明治三十八年一月十五日定期増刊（毎月一回五日發行）　明治三十三年十二月廿五日第三種郵便物認

女學世界定期增刊

家庭小說 小天地

第五卷 第貳號

博文館

女學世界 春期增刊

小天地目次


滋養强壯と次亞燐
次亞燐は世界無比の滋養新藥なり常に服用せば血を増し肉を肥し食物の消化を補け血色を能くし身體を强健ならしむ本劑は肺病肋膜胃病心臓神經喘息たんせき脚氣病其他貧血衰弱症に特効あり尙は産前産後の肥立は勿論病後等の補血に欠くべからざる新藥にて牛乳に優る數十倍の効ありて飲み安き藥劑なり
●大瓶五週金壹円廿戔、●中瓶二週半金七十戔●小瓶壹週金四十戔
（小包送料）●大二十戔●中十五戔●小十戔
次亞燐は滋養强壯の新藥にて人體の肥料なり
牛乳に優る効數倍です
次亞燐を飲んでこんなに肥りました
滋養大関
本舖 大阪道修町 小西久兵衛
●賣捌處は全國各藥店にあり
次亞燐は富國强兵の基にて滋養强壯の新藥なり



梶田半古筆

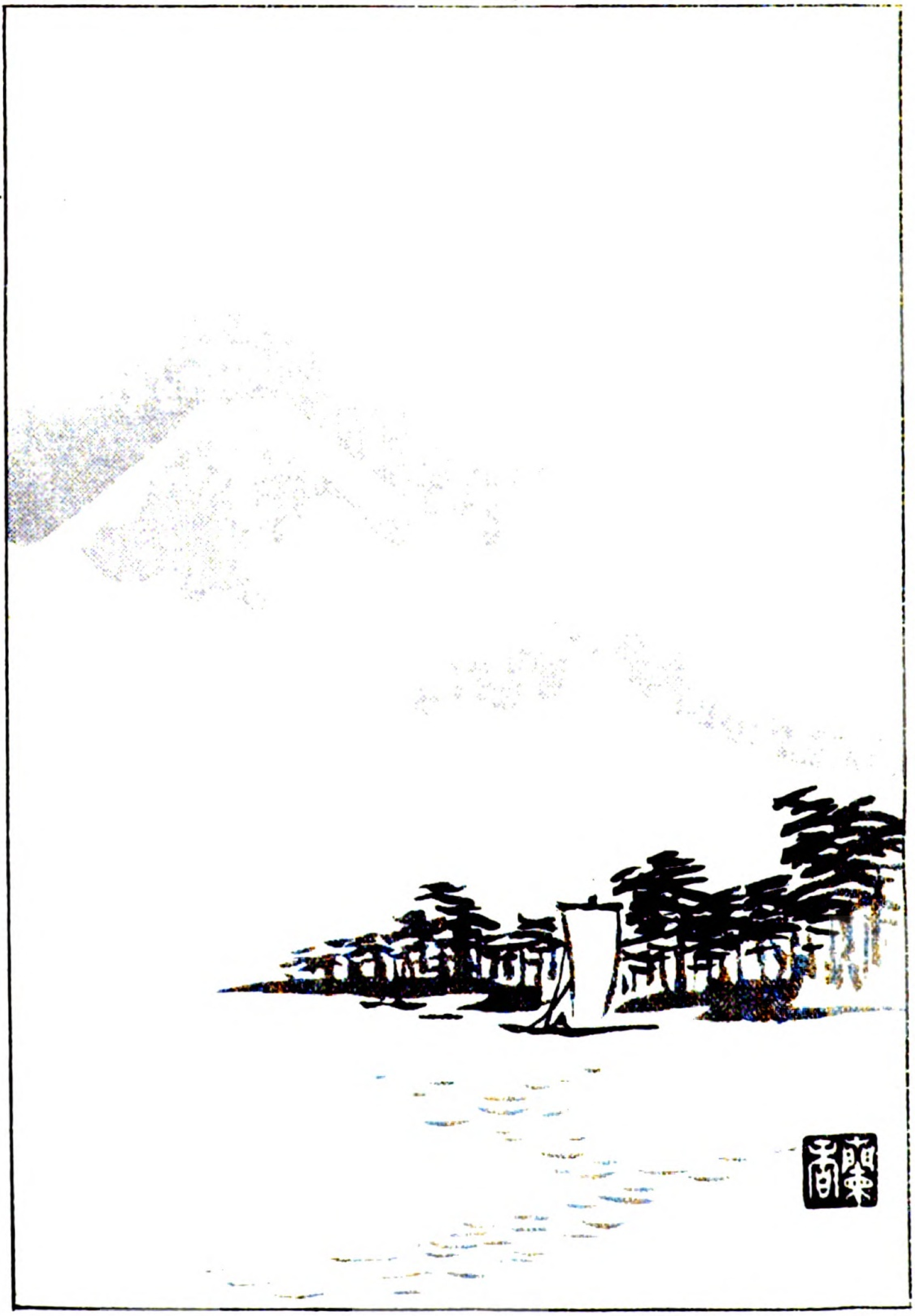
春あそび



田内千秋筆

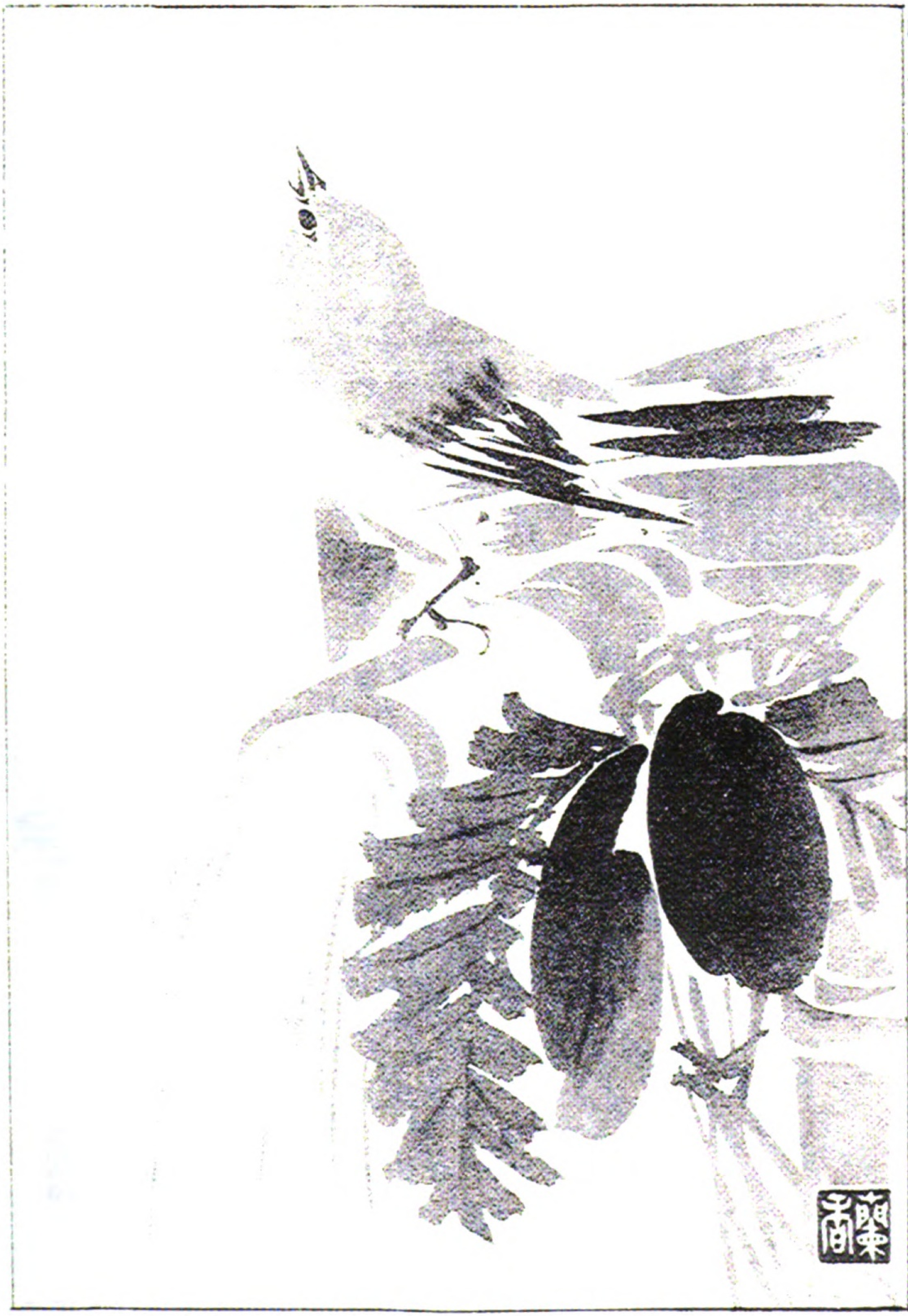
春霞

蘭香女史筆



初音

蘭香女史筆



（前付の一一）

工業叢書

專門技師大見鐐一君 在學院 工學士淺川彰一君 共著

ペイント製造及檢査法

全壹册

洋裝總クロース製
正價金壹圓
郵稅金拾錢

第一編 第一章―原料に對する準備(一)乾式碎粉法(二)濕式碎粉法 第二章―ペイント製造器及裝置(一)ペイント混合機械(二)ペイント練磨機械(三)鉛白の練磨裝置(四)亞鉛華の練磨裝置(五)酸化物より成れるペイントの練磨裝置(六)黑色ペイントの練磨裝置 第二編 第一章―檢査法第一―(一)器具及試藥の說明(二)油及ワニシの抽出(三)白ペイント及顏料(四)黃色ペイント及顏料(五)綠色ペイント及顏料(六)青色ペイント及顏料(七)赤色ペイント及顏料(八)褐色ペイント及顏料(九)朱色ペイント及顏料(十)油製ワニシ(十一)アルコール製ワニシ(十二)亞麻仁油(十三)ボイルド、オイル(十四)的列亞油 第二章檢査法第二―(一)標本(二)顏料の色彩(三)顏料の着色力(四)顏料の被覆力(五)顏料の不透明度(六)顏料の可混性(七)顏料の防末度(八)顏料の比重(九)顏料がペイントの乾燥性に及ぼす作用(十)顏料の耐久度(十一)硬練ペイント(十二)製ペイント及エナメル(十三)油製ワニシ(十四)アルコール製ワニシ 雜錄―ペイントり(十五)ドライヤ(十六)亞麻仁油(十七)的列亞油 第三編 使用に就て外八項

工學士 淺田忠順君著

石鹸製造法

全壹册

附り……西洋洗濯法……

(近刊)
洋裝總クロース製
正價金七拾錢
郵稅金八錢

日用品中に最も需用多く各人の衛生上欠くべからざるものゝ實に石鹸にあらずや故に方今內地に於て之れが製造に從事するもの甚だ盛にして其製品も優に舶來品を凌駕するの逸品を製出せらるゝは國益の一源といふべきなり著者應用化學に造詣する所深し近頃本書を著はして石鹸製造者に便ならしむ讀者之に由て一層研究せば其領得する所鮮少にあらざるべし附錄に西洋洗濯法を記載するは著者が尤も注意の綿密なるを證するに足る

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

(前付の二)

眞崎製三菱印ゴム附鉛筆發賣廣告



此（HB符號）ノ三菱印鉛筆ハ舶來月印鉛筆ノ輸入防遏ヲ目的トシテ製ス故ニ心墨ハ粗ボ月印同樣ノ軟質ナレドモ筆記滑ニシテ黑ク磨滅オソキ點ニ於テ遙ニ月印ニ勝ル　但代價ハ月印ト同シ



此（MP符號）ノ三菱印鉛筆ハ舶來鉛筆鷲印擊退ノ目的ヲ以テ製ス故ニ心墨ハ粗ボ鷲印同樣ノ中軟質ナレ𪜈磨滅非常ニオソク運筆滑カニ體裁優美ナル等著シク鷲印ニ勝ル　但代價ハ鷲印ト同シ



此（HB符號）ノ三菱鉛筆ハ舶來鷲ヨリ稍々硬質ノ心墨ヲ用ヒアリテ圖ノ如ク尖頭ヲ鋭ク削リ用ユル時ハ細字數千字ヲ筆記シ尚削[illegible]ノ必用ヲ感ゼザル堅實ノ心墨ナルニ拘ワラズ筆記ノ滑カナル恰モ軟質ト異ナルナシ以テ本品ノ心墨ガ如何ニ善良ナルカヲ證スルニ足ル　但代價ハ鷲印ト同ジ

附言　眞崎製鉛筆ハ去ル明治二拾五年創業ノ當時遞信省ニ於テ體裁ハ粗ナルモ心墨ハ舶來品ニ優ルトノ好評ヲ賜ハリ[illegible]爾來每年數十萬本ヅヽ納品ノ榮ヲ辱フシ現ニ全國到ル所ノ電信局ニ使用セラレツヽアル實用的最良ノ鉛筆ナリ今ヤ體裁モ優美ニ心墨ハ一層鍛錬ヲ加エ全ク外品ヲ凌駕スルノ域ニ進ミ毫モ輸入品ニ待ツノ必用ナシ然レ𪜈一般公衆ハ遞信省ト違ヒ總ベテ諸會社商店ニ至ル迄デ舶來品ニ信用厚ク殊ニ内地製品ヲ顧ミザルノ癖習アリ實ニ鉛筆ノ代金トシテ我金貨ノ海外ニ流出スルモノ年一年增加ノ方ニテ每年數拾萬圓ノ巨額ニ達ス希クハ愛國心ニ富メル大方ノ諸君 今日ノ場合 宜シク外品ヲ退ケ我内地ノ製品ヲ御使用アラセラレンヿヲ

製造元

東京市四谷區內藤町

眞崎鉛筆製造所

（前付の三）

文藝倶樂部春期增刊

表紙しばゐ　山中古洞君筆
木版口繪辨財天　梶田半古君筆
卷中挿入寫眞版　新富座俳優の素顔と舞臺顔

本書は現代作劇家の巨匠に囑し其新作脚本を掲く此書一度出てゝ我劇壇は革新の一時期を劃すべし

胡蝶の舞	江見水蔭君
エルナン	松居松葉君
史劇	宮崎三昧君
喜劇叔平姪平	橋本青雨君
梅雨闇一夜嫦娥	岡鬼太郎君
花橘	空々閑山人
喜劇相續三人男	川上眉山君

初芝居

一月十五日發行
正價貳拾五錢　郵稅貳錢五厘

五百圓俳句投句箋

第壹等貳百圓百圓以下第七等迄百卅三名

發兌元　東京日本橋區本町　博文館

(前付の五)

心學叢書

男爵細川潤次郎先生序文　赤堀又次郎先生校訂

第一編

第二編

第三編

第四編

第五編

第六編

全部六册　大判大和綴

正價　一册金四拾錢、三册金壹圓拾五錢、六册貳圓貳拾錢、郵稅一册拾錢ヅヽ、

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

(前付の六)

家庭衛生叢書

醫學博士井上通泰先生監修

家庭に衛生上の智識が必要であるといふことは今更いふ迄もないが、此衛生上の智識は實に一日でも應用せられぬといふ事はない、住居を撰ぶにしても、衣服を製るにしても、食物を調理するにしても、之に衛生上の智識を應用したなれは家庭がどの位幸福になるか、殆んど測り知ることが出來ないと思ふ。其他小供を育てるにも、傳染病の流行時にも、病人の出來た時にも、婦人の妊娠時にも、凡て吾々の家庭に衛生上の智識の必要であるといふ證據立てる機會は日常甚だ多いのである。家庭衛生叢書は各專門の大家が特に衛生上注意すべき事項に就て、講話せられたる所を成るべく平易に寫し出して、一般人が衛生上の智識を開發するといふ目的として發行せられたのであつて、讀者は必ず得らる所が多いと思ふ、尚此叢書に講話を承諾せられたる大家は下欄の諸先生である。

全部六冊洋裝菊版
正價金一冊貳拾錢
全部壹圓拾錢
郵税一冊六錢宛

醫學博士 呉秀三先生
醫學博士 入澤達吉先生
醫學博士 岡田和一郎先生
醫學博士 長與稱吉先生
醫學博士 木下正中先生
醫學博士 森林太郎先生
醫學博士 金杉英五郎先生
醫學博士 緒方正規先生
醫學博士 土肥慶藏先生
醫學博士 中濱東一郎先生
醫學博士 北里柴三郎先生
醫學博士 弘田長先生
醫學博士 近藤次繁先生
醫學博士 佐々木政吉先生
ドクトル 桐淵鏡治先生
醫學士 富士川游先生
醫學士 賀古鶴所先生
醫學士 宮本叔先生

第壹編　既刊

口繪、北里博士、長與博士、金杉博士、土肥博士、(肖像)

第貳編　既刊

口繪　宮本學士、木下博士、(肖像)

第參編　既刊

口繪　三輪博士、井上博士(肖像)

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

(前付の七)

寫眞畫報臨時增刊 旅順降伏大紀念帖

一月十日發行
正價金貳拾錢
郵稅金貳錢

（前付の八）

（附錄地圖）
其一 旅順附近戰鬪詳圖（竪一尺三寸、横一尺八寸）
其二 旅順要塞詳密圖（竪九寸、横一尺三寸）

（口繪石版）
旅順降伏兩軍全權委員の會見 旅順從軍畫家 東城鉦太郎氏筆

旅順攻擊軍の主腦
乃木攻圍軍司令官、伊知地全參謀長、須永第九師團參謀長、星野第一師團參謀長、山岡第十一參謀

旅順口攻擊艦隊の主腦
東鄉聯合艦隊司令長官、片岡第三艦隊司令長官、出羽第一艦隊司令官

旅順口攻擊師團長
前第一師團長伏見宮殿下、第十一師團長鮫島軍中將、第七師團長大迫軍中將

旅順口攻擊軍の主腦
上村第二艦隊司令官、瓜生第二艦隊司令官、三須第二艦隊司令官、加藤第二艦隊參謀長

旅順口攻擊軍師團長
第九師團長大島陸軍中將、第十一師團長土屋陸軍中將、第一師團長松村陸軍中將

旅順口攻擊艦隊司令官
東鄉第三艦隊司令官、（正路）梨羽第一艦隊司令官、山田第三艦隊司令官、細谷第三艦隊司令官

旅順口攻擊旅團諸將
山本陸軍少將、大迫陸軍少將、中村陸軍少將、平佐陸軍少將、一戶陸軍少將、神尾陸軍少將、山中陸軍少將

聯合艦隊參謀諸將
參謀長島村海軍少將、參謀中村海軍大佐、佐藤海軍中佐、岩村海軍大尉、伊集院海軍大尉、筑土海軍大尉

二百三高地より旅順口港下瞰（二頁）

露國關東要塞司令官陸軍大將ステッセル少壯時代以降の寫眞六種

旅順口攻擊軍諸將
齋藤陸軍少將、吉田陸軍少將、友安陸軍少將、馬場陸軍少將、鵜貝陸軍大佐、渡邊陸軍大佐、村上陸軍大佐、吉田陸軍中佐、白石陸軍少佐、佐藤陸軍少佐、

攻擊右翼軍の猛將
飯田步兵大佐、渡邊步兵大佐（旅十郎）牛島步兵大佐、兵頭砲兵大佐、成田步兵中佐、橫田步兵大佐、大木工兵大佐、中原步兵少佐、枝吉步兵少佐、五十嵐步兵少佐、宍戶步兵少佐、隈部步兵少佐、伊川砲兵少佐、山川砲兵少佐、仲砲兵少佐

攻擊軍中堅の勇將
大內步兵大佐、中村步兵大佐、佐治步兵大佐、三原步兵大佐、木越步兵少佐、佐久間步兵少佐、中西步兵少佐、余語步兵少佐、田中步兵少佐、錦木步兵少佐、伊藤步兵少佐、山本步兵少佐、三好步兵少佐、佐藤步兵少佐、後藤步兵大尉、松尾步兵大尉、

攻擊軍左翼軍の勇將
石原步兵大佐、山步兵大佐、西山步兵大佐、河野步兵大佐、足立砲兵大佐、松村步兵少佐、上村步兵少佐、本間步兵少佐、森步兵少佐、松永步兵少佐、佐久間步兵少佐、鵜見步兵少佐、渡邊步兵少佐、伊藤砲兵少佐、森砲兵少佐、

旅順口攻擊軍將校
海軍陸戰重砲隊黑井指揮官、出征要塞砲兵聯隊の諸將校

旅順口攻擊艦隊の諸將
松本海軍大佐、大井上海軍大佐、井手海軍大佐、村上海軍大佐、久保海軍中佐、兒島海軍大佐、中川海軍中佐、長井海軍中佐、土屋海軍中佐、松岡海軍少佐、大島海軍少佐、松村海軍少佐、井手海軍少佐、大山海軍少佐、久津見海軍少佐、竹村海軍少佐、近藤海軍少佐、眞野海軍少佐、竹內海軍少佐

旅順口攻擊の諸艦と艦長
三笠と伊知地艦長、朝日と野元艦長、敷島と寺垣艦長、[illegible]と丹羽艦長、富士と松本艦長、八島と坂本艦長、日進と竹內艦長、淺間と八代艦長、須磨と土屋艦長、橋立と加藤艦長、高砂と石橋艦長、筑紫と西山艦長、千歲と高木艦長、明石と宮地艦長、扶桑と奧宮艦長、松島と川島艦長、嚴島と大島艦長、秋津洲と山屋艦長

旅順攻擊軍青泥窪上陸……外人某氏筆
驅逐艦隊の接戰……英人某氏筆
旅順艦隊の潰敗……英人某氏筆
敵驅逐艦長の奮鬪……山中古洞氏筆
山岡軍使敵の前哨に聖旨を傳ふ……中澤弘光筆
ジヤンクを臨檢して支那人に裝へる露兵を發見す……若林一等水兵筆
旅順口の最期……木村九太郎氏筆

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

人麗の市敦倫



嗚呼天才!!!



未來の大詩人（狂と呼び痴と呼ばるゝもおれは[illegible]誰か省みざりし昇れ詩人の[illegible]

嗚呼天才!!!

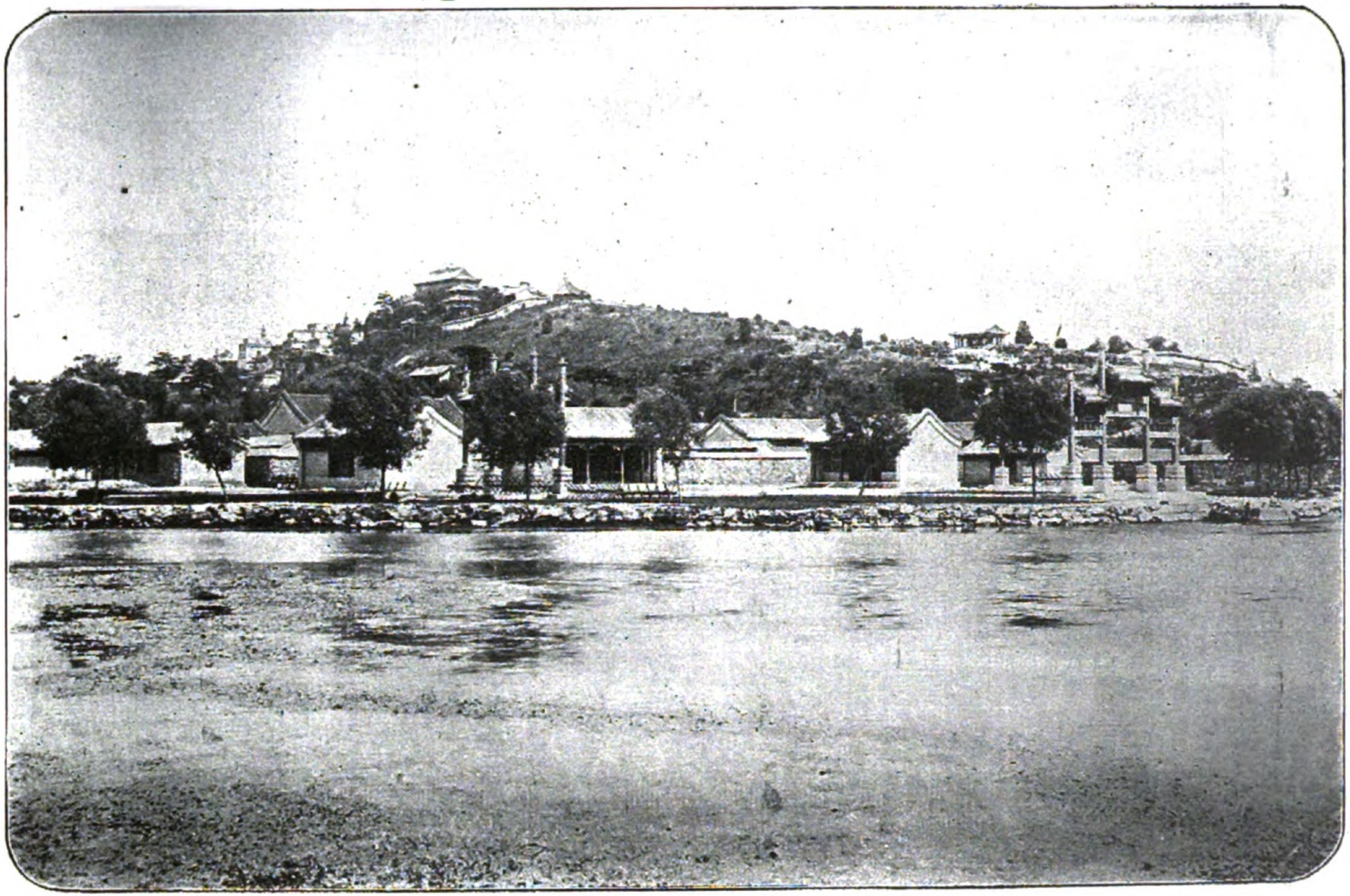


[illegible]作家（[illegible]）

雪の松島

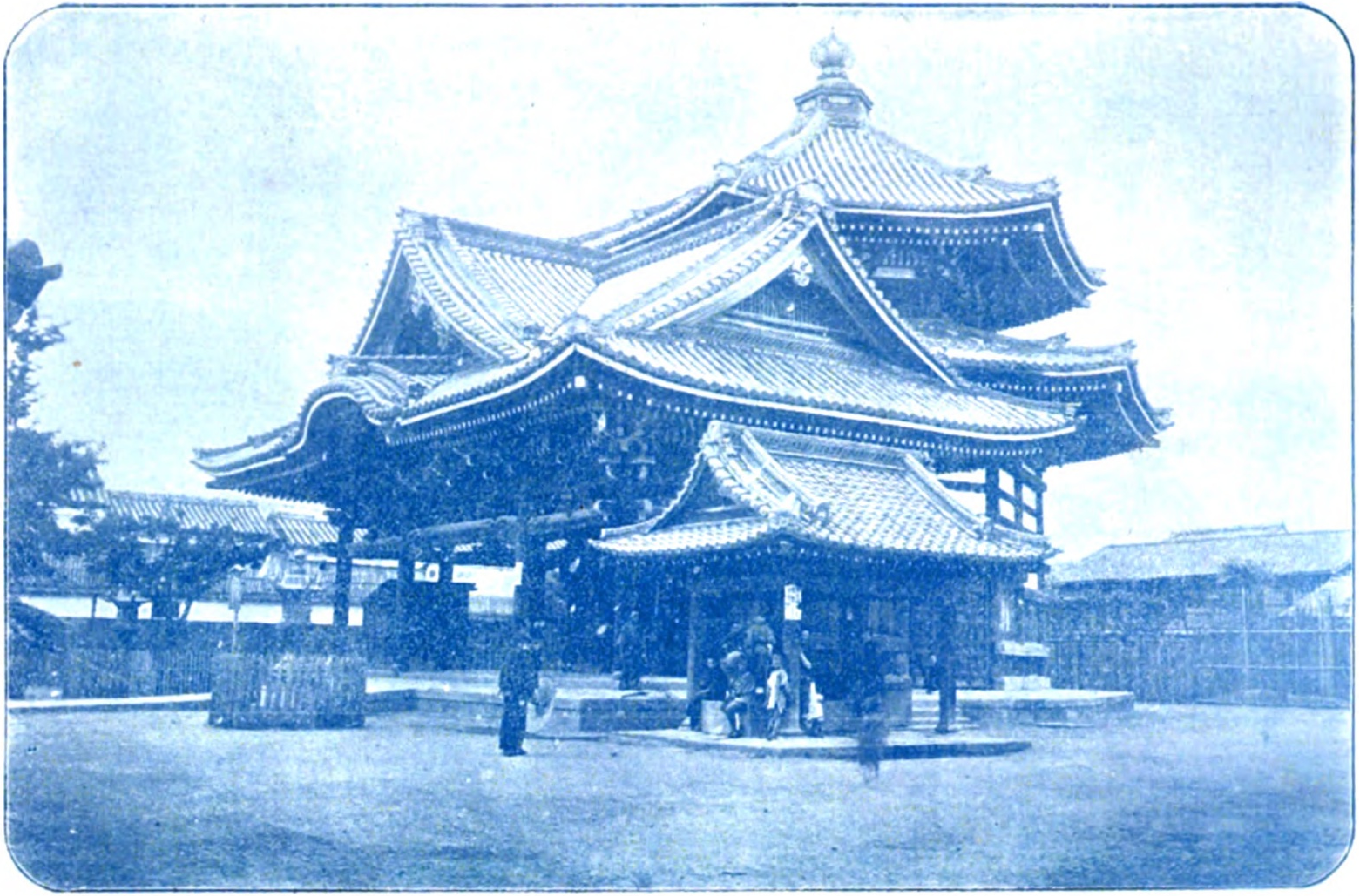


清朝の禁苑



北京宮廷の禁苑萬壽山

京都六角堂

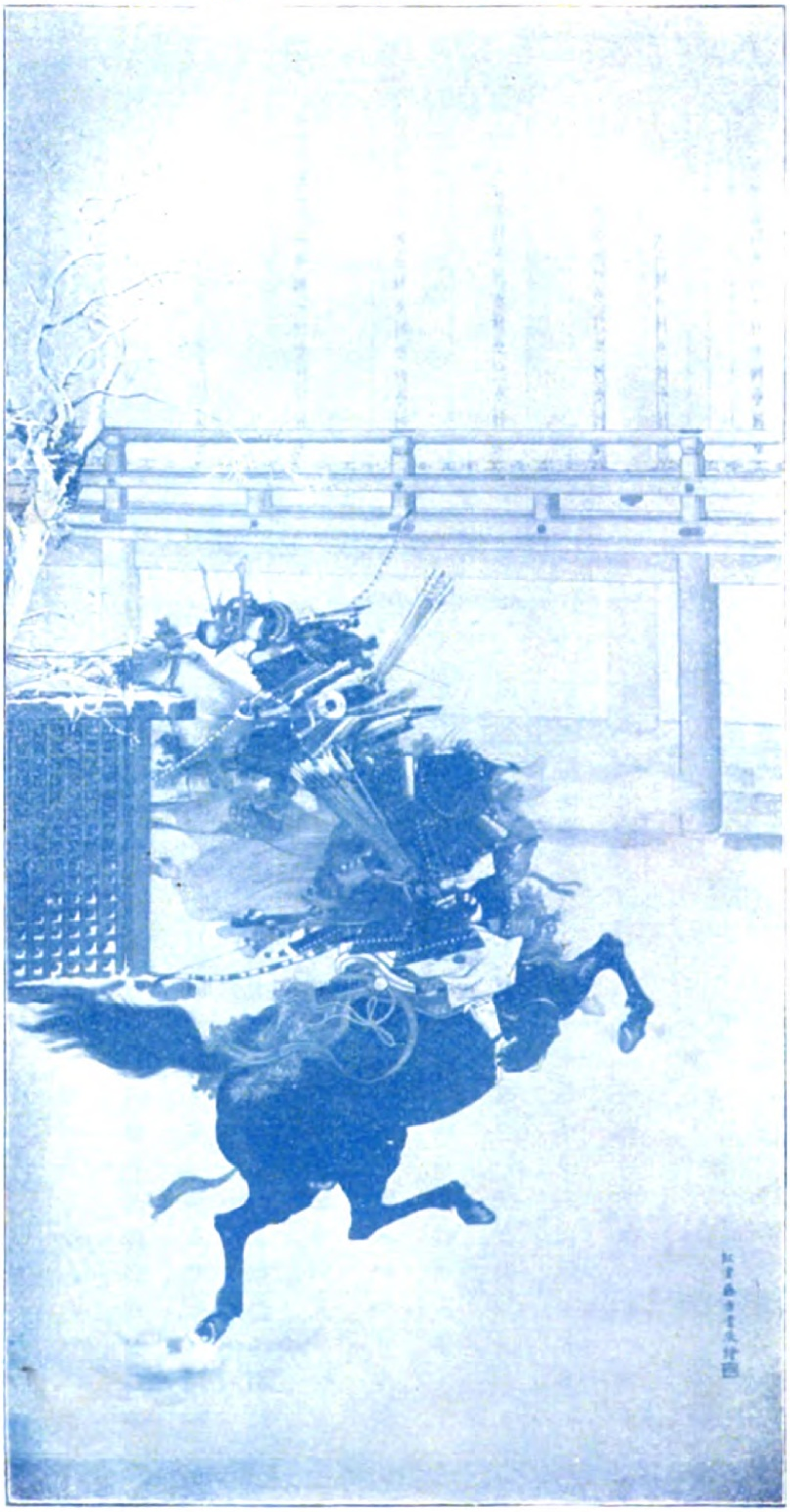


容儀體操



日本女子大學の體操

紫宸殿前の奮闘





女學世界春期增刊
第五卷第二號

家庭小說に題す

自然の機微を寫すもの之を詩に求めざるべからず、人情の冷熱を描くもの之を小說に求めざるべからず、乾燥なる文字萬卷、牛に汗し棟に充つるも人生との交涉なくば更に何等の益あるなし、夫の花の爛熳たる未だ必しも美と云ふべからず、風に傷み雨に惱みて始めて其美を擅らにするが如く、無垢の少女も世上の變故に遭ふて情操の美愈美に、以て生活の眞趣を解するに至る、本誌が家庭小說を編するの意實に茲にあり、讀者亦た此の心もて讀みたまはゞ敎外の敎を得る蓋し少からざるべし。

家庭小說

六人家内

中村春雨

（一）

前の俥には麻縄で龜甲形に縛し上げた嵩張つた柳行李、支那鞄、ヅックの旅行鞄などが轉落ちぬやうに、眞田紐を綾取つて、念珠繋にして積み重ねたのを、倔強な車夫が二人掛りで重たさうに、少し路の勾配の附いた處はウン〳〵云つて額を汗にして牽いて行く、後の俥の上に、裕然と身輕に乘つて、葉卷を薫らしながら山廻り、谷現はる丶四邊の田谷景色を懐かしさうに眺めやつてゐる男の年紀はもう三十四五であらう、金縁の眼鏡の間に隆まる鼻いかつく、麥酒色の髭の先がカイザル式にピンと彈ね上つて凛とした眉、口附、色黎黒く、上眼に見る時額に深い皺が寄つて一癖ありげな面魂、中山高帽に、總々した臘虎の襟の附いた暖かさうな、焦茶色の玉紗の外套を猪首に着込んで銀の獅子頭の杖の先を茶革の手袋被た片手に掴み、膝の上には、銀金具の附いた鹿革の手提鞄を引寄て稍反身になつてゐる

稲はもう刈り取られても淋しい刈田の畔に處々、掛稲がぱつと夕日に映えて黄色な雲と棚引いてゐる、菜畑は漸く苗が萌え出で丶黒土の上が薄青く斑になつた許り葱畑は縦に横に淺みとりの畷を織つて肥壺の横にひよろりと立つ裸になつた柿の木の梢には霜に熟れ過て今にも潰えさうな黒痣のある眞赤な柿の實が二つ三つ、中には半分烏に啄かれたらしいのも殘つてゐる

白象の群るやうな冬ざれの雲が淺黄色の空をゆるく動いて村の丘の上に高く聳えてゐる雨晒しの半鐘臺が目に入ると、程なく茅葺、或は瓦葺の人家の屋根がちらほら見えだして、ドー〳〵と鳴りさやぎる川瀬の音も早聞えて來る

「田舎は變らんもんだな」と車上の客はほつと吐息と共に烟草の烟を吐き出して何んだか感慨に堪えぬやうな顔色で云つた

「へイ、左様だつぺえね」と車夫は息苦しさうな聲で答へた

道が出ると、直と眼をとめて

「ア丶變らんと云つても矢つ張變つた物もあるな、あの、火見臺の下の新築の長い屋根は小學校かい？」

「へイ……昨年建て更へたでがすんが……旦那様は東京から此な邊鄙へ何しにござらつしやつたゝね？」

「私の故郷だ」

「へエ……」と吃驚したやうな調子「何年振りでお歸らつしやつただかね？」

「足掛十年振りだ」

「御家内様ア東京に慣いて來さつしやつたたつぺえね」

「まア然んなものだ」と苦笑して、新らしい葉卷にパッと燐マッチを擦り附けた、

「東京のやうな賑かな處からこんねえな谷の底へ歸つてござらつしやつても面白い事アなかつぺえね？」

「親も健康だし、兄弟も居るから、歸つて來もするが、村の人はよくこんな山の奥の、谷の底で、長い一生死んでるか、生きてるか分らない、虫介のやうな生活がしてられる事つたと思ふな、己なんかもう東京が狭くて、日本ぢや何んだか鼻を突くやうな氣がしてならないのだが、久し振りに此所へ歸つて來て見ると自分の故郷はこんな處だつか知らと何うも不思議な樣だ……」

「然うだつぺえね、十年も廣見へ出てござらつしやつた旦那方の目から見たらこゝらの田舍はお話にも何もなるこんぢやアなかつぺえ」

「旦那は東京で御商法なさつてるだかね？」と、前の俥の車夫が豆絞の手拭で額の汗を拭き〳〵振返つて大聲を張つて問ふ」

「まアそんなもんだ」と言葉少である

「東京邊の商法は田舍のケチ臭エのたア違つて、小い所でも五万の、三万のつて太え事だつて話聞てただが眞實の事だつぺえね」

「まア村の丸持長者と指を折られてるやうな人方の身代が一日の取引高にも當らなかろうて奴さ、だから旨く當れば一夜の中に岩崎、三井と背くらべの出來る大分限にもなれやうし一つ失敗つたら際掛昨日の大名が今日は乞食、立ん坊と相場附が定つてゐる、そんな、百年も二百年も、先祖代々受け繼いで來た財産だからつて、殖もせず減しもせず藁石の番人見たいに後生大切に守をしてるやうな意氣地なしは鐘や大鼓で捜し廻つたからつて先づ一人半疋も見附からなからうつて云ふものさ、」

「察えもんでがんすなア」と車夫は眼を瞬つて異口同音に云つた

「けれどもまだ東京なぞぢやア舞臺が小い、岩崎三井と來ちやアまだ慾が無さ過らアな、海一つ東へ跨いだら米國つて、日本の何千倍もあろうて云ふだゝつ廣い毛唐の國があるし、其處にやカーチギーだの、モルガンだのつて、岩崎、三井を小僧つ子に追ひ遣はうて豪い勢の大分限者が隣にも向にも鉢合せをしてるんだ、そんな處へ裸一貫で飛び込んで一番角力を取ろうて勇氣がなくちや、今后は男子だとは云はせないんだ、何うだ、汝等も出稼に行つて見る氣はないか、一生、梶棒に縋つてるでもなかろうせ」

「へゝゝ旦那……」と云つて、車夫は笑ひながら、饅頭笠を脱いたが、頂邊はてら／＼した、藥罐の樣なすべつこい禿頭の、耳の邊には白髪交の髪毛が少し殘つてゐる許「御覧なさる通、もう六十の老爺だからね意氣地も何もありましねえだへゝゝゝ」と禿頭を掻く

「然うか、齡は取り度くないもんだなハゝゝゝ」と客も笑ふ

「己等だつて、嬶や、餓兒さへ居なかつたら一番奮張つて行つて見べえ氣にもなるだがね、もう世帯持つちや山氣も何もすつ込んでえまひやすだへゝゝゝ」と豆絞が、振向いて大聲で云ひながら鼻で笑つた

「然うか、嬶なんか持ち度くないもんだなハゝゝゝゝゝ」と又笑つた

もう數疊が間近くなつて、木の橋が彼方に見える、毛槍杉が二本並び立つてる茶屋の椽先から黑い人影が動き出したかと見ると、六歲位ないたづらさうな男の子の手を引いて、三十前后の、髮の蓬けた、色の淺黑い、百姓らしい巖丈造の男が、毛の切れた唐繻子の襟の掛つた袖無絆天を着て、洗ひ晒らしの袷の上に縒れ／＼になつた帶を締め、尻切草履ばた／＼と駈けて來る、後からは、色の小白い丸顏の前髮のふつさりした、七八歲の小娘が怯々したやうな、愛らしい眼付で蹤いて來る

次第に兩方から近く迫つて來る中にも互に瞳を見合せてゐたが、向の男は一二間の處でハタと立留つて眤と

此方の顏へ眼を据えながら「兄さんぢやねえか？」

「オヽ、由太か」と車上からも聲をかけて懐かしさうに眼を輝かした、俥は泥除を叩かれて、そのまゝ留つてゐる

「私何うもはア見違えて了つただ……よく歸つてござらつしやつたゞね」ともう手拭で瞼を押拭うてゐる

「何うも暫らくだつたが、何方もお變りはないかい、お父さんもお母さんも！」

「へイ、幸福と皆健康で居やすが兄さんのハガキ着いてから、父さんも母さんもえら喜んで、この二三日いふものは、ハア夜が寢られねえで騒でがんすよ前の俥のが兄さんのお荷物だかね、まア、まアこんねえに立派になつて歸らつしやつてお目出度えだね、サア平作もお島も東京の伯父様へ御挨拶するだアよ、もつと腰低くしろ、兄さん、こんねえな餓鬼どもが出來やしただハヽヽ」と微笑んでゐる

子供を見て何んだか思案顔をしてゐたが、又さりげなく「ぢやア汝、お島さんを女房にして、こんな子供を産へたのか」

「左様でがんすよ、餓鬼許殖えますだハヽヽ」と頭を搔く

「然うか……」とちよつと小首を傾げたが「……もうこんな大きな子供があるのか、然うか……汝も年を老つた筈だなこれぢやお島さんももう大分老た事つたろうな、二人とも伯父さんの膝の上へ腰をかけろ、家まで俥で行かう、さア遠慮はないから乘つた、乘つた」と笑顔を見せる

「こんな汚ひ衣服してゐるだから、兄さんの衣物穢れるといけねえ、私が連れて後から歸るだから兄さん先へ俥で行かつしやい」

「何搆ふもんか、さア此方へ寄越すが善い、平坊だつたな？、平坊、さアお來」と車の上から両手を出す、

乘つて見度もあるし、何んだか遠慮にもありさうな樣子で、鼻汁をしゆう〳〵啜り上げながら、パチクリ眼を瞬つて、指を啣へて伯父の顏を見上げてゐたが、俄かに活潑に兩手をさし出した、車夫は抱き上げて、膝の上へ乘せてやると、尻をもぢ〳〵させながら、父と姉との顏を見下ろして嬉しげに莞爾と笑つた

「さア、お鳥ちやんもお乘りよ」

姉は羞かしさうに、父の後へ顏を隱くして了つた

「この娘は乘らねえでも善えだからね……」と由太は笑ひながら平坊の顏と、伯父の顏を見競べてゐる

「不活潑ぢやいけない、平坊は活潑だから伯父さん好きだ」と云つて、兩手でヒシと抱きしめる

杖の獅子頭をいぢくつてゐた平坊は、ざら〳〵した髯が頰へ觸るので、眼をまじ〳〵させながら「伯父さん、お土産があるだかね」と極めて低聲である

「お土産は前の俥へどつさり積んであるよ、平坊の好きな物は何んでも上げる」

「然うかい、己ア洋劍と鐵砲と時計と靴とそれから人の乘る滊車が欲しいだ」

「ハヽヽ人の乘る滊車が欲しいか、この子はなか〳〵慾が大い、賢い奴、賢い奴……滊車は荷物の中に入らないから後で買つて小包で送つて上げるよ、ハヽヽヽ姉さんは何が要るのかい」

默つて、唯耻かしさうに、袖で顏を隱してゐる

「姉さんは伯父さんに、肩掛と、それから學校へ上る海老茶の袴と、毛絲の赤えのと靑いのと、雛樣と、お嫁入しる簞笥とそれから何だつたかね？……」

弟に喋舌られて姉は小くなつて彼方へ逃げて了ふ、由太は車夫を促して「お話は後からまだ山ほどあるだ、兄さん先へ行かつしやい……」

平作は生れて始めて車といふものに乘つたので低い鼻高々と大得意、來年から小學校へ上るといふ事や、今年は裏山に栗が澤山實つて、自分一人で二升位拾つたといふ自慢や、豚が兒を產んで四疋になつたが嬉しい事や、昨日鷹が坐敷へ飛び込んだつで、箒で叩かうとしたら障子を破つて逃げて了つたから口惜かつた事や何や彼や話しながら伯父さんともうお馴染になつてゐる

橋は遙か後ろに、道は曲り廻つて、落葉を燻べる烟が麥畑の處々にふす〳〵と立のぼり邊の山々はもう薄すりと霧が這ひかゝつて來る、暮の鐘が彼方のほの暗い森の中からゴーン〳〵と淋しげに響いて來る、裸の大欅の根元に立てる小い祠の屋根で尾を叩いて向の籔疊の方へ飛んで行つたのは鶺鴒であろう―

「家ィ燈が點つてるだよ」

平作の聲に始めて氣附いたやうに、昵と見やると、彼方の、畑中の、銀髮風にゆらぐ枯尾花の一段小高い丘の上の、茅葺の家の煤け障子　赤々と燈火の影が映つてゐる

「ア丶、もう歸つたのだな」と呟いたが忽ち傍ら、黃昏れた楮畑の中から聲があつて

「谷藏でねえかい？」と人影が、二つ、三つ、ばら〳〵と車を取り卷いた

「オ丶、お父さんですか」といふ聲は慄えた

「よく歸つてくれただな」と母はもう涙含んだ調子

「お母さん……御無事で……」と谷藏も途切れ〳〵に斯く云つた

「兄さんよくお歸りなさつたゞね」と後から微かな聲音

「ヤ、お島さんか……」

暫しは誰も押默つて、話を繼ぐもののない、すゝり泣するやうな聲ばかり夕闇の中に聞えてゐたが、すると

後から人の足音が近づいて「皆、何してるだね、兄さん疲れてるだ、早く湯へ入れたら善えでねえか、お島何、ぼんやりしてるだよ」と由太が喚く

「アヽ年甲斐もねえ、己もあんまり嬉しいだで……」と、父の作平は大い手掌で涙を拭いた

「兄さん、直ぐ湯へお入んなせへな、私その鞄持ちますだ」とお島は兄の手から手提鞄を引奪ると、平作がそれを持つと云つて、せがんだが、一人では重くて地から上へ上らないので、到頭閉口して母と持合つてよち〱足元危げに先へ立つ、後から谷蔵を取巻いて泣いたり笑つたり、一同が足の踵も地に附かぬやうな歩取で歸つて行く、夕ばえ西に紅く中空には星が寒さうにちらほら燦めきそめて、何處かで遠く牛の鳴聲が聞える

（二）

朝日がきら〱と反古張の障子に、樹木の梢の影低く映し出して、軒端に干した串柿の影もあり〱と椽の上に斜になつてゐる、家の内はぱつと明るく、板の間には籾粃が散りこぼれ、紡績車の黒光りのするのが、今朝はまだ休んでゐる、野郎疊を敷き詰めた十二疊の奥の間に一家皆寄り聚つて、谷蔵を中に取圍み、彼是と土產物の品評に、軒の雀を驚かして賑やかな事である

支那鞄も、柳行李も繩を解かれて、安堵したやうに大口を開けてゐる、平作は金線の入つた士官帽を冠つて、得意げにプップップと、顔を赤うして喇叭を吹鳴らす、靴や、學校行の鞄や、紙製石盤、玩弄の軍艦などが足の先に取散らかされてある

「コレ、やかましいだ、そんなに耳ん先で吹くでねえだ」と、母は子を制しながら、眼の前に突き出された新らしい繻珍の帯を、何んだか勿體なさゝうに、手も觸けず、おろ〱と見据えてゐる

「も少し上等をと思つたが、あんまり買物が多くて手が廻らなかつたんだ、何、これでも田舍ちや締められるよ」と谷藏はお島の顏を見る

「こん樣物、私罰が當るだ」

「兄さん、こん樣な帶、村長樣の御新造樣も締めた事ア無えだ、百姓なんかの婦にや一生、寶の持腐だつぺえよ」と由太も眼を瞬つてゐる

「折角、汝、數々結構な物、お土產に持つて歸つてくれて、難有いだけんど、何うも少と、はア、田舍者にや分不相應な物許でねえかよ、私にこん樣な赤髯の着る羽織見てえな……コレ、何んて云ふだかソウム、マントーか、マントーだなんて、此さ着て野良仕事出來ねえでねえかい、婆さんだつてショルたらシオーロたら、立派な襟見てえなものさ、引破けて畑打つ事もなるめえし謙信袋たら信玄袋たら、お寺さアの頭巾見てえな結構な袋提げて蓬摘に行くも勿體ねえ事だし、孫娘にだつてえば又袖の無え着服頭から押被せて、毛唐人の婦衆の眞似さすにも及ばねえ事だ、第一、村の衆笑ふでねえかよ、私、汝の志は勿體ねえ思ふだけんど、之何も、三毛猫に小判見せる樣なもんだつぺえ、汝一人豪えものになつて、已等が昔の儘の馬鹿もんだで此樣なとんちんかんな事起るだけんど何うもはア、ちと土產物が身分に過ぎてるだよ」と作平は當惑したやうな顏色である

「何云つてもはア、御膝元で大え商人に出世さつしやつた兄さんの事たで、こん樣な結構なお土產持ち歸つてくれさつしやたんで何ともはア、御禮の申樣も無えでがんすが、父さんの云つての通、水呑百姓の體に着けるにや罰が當るべえ思ふもの許で、煤け返つた家の中に置くのも勿體ねえやうな氣がしますだよ、この銀時計だつて村長樣のより立派なもんで、私の帶にまきつけるが際期、胸がしく〳〵痛んで來べえ思ふでがんすな」と弟も呆氣に取られてゐる

「何、皆で外外行の時、着たり、行被つたりするさ、何時迄も時世遲の事を云つてるとそれこそ世間の笑はれ物になるんだ、折角人間に生れた甲斐にや、少しは善い衣服も着て旨い物も食べて、人並な眞似をせんけりやア、黒眞になつて年中稼いて許居たつて、死ぬ時が來たら死ん了ふんぢやアないか、つまらない事さ、金は天下の廻り持で、已なんか懐に少し溜つて來ると、直ばつ／＼蒔き撒らして了んけりや溜飲でも起つたやうで氣持が惡くなる方だハヽヽヽヽヽヽ」

ブップップップップとしきりと喇叭を鳴らしてゐた平作は「汝、やかましいだよ、外へ出て吹くが善えだ…………」と祖母に叱られて、つと起上り「勝つた――」と叫んだかと思ふと、傍にあつた羽衣ショールを黒足の先に引掛けながら駈けて行く

「コラ、惡戯するでねえだ」と祖母は起上つて後から追うて行くと平作此度は二本棒の垂れた顔へショールをくる／＼捲きつけて、キャッ／＼高く笑聲を立てながら逃け出す、逃がさじと追ひ行く

「そりや汝の云ふ通、金自分で儲けて、自分で使ふが男だつぺえけんどな、東京たア違うて、こゝらの田舎ぢや鐚一文儲けるもなか／＼骨折れるだよ、汝が内飛び出してから留守中、由太の苦勞つて云ふものア親ながら感心する程それは、はア大したもんだつたよ汝が私等の知らねえ間に拵へた三百兩の借金の利子も拂うて行くだし、親類の義理合から迷惑のかゝつて來た百何兩の受判の口も年賦で濟しくづして行くだし、まアこの一二年漸つと肩が潤ろいで來て、孫の御飯でも氣持善う戴く事出來るやうになつたゞが、汝からはこの春までは便一つしてくれねえだからもう死んだんぢやねえかと氣遣うたり、愚痴云ふたり、何かにつけて思ひ出して許居たゞよ……」と聲が鼻にかゝつて來る

「父さん、昨夜もそん樣事云ふて、又一つ事繰返して云はつしやるだと、兄さんも聞き辛いだつぺいよ、何

んでも、はア、死んだと思つた兄さんが無事で出世して、歸つて來たゝからてん樣な目出度い事無えでねえかね、お土產が物過ぎる云ふて、不足べえ云はれちや兄さんも勘定に逢はねえ話だハ、、、、、此方が惡いだ井の中の蛙が大海知らずたア此の事だつぺえよ、兄さん氣持惡くすつしやるな」

シオールの塵を拂ひながら此時もう坐に返つてゐた母も一膝進めて「眞實に、谷藏が折角、汗水垂らして儲けた金で私等嬉しがらすべえ思うて、買うて持ち歸つてくれた結構なお土產にケチ附けるやうな事を云ふだとそれこそ罰が當るべえよ」と孫子の肩を持つてゐる



「側、若られなきや、途へ打捨つたつて構ひません、高が百か二百の代物でございますアハ、、、、、」と一方は氣にも留めぬやうに笑つてゐる「汝何うも膽太過でい

けねえだ」と父はつい歎息を吐く

「私、これ似合ひますべえか」と、大島紬の柄の大きなのを手に取り上げて、お島は恍惚見入つてゐると

「それ若て、この帯締めたら、汝、村中一番の別嬪になるだよハヽヽヽ」と母は我子の手柄を誇るやらん高笑するのであつた



「ドレ、巳アこれから雉か、兎か撃ちに行つて来べえ、兄さんの夕飯の御馳走何にも無えだからな……」云ひ〳〵由太は欠伸をして起上つた

片隅の方で大人しくお島は緋ぢりめんの布片を默つて弄つてゐたがブツブツブツブツと、戸外ではしきりに覚束ない喇叭の聲が聞える

（三）

母のお鎌が先に立つて、谷藏は一巡、家の周圍を廻つて見る、厩の後の、木柵の中で、ひつと鼻を突くやうな臭氣のする泥土に塗れて、クウ〱唸つてる親豚子豚が都合四匹、人影を見て、細い目を瞬つては又鼻を鳴らしてゐるこれは一昨年、由太が牝牡一番を町の牧場から買ひ取つて來たので追々繁殖させる計圖である事や牝牛も去年子を產んで一匹殖えた事や、物置小屋の前の方を夫婦眷族睦しくク丶と呼び交はしながら、赤い鷄冠や、長い尻つ尾を振り立て丶こぼれ米、菜つ葉の端など啄き歩いてる鷄の一群も近年飼ひ始めたとの事、風呂桶はこの夏の新調で、壁際に懸つてる梯子は、村の何兵衛の公賣處分に逢つた時安價く買ひ取つたのである事など、一々細かに云つて聞せて、やがて畦路へと立出る

「由太はよくこんな小面倒な世話が行屆きますな、だから年の割に老けて見えるのでせうが……」と谷藏は腕を叉いてゐる

「イヤ、なか〱善くして吳れるだよ、汝の留守に、すんでの事人手へ渡るえべ思ふた田畑、山林七八町步といふもの、彼等夫婦が汗水垂らして辛棒したで漸つと此方の者になつただからね、私等アもう年老で、世間の事は分らねえし何處を何うすれば善えだか方角が立たねえだから邪魔にやなつても彼の子の便にやならねえだで、彼の子もはア、何んねえに苦勞したか知れねえだよ」

「私ア別に惡氣があつてやつた譯ぢやありませんが、實はお父さんなんかに相談した處が埒の明く話ぢやアないからと高を括くて、財產が私の名義になつてるのを幸、抵當に入れて、その金で一鍬起す氣で夜逃と出かけましたんですがね、一年か二年の中に借金を返すは愚か、十倍にも二十倍にもするつもりだつたのがガラリ

と的が外れ、皆さんにとんだ苦勞をさせましたな」

「汝は又汝の考あつてした事だから、それ何にも惡い事てねえだよ、が之に今日は立派な大盡になつて歸つて來たゞから汝の望も屆いたいふもんだで親も肩身が廣いだし、由太も見さつしやる通な辛棒人だから、私等二人とも善い子寳持つて、こんねえな幸福ねえだ思ふよ」と母はホク〳〵喜んで、笑顏で振り返つて見るのである

冬の日がわびしく映しかゝつて左右は廣く拓けた麥畑、彼方には落葉した林が立つて、その裾は一面月夜のやうに白い花の咲いた蕎麥畑で取卷いてゐた、桑の樹と桑の樹との間には、繩に吊した大根が白く乾いてゐる

谷藏は何んだか小頸を傾げて腕叉を堅くしてゐたが、ほつと吐息を吐いて「お母さん、お島と由太は始終仲善う暮してますか？」

振返つて見て「オヽ、幸福と二人も仲が善うて老爺さんも私も安心しとるだよ、一應、汝に相談打つ筈だつたゞけんどな、汝の行衞分らねえだからもう仕方ねえ、年頃の娘、何時迄も一人で置く事出來ねえし、由太と汝は兄弟だで、兄に嫁はす筈の者、弟に讓るも世間によくある事つたし、とう〳〵二人夫婦にしたゞが、長年連添うてる間に私等の前ではまだ喧嘩一つした事ねえだよ」

「お島も別に不承知は云はないで夫婦になつたのですか？」

「不承知も何も無え、二人共親の命令だからへイ〳〵つて、雜作なく治まつたゞよ、汝もそん樣に大盡になつて、まだ獨身ぢやア仕方がねえ、第一不自由千萬でねえかい、早く善え嫁取つて、孫の顏見せるやうにしてくんろよ」

「私はもう嫁なんか、決して貰ひませんよ」

權幕が鋭かつたので、母は呆れたやうな顔をして、振返り「汝、何うしてそん樣な事云ふだかね？」

「お母さん、私は又これから米國へ……外國へ行くつもりで、實はその暇乞旁々歸つて來たのでございますよ」

「エ……」と鴟鴞のやうに眼を瞠つて「外國？……毛唐の國へ行くだつてえのかい？」

「亞米利加のテキサス州つていふ處へ人夫を連れて行く事に手筈を定めてるのですが、幾何あつても足りないものは金でさア、これ丈の田、畑、山林があれば先づ千圓位は借出されませうかね」と眼を放つて邊りを見渡してゐる

「汝、まア、それ、本氣で云ふだか？」と母は腰も抜かさん許、足がぶる／＼慄え出した

「この事はまだお父さんにも由太にも云つて下さいますな、お母さん丈に話すのですから……」

「そん樣な事云つたて、汝、それ、あんまりでねえか、汝の自由にやならねえぢやアねえかよ、谷藏、それいけねえだ、いけねえだ、もうそん樣な遠方へ行く事私、第一、不承知だから遣る事なんねえだよ」

「だつてお母さん、それぢやア私は何うすれば善いのです？」

「私等こんねえに年老つて、もう明日の日が知れねえだ、後生だから當分、此家に居てくんろ、もう何處へも行かねえで此家に居てくんろよ」と、早潤んだ眼尻を襦袢の袖口で拭く

「此家に居たつて私の身の處置が附かないぢやアありませんか、由太はお島と夫婦になつて樂しい家庭を造つてるのですからそれで善ございませうが、私はもう仕方がありません、米國へでも行くより外に、全く方策が盡きてるではありませんか……」と眼中が異樣に光つて來る

「汝、そんねえな氣強い事云はねえで此家に長く逗留しとつてくんろよ、もう今度別れたら一生會はれねえ

だからの……」
谷藏はもう默つて俯目になつた、百舌鳥が何處かできりく\と乾いた空氣の中に波紋を描いて鳴きしきつてゐる

「汝頼むだから、毛唐人の國へ行く事なんか止めてくんろよ、折角由太夫婦が稼ぎ出して自分の者にした田畑で又借金術へちや濟まねえだからな、親爺さんも聒ましく云はつしやるに定てるだし、大騒ぎ持上るだと、私、はア、起つても居ても居られねえだからな」

「私は家へ歸つて見ない前、もう斯うなつてるだろうと凡そ見當は附けて來ましたが、それにしても由太といひ、お島といひ、一言の異議もなく夫婦になつたといふのを聞ては何んだか氣持が善くないです」

「それぢやア、汝、お島を弟に嫁したんが不服だ云ふのか？」と母は不思眼を圓うする

谷藏は冷かに笑つて「不服を云つた處が今更何うも仕方がない事でさア、之も成行でせうから、私も亦その成行に任せるより外策がありません、誰が何と云つても、財産は私の名義になつてるから私の思ふ様にするのを誰も故障を入れる權利はありませんです」

「そんな事云つちや、皆、乞食にならねえぢや了えねえ事になるだ、皆を可愛さうだ思うて、何卒そんねえな無法な事してくれねえやう私お願ひするだ」と母はおろく\泣目立つて手を合はさん許である

彼方の藪陰から、火繩銃を肩にして現れて來たのは弟の由太である、手に一羽の小肥した未だ血の痕がさうな雉を提げてゐる

「兄さんも母さんも何してるだね」と莞爾莞爾笑ひながら「この通、御馳走出來ましたゞよ、兄さん、これから私、料理しるだから今夜ア酒一合澤山と飲んでくれさつしやいよ、お島ア町へ出て上酒取つて來い云附け

といたからもう行つて來ただつぺえね、母さん、兄さん、歸りますべえよ」

母が鼻汁を啜り上げてゐるので「何うさつしやつたゞね、又嬉し泣なさつてるだか、兄さん年老ると愚痴が出て仕様がねえだねハヽヽヽ」

谷藏も唯笑顔を造つた

その時、家の方から喇叭の音が聞えて、平作が先に、お鳥が後から、小足早に驅けて來る

「伯父さん、何處へ行つたゞね、私探してたゞよ……ア、父さん、雉が取れたゞかね、コレ伯父さんに皆上げるだね」と無邪氣に笑つて、姉と二人で雉を持つて、勢込んで先へ驅けて行く、谷藏は後を見送つて、フーと深い溜息を吐いた

由太は唯嬉しさうに微笑んで、子供の行方を見守つてゐる

（四）

釣洋燈の下で、樂しい夕餐の團欒が始つてゐる、牛蒡を刻み込んだ雉の肉が旨さうな匂を立てゝ大鍋の中でぐづ〳〵と煮え口の欠けた燗徳利ももう二三度は交代られたのである

「東京の御馳走たらふく食べ飽いてる兄さんの口にやこんなもの旨くも何ともあんめいが、折角私が取つて來て、お島が料理したゞからその志一番食べてやつて下せへよ、酒だつて田舍のは水飲んでるやうだつぺえが……」

「眞實に兄さんに何も御馳走が出來ねえで氣の毒でなりましねえだよ、雪降ると汝様、兎を毆つて來るつしやるべえけんどな」と燗徳利を片手に、お島も焚火で照つてか、上氣したやうな紅い顔をしてゐる

「イヤ、なか／＼旨くて頰邊が落さうだから最前から默つて突いてるのさ之でも昔は由太と一緒によく山川をほつき歩いてたもんだが、己なんか今はもう鐵砲擔いでも肩が張つて來やう、變れば變るもんだなア、、、」と一杯干す

「變るたつて、兄さんのやうに立身出世して、平常でも絹服着てられるやうになりやア結構な事だけんど、相不變、芋を堀つて田ア植えて、嬶を貰うて、餓鬼を產つて、このまゝ年老つて死つちまふだから何んだか、はア、お話にならねえだハ、、、」と由太も杯を乾して、父に囑す

お島の酌に、作平快く舌皷鳴らしながら、もう眞紅になつた額を撫でゝ「何しろ、はア、こんねえな目出度事ねえだよ、兄は兄で、立身出世するが善えだし、又弟は弟で家何處までも立てゝ行つてくれるが善えだし、二人とも己が目から見たら立派な男子だ、婆さん、善え息子を產んでくれてこれ、眞實の御手柄だよ、まア一つ、飲つしやい」と昵と顏を見て「汝、何うして、宵から鬱いでるだよ」

お鐮は鼻汁をすゝりながら「私、谷藏が早く嫁取つてくれねえだと、何うもはア、安心しる譯に行かねえだから……」

「そりや然うだつぺえ、母さんの云ふ事一理あるだよ兄さん、もう嫁さん貰ふて、皆に安心させるが善えでねえかね」

「善え女房さん、東京から連れて來さつしやるだかと私思ましたゞよホ、、、」とお島も笑ふ

「兎に角家内持たねえと、治まりが附かねえだ、貧乏暮しすとつても子も孫も、嫁も女房もゐるだとソレ、家が賑かで面白く暮せて行ける、だけんど汝のやうに立身出世しても女房もねえ、子供もねえと來ちやお寺さアのやうな大い家借込んでもまだ家持つたいふものでねえだ、早く、嫁取つて私にも、婆さんにも、皆にも安

心させてくんろよ」

「然うですなア……」と酒も苦さうな思案顔をしたが「十何年浪人をして見ましたが、尻が据らなきや片時も安心ていふものはありません、そこへ來ると由太等は幸福者でせう、美い女房は持つてるし、子供はあるし……子供といふものが又家の寶でせうからねオイ、平坊、ハヽヽヽ大人しいと思つたらてく〳〵居眠してるぢやねえか、一杯飲め」と杯を賜す

「この子に酒呑ましちやいけねえだ」と由太は手を振つた

「何、一つ位構はんさ……」云つて、杯を持たせて「オヽ姉さん酌いでやれ」

お島は父の顔色を伺ひながら、德利取上げて酌をする

「少し酌くだよ」とお島は傍から注意する

平作、漸く眼を醒まし、小い口でちび〳〵飲んでるのを、笑顔で谷藏は眺めてゐたが「何うだ、旨いか？」

「旨え……」と云つて、嬉しげに莞爾する

谷藏も眼を細うして「罪のない奴だ……ドレ、伯父さんが一つ抱こしてやろう、此方へお來」

平作つと起上り、杯を持つて來て「伯父さん、此杯上げべえか」谷藏は頭を撫でゝ、膝の上へ坐らせた

「姉さん、酒……伯父さんに……」

お島は笑ひながら、酌をする

谷藏は一息に飲干して、此度はお島に賜し「汝もお呑みよ……」と自分で德利を取上げた

「難有う……」と丁寧に叩頭して、少しづゝ飲む

「伯父さんの子になつたよ〳〵〳〵」と由太は熔けるやうに笑つて、二人の子供を眺める

「平作一つ唄歌唄うて伯父さんに聞かすが善えだ」とお鳥も心から嬉しさうである
「ア、、一つ、龜さん唄うて見ろ」と祖父も子供のやうな笑顔をして促してゐる
「ウシ……」と平作頷いて「もしもし龜よ龜さんよ、世界の中で汝ほど、歩ののろいものはない……」うろ覺の唱歌の稍もすれば行詰るので、お鳥が小聲で後を附ける「何んと仰やる兎さん、そんなら私と駈けくらべ向の小山の麓まで……」
「姉さん、默つてるだ、……そんなら小山の麓まで、私と駈けくらで……」
「違ふだよ、向の小山の麓まで……」
「姉さん、違ふだよ」
「汝が違ふだよ」
「姉さん馬鹿……私唄ふだ、ぴよんぴよんぴよんぴよんぴよんひよんぴよんぴよんぴよんぴよん、何んなに龜が急いでも……」
「ドレ、この間に一眠入……」と姉も節を合せて唄ふ、釣り込まれてお島も小聲に唄うてゐる、由太は兎のやうにしきりに首を振り出した、祖父も祖母ももう餘念もなく、莞爾々々して浮世の苦は暫し此家から忘られて了つた
俄かにお鎌は夢から醒めたやうに「谷藏、こんな可愛い孫が乞食にならねえちやなんねえだ、汝、何卒、もう謀反氣起してくれるでねえ、頼むだから」と聲が涙に慄えてゐる
谷藏も何んだか、最前から溜息許ついてゐたが「お母さんもう何にも云つて下さいますな、私一人の山氣の爲に、こんな可愛い者どもに苦勞かけちや濟みません、私の名義になつてる者は此の場で皆由太の名前に切り

替へて了ひませう、此の家を支へて行く由太にや矢つ張それ丈の財産が要りますが、私のやうな世界を家にして行くものにや、何、體一つありや澤山ですハヽヽヽ」と淋しく笑つたが、手近の燗徳利を取上るや否、ギウッと灑飲をやるのであつた

一坐眼を圓うした、がそれには頓着なく子供はしきりに唱歌を唄つてゐる

（五）

四五日經つて、例の世界を家とする、金縁の眼鏡を燦めかせて臘虎の襟の着いた外套を着込んで、いかにも福々しさうに見ゆる紳士谷藏は、見すぼらしい姿をして、六人家内を手一つで支へて行く農夫由太と、その妻子に送られて、再び故郷を後に、黄金花咲く米國を指してさすらひの旅途に上るのであつた、橋際から車の影が次第と遠かるのを懐かしがつて子供等は「伯父さん〳〵」と聲を限りに叫び出す、伯父さんはしきりと振返り〳〵、半鐘の火見臺の頭が山影に隱れて見えずなるまでは、見返りがちに彼方へ遠ざかつて行くのであつた（完）

三井の臺所

東京で呉服小賣店の大立者と云へば越後屋白木大丸の三軒であるが其の越後屋の名は三井呉服店と變つて今は三越と變つて白木大丸と並稱されて居る、さて此の三井を紹介しやうなら番頭を始め小僧に至るまで雇人の總勢二百廿五人中には女子職業學校の卒業生が十五名交り是は女店員として働いて居るが此の人數の賄ひは昨年九月より同所室町三丁目の伊豆勝と云ふ仕出屋が引受け一人前一日十五錢見當にして調理して居る、尙店員には一定の食料が支給せられて各自前様に賄方へ月々の拂ひをする事になつて居るゆゑ嗜みの惡い者は食料を他の事に使ひ晦日になつて伊豆勝さん濟まないが來月迄待つてくれ玉へなどゝ弱い音を吹くのもある、賄ひは十五錢宛で何を入れるかと云ふに米は三等米で朝は味噌汁に香の物其の味噌は仙臺で實は大根や豆腐、午は鯛、鰹節、干魚などか又は油揚・豆腐の煮付などに香の物、夕飯には煮豆か菜の煮たの位に香の物、酒は一切嚴禁せられて居る、斯様な工合で食物の種類は他の商家と特別變りはないが各自拂ひと云ふ點が珍らしい處である、附録として一寸店の符牒を記すが「商のみえざる處を會計者」これを一二三四五六七八九十萬の數字に割當てゝある飯の水を喜左衛門と云つて居るは當店に喜左衛門と云ふ飯炊男があつて永年忠勤を積んでたるより起つたのであると

雪の翼

泉鏡花

柏崎海軍少尉の夫人に、民子といつて、一昨年故郷なる、福井で結婚の式をあげて、佐世保に移住んだのが、今度少尉が出征に就き、親里の福井に歸り、神佛を祈り、影膳据えつゝ坐にある如く、家を守つて居るのがあつた。

旅順の吉報傳はるとともに幾干の猛將勇士、或は卒——或は傷つき骨も皮も散々に、影も留めぬさへある中に夫は天晴の功名して、唯纔に左の手に微傷を受けたばかりと聞いた時、且つ其の乘組んだ艦の帆柱に、夕陽の光を浴びて、一羽雪の如き鷹の來り留まつた報を受け取つた時、連添ふ身の民子は如何に感じたらう。あはれ新婚の式を擧げて、一年の衾煖かならず、戰地に向つて出立つた折には、忍んで泣かなかつたのも、嬉涙に暮れたのであつた。

あゝ、其のよろこびの涙も、夜は片敷いて帶も解かぬ留守の袖に乾きもあへず、飛報は鎮守府の病院より、一家の魂を消しに來た。

少尉が病んで、豫後不良とのことである。

此の急信は……年……月……日、午後三時に屆いたので、民子は蒼くなつて衝と立つと、不斷着に繻子の帶引締めて、つか〱と玄關へ。父親が佛壇に御明を點ずる間に、母親は、財布の紐を結えながら、駈けて出て之を懷中に入れさせる、女中がショールをきせかける、隣の女房が、急いで腕車を仕立に行く、とかうする內

お供に立つべき彌曾平といふ親仁、身仕度するといふ仕末。さて、取るものも取りあへず福井の市を出發した、これが鎭守府の病院に、夫を見舞ふ首途であつた。

冬の日の、山國の、名にしおふ越路なり、其日は空も曇つたれば、漸く町をはづれると、九頭龍川の川面に、早や夕暮の色を籠めて、暗くなりゆく水蒼く、早瀬に亂れて鳴る音も、千々に碎けて立つ波も、皆やー其の雪の思ひ遣らるゝ空模樣。近江の國へ山越には、出づるまでには、中の河内、木の芽峠か、最も近きは目の前に、春日野峠を控たれば、頂の雲眉を蔽ふて、道のほど五里あまり、武生の宿に着いた頃、日はとつぷりと暮れ果てた。

長旅は抱へたり、前に峠を望むだれば、夜を籠めてなど思ひも寄らず、柳屋といふに旅を取る。

路すがら手も足も冷ね凍り、火鉢の上へ突伏しても、身ぶるひやまぬ寒さであつたが。

枕に就いて、初夜過ぐる頃ほひより、少し氣候がゆるんだと思ふと、凡そ手の掌ほどあらうといふ、俗に牡丹となづくる雪が、しと〳〵と果しもあらず降出して、夜中頃には武生の町を笠のやうに押被せた、御嶽といふ一坐の峯、根こそぎ一搖れ、搖れたかと思ふ氣勢がして、風さへ颯と吹き添つた。

一の谷、二の谷、三の谷、四の谷かけて、山々峯々縱横に、荒れに荒るゝが手に取るやう、大波の寄せては返すに齊しく、此の一夜に北國空にあらゆる雪を、震ひ落すと、凄まじい。

民子は一睡の夢も結ばず。あけ方に風は凪きた。

作夜雇つた腕車が二臺、雪の門を叩いたので、主從は、朝餉の支度も匆々に、身ごしらへして、戸外に出ると、東雲の色とも分かず、黄昏の空とも見えず、溟々濛々として、天地唯一白。

不意に積つた雪なれば、雪車と申しても間に合はず。ともかくもお車を。帳場から此處へ參る内も、此の通

りの大汗と、四人の車夫は口を揃へ、精一杯、後押で、お供はいたして見まするけれども、前途のお受合はいたされず。何はしかれ車の歯の埋まりますまで、遣るとしませう。其の上は、三人がゝり五人がゝり、三井寺の鐘をかつぐ力づくでは、とても一寸も動きはしませぬ。お約束なれば紫柳屋の顔立に参つたまで、どしり込することと一方ならず。唯急ぎに急がれて、こゝに心なき主従よりも、御機嫌ようと門に立つて、一輿ひけば降る雪に、母衣の形も早や隠れて、殷々として沈み行く客を見送る宿のものが、却つて心細い限りであつた。

酒代は惜まぬ客人なり、然も美人を載せたれば、屈強の壯佼男をなし、曳々聲を懸け合はせ、畷、畝道、村の徑、揉みに揉んで、三里の路に八九時間、正午といふのに、峠の麓、春日野村に着いたので、先づ一軒の茶店に休んで、一行は吻と呼吸。

茶店のものも爐を圍んで、ぼんやりとして居るばかり、いふまでもなく極月かけて三月彼岸の雪どけまでは、毎年こんな中に起臥するから、雪を厭くやうな者は忘れても無い土地柄ながら、今年は意外に早い上に、今時慳くまで積るべしとは、七八十になつた老人も、思ひ懸けないのであつたと謂ふから。

來る道でも、村を抜けて、藪の前など通る折は、兩側から倒れ伏して、竹も三尺の雪を被いで、或は五間、或は十間、恰も眞綿の隧道のやうであつたを、手で拂ひ、笠で拂ひ辛うじて腕車を潜らしたれば、網の目にかかつたやうに、彼方此方を雀が、ばら〳〵、洞の蝙蝠の居るやうだつた、と、車夫同士噺りなどとして、しばらく啜茶に市が榮へる。

爐の中に苫と一盤、床几から轉げ落ちさう、脾腹を抱へて唸いたのは、民子が供の輿曾平親仁。

道は便なし、心を冷した老の癡、其の惱輕からず。

一體誰彼といふ中に、さし急いだ旅なれば、注文は間に合はず、殊に少い婦人なり。うつかりしたものも連

れられねば、供さして遣られもせぬ。與曾平は、三十年餘りも律義に事へて、飼殺のやうにして置く者の氣質は知れたり、今の世の道中に、雲助、白波の恐れなんど、あるべくも思はれねば、力はなくても怪しうはあらず、最も便よきは年こそ取つたれ、大根も引く、屋根も葺く、水も汲めば、米も搗く、達者なればと、この老僕を擇んだのが、大なる過失になつた。

いかに息災でも既に五十九、あけて六十にならうといふのが、内でこそはくる／＼働れ、近頃は遠路の疲もなく、父親が本を見る、炬燵の端も拜借し、母親が看經するうしろから、如來樣を拜む身分、血の氣の少ないのか、とやかくと、心遣ひに胸を騷がせ、寒さに骨を冷したれば、忘れて居た持病がこゝで、生憎此時。

雪は小止もなく降るのである、見る／＼内に積るのである。

大勢が寄つて集り、民子は取縋るやうにして、介抱するにも、藥にも、ありあはせの熊膽位、其でも心は通じたか、少しは落着くから一刻も疾く／＼と、再び腕車を立てやうとすれば、泥除に噛りつくまでもなく、與曾平は腰を折つて、礑と倒れて、顏の色も次第に變り、之では却つて足手絡ひ、一式の御恩報じ、此のお供をと念ひましたに、最う叶はぬ、皆で首を縊めてくれ、奥樣私を刺殺して、お心懸のないやうに願ひまする、おのれやれ、死で鬼となり、無事に道中はさせませう、魂が附添つて、と血狂ふばかりに急るほど、弱るは老の身體にこそ。

口々に押宥め、民子も切に慰めて、お前の病氣を看護ると謂つて、此處に足は留められぬ。棄てゝ行くには忍びぬけれども、鎭守府の旦那樣が、呼吸のある内一目逢ひたい、私の心は察しておくれ、とかういふ間も心が急く、旅は前に控えて居るし、爺や！

もし奥樣。

と土間の端までいざり出でゝ、膝をついて、手を合はすのを、振返つて、母衣は下りた。

一臺の腕車二人の車夫は、此の茶店に留まつて、人々とゝもに手當をし、些とでもあがきが着いたら、早速武生までも其日の内に引返すことにしたのである。

民子　腕車も二人がゝり、それから三里半だら〳〵のぼりに、中空に聳えたる、春日野峠にさしかゝる。もの、半道とは上らないのに、車の歯の軋み強く、平地でさへ、分けて坂、一分間に一寸づゝ、次第に雪が嵩増すので、呼吸を切つても、もがいても、腕車は一歩も進まずなりぬ。

前なるは楫棒を下して踞り、後なるは尻餅ついて、御新造さん、、、、とてもと謂ふ。

大方は恁くあらむと、期したることゝて、民子も豫め覺悟したから、茶店で草鞋を穿いて來たので、此處で母衣から姿を顯はし、山路の雪に下立つと、早や其の爪先は白うなる。

下坂は、動か取れると、一名の車夫は空車を曳いて、直ぐに引返す事になり、楫棒を取つて居たのが、旅鞄を一個背負つて、之が路案内で峠まで供をすることになつた。

其の鐵の如き健脚も、雪を踏んではとぼ〳〵しながら、前へ立つて足あとを印して上る、民子はあとから俯目も觸らず、攀ぢ上る心細さ。

千山萬岳疊々と、北に走り、西に分れ、南より迫り、東より襲ふ、四圍たゞ高き白妙なり。

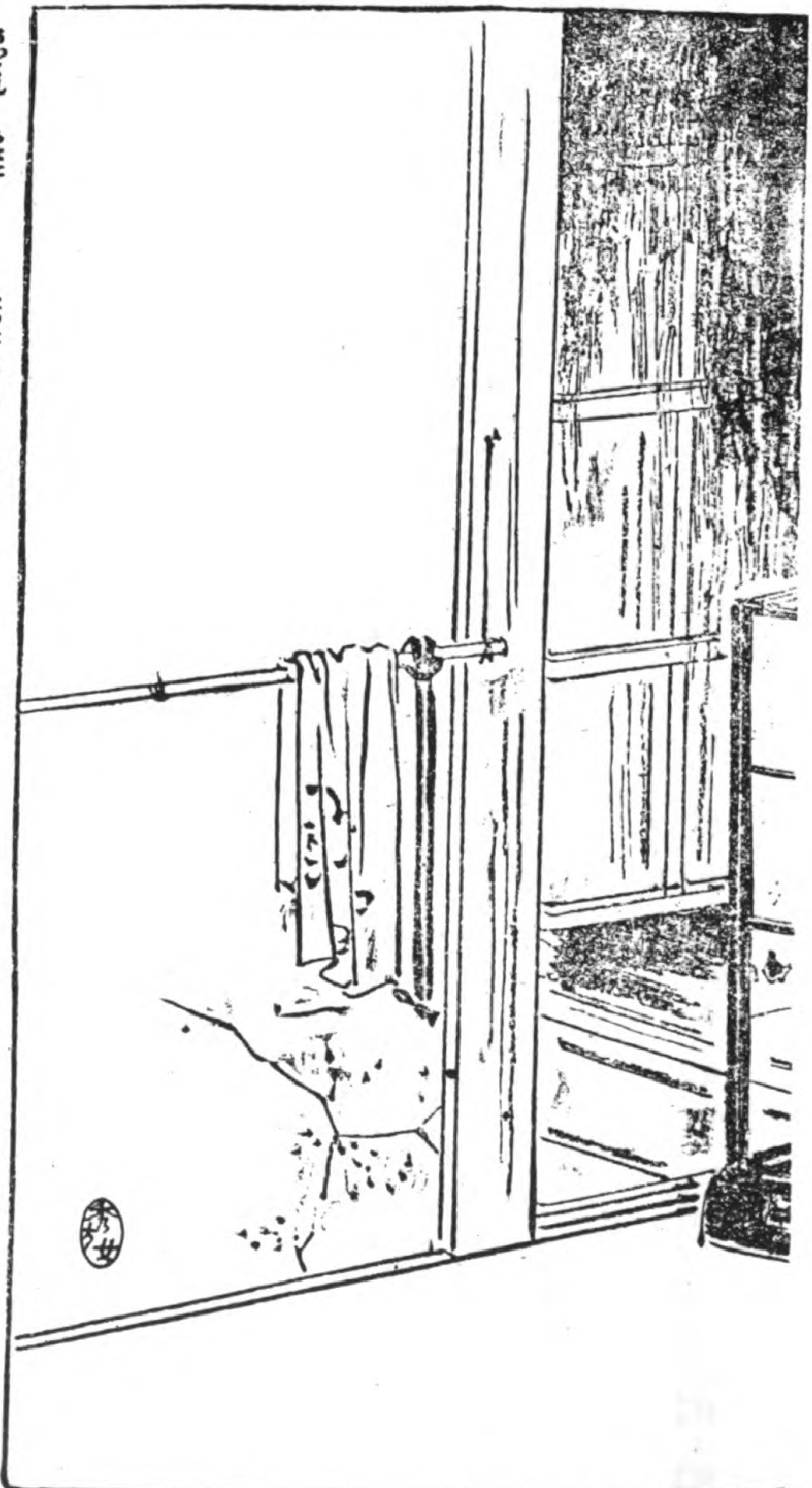
さるほどに、山又山、上れば峰は益々累り、頂は愈々聳へて、見渡せば、見渡せば、此處ばかり日の本を、雪が封ずる光景かな。

幸に風が無く、雪路に譬ひ山中でも、然までには寒くない、蹠占めるに力の入るだけ、却つて汗するばかりであつたが、裾も袂も硬ばるやうに、ぞつと寒さが身に迫ると、山々の影がさして、忽ち暮なむとする景色。

あはよく峠に戸を鎖した一軒の山家の軒に辿り着いた。

さて奥様、目當にいたして參つたは此の小家、倅は武生に勞働に行つて居り、留守は山の主のやうな、爺と婆二人ぐらし、此處にお泊りとなさいまし、戸を叩いてあけさせませう。まだ彼方此方五六軒、立場茶屋もご





ざりますが、美い貴女さま、唯お一人、預けまして、安心なは、此の外にござりませぬ。武生の富藏が受合ひました、何にしろお泊んなすつて、今夜の樣子を御覽じまし、此の雪の止むか、止まぬかゞ勝負でござります。もし留みませぬと、迚も路は通じません、降やんでくれさへすれば、雪車の出ます便宜もあります、御存じでもありませうが、此の邊では、雪籠といつて、山の中で一夜の内に、不意に雪に會ひますると、時節の來るま

で何方へも出られぬことになりますから、私は稼人、家に四五人も抱へて居ります、萬に一つも、もし、然やうな目に逢ひまするど、嬶々や小兒が顋を釣らねばなりませぬで、此上お供は出來かねまする。お別れといたしまして、其處らの茶店をあけさせて、茶碗酒をぎうとあふり、其勢で、暗闇に、とんぼを切つて轉げるまでも、今日の内に塒まで歸ります、とこれから其の伏家を叩くと、老人夫婦が出迎へて、富藏に仔細を聞くとお可哀相のいひつゞけ。

行前が案じられて、我にもあらずしよんぼりと、門に佇んで入りもやらぬ、嫺い最明寺殿を、手を取つて招じ入れて、昇据えるやうに圍爐裡の前。

お前まあ些と休んでと、親切にはだされて、懷しさうに民子がいふのを、いゝえ、さうしては居られませぬ、お荷物は此處へ、もし御遠慮はござりませぬ、足を投出して、裾の方からお温りなされませ、忘れても無理な路なされますな。それぢやとつさん頼んだぜ、婆さん、いたはつて上げてくんなせえ。

富藏さんとやら、といつて、民子は思はず涙ぐむ。

へい、へい、奥さま御機嫌よう、へい、又た通りがゝりにも、お供の御病人の氣をつけます、あゝ、いかい難儀をしておいでなさるさきの旦那様も御大病さうな、唯の時なら橋の上も、欄干の方は避けてお通りなさらうのに、おいたはしい。お天道様、何分お頼み申しますぜ、やあ、お天道様といや降ることは〳〵。

あとに頼むは老人夫婦、之が又、普陀洛山から假にこゝへ、庵を結んで、南無大悲民子のための觀世音。

其の情で、饑えず、凍えず、然も安心して寝床に入ることが出來た。

佗しさは、食ぶるものも、着るものも、こゝに斷るまでもない、薄い蒲團も、眞心には暖く、殊に些は便りにならうと、故と佛間の佛壇の前に、枕を置いてくれたのである。

心靜かに枕には着いたが、民子は何うして眠られやう、晝の疲勞を覺ゆるにつけても、思ひ遣らるゝ後の旅。更け行く闇に聲もなく、涼い目ばかりぱち〳〵させて、鐘の音も聞こえぬのを、徒らに指を折る、寂々とした板戸の外に、ばさりと物音。

民子は樹を辷つた雪のかたまりであらうふと思つた。

しばらくして又ばさりと障つた、斯る時、斯る山家に雪の夜半、此の音に恐氣だつた、婦人氣はどんなであらう。

高藏を疑はないでも、老夫婦の心は分つて居ても、孤家である、この孤家なる言は、昔語にも、お伽話にも淨瑠璃にも、ものゝ本にも、年紀今年二十になるまで、民子の耳に入つた響きに、一ツとして、悲慘悽愴の趣を今爰に囁き告ぐる、材料でないのはない。

呼吸を詰めて、なほ鈴のやうな瞳を凝らせば、薄暗い行燈の灯の外、壁も襖も天井も暗でないものはなく、雪に醒めいた目には一しほで、ほのかに白いは我とわが俤に立つ頬の邊を、緊乎とおさへて枕ながら幽にわなゝく小指であつた。

あなわびし、うたてくもかゝる際に、小用がたしたくなつたのである。

もし、ふるへ聲で又た、

もし〳〵と、二聲三聲呼んで見たが目ざとい老人も寢入ばな、分けて、罪も屈托も、山も町も何にもないから、雪の夜に靜まり返つて一層寢心の好さゝうに、鼾も聞こえずひッそりして居る。

堪りかねて、民子は密と起き直つたが、世話になる身の遠慮深く、氣味が惡いぐらゐには、家のぬし起されず、其まゝ突臥して居たけれどもさてあるべきにあらされば、恐々行燈を引提げて、勝手は寐しなに聞いて置

た、椽側について出やうとすると、途絶えて居たのが、ばたりと當ッて、二三度續けざまにばさ、ばさ、ばさ。

はッと唾をのみ、胸を反らして退つたが、やがて思切つて用を達して出るまでは、まづ何事もなかつた處。

手を洗はうとする時は、民子は殺されると思つたのである。

雨戸を一枚つと開けると、直ちに、東西南北へ五里十里の眞白な山であるから。

如何なることがあらうも知れずと、目を瞑つて、行燈をうしろに差殺き、わなゝき〳〵柄杓を取つて、埋もれた雪を拂ひながら、カチリとあたる水を濺いで、投げるやうに放したトタン、颯とばかり雪をまいて、ばつさり飛込むだ一個の怪物。

民子は思はずあッといつた。

夫婦はこれに刎起きたが、左右から民子を圍つて、三人六の目を注ぐと、小暗き方に蹲つたのは、何ものかこれ唯一羽の雁なのである。

老人は口をあいて笑ひ、いや珍らしくもない、まゝあること、俄かの雪に降籠められると、朋に離れ、時に迷ひ、行衛を失ひ、食に饑えて、却つて人に懐き寄る、これは獵師も憐んで、生命を取らず、稗、粟を與へて養ふ習と、仔細を聞けば、所謂窮鳥懐に入つたるもの。

翌る日も降り止まず、民子は心も心ならねど、神佛とも思はるゝ老の言に逆らはず二日三日は宿を重ねた。

其夜の雁も立去らず、餌をかはれた飼食のやう、よくなつき、分けて民子に慕ひ寄つて、膳の傍に羽を休めるやうになると、はじめに生命がけ恐く思ひしだけ、可愛さは一入なり、つれ〴〵には名を呼んで、翼を撫でもし、膝に抱きもし、頬もあて、夜は衾に懐を開いて、暖い玉の乳房の間に嘴を置かせて、すや〳〵と寐ることさへあつたが、一夜、凄じき寒威を覺えた、あけると凍てゝ雪車が出る、直に發足。

老人夫婦に別を告げつゝ、民子は雁にも殘惜いまで不便であつた、なごりを惜むだ。神の使であつたらう、この鳥がないと、民子は夫にも逢へず、其看護も出來ず、且つやがて大尉に昇進した少尉榮を見ることもならず、彌曾平の喜顏にも、再會することが出來なかつたのである。

民子をのせて出た雪車は、路を辷つて、十三谷といふ難所を、大切な客ばかりを千尋の谷底へ振り落した、雪ゆゑ怪我はなかつたが、落込んだのは炭燒の小屋の中。

五助。

權九郎。

といふ、兩名の炭燒が、同一雪舩に會つて封じ込められたやうになり、二日三日は貯蓄もあつたが、四日目から、粟一粒も口にしないで、熊の如き荒漢等、山狗かとばかり痩せ衰へ、目を光らせて、舌を噛んで、背中合せに倒れたまゝ、唸く聲さへ幽な處、何、人間なりとて用捨すべき。

帶を解き、衣を剝ぎ、板戸の上に縛めた、其のありさまは、こゝに謂ふまい。立處、其の手足を灸るべく、炎々たる炭火を起して、やがて、猛獸を拒ぐ用意の、山刀と斧を揮つて、あはや、其胸を開かむとなしたる處へ、神の御手の翼を擴げて、其膝、其手、其肩、其脛、狂ひまつはり、摑まつて、民子の膚を蔽ふたのは、鳥ながらも心ありけむ、民子の雪車のあとを慕ふて、大空を渡つて來た雁であつた。

瞬く間に、雁は炭燒に屠られたが、民子は微傷も受けないで、完き玉の安らかに雪の膚は繩から拔けた。

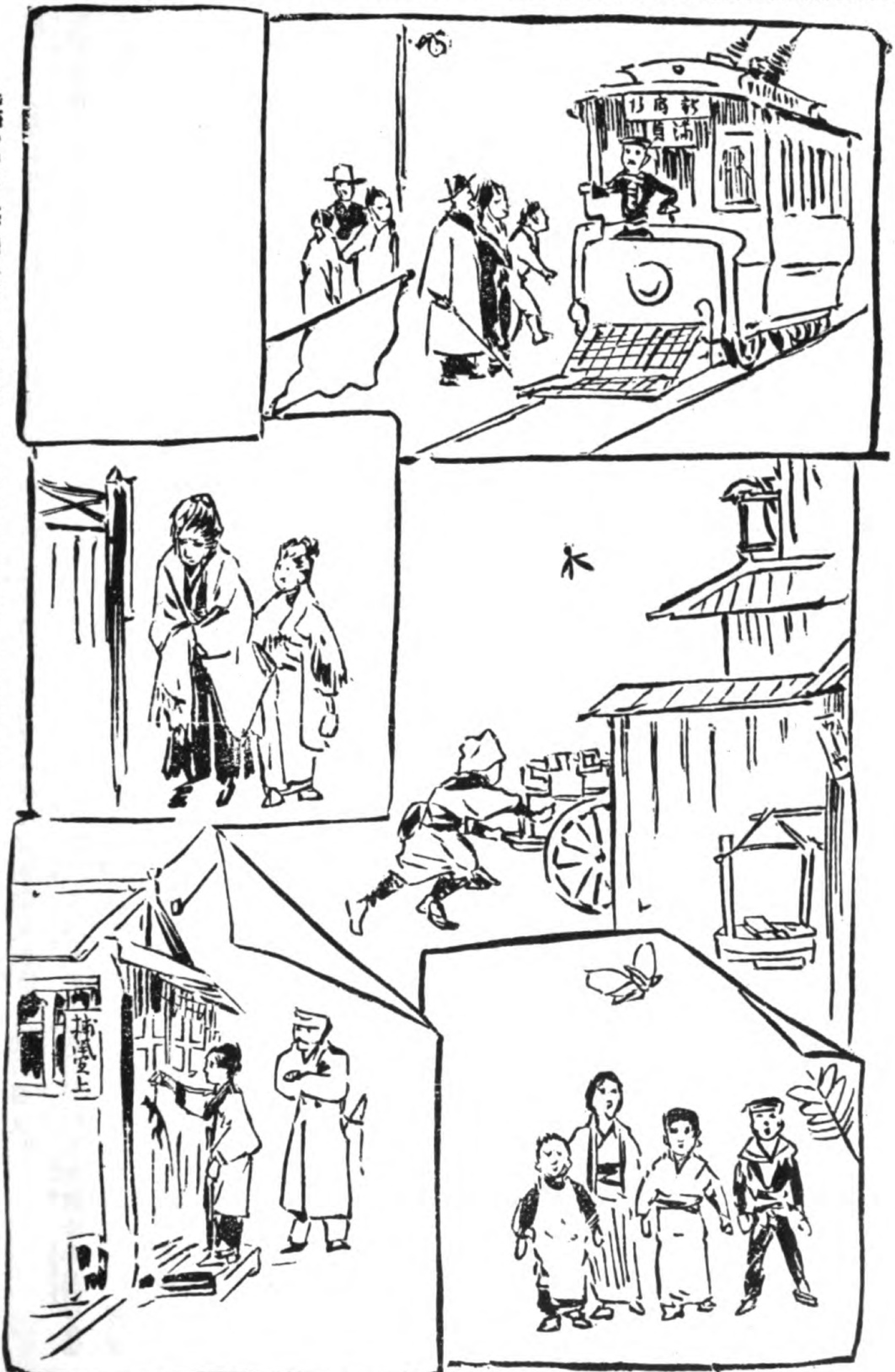
渠等は敢て鬼ではない、食を得たれば人心地になつて、恰も可、谷間から、いたはつて、負つて世に出た。

（完）

懸賞絵さがし (一)

此畫の中に人が幾人居りますか當てごらんなさい當つた方には規定の賞品をさし上ます

（〆切二月廿七日限）





この畫の中に人が何人居ますか當てごらんなさい當ッた方には規定の賞品を上ます

〆切二月廿七日

吉祥天女

小栗風葉

（一）彫刻室

「慶雲さん／＼、私貴方の奥様に成れなかつたら死んで了ひますわ！」

「有難いです！花子さん、僕も貴方のお心は能く知つて居るです、ですが、貴方の阿父さんを惡く言ふのぢや無いけれど、金子さんは何故那頑固なんでせう。那れが本當のガリ／＼亡者……ガリ亡と言ふのですよ。」

「あら、多度被仰い！何うせ私の阿父様はガリ亡よ。ガリ亡の子だから、あの、私もガリ娘よ。」

「其の又ハスバントはガリ／＼野郎ですかな。いや、然うぢや無い、貴方の阿父様は僕の事をピイ／＼野郎だと被仰つたさうだ、怪しからん！」

「だつて、阿父様は昔人間で何にも分らないんですもの、惡い氣が有つて言つたんぢや決して無いわ。全くよ、アーテストが甚麼もんだか、ゼネアスが何ういふ者だかサッパリ知らないんですから、只ねえ、何でもお金をドッサリ儲ける者で無くちや人間ぢや無いやうに然う思つてゝよ。」

「だから、ガリ／＼亡者と言ふんです！那様馬鹿な！ぢや、天才のインスピレーションが金で得られますか？」

「えゝ、私も貴方の被仰つたやうに然う言つて見たの。すると阿父様はね、インスピレーションでお腹が滿れるか、親の身として、自分の娘が餒じい思ひを爲るのを見ちや居られない、だから、貴方の所へは何うしても……むの……」

「遣られないと被仰るんでせう。あゝ、情無い！僕は何だつて這麼彫刻家なんぞに成つたんだらう――這麼食ふにも困るやうな。充らん！充らん！這麼事なら、僕は麵包燒か米搗に成るんだつた。」

「那様に力をお落しなさる事は無いわ。だから多度で無くても、貴方が一萬圓お金をお溜めなさりや、それで

我慢すそつて阿父樣は言つてるんですもの。」

「一萬圓！花子さん、僕は一月二圓の米代さへ不自由してるんですよ。あゝ、情無い！」

（二）應接所

「いゝや、何と言はれても其れぢや駄目ぢや、お話するがものは有りません。私は何も貴方ぢやから遣れんと言ふのぢや無い、やれ戀ぢやの藝術ぢやの云うて、私は大事な一人娘を、那樣貧乏の塊見たやうなものと取換へは出來んと言ふのぢや、なあ、貴方。然う言うちや失禮か知らんが、貴方は私の娘を貰ひなさる資格は無いのぢや。」

「御尤もです！それは被仰る通り僕は全く貧乏の塊です、けれど……けれど金子さん、僕は成程金と云ふ點から云つたら無資格な者でせうけれど、然し、名譽と云ふものは人生に無價値でせうか。貴方も御承知の那の彫刻です——今度懸つて居る那の吉祥天女の彫刻は、僕も非常に苦心したもので、帝室技藝會の會長も慥に名作だと言ひました——現在僕に向つて然う斷言したんですから間違ひは有りません！恐らく天平以來の名作だ！此の鹽梅で爲揚つたら必ず世間を驚かすだらうつて……」

「はゝゝゝ、那の男のお世辭なんぞが當に成るものぢや無い。縱んばぢやね、其通り那れが名作で、貴方が今に天下を驚かすやうな名聲を得られてからが、頭張名聲や名譽ぢや腹は滿れんのぢやて。那の木彫の唐子人形見たやうなものが、何ぼ名作に出來揚つた所で、幾らに賣れるな？餘程物好きな買人が附いてまあ五十圓か——私なら只の五圓でも御免ぢやが——それで、貴方が那れを彫り揚げて了ふに、ザッと半年懸るとして、五十圓の六月に割つて月八圓と少しぢや。慶雲君、八圓で自分も食ひ女房も食はされると思はれるか？はゝゝゝ。」

「ですが——人生は食ふばかりが目的ぢや有りますまい。」

「食はずに目的ばかりぢや生きて行かれんぢやて。ま

あさ、貴方が強つて娘が欲しいと云ふなら、妻も言ふ通り一萬圓お溜めなさい、然うすれば默つて娘は差上げる。其れが出來んければ私も承諾は出來ん、豫ての懇望ぢやから、大坂の支店長へ緣付げるより爲やうが無い。ぢやが、其の方も何れ此夏先方が這箇へ歸つてからの話ぢやから、貴方も其れまでに一萬圓お溜めなさい、私も五月まで待たう。其代り五月一杯に貴方が一萬圓出來んければ、私は直ぐ先方へ承諾の返事を與へます。」

「あゝ、情無い!」

（三） 彫刻室

「おゝ、才田君、能く來てくれた、僕は實に耐らん、僕は自殺しやうと思ふ。」

「自殺するのに相談する奴があるかい。君は馬鹿だよ。」

「だつて、僕は最う生きてる瀨は無い、此世に何一つ樂みが有るぢや無し——本當に此の彫像でも無かつたら迷うに死んで了つたらう。」

「ぢや、其の彫像が有るから自殺するにも及ばんぢやないか。君の言ふ事は實にトンチキだよ。」

「だけれど、此の彫像も木だからね……木で彫つた天女だからね、一向僕を慰めちやくれない……」

「當前さ、木で彫つた天女が口を利く譯も無し……君は何故然う間拔な事ばかり言ふんだらう。」

「だが、まあ見てくれ給へ、此の圓滿美妙な相格を——是で口を利かないのは不思議ぢやないか。」

「不思議も無いもんだ、自分で拵へたものを。だから、君は大馬鹿だと言ふんだよ。」

「何故?」

「何故も糞も有つたもんか、馬鹿も馬鹿も大馬鹿の三太郎だ! 君は何時だつたか、一萬圓溜めなくちや成らないと言つてたぢやないか、死ぬの何のと、那樣行らない事を言つてる日間に何故一萬圓の工夫を爲ないんだい?」

「君——才田君、人の苦痛を譁ふのは酷いぢやないか

ね。」
「馬鹿！誰が譯つてる？」
「考へても見給へ、百年も懸つたら知らない事、僕一生に一萬圓なんて金が溜るか溜らないか。工夫を爲るも爲ないも、僕の境界は君能く知つてるぢやないか。」
「馬鹿だと思つたら這奴腑拔だ！意氣地無しの効性無し！一萬圓ばかしの金が工夫附かんで何う爲る、那樣者は舌でも食ひ切つて死んで了ふが可い。」
「君は今日は何うか爲てるのぢやないか？一萬圓だよ、向ふ僅か五箇月の間に一萬圓だよ。」
「一萬圓が何だ！向ふ五箇月だらう？」
「然うさ、向ふ五箇月。」
「五箇月……充分だ。ぢや、僕が一番工夫してやらう。」
「え！本當かね？」
「本當とも。」
「だつて……然う言つちや何だけれど、君だつて此節は餘り融通の好い方ぢや無いし、現に親父さんから讓られた田舍の家屋敷まで手放すと言つてるくらゐで……
……」
「おい〳〵、失禮な事を言ふなよ。人の疝氣筋よりも、何う爲るんだい、僕に頼むか何うなんか？」
「それは、君に當が有るなら是非頼みたいがね……」
「當が有るならとは何だ、當の無い事を言ふもんか。其代り僕に頼む以上、君は決して僕の爲る事に故障入れちや成らんよ。甚麽物を甚麽事爲やうと、一切僕に任せて君は默つて見て居るんだよ、可いかい、え、慶雲君、僕の行爲は甚麽事でも是認して一切故障を言はんと誓ふかい？」
「僕には何う爲て可いか分らん、頭がメチャメチャだ――可いよ、何でも君の言ふ通りに從ふよ。」
「宜い！」
才田は傍にあつた鉈を取るより疾く、行成吉祥天女の彫像の鼻を削ぎ落す。ハッと思つて慶雲が立懸らうと爲る間に、更に鉈を一振、天女の指二本コロリと落ちて、續いて片耳、それから左の脚の足首。床

の上には無慘な破片が狼藉と飛び散つたのを、才田は見向きも爲ずに、其儘鉈を放り出してブイと出て行く。

餘りの事に慶雲は慍る事も忘れて居た。もの丶二十分ばかりと云ふもの、其の打毀たれた奇形の彫像をジッと見入つたま丶、眞青な顔をして息も爲ぬかと思はれたが、旋て男泣きにオイオイ泣き出したのである。

所へ、才田は一臺の人力車を雇つて歸つて來た。而して、半ば氣を失つたやうな慶雲には目も與れず、其の鼻缺け指足



らすの、片耳片足の影像を車の蹴込へ載せて自分も乗つて、何所へか行つて了つた。

(四)

彫刻室

「あゝ、今日は三十一日、五月も最う了ひだ！明日は愈々花子さんは支店長とやらの細君に決るんだ、あゝ、情無い！あゝ、腹が空つた！昨日夕飯を食はずに、今日も未だ朝飯を食はないんだから、腹がペコ〳〵になつて目が眩むやうだ。食ふ物は無し、借金取には責められるし、大家は大家で立退きを迫る、あゝ〳〵、進退谷まつた！最う



又米屋に酒屋が來るだらう、昨日の氣込みで見ると何でも今日は取らなきや歸るまい、其所へ又大家の禿頭が遣つて來て、三人が三方からガミ〳〵呶鳴るんだ――耐らない、命が縮まるやうだ―あゝ、一萬圓なんて那樣慾張つた事は最う要らないから、誰か爰へ十圓貸してくれる者は無いかなあ。才田は何う爲たか知らん？才出でも來ると何とか又相談對手にも成るのだが、那れつきり最う顔を見せない……顔と云へば、此間金子の邸の裏手をウロ付いてたら、丁度花子さんが二階から僕を見て、何だか懷しさうな悲しさうな顔を爲て……可哀さうに―那の樣子で見ると、何でも親父が彌喧くて外へ出さないと見える。金子のガリ〳〵親父め！好い加減に亡つて了やがりや可いんだ……おや、誰が來たやうだ！やれ〳〵、又苛めに來やがつたな。誰だ？むゝ、酒屋の因業野郎か――弱つたなあ。」

「えゝ今日は。何うも旦那、此度びは取んだ御運の好い事で……お愛でたう御座います。えゝ昨日は、誠に失禮を申上げまして……何うか惡しからず……いえいえ、何う致しまして、僅かばかりの事で御座いますから、お拂ひなんぞ何時でも宜う御座いますから、那樣事は決して御心配無く、何うか相變らず御最負に精々御用をお願ひ申します。えゝ是までお宅では、些とも酒の御用が御座いませんでしたが、旦那は日本酒が何で被居いますなら、麥酒も手前共に御座いますから……へい、何分何うか宜く。然やうなら。」

「獨りで喋つて行きやがつた、變だな！拂ひなんぞ何時でも可いつて、妙ぢやないか。昨日那麼に彌喧しく言やがつたものが、可怪いな。催促の事は忘れたやうに、やれ御最負に願ひますの、やれ麥酒が何うのと、一躰何う爲たと言ふんだ―奴め、家を間違へやがつたぢや無いか知ら？今に又引返して來るんだらう……おゝ、最う來せた―」

「はい、御免なさいよ。―

「や、大家の禿頭だ！」

「新聞で見ましたが、何うも豪い事に成りましたなあ！―

「又日本が勝ちましたか？戦よりも僕は貴方の攻撃が恐しいです。誠に濟みませんが大家さん、何うか最う二三日の御猶豫を……」

「那様現金な事を言ひなさらずに、折角恁うしてお馴染になつたんだから、御不承がなるものなら居着いとつてお下んなさい、それとも爰が手挾りやうなら、未だ私共の借家に廣い最う少し普請の新しい家が有るから、那裏を明けさせても可い。那れなら屹度お氣に入るから、今日午からでも私と一緒に見に行きませう。二階建で見晴しは好いし、湯殿が附いて物置が有つて、些いと恁う待合と云つたやうな造りだから。」

「御免下さい。」

「あゝ、米屋が來た。」

「ぢや、私は午から來ますから、左に右御一緒に見に行きませう。」

「えゝ手前は米屋で御座いますが、毎々手代が上りましては何かお煩い事を申上げましたさうで……此頃内お得意廻りは一切店の者に任して御座いまして、手前は何にも存せずに居りましたが、誠に何うも失禮を致しました。御承知の通り若い者で御座いますものですから、とんと最う見境も無しに御催促を申上まして、然ぞ御立腹で御座いましたでせう。何うぞ惡しからず御勘辨なすつて……それに今日始めて店の者から聞きましたので御座いますが、何うやらお宅様へは暫く御用を伺はずに居りますとかで、取んでも無い！何うも若い者任せで置きますと、つい恁う云ふ事が御座いまして困りますで御座います。何うか是までの御贔負効に、相變りませずお引立を……然やうなら。」

「何うだ、借金取と云ふ借金取が、皆手の裏返すやうにお世辭を言つて行くが、希代だな、何うも希代だ！僕にはサツパリ譯が分らん。」

「おい、居るか？」

「や、才田君！」

「慶雲君、さあ、大いに奢るんだ！花子さんは愈君のものになつたぞ。今爰へ來るから……何だ其顏は？そら俥の音が爲た、キヨト〳〵爲てないで出迎ひにで

も出ないかい。」

「慶雲さん！」

「おゝ、花子さん！」

「私まあ、這麼嬉しい事は無いわ！私最う貴方の奥様よ。」

「え！ぢや阿父さんが承諾なすつて？あゝ、有難い！何だか僕は夢を見てゐやうだ。」

(五) 麥酒店

紳士二人、テーブルに向つて麥酒を飲み居る。

「君は今日の新聞を見たかい？」

「見たが何う爲た？」

「驚くべき記事が有つたね。」

「むゝ、相續税法が通過したのか？」

「それを君が驚くのかい？借金の相續には税率は無いよ、まあ聞き給へ。兇う云ふのだ。些つと名前は忘れたが、苗字は何でも才田とか云ふ人が、自分の郷里の大和國御幸村と云ふ所の家屋敷を、東京の慶雲と云ふ彫刻家に讓り渡したんださうだ。其の家屋敷と云ふのは餘程以前才田と云ふのが抵當に入れて慶雲から金を借りた所が、何うしても返濟が出來ないと云ふので、今度抵當流れになつて慶雲の手に移つたんだ。愈明け渡す事になつて、才田は何か必要があつて屋敷の那箇這方人夫を入れて居ると、土を掘つた穴の中から驚くべき物が……」

「え？金の茶釜?!で無けりや、古金の入つた瓶だらう！えゝ君、それで時價に積つたら幾ら位のものなんだい？疾く高を知らしてくれ、氣が急いて成らない。」

「おい〳〵、目の色を變へて何だ……それ、コップが倒れるぜ。氣の早い、誰も古金だと言やしないぢやないか。」

「何んだ！充らない。ぢや、矢張流行のクロポックルか何かが？」

「所が、コロポックルより希しくて、古金より最つと金目の物だ。」

「ぢや、純金の石斧か、土器でも……」

「いゝや、金でも石でも土でも無い、物は木さ——木彫の佛像さ。何しろ永い間土の中に埋つてたんだから鼻も耳も缺けて了つて、脚なんか片足無いんださうだ。」

「何んだ！一層充らない。」

「所が、充らなく無いんだ。時代は無論古いし、何うも其の彫と云ひ形と云ひ、餘程素敵しいものらしいと云ふので、早速鑑定家や考古學者が研究に取懸つて、其れ〳〵專門家が色々な方面から調べた所が——何うして那樣所に埋つてたか理由は分らんが、左に右く鑑定は着いたんだ。像は吉祥天で、何でも今から千年以上天平時代の物と云ふので、稽文あたりの作らしい、何うも其の典雅沈靜な工合、クラシックの妙を盡して居て、奈良の三月堂や金堂の吉祥天なんぞ及ぶ所ぢや無いさうだ。其所で、政府へ買上になるとか何とか那樣議の起つてる内に、例の古物好きの何某家ね、那れが早速手を廻して、只三萬圓と云ふ安値で買取つて了つたんださうだが——何に懸けても那奴は手敏いよ。」

「ふむ！那樣鼻缺けの木彫一つが、三萬圓？」

「何を呆れるんだい、安いのに呆れるのか高いのに呆れるのか。何しろ千年以上の物だよ！國寶どころか、世界の寶とも云ふべき物だもの、三十萬圓だつて安いくらゐだ。君は美術の値打を知らないから話に成らんさ。」

「それで、其の三萬圓は誰のものに成つたんだい？」

「前の地面主の才田と云ふと、新に持主になつた慶雲と云ふと、一萬五千圓づゝ二人で折半したさうだ。」

「ふむ！何と云ふ運の好い奴等だらう。」

「何うだい？我々も一つ合資會社でも立てゝ、京都から奈良、那の邊の地所を手廣く買占めて了つて、ドンドン彫像の發堀を遣らかすのだ、礦山の發堀なんぞより割が好いかも知れないよ。其所で會社の名が、大日本堀出物會社さ！」

（六）展覧會

「ちよつとお花、參考室の那の有名な彫像を御覧、稽

文會の吉祥天と云ふ折紙が附いて何某家から出品したんだが、不思議さね、那して箔が附いて見ると俺にも何だか尊く見えるから。」

「然うですねえ。那れが未だ彫り懸けになつて居ます頃、私も能くお邪魔に上がつては何でしたが……ですか、私の覺えて居ますのとは、何所か顏なんぞ違ふやうに思へますよ。」

「それはね、鼻や耳を後から加着けた所爲なんだよ。ソッと堀出したまゝに爲て置けば可いものを、此の像と一緒に自分の名を殘さうと思つて、此節の野心澤山な彫刻家が、腕に覺えも無い癖に餘計な手入れを爲て鼻だの耳だの繼足し爲たものだから却て變な顏に成つて了つた。だが然し、俺の今日あるのも皆此の像のお蔭──云はゞ慶雲夫婦が開運の守本尊さ。」

「本當にね。然う思つて見る所爲か、何だか恁う神々しいやうで御座いますわ。世間で騒ぐ通り、全く其れ丈の値打も有るんでせう。」

「何有に鼻や耳が滿足だつたら世間は振向いても見や爲ないんだ。して見ると、此の吉祥天女よりも、鉈で打缺いだ才田の方が我々開運の守本尊かな。」（○元）

世界第一の女學校

世界第一の女學校

世界中にて最も多數の女學校あるは米國なれども最大女學校は大英國の高等ヘルロウエー學校にて建築其他の設備費のみにても八百万圓を費し其敷地は實に九十六エーカー（一エーカーは三反）たり入學生は十七歳以上の女子にて費用は授業料寄宿費さを合せ一ヶ年八百五十圓なり、尤も寄宿生には各一人美麗なる學問室寢室各一つを貸與し廣間二三室あり、學校の目的は高等社會の婦女子に適當なる最良なる教育を施さんさするにあるものにして卒業生は倫敦大學の理學士文學士等の學位を受くる資格ありし又オックスフォード大學の文學數學兩科の卒業生さ同格の證明狀を受くるを得べし衛生設備として一名の經驗ある看護婦は學校の常職員たり、敷地內には病室の設けあり運動場にはテニス、クリケット、ホッケー、游泳等の設備あり殊に游泳の爲めには游泳槽を設け學生には總て規定の教授を爲すなり、創立年月は今より十八年以前にして故ヴヰクトリア女皇之に親臨して千八百八十六年四月開校の式を擧げられしが當時は僅に二十八名の學生を有するに過ぎざりしが今や約二百名あるに至れりと

ポッケットの手簡

田山花袋

青山に於けるなにがし中尉の戰死は、實に勇烈無比、これを聞くもの皆な袖を絞らぬものは無いのであるが、渠が最後までその身を離さなかつた數通の手簡――自分は仔細あつてこれを讀んだ。

其手簡は都合五通、軍服の内の隱袋に深く深く藏められ、胸部を貫通した致命傷の血汐は、しどろにこれを染めて居つたので、乾きたる後はこれを開くに難く、或處などはそれが爲めに殆ど解らぬまでになつて居た。

今、此處にこれを展げて見やう。

其一

日附は五月七日、封の裏には梅子とばかり。

――妾を戀して下すつた貴郞、其時妾は貴郞の戀を受けることが出來ませんでした。今、今は何うでせう。此胸、此心、妾は餘りに遲く戀を知り始めたのよ。今、今の身の上で戀を爲たとて、……もう妾には夫たる身、あゝ何うしませう、此胸の苦しさ！

貴郞は妾が貴郞の戀を受けなかつた其時にも世の常の人のやうに、私を捨て、私を呪ひ、私を憎んでは下さらなかつた。いゝえ、何故あの時、私を呪つて、憎んでは下さらなかつた。もし、左樣して頂いたなら、今、今になつて、二人が苦しい悲しい思ひを爲なくつても好かつたものを。

友さん、堪忍して頂戴、何も彼も皆な妾が惡いのよ。新橋で御別れ申したあの夜、私は何んなに悲しかつたでせう。奧樣は彥丸さまを抱いて眼が泣き腫らして御出なすつたけれど、私はその眼を泣き腫した奧樣が羨ましかつた。かうして二人して別離を惜んで御別れなさる、――あの時戀を知つて居つたなら、私が奧樣の代りに泣いて上げることが出來たものとそう思ふと、お別で悲しいのに、猶それよりも辛い淚が出て、

私は貴郎の前に出ることは出來なかつた。貴郎は私の影が見えないので、何處に行つたと思召しましたでせう、私はね、あの時、丈の高い人の陰で、齒を喰しばつて泣いて居つたのよ。

新聞で見ますと、船の中も何うやら御安全——第二軍は恙なく遼東半島に上陸したッて、昨日號外が出て、妾は何んなに喜びましたか。すぐ、奥様の處に出懸けて行くと、奥様は矢張號外を見て御嬉しいと見えて、莞爾〳〵して御出なすつた。『奥様、第二軍は恙なく上陸してね』と突如聲を懸けると『まア、梅子さんの頓狂なこと、それでも御亭主持……』と仰しやるぢやありませんか。だッて、嬉しんですものを。それに、奥様は餘り酷いわ、それでも御亭主持!だッて。それでもとは何でせう。

嬉しいでせうと申すと、奥様が仰しやるには『友衛はもう覺悟を定めて出陣したのだから、國の爲めに戰死すると思へ、歸つて來ると思ふと間違ふぞ、彦丸はよく養育して呉れよ、呉々も言置いて行つたから、私はもう其氣で居るのよ』丸で平氣で入らつしやるのよ。それは左様、軍人の妻君ですものを、その位の覺悟は持つて居らつしやるのが當然、けども餘り素氣が無いぢやありませんか。

奥様はだから嫌ひ、(御免よ)

私が貴郎の奥様になつて上げたなら——それこそ、それこそ……けど、もう申しますまい、何だか悲しくなつて來るから。

彦丸さんは日増に御成人よ。此間、行つた時は御晝寐、何うかして御起きなさるまでと待つて居ましたけれど、中々御起きなさらないから歸つて了ひました。此間の前に行つた時には、元氣が好くつて、軍人の帽子を冠つて、サアベルを持つて、陸軍大將だッて言つて居らしつた。妾によく懷いて、妾が歸るッて言ふと、入口の處まで來て泣くのですものを。友さん、彦丸さんは貴郎によく似てゝね、奥様にもそれは似てるけれど、眼などは貴郎に活寫。

戰塲では何や彼やと苦しいことも多いでせうね。召

上るものなども充分には無いでせう。祖國の爲めですから、嬉しいですけれど、可成身體を。大切に、御手柄を澤山立てゝ下さいよ。

私が貴郎の奥樣だと――

其二

日附は五月二十一日、

初めての御手簡、何んなに嬉しかつたでせう。色々御困難の中に居ても、御壯健のよし、何よりも嬉しい。菫の花――色も香も少しも變らず、私はそれを戴いて何んなに御地のことを思つたでせう。この菫の花の咲いて居た處は、柳の樹の陰、少し高くなつて居る丘陵の上で、其處は何時でも貴郎の御散歩なさる處ですてのこと。又、其上では御國のことや奥樣のことや、私のことなどを考へる處であつて、――友さん、私のことなども時には考へて下すつて。あれ程思つた戀をも受けられぬやうな私をも憎いとは思はなくつて。けれど許して下さるわね、私は今後悔して、居りますものを、苦んで居りますものを、泣いて居りますものを。

それから、此の菫の花の咲いて居る丘陵の向ふには、貴郎の軍隊が泊まつて居て、そこには炊事場やら何や彼やらがあつて、豚を追廻して居るものもあるし、鷄を割いて居るものもあるし、夕炊の烟が一面に靡き渡つて居るとの御話。御困難でせうけれど、又面白いこともあるでせうねえ。私も男なら――女に生れたのが口惜しい。

菫の花は文箱の底の底に大事に藏つて置いてよ。御凱旋の時まで、屹度色も變らずに居るでせうと思ふの、いゝえ、貴郎が御健全で居らつしやる中は、屹度この色は變らなくつてよ。

昨日何うしてだか、昔のことを思ひ出してよ。妾がまた十三位、貴方は士官學校に居らしつて、よく妾の宅に御出なすつたわね。妾は例の臆面無しですから、よく貴郎にいろいろなことを申して、御友達にして遊んだわね。何故あんなに臆面無しに、すつかり貴郎を御友達にして了つたでせう。あんなに御友達に爲なけ

れば、乾度貴郎の私に戀してることも解つたのでせうけれど、餘りに打解け過ぎて了つたものですから、それで惡るかつたのよ。

私は十二三の大きな體で、よく貴郎に負ぶさつたのですものね。私は蝦茶の袴で學校から歸つて來ると、土曜日には乾度貴郎が來て居る。金釦鈕、肩章、帽子の跡の際立つて黒い額、私はその肩に負さつて、よくリボンを買つて呉れとねだつたわねえ。あゝあの頃が戀しい。

貴郎も戀しくはなくつて？

奥樣も御健全、杢丸さんも御健全、此間貴郎が奥樣に上げた御手紙も見てよ。何故あんな鹿爪らしいことを書いて？　何故、私の處に寄越すやうな打解けた手紙を書かんの？軍人の妻たるの本分を忘れるなよ何のつて、そんなことは今更言はんでも解つてるわ。貴郎は歸らん積、名譽の戰死を爲さる積、これは軍人だから、左樣思ひなさるゝのは尤もだわ。だけど、私は何うしても歸らせるわ、何うしても戰死などはさせないわ、――私は朝夕神樣にお祈禱を上げて居るから。

それから奥樣も此頃信心を始めてよ。信心などゝ言ふと友さんは笑ふでせう。けども、そら、貴郎の宅の二三軒先に、矢張同じ軍人の奥樣があつて、第一軍の方に行つて居らつしやる、ね、三十位の色の蒼い、痩方の奥樣。あの方がね、何うしても無事で歸つて貰はなければならんと仰しやつて、これは何でも神佛にたよるより他に仕方が無いと、先月から――町のお釋迦樣に日參を始めたのですツて。奥樣も感心なすつて、それでは妾も御參をしやうと言つて、毎日出掛けて行つてよ。御釋迦樣、そら、貴郎も知つてるでせう、私が稚い時分、よく貴郎と緣日に行つて、人形を買つて貰つたあの御釋迦樣よ。此間の朝も奥樣の行くところに逢つたのよ。で、妾も一緒に御參をして、何うか無事で御歸りなさるやうにと御願を爲たの。御釋迦樣に日參、あまり舊派だわねえ、――けども妾は好いと思ふの。

まだ、戰爭は無いのですツて。けども、もう直きあ

るでせう。東京ではね、第一軍の九連城の勝利で、皆な夢中になつて、提燈行列だの、何だのッて、丸で御祭のやう。私も此間內の人に伴れられて（冷かしては厭よ）行て見ましたがね、日比谷あたりはそれは賑かでしたわ。

內の人ッて言へば、また友さんに笑はれるか知れませんけれど、面白くない人ね。御役所の役人なんぞ、私嫌ひ。

其三

日附は六月十二日。

南山での御奮闘――今日の御手紙でほつと呼吸を吐きました。

先月の二十八日、南山大勝利の號外の出た時、私は何んな心地が爲たでせう。大勝利なのは、此上もなく嬉しかつたですけれど、其號外を見てすぐ思つたのは、貴郎の安否。それに、段々聞くと大變な死傷者だッて申すぢやありませんか。そればかりならまた好いですけれど內の人が役所から聞いて來て話すのには、何でも貴郎の附いて居る師團が一番苦戰して、そして一番死傷が多いと申すではありませんか。もしや、もしやと思つて、何んなに心配したでせう。奥樣なども、電報が來はしないかと、びく〳〵者で居らしつたやうです。ですから每朝新聞を見るのも心配で、何の位貴郎の御身の上を思つてたでせう。ある日などは、丁度雨の降つた、厭な厭な日でしたがね、何うしても貴郎が御戰死なすつたやうな氣がして仕方が無い。陰で鬱いでると、內の人が、何をそんなに考へ込んで居ると聞くぢやありませんか。これ〳〵と私は話したですわ。すると、非常に笑つて、そんな取越苦勞を爲んでも好いぢやないか、大丈夫だよ、今、報知して來なければ、もう戰死などと言ふことは無いと申すのです。私はそれでも心配で心配で爲方が無かつたのよ。

今日着いた詳しい御手簡。何んなに嬉しかつたでせう。私は泣いたのよ。もう、もう、そんな危險なところには出て下さるな。銃丸の來るやうな處、そんな處

には成だけ出ないやうに爲て下さい。それにしても、どんなでしたらうね、銃丸が雨のやうに來る中をずん〳〵と進んで御出なさる時は？そんな時にも、貴郎私のことを考へて？ 鐵條網の中を突貫して御手紙の中にありましたが、よく彈丸が中らなかつてね。私は神樣に御禮を申上げなければならない。

南山といふのはどんな處、私、いろ〳〵に想像しましたよ。昨夜の夢に、何だかかう非常に恐ろしい山のやうな處を、私が彦丸さんを負つて行くと、俄かに大砲の聲が爲て、その彈丸の破裂することの見事と言つたら、私思はず見惚れて居ると、向ふから澤山の兵士が進んで來て、それが皆な露兵、私は吃驚して逃げやうとして眼が覺めた。見ると、行燈がさびしく暗く點いて居るのよ。其時、私思つたわ、友さんは今頃將校斥候か何かに出て、非常に危險なところを通りながら、私のことを考へてるのでせう、と、友さん、私の事を考へて下さいよ。貴郎の奥樣にはなれなかつたけれど、私は本當に貴郎を力にして居るのだから。ひよつとかすると、奥樣よりも妾の方が却つて貴郎のことを餘計に思つてよ。

私、此間、貴郎の凱旋して御出なさる時のことを想像してよ。貴郎は其時は乾度すぐれた功蹟を立てゝ、新聞などにも賞立てられて、軍人の龜鑑とか何とか言はれて居らつしやる。それを新橋に迎ひに行く時は、それは何んなにうれしいでせう。私は、人が見て居たつて、何だつて搆はんわ、いきなり貴郎の傍に行くわ、奥樣よりも私が先に握手するわ。乾度貴郎は其時は軍服はぼろ〳〵になつて、鬚武者の、見違へるやうになつて居るでせう。けれど、其時は何んなに勇ましからうと思ふの。

早く其時が來れば好い。

内の人は嫌ひだけれど、感心に貴郎のことだけは賞めるのよ。友衛さんは軍人肌に似合はず、沈着いたやさしい處があつて賴もしい男だ、乾度あの人などは立派な手柄を立てるだらうと、いつも言つてるの、大藏省の叅事官だツて、厭なものだと思ふけれど、それ

でも大學を出ただけあつて、ちつとは眼が開いて居るところがあると見えるわ。

そして、何か追送品に交せて、旨しい者でも送つて上げたら好いぢやないかと言ふの。私も、前から左樣思つて居たのだから、何か送つて上げやうと色々考へましたの、貴郎、何が好くツて？風月堂のカステラ？榮太樓の甘納豆？今度は仕方が無いから、有合せのものを送りますけれど、此次の便には、何かねだつて寄越して下さい。

それから眞面目に貴郎に申上げなければならないことがあるわ。それは他でも無いけれど、此間御越した奥樣への手紙、あんなことを此から言つて來ては厭ですよ。奥樣はあれを見て泣いて居なすつた。自分の父親も國家の爲めに名譽なる戰死を爲た、自分もこれに劣つてはならぬ。自分と自分の母との嘗めた寡婦孤兒の味を妻や彥丸に嘗めさせるのは不愍だけれども、これとて、何うも國の爲めなれば致方が無い。今度の戰爭は支那人を相手に爲た二十七八年の役とは違つて、敵が中々手硬いから、中隊長、大隊長などが先へ出て戰死する位でなければ、何うしても駄目だ！今度といふ今度は、覺悟を極めたと仰しやつて寄越しなすつたつてね。そんなことを言つては厭ですよ。考へて御覽なさい、如何に御國の爲めだと仰つて、まだあの若い奥樣に寡婦の苦しみを嘗めさせるのは、餘り無情ではありませんか。そんなことを言つては厭よ。御身安全と神樣に御祈禱を上げて居る此身を忘れては下さるな。

其四

日附は七月三日。

段々暑くなつて、嘸ぞ御凌ぎ惡いことでせう。内地に居て、氷や何や彼やと申して居りましても、堪へ難い程暑いのですから、滿洲の水の無い處では、とても話にならぬ程でせう。

得利寺の戰爭にも、右翼の最も激しい處に御出陣なされしよし。しかも些の傷痍だに受け給はぬ御武運の程、私は何んなにうれしく思ふでせう。此地にても、常陸丸沈沒以來、一方ならぬ騷動にて、戰爭の恐ろしさなど人知れず考へて居りまする次第、——もう好い加減に敵は降參しさうな者ですに……

此間の御手紙——不束な私の言葉を容れて下すつたのは、何よりも嬉しい。御身、御身の爲めにのみ生き

る、此の言葉を讀んだ時は、私はうれし泣きに泣きましたわ。何うか此言葉を忘れては下さるな。何うか、この世に御身の凱旋を死ぬほど祈つて居る女のあることを忘れては下さるな。──御身ある間は死すまじ、いかに激しき戰の庭に臨むとも、御身の美しき戀を思はゞ、銃丸も亦避けて飛ばむ──御言葉の通りよ。私が神樣に御祈禱を上げて居る間は、決してそんな心配は無いのよ。

友さん、何故私は貴郎の奧樣にならなかつたでせう。何故妾はあの時承知しなかつたでせう。父樣や母樣は何と言つたつて、私さへ爲る氣なら爲れたのに……あゝ、魔がさしたのだわ、本當に魔が………。

けれど友さん、奧樣にはなれなかつたけれど、私は戀してるのよ。私の靈は貴郎より他に愛するものは無いのよ。友さん、これで、滿足して下さるでせう。これで生きて下さるでせう。

あゝ、辛いわ、この胸。

昨日、奧樣を訪ねたのよ。

奧樣は相變らず御丈夫、直丸さんも此間中少し腸を害して、おむづかりでしたけれど、今ではもうすつかりよくなつて、父樣は？と人から聞かれて、戰爭に？と仰しやるし、新聞號外、新聞號外！と號外賣の眞似を爲されるし、萬歲！も分明仰しやられますよ。昨日久し振りで、奧樣と一緒に琴を彈きましたが、貴郎のお好きの住吉が何うしても旨く彈けない。氣に懸るから、幾度も彈直して見たが、何うしても想ふやうに調子が合はないではありませんか。終にはむしやくしやして遂々止めて了つたのよ。

奧樣の仰やるには、何うも琴と言ふものはつまらない。それは、いくら彈かないで居ても忘れない位に上手になれば面白いでせうけれど、御新樣位ではすぐ忘れて了ふ。子供でも居ない中は、おさらひも出來るけれど、もう人の妻になつては、駄目なものだと仰しやつた。琴ばかりでは無いわ、人も若くなければ、矢張駄目。

何故、昨日はあんなに悲しいことばかり話したでせう何かの話の次手に奧樣の仰しやられたには、もし、文衞が戰死したら、何うしやう。私は其時はこの直丸を養育して、この家の系統を絕たぬやうにする積ですけれど、梅子さんは其時は力になつて下さるでせうねと仰るのですよ。まア、そんな話は爲んでも好いぢやありませんかと止めて見ましたけれど、奧樣は中々承

知なされないのよ。まア、軍人であり、戰鬪員であればそんな事は無いとも限らないものだから………と逢つて仰しやるから、無論、私は一生御友達にもなるし、御世話が出來るなら御世話も致しますともと申すと、奥樣は淚を流して、乾度よ！と仰しやつた。悲しかつたこと。

貴郞、貴郞のやうに、二度も戰場に臨めば、もうそれで祖國の爲めにも充分なんですから、餘りに無謀なことを爲されず、危險な處になど出ずに、御無事に歸つて來て下さいよ。

得利寺の戰爭は味方の大勝利でしたとのこと。常陸丸や何かの騷ぎで、提燈行列も無かつたですけれど、内の人などの話では、何でも大變有利な戰爭であつたと申すことですわ。ことに貴郞の御出なされた右翼と申す方は、最も激戰であつた相で、互に石を投げ合ふほどでしたとか聞きましたが、隨分酷い者でせうね。

それに、此間に追送品が漸く着いて、折角の私の思ひのとゞいたのは、此上なく嬉しいと思ふわ。今度は榮太郎の甘納豆を送つて……とのこと、早速送つて上げますから。

聞けば、水が非常に惡い相ですね。暑くつても、餘り生水は召上らぬやうにして下さい。御不自由はそれは限りはありますまいけれど、その代り、凱旋の曉には、奥樣と一緒にどのやうな御無理も聞いて上げますから。

それから最後に、恥しいけれど、御報知するわ。私は懷姙してよ。

其五

日附は八月十日。

（半破れ、血汐に染まりて、分明と解らず）――あゝ何うしませう。今日ゆくりなく見ると、菫の色がすつかり變つて居たわ。

菫の色が……あの菫の色が。

何うしませう。

かへす／＼も御身體を大事に注意して下さいよ。

（この跡破れて無し）

末の望

矢崎孤村

(一)

村端の舛形山は、高さ二三間の低い岡で、廣さも僅か千坪斗の狹い所ながら、千歳の老杉枝を交へて、遠くから見るとこんもりと繁つた樣格好宜く、村の目標となつて居る、此山の中央に春秋は左のみ目立ぬながら、高さを杉の梢と爭ッて居る二本の大榎が有て、其が秋の末霜を孕んで眞赤に紅葉する時は、綠葉の間にちら〳〵と隱見して、遠くから見ると實に美しい、殊に此山に登ッて其大榎の下に立つ時は、宛然大傘を廣げた樣な大榎の紅葉は惜氣もなく、投懸る秋の日を樹充溢に浴て、眩ゆき斗赤い、取別け小兒の接吻の如く澄切た秋の空、と淡黑き杉の青葉とが、最も詩的に是が對照を形造るので、更に一層の色を增て、宛然錦の天幕を張たの歟とさへ思はれる。

村の老人は今も尚記憶するで有らう、今より恰度五十餘年前、此大榎の下へ、年頃十歳斗の男の兒と八歳斗の女の兒とが、能手を携へて遊びに來ては、暑き夏の日盛を飯事をして遊んだり、又秋此木の葉が色付き始る頃、榎の果の眞黑に熟したのを、楓の樣な可愛らしい手で拾ひ集めたりなぞして遊んで居た事の有たのを。

彼等は此村の子供にして、一人は此山の持主なる富山家の愛娘、一人は小作人の與吾作の長男で有る、蓋し幼時には貧富の別も有らず、仲宜を以て朋友とすれば、彼等は其親々が主僕の如き關係有るにも係はらず、斯は親しみ睦みて日を送ッたので有た。

されど春の如き無邪氣なる幼稚の天明過去りて、旭陽の登る如き生活の運命に二人の入りし時は、世間の習慣は二人を別々にして、又幼時の飯事を爲すを許さなかッた、兎は言へ春の茶摘頃、夏の養蠶時、彼等は地主のお孃樣、小作人の若者として、時々節々顔を合し、言葉を交す事は絶ぬので有る、何となれば斯る時は、彼等は一ッ畑に出で、一ッ茶を摘み、一ッ桑をむしる事が有る故で有る、然して斯る時彼等の淡々しき心が、如何に可愛き細やかなる波を立るで有らう歟、彼等の心は一日として其懐しき幼時の朋友を忘れた事ないので有る、今や彼等の一人は乙女として其幼時の朋友を心に抱ば、一人は若者として懐しき乙女の姿を心に慕ひつゝ、其二ッの心には幼時よりの愛情が、年と共に温められ育てられつゝ、電流の如く通ひつゝ有るので有る、されど浮世の貧富は二人の中を断然と隔てつゝ有る、嗚呼造物の神よ、爾は二人に温き愛情を與へたまへど、二人に如何なる行末を與へたまふで有らう歟？

（二）

夏の日駒ゲ嶽の巓に懸ッて、伊奈部川の水面を銀の樣に照せば、村人も此處一時間は晝休み、或は三々伍々相集りて、澁茶を吸み、小晝飯を喫しながら、四方山の噂をして居るのも有れば、或は又木蔭を撰んで華胥の國へ遊ぶのも有る頃で有らう、斯る時は此處彼處の水車の音も遠く聞えて、蟬の音が獨り杉の梢に高く四方の靜さを破るので有る。

此時しも蚪形山の森へ分入り、大榎の根方に腰打掛て語らう男女二人の者が有る、男は年の頃二十歳斗、身には垢染た筒袖の木曾の麻布を着け、足には輕衫を穿て居る、貌は日に燒て黒けれど、腦額高く、目清しく、如何にも相貌の明瞭として怜悧さうな男で有る、女は年の頃十七八歳、身には手織縞の單衣を着た質素の打扮な

がら、色白く、目元凛々しく、如何にも上品の品格を備へて居たに、其育柄も忍ばれて、人をして何處となく懐しく思はしめる

與作様、お前私に相談が有るとお言だが、如何様相談だね?

お孃様、私貴孃に何時歟から言はふ〳〵と思ッて居て、つい折が無ッて言はなかッたゞが、今日は好機會だで言ますだ、是は眞面目の相談だで、貴様も篤と考へて、確乎した返事打てくれせへよ、私い何時歟貴孃と夫婦約束さしたけんど、熟々考へて見ると、貴孃は大家のお孃様、私は見る影も無水呑百姓の子、此儘で居ては迚も夫婦にはなれましねへだ、否さ、假ひ私等二人が如何様に其を望んだからとて、迚も貴孃の父上様や母上様がお許しなさらねへだ、而して見れば末の認が無だ、否さ、篤と私の言ふ事聽てくれせへよ、其處で私考へたゞ、迚も此儘では不可から、一骨折て身代を作るべい、だけれど此信州の様な山の中では、如何する事も出來ねへだ、此間も飯田の市へ玉子を持て商賣に往て見たが、幾らの儲も無だ、だから是から思ひ切て、寧そ江戸歟横濱へ往て稼いで見べいと思ふだ、此頃人の話で聞けば、横濱はえら異人が這入り込で來て、種々新しい商賣が始り、如何様一文無の男でも、詰度何歟知らにか有附といふだから、私其横濱へ往て見べいと思ふだ、其處で辛捧して一骨折たら、大都會の江戸は近し、新開地の事で有るから、詰度物になるべいと思ふだ、だが其處が相談だ、私が横濱へ往て歸ッて來る間、五年なり十年なり、貴孃が御亭を持ずに待て居られる歟如何だ歟、若待て居られるなら待て居て貰ひたいだ、私詰度金を貯て歸ッて來るだから、けんど若貴孃に其が出來ねへければ、私の事は思ひ切て他の御亭を持て貰ひていだ、

否、私何で他の亭主なぞ持もの歟ね、是非お前様と夫婦になるよ、死でもならずには置ないわ、

否、其は貴孃の志は難有いが、左様容易く返事打れては却て嬉しくねへだ、其は貴孃は私の女房になる積

で居てもだ、宜しかね、御両親が御許しなさらねへだ、其に其中には嫁人の口も、此處彼處に出て來やうといふものだ、如何して其が一々貴孃に斷れべい、仕舞には御両親も怒つて貴孃を憎まッしやるだ、其時の難儀は如何だんべい、其等の事も篤と考へて、確乎して返事打て貰ひていだ、よ、孃様

と與作は靑年ながら、貧苦の中に生長たれば、浮世の塵も充分身に染て居るものと見え、分別も深く思ひ入ッて演た、乙女は今更の如く覺えたが、然し其決心は堅い、石にあらず、轉ずべからず、莚にあらず捲べからずで有る、

其は御前様の言ふ處は御道理です、然し私は如何様好口が有ても、決して嫁には往ません、たッて両親が勸めれば死を以て爭ひます、私はお前様との約束は決して變ません、だからお前様も如何歟横濱へ往て、充分お金を貯て歸ッて來て下さい、私は其迄は五年でも十年でも、必らず辛坊して待て居ます、

と乙女はきッぱりと返事をした、

孃様、貴女が其氣なら私此上もなく嬉しいだ、其では私乾度金を貯て歸ッて來るだから、必らず辛棒して待て居てくれせへよ、

斯て靑年與作は横濱へ出立した、彼が出立して後一年經ち、二年經ち、三年經ち、五年十年と星霜を過たれど、そよとの風の音信だにない、彼は抑如何したで有らう歟、

（三）

靑年與作が故鄕を出立したのは、元治元年の夏で、其から今日迄足掛十年の星霜を經て、世は明治六年となッて居る、其間日本は最も多端多變の時代を經過して、德川政府の瓦解となり、王政維新の設定となり、廢藩置

縣の英斷となり、開國進取の國是となッて、舊習舊慣は著しく一掃せられ、從て各人の生活狀態にも大變化を生じたので、武陵桃源の如き信州の山中さへ、大に其影響を被むッて、昨日迄饑餓に苦しみし水呑百姓の子が、一朝にして巨萬の富を造るも有れば、曾ては素封家を以て郷黨の中に重んせられた者が、忽ちにして產を失ふも有る杯、今更の如く人をして世の榮枯盛衰の感に堪しめぬもの多かつた、我乙女の生家たる富山家の如きも、又此自然淘汰の千石簁に洩ず、產を失ッて土崩瓦解したが、今其由來を尋ぬると斯で有る。

富山家は元一村の庄屋として、代々勤儉の風を尙び、大に全村の尊重を得て居たもので有たが、祖父の代より次第に家風衰へて、奢侈の風大に進み、年々浪費のみ多かりし爲め、家計漸やく衰微するに至ッた、乙女の父家を繼に及びて甚く之を憂へ、頻に家運の回復を計りたれど、何しろ世間見ずの懐育ち、思ふ樣にもならなかッたので有た、其中に政治の變遷や、時世變化の餘波で、家運益々非に、身代愈々傾くといふ有樣、父なる人は愈あせつて、頻りに自らも工夫し、他人にも計つて、其回復策を運して居たが、物事はあせればあせる程巧く不可ぬもので有る、恰度其頃我國の外國貿易は次第に發達し來て、中にも蠶種貿易は年々長足の進歩を爲したが、信州は昔からの養蠶地とて、我も〳〵と蠶種製造に着手する有樣となつて來た、乙女の父なる人も此風潮に乘じて、一攫万金の利を博せんものと、產を盡して資本を此事業に打込んだが、扱馴ぬ事には失敗多きもので有る、此頃の日本人は、商業の秘訣の信用に有る事を知らず、只時の風潮に乘して、皆一時の奇利を占んと思ふ者のみ多かりし故、蠶種製造の如きも、其品質の如何を問はず、滔々として粗製濫造を敢てした結果、我國蠶種の聲價忽ち地に落て、大恐慌を市場に來した折なれば、父なる人が折角產を擧て打込んだ此事業も、只大失敗に終つたので有た、されば彼は一敗地に塗れて又挽回の策なく、さらぬだに殘り少となッた田畑は皆他人手に渡ッて、祖先以來住馴た邸宅にさへ住得ず、村端の茅屋へ移轉するの悲境に陷ッて仕舞ッた、

彼は是を苦に病で甚く歎き悲んだが、多年精根を使ひ減した上へ、今此悲運に陥ゐりし事とて、悔恨胸に満て、終に健康を失ひ、病を得て冥土の人となり終ッた、

是より先乙女千代子は媒介する人の有て、、隣村の富豪へ嫁入の世話をせんとて、二三度申込の事は有たれど、彼女は其度に父母の勧を辭していふ樣、妾今若他家へ嫁入なさば、妾が家の家格として、御兩親も左樣見すぼらしき仕度にて遣たまふ事は叶ひますまい 左すれば無益の浪費の多く懸ると申すもの、今父上が家運の傾けるを歎きたまひて、日夜其挽回に御苦心遊ばす最中、妾の爲に斯る無益の出費は、妾の心苦しく存ずる處、妾若男兒なりせば、父上と共に其心配を分つべきに、女子なるこそ口惜しき限、假ひ父上と共に家運の回復を圖る事こそ出來ね、爭で妾の爲に父上に更に一層の浪費を掛させませうや、妾は家運の回復を見る迄は、假ひ五年なり、十年なり、何時何時迄も他家へは嫁入致しませぬ、假ひ此身は女でこそあれ、糸取、機織、茶摘、養蠶、少しなりと我家の手助をして、何時迄ゝ父母のお膝元に居りますと、斷乎として其勸誘を辭すると、父母も其孝心を憐みて、時の不運を慨くのみ、又詮術も無ッたので有た、されば千代子は與作の心配した如く、父母の憎惡を被むる事なく、寧ろ益々其恩愛に浴みつゝ、、我家に留まる事を得たが、是は然し千代子が婚姻を辭するの口實と斗見るのは違つて居る、何となれば千代子は、其身が嫁に往ぬ以上は、眞實父母に對して斯せん事を願ふたので有た故、其故にこそ彼女は、朝も早く起て家事の手助、糸取、機織、紡績の業、茶摘、養蠶は申すに及ばず、鎌を手にして草刈の業をさへ手傳ひ、召使と同樣にまめやかに働いて居たので有た、なれど禍の勢を逞ふする時は、人の誠も之に勝ぬもの、前にも既に演た如く、父は事業に失敗して、家邸をさへ失ふ悲運に、彼女も父母と共に村端の茅屋に引移ッたが、次で父の沒するに及びては、一家の困厄は益々其度を高めたので有た、

尤も古河に水絶ずで、父の死後と雖も、倘資殘の田畑七八反有たれば、之を勞苦して耕し往ば、糊口丈には差支無ッたので有た、なれど千代子に一人の兄が有て、其が父の忠實や千代子の孝心に似るべくもなき怠惰者で有た爲め、此資殘の田畑をさへ質入して、女狂ひに使ひ果し、果は母妹を置去にして何處へ歟出奔したれば、其後は一家は寄る邊なぎさの棄小舟、母子の糊口は全く千代子が甲斐なき痩腕に依るの外は無き仕末となつたので有た、哀れ時世の浮沈とは言ながら、昔は大家のお孃樣として、米の價も知らずに育た女子が、今は茅屋の侘住居、村人の賃仕事に雇はれつゝ、春夏秋は養蠶の手傳ひ、冬は機械の業なぞして、幽に其日の煙を立つ、一人の老母にいたはり侍づいて居るといふは、實に氣の毒の至で有る、

去りながら彼女は斯る貧苦の中に有て、有らゆる浮世の辛酸を嘗盡しては居るもの丶、倘前途には樂しき一縷の望を抱いて居るので有る、希望に生き冀望無きに死するとは古人の金言で有るが、實に人は希望無れば一日も生活し得られぬもので有る、蓋し彼女の希望といふは外でもない、十年の昔夫婦の約束をして、故郷を去た與作の身に繫ッて居るので有る、與作が今にも夥多の金を貯て、約を果すべく歸ッて來るで有らうといふ望は、一日も彼女の想像を離れぬので有る、尤も其も始の三四年は、只横濱で稼いで居るで有らうと思ッて居たのみで、歸鄕を待つ心は起らなかつたので有たが、もう五年目頃からは、今年は其人が歸ッて來る歟、今年は〳〵と、年々に多く冀望を之に繫ぎつゝ、其歸鄕のみが期對せられ始たので有た、なれど六年、七年、八年と空しく年のみは經過すれど、其人よりの音信は露斗も無れば、八九年目頃からは又心配も出て來て、都は美人多しと聞ば、彼人も今は心變して、私の樣な斯る山家の花は見返る心なく、新に妻でも迎へて、樂しき世を送ッて居たまふのでは無い歟、其とも知らぬ他國で艱難して、病氣にでもなつて死でもなさいはせぬ歟、抔と種々に思ひ亂る丶時も有たので有る、なれど斯る想像の時も、末は何時も此樣な辛い悲しい想をば押退て、輝

やく様な樂しき想に歸りつゝ、今月は〳〵と其人の歸宅に多大の冀望を胸しつゝ居るので有る、去れば彼女の今の境遇は、風雨慘憺たる悲慘の闇の夜では有れど、其心には遙に朗かなる夜明の天がほのめいて見ゆる故、辛き浮世の生活の戰爭にも屈せず、常にいそ〳〵として、愉快に、活潑に、賤の手業に從事しつゝ、愉しき浮世の行路難を、勇婦の如く送りつゝ有るので有る、嗚呼其待人は果して歸るで有らう歟如何歟？

（四）

世は秋蠶を養ふに忙しく、桑の葉を摘む乙女の歌ふ聲が、此處彼處に聞えたのも昨日今日と思ふ中、信濃路は寒さも早ければ、早櫨楓の葉も悉く散り果て四方は一面冬枯の景色、殊に今日は空朝より曇りて、寒さも强き雪催で有たのが、十時頃からちら〳〵降出して、晝には早地上二寸も積ッた位、他の家では大圍爐裏に丸太の様な大きな薪をふすべて、之を燃し、之に當りながら、今日一日の骨休め、甲是乙非の物語に餘念無も有れば、さらぬも爐の傍で、襤褸の修繕、糸取、紡績の業なぞしながら、賑やかに、花やかな、四方山の話に興じつゝ有る時なるに、千代子は火も無き土間に降て機臺に坐し、朝からとんばた〳〵と機を織て居る

元來千代子の爲に最も艱難の時といふは冬で、春夏秋の時節は、養蠶茶摘等の手傳も有て、可成の賃錢も取るが、冬は其等の女仕事も無ければ、勢ひ機織仕事の外に仕方ないので有れど、其賃銀は甚だ僅なので有る、尤も帯地衣服地等は可成の賃銀にもなるで有らうが、其は皆工場仕事で、個人の仕事としては手に這入らぬので有る、其故町へ出ては白糸を買ひ、白機を織ては之を又町へ賣るのだが、一反の賃銀僅に五錢位に外當らない、其で親子二人の口を糊して行うといふのは、其艱難實に想像の外で有る

彼女の髮は蓬々として亂れ、彼女の手足は皸裂切に痛み、彼女の衣服は薄ふして寒さを防ぐに足らぬ、されど

幸ひに丈夫に生れ附し彼女の體は、寒氣との戰に破れず、貧苦との競爭に屈せず、能其健康を保ちつゝ有るので有る、されど六十路の坂を踰た彼女の老母は、爭で裏を返さぬ荒屋の壁の隙を洩て、雪風のさつと吹入るに堪られやう、其々昔より斯る住居になれ、斯る貧苦との競爭に堪來たつた身ならば兎も角、是迄は温に着、豊に食し居た身の、今俄に斯零落したのなれば、其惱みの程も思ひやらるゝので有る、老母は今朝より寒さ當りと見えて、下腹の邊のきやく〳〵と痛むに、千代子のしてくれた巨燵を抱いて、薄き蒲團を敷き、薄き掻卷にくるまつて温まつて居るが、晝頃千代子が機織る手を止めて床に上り來り、「母上樣如何ですね、少は宜ござひます歟?」と言はれた時は、臥りたる老の目を擧て、やつれた娘の姿を凝と眺めつ

あゝ有難う、如何もまだ善ないが、然しなあに大した事はないよ、其より歟お前、今日の此寒さに土間に降て居て、嘸寒からうねへ、お前が斯孝行にしてくれるに付け、彼馬鹿野郎は、何處に如何して居る歟、不孝者めが、親の罸でも如何せ宜事は有るまい。

と言ば千代子は頭を掉つて

母上樣、私は體を動す爲歟、少しも寒くは有ませんよ、其にもう兄樣の事は被仰いますな、今に苦勞すれば又目の覺る時も有ます、其樣事を母上樣心配するよりは、早く温まつて癒して下さいよ、今私が谷の叔母樣處で貰つたお薩を入て、お粥を熱く煮て上ますから、其でも喫て御覽なさいまし、少しは宜ならうと思ひますから。

彼女は大爐に焚木を燃付け、自在に鍋を掛て粥を煮ながら、一寸其皹だらけな手を温めたが、即で老母の後に立寄り、せめて粥の煮える間なりともと、其背を撫て遣ながらも、老の心を慰め心で四方山の噂、老母は之に心を慰められて、聊か痛をも忘れて居る中、早粥の煮え立に、千代子は胡桃足の古膳を母の前に備へ、茶碗に

粥を倣て母に與ふれば、母は一口喫て、「あゝおいしい事、寒い時は温い物に限ると、」さも甘さうに喫る、老母には千代子の親切が、熱き芋粥よりは温なので有らう、千代子は又母の喜ぶ體を、如何なる珍味佳肴にも優りて嬉しく感しつゝ、母の給仕をしながら、自分も傍で食事を爲すで有らう、暫らくして老母は食事を終り、嗚呼お蔭で大層温くなつた、何だ歟氣の故だ歟痛みも少しは可い樣だ、といふに千代子は嬉しく、巨燵の火を直して母を寢かしやり、我身は土間へ降て手早く茶碗を洗ひ、腰障子を細目に開て外面を打見やれば、小粒を蒔く樣な雪は、嵐を呸んで霏々として飛舞ひ、寒風さッと面を吹て、寒さ身に染渡るに、母の方の寒からうと直障子を閉め、又機臺に坐して、とんばた〳〵と織始る、此樣な生活、是が千代子の冬で有る

老母は温い食物の冷たい腹に這入ッたので心地よくなッた歟、すや〳〵と眠り始めたれば、千代子は安心して一心に機を織て居たが、凡そ二時間餘も過た歟と思ふ頃、突然あゝ痛々々ーと叫ぶ老母の聲に驚ろかされた、喫驚して梭を投棄て、老母の傍へ走寄て、母上樣如何なすッて、と尋ぬれば、俄に挿込む樣に痛み始たといふので有る、で後へ廻ッて背を撫腹を抑へて一心に介抱して見たが、其甲斐もなく苦しむ樣子に、千代子は身も代もあられず

母上樣、一寸我慢して居らッしやいましよ、私お隣の叔母樣に來て貰ッて置て、一走往て藥を買て來ますから

老母は之を聞て頭をふり

なあに、其には及ばないよ、高が雪當だね、斯して居れば今に癒るから、有もしないお金で藥なぞを呑で、お前に餘計な苦勞をさせては濟ない、却て心配で不可いから

なあに、幾ら出るものですかね、お腹の痛いのには熊膽が宜から、私一走往て買て來ますよ、然し其前一

寸お隣の叔母様を頼んで、來て貰ひますからね、辛いでせうけれど、少しの間一人で辛抱して居て下さいよ、

言捨て千代子は我家を飛出したが、即て四十計の女を伴て歸ッて來た、其は所謂隣の叔母様なので有らう、素朴らしい山家の女で、這人口から大きな聲

隠居様、鹽梅惡いさうでがすの、不可ましねへのうし、今嬢様が左様被仰るで、驚いて飛で來たゞ、如何様様子でがすの？

老母は當の様子を語ッた、千代子は其間に、手早く股引を穿き、帶を締直し、簑を着、笠を持と、

其では叔母様、一寸一走り往て來るで、母上様を如何歟お願ひ申しますよ、

あゝ宜いよ、後を案事ねへで、氣を着て往て來せへ

千代子は其聲を背に聞ながら戸外へと出たが、紛々として降來る雪を簑笠に受つゝ、道を急いで藥賣る家の方へと向ッた、其處迄は普通の道を往ば五六丁も有るが、畑道を往く時は三四丁に過ない、其代り村の中央を流るゝ小川の流に橋がなく、只一本の厚い板が渡されて有るのみで有る、千代子は少しも早く母の苦痛を救はんものと、此近道を撰んで走る様に往た、此時雪は地上に五六寸も積ッて居るに、其ながらまだ降止む景色は少しもない、今を盛と行先も見えぬ迄に降頻れば、寒風は颯々として膚を刺す如く、寒地に生長た身ながらも、千代子は侗胴顫の出る迄に今日の寒さを感じたので有た、然し漸々にして藥賣る家迄往き、望の如く熊の膽を買ッて歸途に就たが、何しろ母の事の案じられゝば、心のみを空しく先に進めど、足は深雪にはか取らず、漸漸にして小川の一本橋迄來た時は、手足も體も冷每ッて、齒の根も合はぬ斗で有た、なれども母を思ふ一心に、急いで件の橋を渡らんと、半迄渡り掛た折しも、……何しろ橋が氷つて居る上に、雪が五六寸も積つて居り、其足も冷切て居る事なれば、只さへ渡り憎いのに……折しもどッと吹降す吹雪の勢に、危なく笠を取られさ

うなれば、取られしと身を傾け笠を押へて、一足進む板橋の、つるり滑ッて何たまらう、中心を失ッて小川の中へ、千代子はあれと言ふ間もなく陷ゐッた、幸ひ河水が氷ッて居た故溺はしなかッたが、落た時脾腹でも打たもの歟、むうといふと其儘氣絶して仕舞ッた、哀れ颯々として降る雪の夕暮、往還とも違ふ畑道の小川の中、誰歟彼女の落たのを知る者が有らう、嗚呼天も孝女の身を憐まぬので有らう歟、彼女の運命は抑如何なるで有らうぞ

（五）

野も山も皆白妙に埋れて、四面は一面の銀世界、烏帽子嶽より吹降す風は、野に在ては雪を粉の如く飛せ、森に在ては梢の雪を綿の如く溢せば、道ゆく人の難儀は如何計で有らう歟、斯る時上市田の方より烏帽子嶽の麓なる此村を差て來かゝる、一人の旅人が有る、彼は年の頃凡そ廿八九、身には其頃都で流行た毛織の鳶といふもの着て居れば、下の衣服は能分らぬが、足に穿て居るは紺の脚袢に紺の足袋、草鞋の紐の締方でも、浮世の鹽の甘さ辛さ、充分味た人とは見える、小太りに太ッた體の丈夫らしく、目の中凜々しく冴て、一文字に結んだ口元に、確乎とした氣象を見せつゝ、雪を蹴立て進みゆく風采、元氣全身に滿て、何事にも屈せぬ質の人らしい、其風俗に因て察するに、彼は京濱邊の商人でゝも有らう歟、身のこなし何處となく敏捷らしく、才氣眉宇の間に往來して見える、其にしても彼は抑何故に、街道にも有らぬ此山懐へ向て進むので有らう歟、然り彼は今其故郷へ向て歸り往ので有る、

彼が故郷を出てより早十年の星霜を經て居る、其間故郷の地が抑如何なる變化を經たで有らう歟、彼が故郷を出た時は、花ならまだ十九歳の蕾の頃、若き勇氣と精力とは全身に漲りて、心には滿々たる希望を抱きながら

も、身には筒袖の麻布一貫で、父母の目を忍び、野良稼から其儘出奔したので有たが、爾來京濱の間を奔走して、幾多の辛酸を嘗め、幾多の經驗を積み、今人生の苦闘に稍成功するに及びて、其故郷の父母をも顧みたく、約したる女の情も棄難ければ、父母をも喜ばせ、女との約束をも果さんものと、今しも其故郷へと歸り來たッたので有る、斯る人生の戰士、勇士ともいふべき男兒を迎ふるのなれば、故郷の山河も、平常の裝で迎へては悪いと思ッたので有らう歟、鵝毛、鶴氅、銀鎧、銀兜、銀の瑤珞、白妙の帶、斯無垢清淨の裝を凝して、今しも彼を迎ふるので有らう、山河は斯く新しく裝を凝して迎ふれども、彼の目は故郷の山河の中に、懷かしき十年前の記憶を認むる事を過まらぬので有る、彼方なる鎭守の森も、十年前に比べては其丈餘程大きくなッて見えれば、赤塚の一本松も、其枝餘程繁ッて見える、妙心寺の杉は殘らず伐出されて、代りに若杉が一面に植られて有るが、伊奈部川堤の榛の木は非常に生長して、枯枝に美しく鶴の霜毛を脱掛て居る、倘村内へ入るに及びては、其變化の著しきが一々目に這入ッて來る、昔は黑馬大盡とて、黑馬の大きさ丈黃金の貯が有たと歟で、近鄕に隱れなかッた威儀しき衡門構の大盡の家も、今は門の跡形もなく、僅に殘ッて居る大きな構の阿母屋さへ軒傾むきて、世の哀を集め顏で有る、寄木の叔母の家の崖には、新しき水車小屋が建られた様子で、今日の如く雪ふる時にさへ、倘車は音を立て廻ッて居る、されど其叔母は今も倘丈夫なりや否や、曾て自分が能釣に來た小川の柳陰、其柳の今も倘枝を川の方へ垂て居るが、木は見違へる程大きくなッて居て、何となく懷かしい様な思がする、然し彼の心に最も懷しく思はれるのは、あれ、彼方に見える舛形山の杉の森と、其森蔭に白壁のちら〱見える大きな家とで、是は彼方の藪陰に、ちよんぼり見える白屋に續いて、彼の心を波立たせる種で有る、嗚呼彼藪陰の白屋、彼處にこそ彼は十年前迄は、朝夕起伏して居たので有た、今都の家を見なれた目には、如何に其白屋が小さく見えるで有らう歟、されど懷しい白屋、戀しい白屋、其處には

彼が國を出てから、一日も、片時も、忘れた事のない、戀しい、懷はしい、尊い、大事の兩親が住で居るので有る、彼は榛の木の畝を廻つて、寄木の叔母の崖下を通り拔た時、一目我家の影を見るより、魂は早懷を拔出て、我家の內へと飛で居るので有る、彼は小川に傍ふて走る樣に我家の方へ向つたが、折しも彼方の畑中の小徑より、簑笠に雪を凌ぎつゝ、小川の一本橋に差懸る女の有るを見て、扨甲斐々々しい女も有るもの、何處の誰歟知ら。と思ふ間もなく、女はつるり板橋を踏滑して、橫樣に河中の雪上にどッさりと落た、彼は遙に此體を見て、あなやと斗驚き、直走寄ッて見るに、女は起騰る樣子もない、打俯になッた儘苦んで居る、彼は狼狽て、飛下て、抱起て、降積る雪を含んで口で解し、其儘口移に女に吞せて、見るともなく其顏を見れば扨も意外、實に意外、姿風俗こそ窶れ果たれ、まがふ方なき我意中の人、富山家の令孃千代子で有る、餘りの意外に愕いたが、まあ一體此風俗は如何したので有らう、扨は父母が勸める嫁入の口を辭んで、爲に其怒を招き勘當でもせられたもので有らう歟、不便の至と思ひながら、孃樣ぁ！孃樣ぁ！と呼生た、幸ひ此聲が心に通じたもの歟、娘は稍有てぱつちりと目を見開いたが、周章て起擧て頭を下げ、誰樣でございます歟、御親切の御介抱、御蔭で生命が助りました、有難うございます、と謝する其姿のいぢらしさ、彼は千代子の手を緊確と握締て、孃樣、私だ、與作だ、久しうお目に懸らぬ、懷かしうござると言ば、千代子は此聲に頭を擧て、一目彼の顏を見るより、あらまあ與作樣！と言た斗、年頃の憂苦勞、我家の零落、人の心の甘さ辛さ、戀や、貧苦や、悲しさや、積り〳〵し思の山、一時に胸に打碎て、夢とも現とも分ぬ嬉しさ、與作の膝に取すがッて、わッと泣より外は無ッた、

（六）

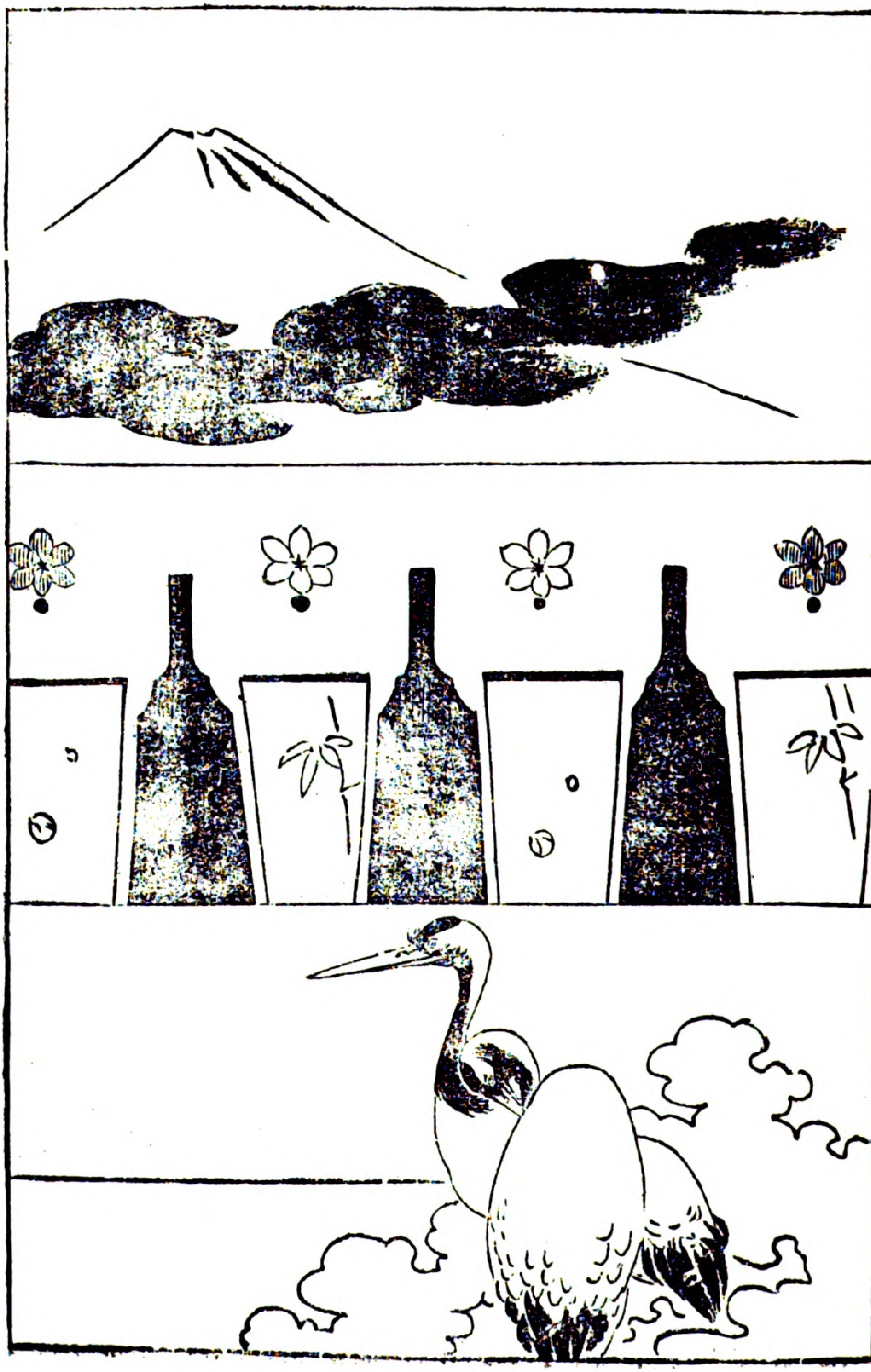
今此話も終に近附たれば、是よりは與作が如何に此十年の月日を送ッた歟、其を語るべき順序で有らう、然し仔細に語るのは煩はしければ、只一言で是を盡して置う

曰く彼は正直、と勉強、と親切とを資本として、貧苦と戰ひ、困難と戰ひ、世の誘惑と戰ひつゝ、次第に内外商人の信用を博して、漸やく世に用ひられ、以後又更に長い間の難儀苦鬪を經て、終に巨萬の財を作り得たので有る、玆に於て故郷の父母を顧みるべく、且は愛人との約束を果すべく、今しも久し振にて歸郷したので有る、彼が情人との出遇は、讀者の旣に知悉する處、其父母との出遇及び其狀況の如何なるもので有る歟は、其は讀者の想像に任せて多く言はぬ、只一事有り、彼は其歸郷の五日目を以て、富山家の令孃千代子と結婚したといふ事で有る、爾來彼等は如何なッたで有らう歟、人事多忙、作者も知らず、世も知らず　（終）

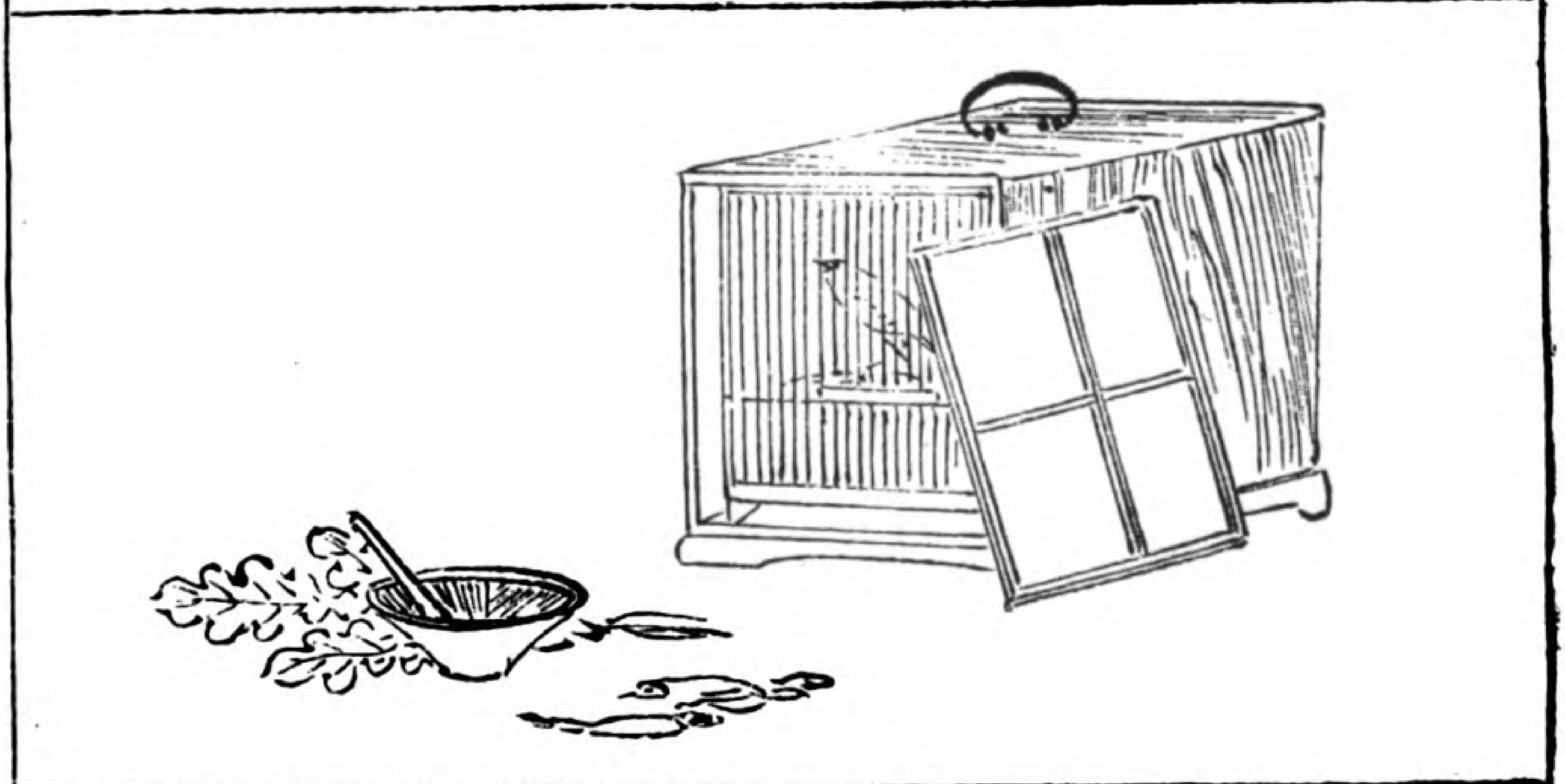
遺族のもとに

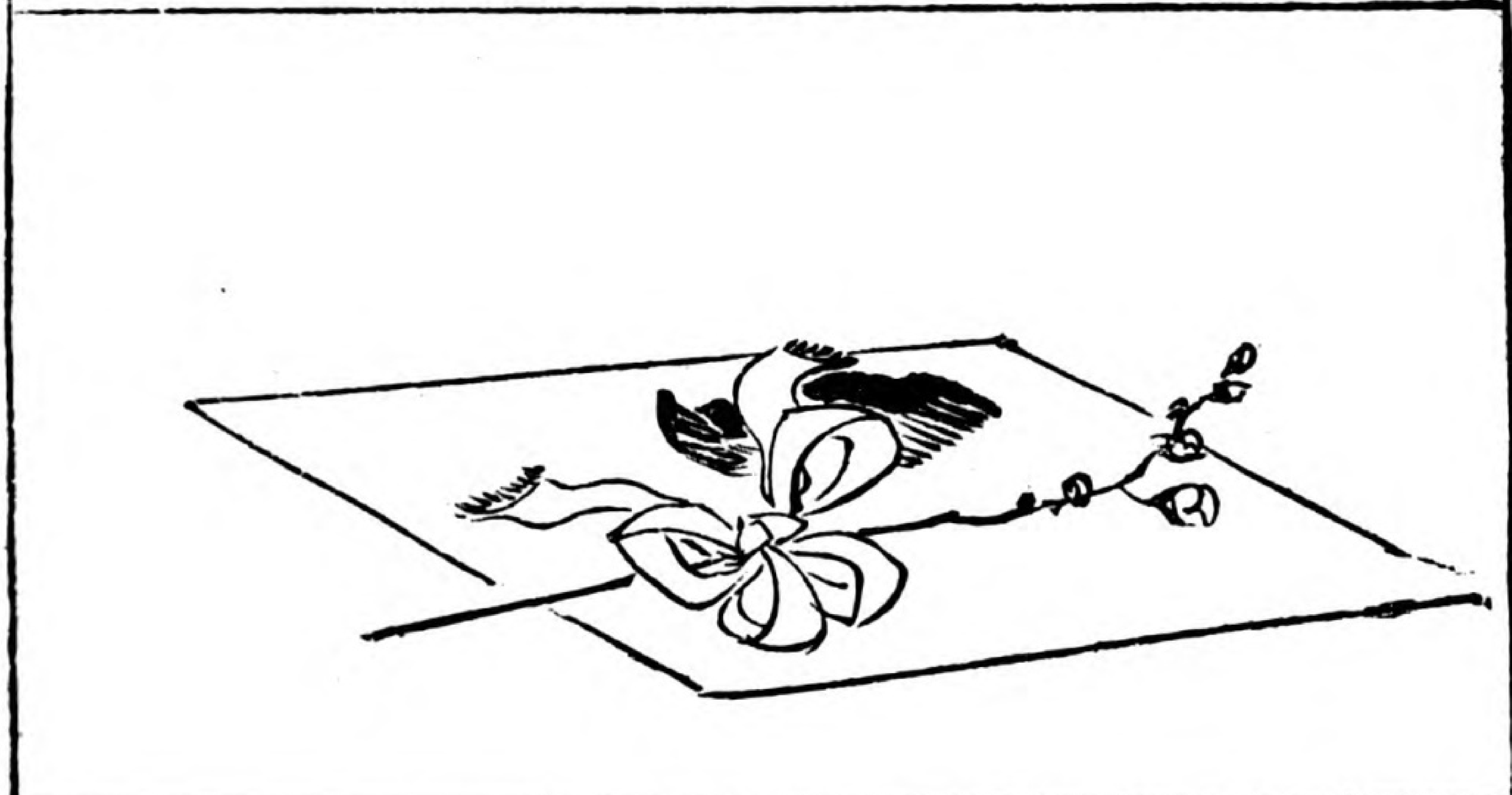
人目も草もかれはてし折柄いとも悲しき秋を耳にせしわらはの驚きはさるものにてまのあたり愛兒をいだきつゝ御かたみの寫眞ながめ給ふ御許樣の御歎さこそと察しまゐらするだに胸ふたがり申しまして御良人樣には征役毎々の大戰捷その戰捷の中に呱々の聲をあげられし御愛兒の父君其まゝの御男子さていさゝ御滿足に思召されしを御寫眞も間にあはずして其花のかげをも見たまはであへなく戰場の露ときえさせ給ひし由誠に何と御慰めやうもなくそゞろ涙にむせび申候されどかれての男らしき御心はかゝる時にこそ己に御覺悟も候らむかゝる千載に遇ひ申すべき晴れの戰に御討死遊ばされ候こそさて國家につくし給ひし忠節は長へに傳へられて御一門の名譽と存じ候さればふつゝかなるわらはの申すまでも候はねど只管御歎きに沈ませ給はで御身御大切に御遺子をよく御養育あそばし父君の御志をつがせ給はんこと御許樣の御義務なき君への何よりの御回向と存ぜられ候いづれ近き程參上御とむらひ申上ぐべく候へどもとりあへず幷にて御悔みのみあら〳〵かしく

小杉松枝









御新造

大塚楠緒子

蛇の目の雫、合羽の點滴、足駄の跳ねやら、草鞋のとばつちり、濕つぽい人力の幌をくゞつて丁稚の脛のさても敏捷こい、と見れば擦れ違ふ湯返りは町内の小町娘、篠つく中を振りかへつて首延ばすはよく〳〵の糸屋の鈍太が意久地なし、あれよ電車の呻いて往くこと、吹つかけられて濡れしよぼの江戸ッ子の乘つた事は、乘つた事は、大通りの雨の日の大繁昌、路次や横町のその氣にならで雨も本場の積に降るらん、たゞし藥種屋の奥二階に、天水桶に水が溜るやら溜らぬやら看板が濡れるやら濡れぬやら何處を雨が降るかのさし對ひの女同士あり、一人は此處に名代の御新造とあつて一人は理學士の令夫人とある。

『ほんとに貴孃が藥種屋の御新造におなりなさるなんて……

言葉を繼ぎもせで令夫人美和子は今更に呆るゝを美しい御新造は微笑んで語る、

『學校を卒業して貴孃に別れてからちようど十年目ですわね、けれども私程身の上の……身の上と言つたつてなにも唐物屋の娘が藥種屋の御新造になるつたつて珍らしいことはないんですけれど、私にしては餘り人樣の思つていらつしやる見當違ひの此樣な處へ嫁いて來たんですもの嘸不思議にお思ひなすつたでしようねへ、

嫌味の無い町風の丸髷つやゝかにすつきりとした襟元白く、おくれ髪を搔き撫づる度にひつかけ帶の友禪動いてこぼれ梅の艶にこぼるゝ樣なる姿、これがまあ、テニソンの詩を諳誦しては隨分高聲に寄宿舍の窓から舍監室を驚かして臆面が無かつたり、私の理想の人は政治家か第一流の學者でなければなんぞつて、高いことを言つて見たり、兎に角全級中の女王で學校の華であつた、あのまあお小夜さんかしら、大よそ物が變ればとてお小夜さんが、まあ、町人風情の愛嬌たつぷり

な此様な御新造に……と、美和子はつく〴〵と人の運命を思ひ思つて居るのである、

『此様なことは手紙にも書けない〳〵と思つて貴嬢にさへ知らせずに置いたのですもの、さぞ朋友間の疑問だつたでしようねへ、

『全くよ』、とこれも容貌自慢の美和子が束髪の前髪を品よく揺つて點いて見せる、

『久し振で御目にかゝつて私どんなに嬉しいでせう、まあさお茶でもあがつてね。

と湯をはこばせ、入れ直したる玉露の香高きをすゝめて、

『ねへお美和さん、私、思といふものは奇体なものだと思ひますわ、こちらでも思つて居ると彼方でも思つて居る、なにも逢つたわけじやなし手紙の往復を為たわけじやなし、それでも何時か心持が通つて居るのですものね、それこそあの繪に書いて有る羽根の生へた小僧の様な者が居て思の紹介を為て呉れるのじやないかと思ひますわ、

『薬種屋の御新造がキユピットを談ずるなんて、まあ日本橋の七不思議だつて他人が聴いたら言ふでしようね、

『まあ、聴いて頂戴よ』とお小夜は身を捻る、

『聴いて居ますともね、』と美和子は頸を傾げる、

『それは、ほんとに思ひ込んで居ましたわ、

『貴嬢の事ならねへ、それは、もうさぞ、

『ジユリエットは以前から好きでしたわねへ、

『慕つた情人となら死んでも好いといふんでしよう、

『勿論よ、

堪へず微笑むお小夜の顔を美和子も微笑んで見つめて、

『それで貴嬢の戀したのは何方よ、

『私の慕つた方、

『どなた、

『それはね、

『早く仰しやいよ、

美和子は聽きた氣、お小夜は態と隱した氣、

「あのね、

「どなた、

「理學士、

「まあ、理學士、

「えゝ、理學士、大學出の俊秀の理學士、

「そんな大きな聲を爲さるなよ、

「いゝんですよ、良人にはもうちやんと白狀がして有るんですもの、それを言ひ〳〵してはよく良人と二人で泣き〳〵しますわ、

「まあ、と、美和子は解せぬ眉根に曇を見せて、それにしては根つから思ひ事も無さそうなお小夜の樣子と、仲好し同士のあゝか斯うかと身の上を案じて居ると、お小夜は構はず例の快活に、

「十年昔の話ですよ、と、註を入れる樣に言つて、

「ちようど、結納を媒介人が持つて來るといふ三日ばかり前のことでしたわ、もうね、矢鱈に店の番頭や小僧が、お孃樣お孃樣てつちや嘲弄んでしよ、私だつて其時分は恥かしう御坐んしたわね、ちようど十九の春でしたもの、

「紫紺の被布が能くお似合なすつたわねへ、

「まぜつ返さずに聽いて下さいよ、それで氣まりが惡いから朝から晩まで小說ばかり讀んでゐましたの、その朝も御飯を頂くと直自分の部屋へ引つ込んでよ、その金色夜叉、忘れもしない熱海の海岸の處でしたよ、貫一が可憐そうだと思つてお宮が憎くて〳〵此樣にも慾の深い情の薄い娘が世の中に有るだらうかと思つて、知己て居る女かなんぞの樣に憎んでゐますとね、椽側の障子がすら〳〵と開くじやありませんか、吃驚したのなんのつて、誰れかと思ふと一軒置いて先の藥屋の龍次……今の良人なのでせう、その時はちようど二十歲で未だほんの東西を覺えたばかりの若旦那でしたの、遠い親類じやあるし近所じやあるし、ちよい〳〵往つたり來たりして仲好くしては居たのですが、此樣にこつそりと裏口傳ひに來ようとは思はなかつたのですもの、あんまり吃驚

してお上んなさいとも何とも言はずに、
『あら、龍ちやん、といひますとね、先では莞爾と笑つて、其癖色の惡い顔をして縁側に腰をかけたのですよ、そうして貸して置いた新小說を私の前へ出しましてね、
『ありがたう、といひますの、あゝ此本を返却に來たのかと、すぐ歸るだらうと思つて居ると、
『小夜ちやんは何時お嫁に往くの、
つて聞きますのよ、をばさんから聽いて大抵のことは知つてゐる癖に、變だとは思ひながら、
『引つ越すのは來月の末になりませうよ、
といひましたがその時私は不意とゝ若し左樣じやないかしらといふ樣な妙な感じが浮んで、氣味が惡いやうな、心持がしたので、そつと對手の顔を見ますとね、それは酷い厭な顔色をして居ますんでしよ、そうして
『己らは是れから自暴になるんだよ、
つて、かすれた聲で獨言の樣にいふんでせう、私は胸に針が刺さつたかのやうにハツとしたのでしたけれど、態と何氣なくよそほつて、
『龍ちやんは今朝どうかしてゐるのね、
つて笑つて見せても對手では乘らないんですよ。
『どうもしてやしない、小夜ちやんに嫌はれたばつかりさ、あゝあ、町人の息子は嫌はれつちやつたんだよ、
つて口惜しそうにいふかと思ふとがつくりと首を垂れてしまひましたの、見ると睫に涙が充滿溜つてゐるじやありませんか、常日頃無口な温順のが、すぱ〳〵と精一ぱいに言つて除けたのでしよ、只事ではないんですもの、お美和さん私はなんともいはれない彼樣な感想をしたのは一生に一度ですよ、腹が立つやうな氣味のわるいやうな、そうかといつて可憐そうでもあるし氣の毒でもあるし、世界は廣いのになにも私なんぞを慕つて與れなくつてもと嘲して仕舞ふ譯柄ではなし、欲しい草花を拔かうとすると側に蛇が蜷局を卷いて睨んでゐるといつた樣な、私の戀に不愉快な疵を付けるこんな龍ちやんでは今までも無いと思つてゐたにと、

言葉の出しやうもなくつて困り切つてゐますとね、龍次はぽん〳〵と懐中を敲いて見せるんですよそうして、

『小夜ちやん此處に百兩あるんだよ、どうせ自暴になるんだから貯金もなにも出して來ちまつた、といふんでせう、

『それを何うおしなの、つて聽きますとね、

『聽く丈が野暮じやないか、ちよいと此先の横町へ這入つて御覽、ぼたんだの蝶吉だのつて可愛らしい雛妓が幾人でもゐらあね、己らは彼れを情人に持つてこれから毎日めちや〳〵に遊んで通すんだよ、小夜ちやんは理學士の奥方、僕は町人の野良息子になつてしまふんだ、

なんてひねくれた物の言ひ様、態と聲を强くして居るんですけれど、眼は潤み切つて何處となく落膽してゐる様子が現然と見えるんですもの、私は變に可憐そうになりましたのよ、まこと惠仁堂の一人息子が堕落してしまつたら、孝行息子の名を落す當人はいゝにしても、氣の弱いおばさんがまあ何様に滅入るだらう、大かた氣違ひにでもなつてしまふだらう、この鹽梅では隨分成り兼ねまいと思ふと、お美和さん女といふものは弱いものねへ、

『龍ちやんが其様な事をお言ひでは私はどうしたらいゝだらう、ほんとに何うしたらいゝでしよう、龍ちやんは怒つてしまつて……

と、ほんとに何うしたらいゝだらうと眞から困り切つた様子が見えたとみえて、對手も少し落ち付いたのですよ、そうして始めて私の方を向いて、

『小夜ちやん、僕は小夜ちやんを慕つて居るんですよ、惡いけれど、許しておくれ、どうせお前は女學校の卒業で學者、己らの様な町人は嫌ひなんだと最初から斷らめては居るんだけれど、他所へお嫁に往くと聽いた時は腹が立つて口惜しくつて、ほんとに怨んだよ、けれどももうそれは斷らめては居るさ、と言つて、お前の婚禮の澄むまでは何うしてもじつとしちやゐられない、飲んだり遊んだり思ふさま自暴

ぞするんだよ、なあに母親なんぞ怖くは無い、つてね悄然していふんでしよ、私はつひ涙がこぼれてしまつてね、あゝ此様にも思ひ詰めてゐる此人を欺いて、たとへ自分の戀を遂して戀しい方のお側へ往つたつて決して寢醒のよい事ばかりはしまい、嗚呼私は罪が深い、憫潑な息子一人道樂者にし、息子思ひのをばさん一人狂氣にしたつて讃めた話じやないものをと、隨分此時分は高くとまつて理想だの見識だのつて生意氣な事はかり言つて居たのでしたけれど、龍次の情愛にはうつかり絆されて……人間の運命といふものは奇怪しなものね、自分の思ひ通りこは決してなりませんよ、

「それから貴孃どうなすつたの、

腑に落ちぬ美和子は猶熱心に問ひかくる、お小夜はすらりとした肩をひと搖り、

「私はもう運命の弄ぶ通りになつて居やうと、結納とまではこんだ理學士との緣談をたゞ少し見合せて呉れとばかり兩親に無理に頼んで、人の怪しむのも構はずぐず〳〵に延ばしてゐたのですよ、此間私は自分で自分に戰つかたのですもの苦しう御座んしたわ、まもなく餘り長びくもんですから理學士の方からは破談にして仕舞ふと言つてよこしたのですの、私はこれが自分の受ける運命の宣告だと思つて別に逆らはずに、それなら破談に致しませうつていつてやりましたわ、

「まあ、

惜しい事をと美和子はさも思つたらしい、

「その内に否應なしに藥種屋へ嫁ることになつてしまひましたの、理學士の方では萬が一にも此緣が整まらぬなんぞといふ事は無いと思ひ定つていらしつたもんだから、大層お怒りなすつて僞つたのだましたの、惡婦だの妖婦だのつて、其後ひどい〳〵お手紙が來ましたのよ、それを見た時にはあんまりなさけないと思つて、あ、あ何故私は龍次なんぞの犧牲になつてしまつたらうと、飛んで往つてお詫をしたい、胸の内を申上げたいと思つたんですけれど、今更しかたが無いとそれも斷念めて未練のない樣にと御返事も出さずに、その上そのお手紙を隱しもせず

龍次に見せますとね、あんな氣の優しい思ひ詰める男なんですから、同情も深いのでね、理學士の方の心根やら私の胸やら自分の戀やらを思ひくらべて此人がお前を思つて居ると同じ樣な己れもお前を慕つて居るものを、それでも眞から己れを好いては呉れないかと、言はれた時、私はしんみり始めて情愛が表面ばかりでなく胸の底まで浸み透つたやうに思ひましたわ、それで何の事はなし情に激した二人はすがり付いて泣きましたよ、それは結婚してから以後勿體ない程優しくして呉れますもの、私だつて喜んで犧牲にならずにはゐられませんわオホ……お話はこれつきり、

「まあ、ほんとにお小夜さんは決斷がいゝのねへ、けれどもそれで全然理學士の事はお忘れなすつたの、と、美和子は猶念を押す、

「え〻忘れましたともね、もう澤山よ、そんな事はあんまり聴いて下さるな、理學士〻〻つて藥種屋の御新造の耳には毒ですよ、

「それ程お嫌ひなすても、私だつて理學士の妻じやありせんか、

「あら惡かつたわね、貴孃は私の仲好しの取り除けですよ、

折節、店のぼん〳〵時計が音高く四時を報じたので美和子は慌たゞしく、

「おやもう四時、おいとましますよ、今度きつといらつしやいよ良人でも切りにお目にかゝりたがつて居ますんですから、

「そんならもうお歸りですかつまらないお話ばかりしましたわね、

「序に伺ひたいわねその理學士のお名、

「そんなことはもう言ひつこなし、貴孃も意地がわるいわね、そんならお歸り、どうぞね旦那樣によろしく、あのよろしくつてね旦那樣に、

何時か空は奇麗に晴れたり、袷時の秋の空變り易いに不思儀はない、門に待たしたる車に乘り移るは野川理學士の令夫人美和子、さよならさよならと殘り惜しろうに幾度も頷き合ふてやがて車の泥濘な彼方へ走り去つたあとまでも、いつまでも〳〵見送るは藥種屋のお小夜、惠仁堂の御新造が絲屋の手代が叩き合ふをも構はず袖を重ねて美しい粹な姿を門口に惜し氣もなく茫然と曝す時、とみれば向ふからちよつとの用達しに出た龍次がにこ〳〵と。

（完）

我が子

德田秋聲

（一）

西片町の只有る横町に、山勢流琴指南鈴木八重と云ふ札を懸けた、一軒の小い衡門の家がある。時は秋で、樫木の垣根ごしに、鷄頭の赤いのや、芙蓉の花の今を盛と、新陳代謝の劇しき一株、倒れ伏がちな萩や女郎花なども風情ありげな小庭が見えて、緣には一つの籐椅子、開けた障子の奥に、卓子の高いのが、きちんと取片附いた書籍、イキン壺、筆筒などを載せて、正面の楣間に懸つてゐるのが、一面の肖像畫の額である。此部屋に、二人の青年が、一皿二皿の洋食、外に二三品の下物を置いて、ビイルを飲んでゐるが、吊ラムプの光に照されて見える。一人は大學の制服、色白面長の男で、一人はネルの單衣ものに、黑のメリンスの兵兒帶を締めた、色の稍黑い丸顔の、毬栗頭である。蟲の音にでも耳を欹て丶ゐたのか、寂として二人とも多時聲がなかつたが、良久あつて制服は憶出したやうに、ビイルの壜を取あげて、

「何うだ、もう一つ。」と笑顔を作つた。

「いや、己は、今日は散々醉はされた。其よりか君は何うだ。」

「僕は御覽のとほり、もう行けない。」と言ひつゝ、制服は盃注に、盈々と注いで、

「それぢや、此でおつもりと爲やうかな。」と愉快さうに、相手のビイルを飲む口元を戍つて、

「まあ、自愛したまへ。」と心から溢れるやうな、友情を聲調に表して、

「僕は非常に、君の今度の不幸……と謂つちや國家に濟まんが、まあ個人としては、いや、君のやうな、他に大いに國家に貢献すべき才能學識のある人としては、まあ不幸と謂つても差閊なからう。」

「何が幸福だか解りはせんよ。」と丸顔の主、鈴木信二郎は、コップを下に置いて、

「己は哲學者でも何でもないのだから敢て這麼問題を

深く考へはせん。唯國家の命ずるがまゝに、十分の責務を盡さうと思ふのだ。」

「それは、實に立派な決心だ。勿論然うなくてはならんけれど、然し僕は、君の才能を惜むばかりでなく姉さんが、實にお氣毒で堪らんからね。」

「あゝ、姉は實際氣毒だ。」と信二郎は急に俯いて低聲になつた。

「無論、戰爭に出たからと謂つて、死ぬものと決つてるわけぢやない。君が幸ひに無事で歸つてくれゝば實に有難い。然うあつてくれゝば、申分はないけれども、丸は人を撰ばずだろう……いや、こんな不吉なことは言ふまい。」と制服は急に氣が着いたやうに笑に紛らして、

「自愛したまへ。」を繰返した。

「はゝ、格別不吉なこともあるまい、巳は實際死を決して出るのだから。」

「そんな事があつちや、眞箇堪らんね。僕は此に於て、甚だ遺憾に思ふよ。」

「何を遺憾に思ふか。」

「僕なんか、君と違つて、國には多少の財産もあるし、兄が二人、姉が一人、御存の弟もあらうと云ふ次第だかね。」

「あゝ、君のホームは實に可羨しいよ。こんな時は、殊に可羨いよ。」

「然うだらう。だからさ。」と制服は溜息を吐いて、

「そこで僕が遺憾に感ずるのは、君に代つて、僕が出征することが出來ないと云ふ一事だ。」

「愚痴を溢したつて、追着かんよ。銘々の運だもの。」

「だから遺憾ぢやないか。僕なんか學生としちや隨分贅澤な生活をして、其で君に後るゝこと二年、意氣地がないのだからね、君を遣るのは眞箇惜い。」

「はゝ、何うも爲方がないよ。然し心配してくれたまふな。愈よ出るとなれば、君が側で考へてるやうなことはないのだから、姉も氣象が氣象だから、案じたほど力を落してもゐないやうだ。」と信二郎は元氣らしく言つて、

「子供の三人もあつて、良人に戰死される人もあれば、新婚早々召集された人もある。僕なんか、骨肉と言つては、天地に唯一人の姉しかないので、隨分心細い身上だが、これでも、まだ〳〵幸福な方なのさ。感心に姉も決心をして、もう少しも心配はない、と言つてゐるから、其點は君も安心してくれたまへ。然し、何を言つたつて婦人の事だ、己が立つて了つたら、多少寂寞を感ずるだらうから、留守中は切望時々見舞つてやつてくれ給へ。」と沈んで頼んだ。

「言ふだけ無駄だ。僕は今までどほり、決して訪問は怠らんよ。君と僕とは同じ町に竹馬を驅つて、同じ小學校を出て、同時に大學へ入つた人なのだ。殊に兄が地方へ行つてからは、色々姉さんのお世話になつてもゐるし、僕は何だか他人のやうな氣もしないくらゐだから、君に成替つて、不及ながら慰藉しやう。」

「が、君の方が、姉に慰藉される方かも知れん。」と信二郎が笑ふと、

「はゝ、大に。」と制服も笑ふ。

姉の八重子は、此時臺所の方から、入つて來たが、

「信さん、ビイルは。」と入口に坐かける。制服は、

「もう澤山です。此とほり醉つてをります。」

「では、御飯にしませうね。」

「いや、飯も行けません。滿腹です。」

「姉さん、山内君は、僕に別れるのが悲しくつて、飯も何にも咽喉を通らんさうだ。」と信二郎は眞赤な顔中に笑を浮べる。

「おや、然うですか。正可然うでもありますまいよ。」

と八重子は笑談らしく言つて、

「私もね、最初然うだつたのでございますよ。ですけれど、皆さんが御盛に送別會をなすつて下すつたり、色々御心切に言つて下さるものですから、此や這麼事では可けないと然う思まひしてね、其からと言ふもの、別に悲しくも何ともないんでございますよ、弟も御覽のとほり、至極暢氣でございますから。」

「其ならば甚だ結構です。」と山内が頷くと、信二郎は
沈んだ調子で、
「然し、ごた〳〵してゐるうちは、紛れてゐるけれど、
立つて了へば、又寂しくもなるだらうさ。」
「だけれど、信さんの彼方へ行つて、苦勞をお爲のこ
と思へば、其位のこと何でもないわ。」
「然うでありませんよ。」と信二郎は妙に聲に力を入れ
て、
「私は忙しくつて、體が始終動いて、憊れ決つてを
るから、宅のやうなんか考へる隙もなからうけれど、
後に殘る人は然うは行かん。」
「だつて、愚痴を零したつて爲方ないんですもの。何
せ行くんなら、思斷よく行つた方が可いんです。幸
が好けれや、無事で歸れるのですからね。」
「其を切望するですよ。」と山内は熱心に言つて、
「其時は僕は、姉さんと字品まで迎に行く、君が大勢
の兵士と一緒に、船から上陸する顏を見つけた時は
其麼に愉快だらうな。」と山内は小供らしく言つて目
を耀かす。
「然うなれば、可うございますけれど、此ばつかりは
銘々の運ですから。」
「まあ、舍利骨ゃ受取ると思つて居給へ。」と信二郎は
例のごとく、無邪氣な笑方をして、
「祭文を讀む日になれば、いづれ君を煩はさなくちや
ならんが、めそ〳〵泣いてくれちや、己も浮ばれん
からね、其處のところは一つ男子らしく。」
「氣樂なことを言給ふな。祭文を讀むやうになつて堪る
ものか。」
「然し己は、何せ丸に中るくらゐなら、十分の活動を
して、金鵄勳章ぐらゐは取らんけりや休まん意だ。」
「それは然うですね、學士ともいはれるものが、犬死
をしちや滿りませんからね。」と姉も雄々しく言ふ。
「いや、少々ばかり畸形になつても、生命に別條のな
い方が可いね。」
「あゝ、こんな卑怯な友人は持ちたくないものだ、君
なんざ、逃廻つて銃殺される方だらうよ。」

「然うでもないね。現に、僕が君に代つて、出たいと思ふくらゐだから。何も生命が惜いからと言つて、戰爭に弱い譯ぢやない、君のやうな、二人しかない兄弟を一人喪ふのは、如何にも無情でならんからの、事よ體が少々弱いからと謂つて、何も戰場の掛引に大した相違のある譯のものでもなからうに、君でなくちやならんと云ふのは、如何にも不本意の至だ。」

「はゝ、詰らんことを言ふ男だ。」と一笑に附して、身を反しながら、意氣昂然と易水の詩を微吟した。

（二）

八重子同胞は、寔に互に、天にも地にも懸替のない、姉でもあり、弟でもあるのであると。中流の家庭に先づ幸福な生活を續けて來たのであるが、母は信二郎が幼少の砌り亡つて、父も亦七年以前に死んで了つた。八重子は其時二十一、既業に緣に着いて、家には唯獨り信二郎、餘財を收合して、學事を繼續してゐた。

が、八重子は不幸にして、其良人に愛せられなかつた

無論八重子にも缺點がなかつたではない。彼女は重に父の手一つに育つて、母の慈愛、溫かい惠を受けなかつた所爲でもあらうが、多少執拗なところもあり、剛情な處もあつて、擧止體度が、總て優美を缺いてゐた。それに、家政料理の手腕が確で、氣が强かつたゝめ、間々干渉ずきな姑と衝突して、十に七八までは我意を通さうとするので、始終姑の不平を挑發してゐた。良人なる人は某省の官吏で、八重子の長所や美點に盲目であるべき人ではなかつたが、妻の腕を揮ひすぎるのが、妙に愛情の冷める原因となりて、寧ろ老母の上を氣の毒と感ずるのであつた。

「女は唯愛情があれば、其で可いのだ。」と云ふのが彼の口癖で、

「妻は家庭の花ではないか。姑のある間は、或點までは、姑に服從して居なければならん。實を結ぶ頃には、母も亡るだらうし、此處で初めて、堅實な家庭のマヂイチヤとなれば可いのだ。」と云ふのが、彼の意見だ。

此が八重子には、非常に不平であつた。多年母のない家政を預つてゐたのであるから、新な姑に服從する習慣を作るのは、彼女の性質としては、極めて困難であつたと同時に、姑が事々物々干渉の手を擴げて、能もない癖に、妄に年の甲を振廻すに至つては、到底苦痛を感せずには居られぬ。

加之、弟は今少しで大學へ進むべき順序であるのに、學資は殘少なになつてゐるので、弟思の彼女は、日夜に心を碎いて、其方法を考へてゐた矢先、弟に補助を與へる與へぬの一事で、家内に劇しい波瀾が高つて、其結果彼女は斷然二歲になる男の子を見棄てゝ離緣狀を貰つた。言ふまでもなく良人に別れるのは、非常の苦痛であつた。我子に別れるのは、更に斷腸の思であつた。

信二郎は寢食を忘れて、姉の身のうへを氣遣ふと同時に、幾度か姉を諫めて、平穩に局を結ぶことを切望したが、剛情な八重子は頑として動かなかつたので、爲うことなし其意見に任した。

爾來彼女は、得意の琴指南を始めて、弟と共に此に一家を構へて、單調な、質素な日を送るのであつたが、平生の性癖は、いよ／＼頑固といふべきほどにまで凝固つて、再び人の妻とならうと云ふ念もなければ、然して薄命を嘆く樣子もなく、偏に信二郎が世に出る日の來るのを、唯一の生命としてゐた。

信二郎が、此に勵されて、いよ／＼學業に熱血を濺いだのは勿論で、社會に地位を得る場合にも、妻は娶るまじと誓つたことさへある。が、八重子は、弟に對しては極めて寛大で、自分の例もあるから、若し信二郎が結婚する時機が來ても、自分は依然として別居を張つて續く限は自分の一身は、身分で始末しやうと考へてゐた。

信二郎が抽籤で、現役を免れたのは、大學に進む前で、其時は、無論學事を繼續し得らるゝとも、得られぬとも解らなかつたので、又一年志願を思立つほどの資力もなかつた。

姉の苦心で、信二郎が此夏優等の成績を以て法科大學

を出て、此頃有望な仕官の地位をさへ得たに就けて、八重子の喜悦と得意とは、大凡察するに難からぬのである。同時に召集令を受取つた時の失望も、亦想像するに難からぬのである。平生兄弟のごとく親んでゐた山内が、二人の情を察して、代れるものなら代りたいとまで思ふのも、強ち彼の性質の涙脆い所爲でもない。山内が、其夜同胞に暇を告げたのは、もう十二時近くであつた。

八重子は食卓を取片づけて、弟の側に坐つたが、信二郎は益す酔の出た形で、卓子に脚のあまりへ横になつて、何をか思に沈んでゐた。



「信さん、此でもうお暇乞に行くところもなくつて。」と八重子は元氣らしく訊いた。

「まあ然うです。」と信二郎は起直つて、

「たゞ一つ氣にかゝるのは、森林の龍吉のことです。」と姉の顔を打眺める。龍吉と云ふのは、今継母の手に育つてゐる、八重子の實子であるのは言ふまでもな

い。

八重子は些と眉のあたりを曇らせたが、

「信さん、龍吉に會ひたいのですか。」

「會ひたいも會ひたいですが、あれが何かして、姉さんの側に置きたいのです。」

姉は俛いて、何とも返辭を爲かねた二人とも多時無言でゐたが、

「姉さんは、屹度寂莫を感ずるですよ。だから、此際龍坊を引取つて、側にでもお置なすつたら可からうと思ふのですが」



「それは私だとて現在血を別けた子ですからね、そんな都合に行けば、もう其位嬉しいことはないけれど、龍吉の身のために、どんなものかと思つて」

「決して惡いことはないでせう。自然の愛のない繼母の側に育つよりか、貴女の側にゐた方が、どんなに幸福か知れません。」

「だけれど、引取るとすれば、悉皆森林の方の縁を切

つて了はなくちやなりませんわね。然うしないと、何だか變なものぢやないか知ら。」

「素より然うする方が可いです。」

「然うすると又、男親に別れる事になつて了ふわね。」

「それは巳むを得ませんよ。もと〳〵圓滿でない親子なかであるのですから、其位は我慢しなくちやなりません。森林も、其のち二人の子が產れて、而も末のは男だと云ひますから、悅んでくれるだらうと思ふ。」

「さうね、森林は左に右、奧さんが嘸悅ぶでせうよ。」

と言つたが、更に、

「だけど私また、憖つか女の片親で育てるよりか、もう小學校へも出る年なんだから、寧そ男親につけておく方が、子供のためぢやなからうかと思ふんですわ。其に、もう後の阿母さんにも、十分懷いてゐるでせうから。」と八重子は意にもない、反對說をも試みた。

「いや、僕は憖か不自然な繼母があるよりか、寧ろ父親がなくつても、眞實の母に就いてゐた方が、小供の幸福であらうと思ふのです。姉さんの森林へ縁づいて、姑に窘られて居たとなど憶出すと、僕は血を別けぬ母子に、決して愛情なんぞある譯のものぢやなからうと思ふのです。」

「それも然うだね。尤も人にも由るだらうけれど。」

「左に右、僕は姉さんを一人置くのは、忍びませんからね。森林を訪ねて、一つ談じて見やうかと思ふのです。」

「然うね。」と姉は決せぬ顏色で、

「だけど、其は又、私か何にか爲やうから、今戰爭に行かうと行ふ信さんが、心配してくれなくたつて、可いんです。」

「でも、然うでもしないと、何分にも不安ですから。其とも、姉さんは、平生の持論を飜して、再婚でもする氣に成つてくれますか。」と信二郎の辭が、素朴ではあるが、如何にも姉を思ふ情が言外に溢れてゐるので姉は念はずほろりと成つた。

「それも極めて自然です。一體なら、僕は其方を希望

するです。」と熱心に姉の顏を打戍つて、
「僕も出る以上は死ぬものと覺悟せんければならんです。是まで莫大の苦勞をかけた姉さんに對しては誠に申譯はないですが、まあ那樣事を言つたつて始まらない。成可なら、後顧の患のないやうにして行きたいと思ふのです。」
「大丈夫ですよ。私のことなら、些とも心配する事ありませんよ。」と淋しい笑顏を作つたが、目に淚の露が晃いてゐる。
「それはまあ、意志の强硬な姉さんのことですから、格別案じる程のことはないでせう。だけれど、決するならば、今のうちですがね。三十と謂へば、まだまだ望のある年です。再婚必ずしも晚くないですからね。」
「再婚なんか、甚麼事があつたつて爲ませんよ。」と姉は屹と云ふ。
「ぢやまあ、再婚說は撤回するとすれば、いづれ龍吉を引取る相談です。」
「さう。其方ならば、事によつたら、森林に聞いて見ても可いんですけれど……。」
「さうすれば、設ひ僕が戰死したとしても、鈴木の祀を絕つ虞もないです。左に右、僕が明朝行つて見ませう。」
「ぢや、然うして戴きませうかね。或は又、後で山內さんに御厄介を願つても可いでせうね。」
「さう、それも一策です。」
此相談が纏つてから、二人が臥床に就いたのが、彼此二時であつた。

（三）

△△が陷ちてから、市中の祝捷は一週間も續いた。不幸か幸か、此二週間半ばかり前に、信二郎は△△山の激戰に、其隊の小隊長が戰死してから、奮然陣頭に立つて、部下を鼓舞しやうとした時、彈丸は其勇ましい號令を絕叫する口から吭を貫いて、美事名譽の戰死を遂げた男氣と膽力に至つては、部下の兵士も、皆ん

と感激したくらゐで、此がために、奪ふべからざる敵の陣地を乘取り、全軍の進行のために、大なる便利を與へたのは、長官の一ト方ならず激賞したところで、多年軍事教育を受けた將校のうちにも、滅多に類ひ見出しかねる。

金鵄勳章に賜金、上長官の感謝狀、友人の弔を受けた時の八重子の心は、悲しいといふよりか、寧ろ豫想外に大なる誇を得た。

無論時を經るに從つて、傷口から次第に紅い血が入染出るが如く、悲痛の情が湧いて來た。が、其も、一週間たち、二週間たつうちには、少しづゝは忘られる事もあつて、信二郎や山内が心配したほどの事もなかつた。

「病死したよりか優どころか、此名譽が弟の生命で買へたかと思へば、弟も本望でせうし、私も本望です。」とは彼女が當時山内に語つたところで、其が又少しでも、痩我慢とは見えなかつた。

町を飾る提灯は、夜風に飜る國旗と共に、國民の得意國の譽と耀いて、其處の樂音、此の万歲、彼處の祝捷歌、此方の煙火は、洋々として滿都唯歡呼の聲の波に漂はされてゐる。

八重子は獨り、肩掛を擔いで、寂莫の情を、此の熱狂のうちに行らうとして、巷に出て見たが、何となく嬉し涙が溢れるのであつた。

七八歲から、十二三ばかりの男の子の一隊が、聲張揚げて、軍歌を謳ひつゝ、只ある橫町へ曲つてゆくのを八重子は熟と立停つて見送つてゐたが、其顏は、二週間前に弟の戰死の報を受取つた姉の顏と言ふよりか寧ろ、數年前に別れた我子を憶出した母親の顏であつた。

突如に、「やあ、貴女もお出かけでしたか。」と橫へ顏を出して、帽子を脫いだのは、信友山内である。

「おや、山内さん、先日は何うも……」と叮嚀に挨拶して、

「何方へ入らつしやいます。」

「今貴女のお宅へ伺つて、此から神田の方へ用達に行

くところです。」

「まあ、然うでしたか。お歸に是非お寄んなさいましな。」

「難有う。今夜伺はんければ、又明日伺ひます。」とマッチを摺つて、莨に火を點けながら。

「何と盛ぢやありませんか。」

「本當に賑ですね。」

「僕は寧ろ癪に觸るです。」

「ほゝ、然う?、何爲てゞございます。」

「だつて、我々の不幸を思へば、對照が餘り慘酷ぢやありませんか。」

「其は爲方ありませんわ。私はもう、諦めてをりますわ。」

「貴女は剛氣です。幾んど感心してをるのです。」

「然うですか。いゝえね、私だとて、矢張女ですからそれはお肚の裡では、どんなに殘念だか知れませんわ。」

「つまり、其を顏に見さんのが、剛氣ぢやありませんか。迚も世間の女には出來ん事ですよ。」

「おや、大變ですね。私そんなに氣の強い女に見えますでせうか。」

「氣の強いと謂つちや、語弊があるかも知れませんけれど、まあ意志が強いのでせう。」

「でも子供のとは、忘れる隙ございませんよ。」

「龍ちやんの事ね。さう〳〵、其龍ちやんを、森林さんが素直に渡してくれゝば、可つたのですけれど。」

龍吉の一身については、信二郎の出征後、山内が引受けて熱心に森林を說いて見たが、森林は、何うしても承諾してくれなかつた。其代り、彼は信二郎が新橋を立つとき、龍吉を連れて見送に出た。互に大して深い憎怨のあらう筈もないので、八重子兄弟と森林とは、何氣なく數語を交へたが、唯其きり、信二郎が汽笛と共に名殘の帽子を脫つた時は、森林父子と八重子とは、全くの他人であつたので。

二人は今少し人通の透いた處へ出た。八重子は、前の山内の語を受けて、

「爲方ございません。森林も切々と骨を折つて、あんなに大くしたのですから、今更に人手に渡すのも惜いでせうよ。」

「其點もありませうな。」と山内は急に立停つて、

「僕は此から電車を利用することにしませう。」と帽子を脱つた。

「さうですか。では、此で失禮致しませう。」

山内に別れてから、人波に推されつゝ、獨り横町に逸れたが此時不圖目に着いたのは、六七間前を行いてゐる、貴夫人捲の身丈の高い、黑のコオトの母親の手に引かれた三歳ばかりの女の子と、七歳ばかりの男の子とで、其の又男の子の、水兵帽に白の毛糸の頸捲、絣の筒袖羽織を着て靴を穿いた後姿が、如何にも去年の秋新橋で見た龍吉に似てゐるので、急に飛つきたいほど可懐しくなつて、胸を轟かして、我を忘れて、人を排けて二三間行いた。

母子の姿は此時、山高に二重廻の紳士と、白い毛の頸捲に首を埋めた、小豆色紋羽二重の羽織を着た、大い淑女と、直と肩を擦つけて歩を運んでるもの、直に隱れて了つた。

憖ひ可憐な姿を見るだけ、新橋で邂逅した時のやうに、後で思の種子となつてはと、八重子は急に思返して、後へ引返さうとしたが、何となく後髮を引かるゝ氣がして、又振戻らうとする途端、祝捷歌の聲勇ましく、一隊の提灯行列が、道を横截つて、遣つて來た。其行列の通過ぎるのを待つて、再び我子の影を逐はうとすると、もう何處へ行つたか、似たやうな姿も見えなかつた。

「あゝ、あの阿母さんに懷いてゐる樣子では、何せ私と云ふ本統の母親のあるとも知るまい。其とも誰かに言聞されて、少しは樣子を知つてゐるか知ら。」などゝ、浮ぶ涙を手帕に押へつゝ、歩を運で見たが、其と思ふ姿も見えなかつた。

不圖、只有るビーヤホールの樓上から、氣立しい樂隊の囃と「萬歳……」とが起つたので、驚いて振仰いだ途端、自分の周の職人の一隊から、「萬歳……」と、應す

る聲。此は可恐しい人込であつた。

若しこんな中にでも居るかと、前後左右を瞰してゐると、ピイヤホールの隣の玩弄物屋の店に、母の袂に縋つて、物ほしやに佇んでゐるのが、正しく其であつたので、念はず進んで出て、横の方から、私と顔を店頭へ覗くと、此は似ても似つかぬ他人の子であつた。

「そんな物、どつさり宅にあるぢやないかね。」と窘める母親の聲の下から、男の子は頻に何をか强請んでゐる。

八重子は、我と我を嘲つて、街と其處を立去ると同時に、今來た道へ引返さうとしたが、ピイヤホールの樓上から、又一時「萬歳……」の聲が起る。

「思つたとて、自分の子になりもしないものを―。」

と八重子は心に呟いて、元氣よく急足に行出したが、

「こんな事で、何して、是から獨で、幾年も〳〵あの寂しい宅に住んでゐられるものか。」と家路を辿る途すがらも思續けるのであつた。

留主宅日記

朝仕舞手早く終へて賃仕事にかゝる。日あたりの垣根のそばて、姉の初子は足のされた馬や手のかけた犬のおもちやを飾り立てゝ、一郎を遊ばして居る。可愛相に六ツや七ツと云へばまだホンの小供。母親のひざに乳ぶさ戀しい子もあるのに。さ見ればいつか針の運びは止つて居た。言ふまい〳〵言ふたて仕方のない事おもより、せつせさ精を出し一日も早く眞人に眞綿を送つて上ませう。夜は一郎を寐さして、氏神様へお百度をふみに行く（眞人に功名をさづけ給へ）さて一時まで夜業。次の日一郎は二足三足歩く様になつた這れるなり何時歩けるだらふ早う歩ける様になつたらなアさ、待遠しがつて居らしつた眞人に一目見せる事が出來たら。せめて寫眞でも寫すことが出來るさいゝのだけれど。例の通りお百度をふんで夜業をしまふた。あゝ今日は何たる幸福な日であらふ。午後二時頃十七八の女學生さんが佇んで居られた。主人出征中の寂しさをいろ〳〵心切に慰めて下すつて、歸りがけにお粗末ですがさ置いて居らしつたのは、靴下一足さ一郎にうつてつけた樣な衣類の編入。勉强のひま〳〵に編んだり縫つたりして下まつたのであらふと眞心のこもつた贈物を手に取りあげて、つく〳〵眺めて居ると何處に這入つて居たのか、少さい紙包がヘラリと落ちた開けば一圓紙幣が二枚。此時の嬉しさはとても〳〵筆にてかく事は出來ぬ。これさへ有れば子供の寫眞も寫せるし、眞綿も買つて送ることさが出來るのだもの。あゝ彼の女學生さんは何處の方だらふ花井露子さのみでお所を伺がつても仰有らなかつたが。お百度をふんで夜業をしまつたのは十二時だ。

岡中しゆん

黒き女

モウパッサン作
上村左川譯

番作老爺と云へば、汚い仕事の專業人として、界隈きつて名が通つて居た。凹所とか糞堆とか汚水溜とかゞ取拂はるゝか、又は汚塵坑の掃除などのある度、雇はれるはいつでも此老爺であつた。

彼れは汚物だらけになつた道具や木靴を持つて來て、其職業柄を斷えずくど〳〵歎訴しながら仕事に取りかかるのである。そこで人が何故這んな嫌な仕事をするかと問ふと、老爺は諦らめたやうに答へる。

『養なうて行かねばならぬ兒子等の爲めでさア、外の事よりはこれが金が取れる』

實際彼れは十四人の子を持つて居るのである。若し誰かゞ其兒子等の成行を尋ぬると、平氣の體で。

『今家に居るのは八人だけで、一人は兵役に出て居るし、五人はもう結婚しました。』

そこで問ふ人が、それは皆熟縁かと聞くと、彼れは快活に答へるのである。

『私は兒子達の氣に逆らはなかつた。何事の上にも逆らはなかつた。皆もう自分等の望み通りに結婚したのです。人の意向に逆らふといふのはいけないもんだ、とんでもない悪い事になるから。私は親が私の意向に逆らうたから這んな掃除屋になつたのだ。それでなけりや、當り前の職人に成つたのに。』

さてその所謂兩親が番作の意向に逆らうたといふ次第は左の通りである。

彼れはその當時アーブルの港の營所に置かれた一兵卒で、人より愚鈍といふでもなければ、又格別氣が利いて居るといふでもなく、實の處先づ質樸な男であつた。休みの時間中彼れが第一の娛樂は、小禽賣りの群れ集ふ埠頭を步くことで、單獨の時もあれば、折には我鄕里近在から來て居る兵卒と一緒に、鳥籠に沿うてぶら〳〵と步くのである。アマゾンの河邊から來た背が綠で頭の黃な鸚鵡やら、セネガルから來た背が鼠色で頭の赤いのや、又花のやうな羽毛や、翼や羽冠やで、宛で煖室で育てた禽のやうな大鸚鵡や、造化と云ふ上手な細畫師が綿密に心を籠めて彩色したらしい形貌樣々の小さな鸚鵡やら、其他數多の若い小禽、黃やら靑やら雜色やらのが跳び廻つて、其鳴き聲は埠頭の喧噪に混じ、船の荷を卸す音や乘客や車などの往來の騷々しさの上に、更に又何處か遠方の非常に大きな森林からでも來るやうに、烈しい銳どい耳の聾れさうな喧噪を添へるのである。

番作は目を睜り大口を開けて笑ひ、魂を奪はれて、件の囚虜になつた鸚鵡どもに我齒を見せながら立止ると、鸚鵡は彼れがズボンの際だつた赤條や、革帶の銅の扣子の方へ其白や黃色の毛冠を始終點頭けるのである。言語を云ふ禽に出逢ふと問ひをかける、それが若し返事の出來て對話がせられるやうだと、彼れは大恐悅で夕方まで其處で過す、又猿を觀るのも大娛樂で、金があれば犬猫のやうに這んな動物を飼つたら、それに上越す樂しみはあるまいと思つて居る。外國から來た動物に對する斯んな趣味は、例へば人が狩獵とか、醫學とか或は僧侶とかに、それ〳〵其趣味を有するのと同し具合に、全く彼れが本來の性分で、營所の戶が開く度每、彼れは抑へ難き熱望で、其方へ我身を引つけられるやうに思ふかの如く、直ぐに埠頭に行かずには居られなかつたのである。

さて或時彼れは、翼を膨らしたり前の方に屈めたり、後元に直したりして、宛で鸚鵡國の懇懃な禮儀を行うて居るやうな或大きな鸚鵡の前に、快然として我を忘れんばかりの有樣で佇立つた場合に、件の鳥屋の隣りの

小さな坐酒舗の戸口が開いて、頭に絹手巾を纏ひながら、屋内の塵屑を街に掃き出す黒奴の娘がふと目に止った。

番作の注意は早速禽と件の女とに分たれ、その二つの何方を多く恐悦したかといふことは、實際當人でも判からなかつた。

黒女は坐酒舗の掃除がやつと濟んで顔を上げ、今度は女の方が兵卒の軍服姿に視惚れて、彼れに銃でも持つて行つてやらうとして居るかのやうに兩手に箒を提げた儘で番作に顔を向けて立つて居た、一方で鸚鵡は相變らず、敬禮をやつて居る。霎時して番作は娘に視られるのがきまり惡くなりだしたので、退軍の体を見せぬやうにして、巧く其場を立去つた。

が、又やつて來た。殆んど毎日のやうに彼れは此坐酒舗の前を通り、當の港の水夫等にブランデーのコップを注ぐ件の色の黒い小娘の姿を、窓硝子越しに時々認める、又娘の方でも番作の姿を見ると戸口へ出て來る、間もなくまだ一言の詞を替はしもしないのに、相識の中のやうに互ひに顔見合せて笑ひ、番作は此娘の黒い唇の中から俄かに艶のある白い歯がきら〳〵と見えると、心を動かされた。到頭或日彼れは這入り込んで試たが、此女が外の者等と同じやうに佛蘭西語を話すには全く驚いた。娘も一杯受けてくれた檸檬水の壜のことが、懐かしい思ひ出の種となつて、それから彼れは埠頭の此小さな坐酒舗へ來て、自分で買へるだけのうまい飲料を何でも呑むことが例となつた。

笑ふ時に其眼よりも鮮やかな白い歯を出しながら件の小娘が自分の盃へ何か注ぐその黒い手を見るのが、彼れが爲めにはいつも心を離れぬ幸福であつた。這んな具合で二月も交際ふと、兩人は深い相識になつて、番作は此黒奴の娘も此國の並卓れた娘と同じやうに天稟の善い者であることや、儉約とか勉强とか其他善い行爲を

尊ぶ心ばえが見えることに先づ驚いた後、さてそれが爲めに一入懷かしさが增し、いよ／＼深く思ひ込んで、終に妻にしたいと思ふまでに至つた。

その意中を打ちあけると、娘は跳たつての喜こび。それに娘は少しは金を持つて居る。それは自分が幼い時米國の船長に此ハブルの埠頭へ置いて行かれたのを拾つて育てゝくれた或牡蠣賣りの女が遺してくれたのである。其船長は紐育出帆後幾時間か經つて後、船の艙の中の綿の荷包の上に此娘の臥て居るのを始めて發見したもので、其時娘はたつた六歳であつた。ハブルへ船が着くに及んで、船長は我船中に窃かに入れてあつた件の黒色の幼兒の世話を此情深い牡蠣賣りに一任してしまつたもので、誰が如何して又何故に船中へ隱したものかは、船長は知らなかつた。

その牡蠣賣りの女が亡くなつたので黒い娘は此居酒舖の下婢となつた譯で。番作は娘へ話の末に「若し兩親が不承知でさへなけりや万事上首尾だが俺はどうあつても親の心には背かないよ、どうしても。今度田舎へ歸るやうになりしだい一寸話して試やうと思つて居る」

其翌週果して二十四時間の賜暇を得たので、彼れはエトーに近き鶴戸村で一寸した作地を作つて居る我家の者に逢ひに行つた。食後はブランヂーを交せた珈琲で人の心が多少寛大になる時であるから、食事のしまふ迄で待つて後に、番作は兩親に向ひ、万事が自分の望みに丁度適つて、個程好く相應したものは世界中を捜しても外にあるまいと思ふ程の娘を發見けたと云ふことを話した。

その話に老父母は忽ち聽耳を立て、一伍一什を尋ね、又番作は娘の皮膚の色の事より外は何もかも打あけて話した。其娘は下女で、錢も多くは取れないが、強健で、儉約で、潔白で、操行正しく、悧發であつて、これだけ備はつて居れば、惡い女房の手に錢が澤山あるよりは遙かに善く、それに其娘は自分が育てられた女の遺產

を受けて小錢を持て居る……可なりの金で先づ一寸持參金と云へる……貯蓄銀行に四百圓位入れてあるといふことに、兩親は息子の話に捲かれ、又自分等の判斷にも縋つて、次第に贊成の氣になりかけて居た場合に、さて番作の話は大切なる點に及んだ。彼れは稍押し出したやうに呵笑ひながら。

「ところがたつた一つあなた達に好くことの出來ないことがある、其娘は白仲でない。」

兩親は其意味が更に判らないので、番作は老父母を驚愕かすまいと、殊に注意して遠まはしに、其娘は以前兩親がエピナルの展覽會に出た圖畫の中に僅かにその標本を見たことのある黒い人種であるといふことを説明した。すると兩親は忽ち、我子が鬼と夫婦になるとでも云ひ出したかのやうに、困却且驚愕の樣子。

母は「なに黒いと？どれだけが黒いのだ、何處も彼處も黒いのかえ」と云へば。

「あゝ然うとも何處もさ、丁度あなたが何處も白いのと同じやうに。」

父は横合から「黒い？壺のやうに黒いのかえ。」

「それよりは少しはましだらう。黒いには黒いが嫌らしう黒うはない。あの牧師さんの下着は黒いけれども白い袈裟より醜い譯ではないわ。」

父は「其娘の國には外にもまだ黒い人があるかい」と云へば、息子は確信の体で。

「え〻〳〵勿論。」

されど老爺は頭を振つて「嫌な氣がするだらうな。」

「外の物よりも格別に嫌らしい譯ではない、あなたはまだ今までそれに慣れたことがないからだが。」

母「外の人の膚より襯衣が汚れはしまいかの、そんな黒い膚は？」

「あなたの膚から上のことはない。それが其娘の固有の色だから。」

それから外に樣々の事を問うた末に、終に兩親は其娘を觀た上でとかうの決斷をしやう、息子の服役期限はもう一ヶ月の後には畢るから、兩親に篤と觀せるために其娘を內へ伴れて來て、あまり色が黑すぎて迚も此吉田一家へ容れられぬ程のものか否かといふことを、篤と評議の上で決斷しやうといふことになつた。

それで番作は五月二十二日の日曜即ち彼れが除隊の當日に情人をつれて故鄕に向つて出發すると云ふ通知をした。

情人の親の家へ行く此旅行、娘は自分の一番美しい一番華美な着物を着たが、それは黃と赤と靑とが主だつた色であつたので、一見何かの大祝日の時に飾り立てられた人のやうな風體。二人がアープルを出發する時、停車塲で人がひどく眼を止め、番作は個程人目を惹く人物と手を組んで居るのが得意であつた。それから三等列車の中で、娘は番作の側へ座を占めたが、乘合ひの百姓連はいたく驚き、次ぎの區劃に居る者等は、列車內の各部を區劃てある木の分界板の上から此娘の姿を見やうと、腰架の上に登つた位ゐで。或一人の幼兒は此娘を見るより怯ぢて號き出し、今一人は母の前垂に顏を隱した。されど二人が目的の塲所へ到着するまでは万事上首尾であつたが、さてエトーに近くなつて、滊車が進行を緩めだすと、番作は自分が兵卒の時何かの訓練を知らない塲合に點檢にあつた時のやうな具合に、不安心に感じだした。それから滊車の窓から顏を出すと、少し向うに當つて、車を挽かせた馬の手綱を操つて居る父の姿と、數多の見物人の集うたプラツトホームの柵垣の處へ進み出た母の姿が認められた。

番作が先きへ滊車を出て、情人に手を組ませ、宛ながら將軍を警護して居るかのやうに、反身になつて我家族の方へ歩んだ。母は緋色の着物で息子に伴れられた黑色の婦人を見るより、啞然として口も能う開けず、父は馬を制しかねた。馬は其時機關車に怖れたか、それとも黑い娘に怖れたか、靜止として居ないで、稍暫らく

徒足で立つて騒ぎ廻るのであつた。されど番作は再たび老父母を見た嬉しさに忽ち氣を取られて、兩手を擴げて進み寄り、馬の驚き騒ぐのにも頓着なしに、母を抱き父を抱きて後、今しもプラットホームの乘客連か、佇立つて呆然として凝視めて居る同伴の娘の方へ向いて兩親に説明を始めた。

「さア娘を伴れて來た。兼ねて云つて置いた通り、始めて見ては變だが、親しうなつて見たら、眞實世界にこれくらゐ好い人はないよ。さア何もいさこさ云はないで、彼娘に一寸挨拶をして下され。」

そこで老婆も、自身には氣も顛倒せんばかりに狼狽へながらも、何とか挨拶らしいことをすれば、父は帽を脱ぎながら口籠るやうに「どうかお仕合せ宜しく!」

それからもう猶豫はしないで一同車にわかり、女二人は座の下部の方に坐つたが、車が搖れて行くのに、体が上下に躍り、男二人は前面の座に外側へ乘つた。誰一人話をするものがない。番作は氣が落付かず、營所の歌の調子を口笛に吹き、父は馬を鞭ち、母は片隅の座から黒娘の方へのべつにそつと横目を注いで居り、娘の頬と頬骨は磨きたての靴のやうに日光に輝やいて居た。

番作は談話を始めようとふり向いて「さて誰も話しに氣が向かぬと見えるな」

母「何か話す機會がなくちやア」

番作は語り續けて「さア、あの卵を入つ產んだ内の牝雞の話を云つて聞かせなさい」

これは此一家で久しい前からの可笑しい奇聞である。されど母は氣の騒ぎから痲痺したやうになつて迚も無理なので、番作は自分に話しはじめ、獨りで頻りに阿笑ひながら、件の珍話を物語つた。委細知り悉して居る父は、話が始まると笑顔になれば、母もやがて顔色麗はしく、黒女は番作の話が極めて可笑しい處になると、突如にドット笑ひ出したが、其聲が騒がしく、急流のやうな勢で溢れ出たので、それが爲め馬が騒ぎ立つて暫

らくは駈けたくらゐであつた。これが双方親和の緒となつて、到頭一同が喋舌りだした。

家に着いて一同が下りると、番作は汚れぬやう晴着を脱がせるために、先づ情婦を一室へ伴ひ、娘が味の好い料理をして老人等の氣に入られやうと、早速臺處で働らいて居る間に、彼れは兩親を戸口の方へ引寄せ胸を躍らせながら、

「さア阿父さんや阿母さんの了見は何うだの？」

親爺は何とも云はなかつたが、母は較勢があつて。

「あんまり黒いよ、いえ眞個に妾にはあれは迚も耐らん、氣が鬱ぐもの。」

「それはさうだらうけれど、そんなことは暫時の間だ。」

それから一同内部へ這入ると、黒娘の菜拵らへをして居る姿に、老婆は稍心を動かされ、直ぐに裾を褰げて、年には似ず活潑と、娘を手傳ひにかゝつた。

それから食事の席はなか〳〵趣があつて、頗ぶる長く頗ぶる樂しかつた。それが濟んで一同が散歩した時、番作は窃に父に向ひ。

「阿爺さん、了見は何うだの？」

老爺は飽くまでも心を狂げないやうにと用心して。

「俺には何も了見はない、阿母に尋いて見ろ」

そこで番作は母の側へ返り、室の隅の方へ伴れて行つて。

「さア阿母さん、彼娘の事は何うだの？」

「のう、お前、あの娘は眞個にあんまり黒いよ、もうほんの少しばかり黒さが薄かつたら、お前の心に適ら

ひはしないだけれど、あれでは何うも、人が怪魔だと思ふよ!」

云ひ始めたら聞かぬ老母が日頃の氣象を知つて居るので、番作は押しては云はなかつたが、今や失望の暴風が我心の上に吹き來らんとして居るやうな心地。何うすれば宜からう、何か好い工夫は無いかと一心に考へ、又一つには、あの女が已に此自分の心を離けたやうに、兩親の心をも離け得ないのを怪しんだ。それから四人一同はまたも無言に返りながら、徐々と畑中を歩き出した。柵垣の所を通り越す度毎、一人の田舍男が上に腰をかけ、腕白連の群れが四人の連中を見ようと攀ち登つて居り、其外誰れも彼れも、今度吉田の息子が伴れて歸つたといふ『黒女』を觀ようと路へ驅け出して來る。先きの方には、何か椿事でもあつて、村中の者に注意の太鼓を打つ時のやうに。人が畑中を驅けて居る姿が見られる。老夫婦は村中到る處這んなに奇らしがつて覗らるゝのに閉口し、二人並んで歩を早め、息子と黒女とを遙かの跡に殘せば、娘は番作に、兩親が自分のことを何と云つたかを尋ねるのであつた。

番作は躊躇しながら、まだ兩親は何とも決斷をしない由を答へた。されど村中見渡しの緑色の中は、何の家からも人が騒いで驅け出し、大勢の群れ集ふ樣子を見るより、老爺は一散に驅けて我家に歸れば、番作は怒り返つてすまし込み、情婦と腕を組みながら、呆れて睜る群集の眼の前を、威風凜然と云ふ態度で進んだ

番作は最早万事休して今は望みの綱も絶え果て、懷かしの黒女を妻にすることは出來ぬを悟り、娘も亦それと察し、家に近づくと二人は泣きだした。歸り着くや否、娘は老婆が家事向きの用を手傳はうと、又も晴衣を脱いで、牛酪塲やら、廐やら、鷄小舍やら、何處から何處まで老母に跟き廻り、『奧樣それは私がやりませう』と斷えず云ひながら、一番骨の折れるやうな仕事を自分にした。それで日暮になつて、老母は可憐の情は催したれど、何分決心は動かしかねて、息子に向ひ。

「彼女は善い娘だが、それでも何うものう、あんなに色の黒いのは可憐さうだけれど、何うもあんまりでのう、私はどうも慣れられないよ、返さねば仕方がない、あんまり黒いから。」

そこで息子は情婦に云ひ聞かした。

「母が承知しない、お前があんまり色が黒過ぎると云ふの、だから歸つてもらはねば仕方がない、汽車まで一緒に行かう。なアに、腹を立てることはないよ、お前が歸つた跡で俺が猶相談をするつもりだ。」

それから番作は、途々も猶望みのあることを云つて慰さめながら、娘を停車場に伴ひ、接吻して後に列車へ入れ、涙に腫れた目で、汽車の隠れるまで目送つて居た。

斯くて猶も兩親に歎願して見たれど更に効なく、彼等は何うしても承知しないのであつた。

・　・　・　・　・　・　・　・　・　・

界隈に知れ渡つて居る以上の物語りを自分で語る度、吉田番作はいつも末に詞を添へていふのである。

「其時からこちといふものは、私は何事にも少しも心から氣が向かない、もう何事をしても。何んな職業も私には一つも向かない。それで此通りの掃除屋となつたのだ。」

そこで人が若し。

「けれどもお前は妻を迎へたでないか」といへば。

「左様、それに私は十四人も子供を拵らへたのを見りア、今の家内も自分の氣に入らなかつたとは云へない。だが、も一人のとは違ふ、どうしてなか〳〵！も一人のは、それ、あの黒奴の女よ。彼女には唯一寸顔を見られア、それでもう私は極樂に居るやうな氣がしたもの。」

（完）


衆芳凍欲折
孤根暖獨回
行軍
春遊
祝儀
蘆手畫

春宵記

物集梧水

（上）暮の夕

お正月、お正月、と待焦がれてゐましたお正月も瞬く間に通りすぎて仕舞ひまして、奥の物置と下竈との狭ッくるしい庇間に、お飾り松の抜きとられたのやら、注連縄やら、三本括しの竹やらが、横ッちよに積まれてあつて、其のがさ／＼に乾燥びきつた笹の葉に、春とは云ひ條、まだ仲々うそ寒い、身内が慄然するやうな朔風がサラ／＼と渡りまして、今恰度黄昏れ時、空をはうつとりと霧もよひで、さも力なさ和な、淡い、冷たい、夕陽が、其の簇々に、鳥の羽みたやうな、どんよりした雲間から洩れて、下竈の、これも力の無い――燃えてゐた火は疾うに消えてしまつて――プス／＼と白い淡い煙ばかりが立昇つてゐて、人の氣勢も無く、四邊は既う果敢い、淋しい、夕闇の手に奪はれて了ひはせぬかと怪まれるやうな或る夕方であります。美保子は例の通り、二階の西寄の窓の障子啓けて、卷繪の經机に凭れかゝつたまゝ、坐ろに許婚の文雄の事のみ思ひ浮かべて、西の空遙かに眺めてをりました――イヤ眺めてゞはありませぬ。熟と考へてゐたので御座います。何うして眺める事が出來ませうか、美保子の眼は見えないので御座いますもの。一昨年から黑症眼を患らつて、到頭去年の春、全然その明を失つて仕舞つたので御座いますもの。

未だ漸つと七草がすぎたばかりなのを、既うお正月は何處かへ逃げて行つて了ひましたかのやうに、往來を通る人の下駄音さへ、カラリコロリと冴へて淋しく、窓ならツイ鼻先――三間そばはなれず――江戸川の川端に添うて、一番に立並んでをりまする櫻の木の芽は、寒の衣を深く被つて、未だ些とも膨みませず、水を[illegible]んで相對して、共に春の榮華を獨り誇らうなど〻は、おくびにも見せぬので御座います。改代町の原ッぱか、赤城神社の前あたりで飛ばしてゐ

るのでありませう、紙鳶のうなりの聲が微かに取遺されて聞えてゐましたが、其れも少時、軈て日は次第次第に暮れて行くと、空は愈々益々曇つて來て、今にも白いものがチラリ〳〵降つて來さうに思はるゝまで。すると江戸川の水の色は黝黑く、流れてゐるのか、ゐないのか、瀬の音も立てず默々として居りまする。暫時して川向の小石川水道町の賑やかな街にキラリと燈火が輝めき出すと、其の灯影が波に映つて、彼岸から此岸へ、金色の蛇がうねり〳〵のたくつてゐるやうに――然ゑ、水は默然でゐても絶えず流れ〳〵てゐました事が分りました。すると忽ち轣轆と雷鳴のやうな響き、それは石切橋を渡る腕車の音で御座います。

然う斯うしてゐる中に、橋の袂の「いろ松」の軒洋燈も、筋向の「橋本」の掛行燈も輝めき出しました。既う紙鳶の音は聞えませぬ。空は淡々として暮れて仕舞つて、無論銀沙子のやうな星もなく、雪の雲は低く蔽被さるやうで御座いました。

今まで窓の障子啓けて、文机によりかゝつたまゝ熟と考へてゐた美保子は此時「嗚呼………」と深く太息吐いて、物憂げに障子をハタと閉めました。而して傍にある桐の火鉢を自分の方へ引寄せて、手探りに火箸で火をほぢつて手を翳しながら、又熟と考へ込みました。夕闇は犇々と此處の六疊の二階を推包んで了ひ、美保子の胸の中には種々の觀想や、往時有つた事柄が、片片になつて走馬燈籠のやうに廻ります。

自分が未だ十六七の時――

妹の里ちやん――近日の中、或る醫學士の許に歸嫁くことに極りました――と一緒に紫の袴穿いて、ヴァヰオリンの稽古に行つた事や、春の暖い日、お庭の芝生の上で、櫻の花瓣がチラ〳〵散つて來るのを浴びながら、文雄様に作つて貰つた落花の曲を西洋の或る樂譜に移して、其れを里ちやんに唄はして、自分はヴァヰオリンを奏でゝ居た所を、築山の蔭で悉皆文雄様に聽かれて仕舞つて、後で、天に鳴いてる雲雀よりも好い聲だ、と調戯はれた時は、本當に極りが惡るつて、顔が眞紅になつて了つた事。

其れから恰度夏の首、我家のお池に杜若の花が奇麗に咲いてゐた時――文雄樣と兩人で燕子花を眺ながら、
「美保さんと、其處に咲いてる燕子花の花と孰ちが美しいだらう？僕は如何公平に判斷したつて美保さんの方が美しいと思ふ―」
「那麼事妾知らなくつてよ。」
「縱へ杜若の花がどれほど美しいッたつて、物は云はずさ、加旃に直き凋んでしまふ―美保さんは雲雀のやうな美音を有つてるし、牡丹の花のやうな容色ぢやあるしさ、加旃に何時まで經つても杜若の花のやうに凋むことはなし……」
「たんとお嘲ひなさいよ―」
「だから要するに杜若の花は、例令ば美保さんの髮にかけてるリボンの色にも敵やしない。」
「もう那麼こと奈何でも宜くつてよ―」
此時妹の里ちやんが傍へ走つて來て、
「兄樣、兄樣、妾もお仲間に入れて頂戴な。」
「否だよ―兄樣はね、兄樣と姉樣の他、誰れも他に入れないの。」
「入れなけりや好くつてよ……」
「つゝ」
「ぞんな意地惡根性するなら、お母樣に吩咐てよ。」
「そんなら僕の方でも吩咐ける……」
「ナニを……」
「何ッて、先日のこと……。」
「先日の事ッて何に……？」
「例の一件……」
「妾や那麼兄樣に吩咐けられるよなこと、お氣の毒さま―そんな惡い事した覺え無くつてよ―」
「ところが有るんだ。」
「あるなら云つて御覽なさい。」
「云つても好いかい。」
「好くつてよ、お云なさい―さア、さア、早く云つて御覽なさい―」
「では云はうか、眞箇に云つて好いかい……？」
「好くつてッば―」

「なら云ふ……ね、ツイ先日學校の先生に叱られた一件……お午前の時間、運動場でお辨當の煮豆を喰べつゝ見付かつた一件……。」

「嘘言、嘘言、嘘言！何時そんな事爲て？先生に叱られて？那麼お行儀の惡い、煮豆なんか運動場で喰べや爲なくつてよ……」

「否え喰べました。先生から整然聞きました。」

「そんなら勝手になさい！那麼お行儀の惡い事爲たことも無いのに、たんと妾をお困めなさい！好くつてよ、好くつてよ！」

妹が怒れたのを、自分は慰めやうと、

「里ちやんお怒りでないよ、嘘言だよ、嘘言だよ、兄樣がお調戯ひゝなさるんだよ。それよかお池の中御覽、それ〳〵其處に大きな緋鯉が泳いでつて……まあ此方にや斯樣に蚓蚪がゐてよ。」

妾と、妹と、文雄樣と、お池の周回をぐるりと廻つて、水際の大きな石に三人腰掛けてると、藤の花の遲咲きのが、風に揺られてほろ〳〵と裾に翻れて、水の中に落ちると、緋鯉が餌かと思つて、パタリ喰べたら妹が手を拍つて笑つた事。

あゝ今は既う里ちやんの顏も、文雄樣のお顏も、お池も、燕子花も、緋鯉も、藤の花も、家のお庭の景色も、お父樣のお顏も、お母樣のお顏も……あゝ既う見る事は能きない！

里ちやんは嘸ぞ品が好く、立派になつたらう！高島田も好く似合ふだらう！近い中に葉山樣の許に嫁く其時は何んなに美しくなるだらう！嘸最う見る事は能きは爲ない!!

美保子はあるにもあられず悲しみました。

其れから三年ほど以前、文雄樣が洋行なさる時、横濱の阜頭で——文雄樣は妾に、

「そんなら是れでお別れをするよ。直に歸つて來る……何有三年と云つたつて、過ぎて見れば夢の間さ。美保さん、身躰を大切にしてね……」

お父樣はお傍から、

「左樣だとも、左樣だとも、文雄樣、心置きなく光

分確乎勉強して來て下さい。美保は私が整然と預かつとく……」

「左樣ですか。では安心して參ります。美保さん、好いかね三年ッて直きだ。」と淋しい笑顏をお作んなすつて「では皆樣左樣なら、何卒お身躰をお大切に……」

「御機嫌好う……行つてらつしやいまし」

と漸との思ひ。妾は其の四五日以前から心細くつて、心細くつて、愈々と云ふ場合になると胸が一杯になつて、何んなお樂い方にお成んなさるのだつて、怎麼辛いお別れする位なら寧そ洋行なんぞなさらない方が……なぞと女心の、何とも彼とも云ひやうの無い心細い感情がむら〳〵と胸に迫つて、人目も憚らず手帕で顏を蔽ふと、既う端艇の上には種々立派な方々と御一緒に文雄樣も乘つて被在しやる。あゝ如彼お立派な方達と御一緒かと思へば、末の末かけて頼母しいやうな、嬉しいやうな氣もするし、するとお父樣のお聲で、

「では是れでお別れする。文雄樣、隨分身躰を大切に勉強して來て下さい。」

脚下の棧橋の棒杭にザブン〳〵と波が寄せて、あゝ既うお別れ！と又新らしい情無さに眼が眩つて、思はず倒れやうとすると、

「おゝ危險い！」とお父樣に肩の處を押へられて、ハッとすると、文雄樣は手帕を頻りに振りながら、端艇は次第々々に放れてゆく……其時の有樣！おゝ其時の有樣‼

美保子は餘り昔の事戀ひしさに、我れにもあらず文雄樣！文雄樣！と低聲に繰返して、ハタと眼を瞬けば、夢幻は跡なく消え失せ、綾目も分かぬ眞の常闇の、美保子は千仭の絶壁から轉び落ちたかのやうに、絶望の涙はら〳〵と、哀れに盲いた兩の眼から溢したので御座います。此時恰度、

「姉樣……」と靜かな跫音で、二階の階子段を昇つて參りましたのは妹の里子で御座います。

「妹樣、オゝ眞暗だ事……濟みませんでしたことねえ」と云ひながら其のまゝ洋燈取りに行かうとすると、美保子は其處に妹が來たのに氣付き、慌てゝ袖で涙を

拭きながら振向いて、
「里ちやんかい？まあ此處へ坐つてお呉れ……燈火なんか妾や無くつたつて可いんだから、まあ此處へお坐り。」
里子は其のまゝ去りも得やらず、膝を突いたまゝ膝行り寄つて、
「姉樣、斯んな處にお一人法師、嘸ぞお淋しくつてでせうねえ、勘忍して頂戴よ。」
云ひながら火鉢の傍へ寄つて、美保子と共に手を翳し、
「妾、姉樣のお側へ來やう／＼と思つてたらね、恰度古川の小母樣が光來しつて、今まで御用して居たもんですから遲くなつちやつて……斯樣に姉樣お一人眞黑闇にお遺し申しといて、濟みませんでしたのねえ。」
もう太陽は一杯に暮れて仕舞つて、窓の障子越に仄暗い幽かな光線が射込むばかり、部屋中を茫ッとぼかして居る中に、簞笥の上の置時計が絶えずチクタク云ひながら、銀色の怪しい光を放つてをりまする。其れよりは火鉢の火の方があか／＼と姉妹の面を照返して居るので御座います。
暫時の間は姉も妹も、何も云ひませず默つてをりましたが、軈て妹の方から、
「あのね姉樣……」と覺束なげに、「妾ねえ、何だか此節は心細くつて／＼仕方がないのよ。昔なら未だしものこと、斯うやつて姉樣がお病いのに、妾一人お先に嫁くやうになつて了つて……妾がゐなくなつたら嘸ぞ姉樣が萬事につけて御不自由なさるだらうと、其ればかし思つて……ソリヤお母樣も被仕しやるし、古川の小母樣だつて當分の間は來てゐて下さるけれど……妾、何だか是れなり姉樣をお遺し申して嫁くことは濟まないやうな氣がして、氣がして……。」
里子は又それなり默つて仕舞ひました。
昔！昔！未だ眼を患はなかつた以前までは、美保子は隨分談話上手でもあり、快活な、元氣の好かつた方でありましたのが、今では幽鬱な、沈みきつた、傍に居るものさへ、如何にも淋しみに襲はれるやうな、昔とはガラリ人間が變り果てたやうになつて仕舞ひ、自分

から決して先に物を云ふやうな事は御座いませんでした。ですから妹の言葉が途切れると、美保子も其の儘俯向いた限り、何事も云ひませんでした。

里子はやをら面を擡げまして、

「もう悉皆暗くなつて仕舞つてよ、窓の雨戸締めましよ……待つて〻頂戴、鳥渡洋燈持つて來ますから、」と思ひ出したやうに、「ア姉様は未だ晩の御飯召喰らなかつたのねえ、古川の小母様が被来たもんだから悉皆忘れてゐて……一寸待つて〻頂戴、燈火點けてから直きお二階に持つて來ますから……」と立起がらうとしますのを、美保子は袂を抑へて、

「里ちやん妾未だお腹が減らないから好くつてよ。それよか里ちやん最う些時此處に居といてお呉れ。妾、里ちやんが居といて呉れないとね、淋しくつて、淋しくつて、穴にでも這入りたくなるのよ。」

「まあ……」

「里ちやん。里ちやんも御飯未だなの？」

と美保子は些し首を傾しげますと、

「えゝ、けれど構はなくつてよ……」と里子は其のまゝ再び其處へ坐つて、「何時までだつて妾　姉様のお側にゐるんなら、御飯なんか頂かなくつたつて構はなくつてよ。」

「ホヽホ、そんなら最う些時此處に居といてお呉れ、妾先刻つから種んなこと考へ出して、最う心細くつて〳〵妾一人で泣いてたのよ……里ちやん、古川の小母様未だゐらつしやるの？」

「えゝ……」

「ぢや階下におりてゐなくつても好いの？」

「構やしなくつてよ。お歸んなさる時にやお母様が妾お呼なさるから、此處に居たつて構はなくつてよ。」

里子は整然と火鉢に擦り寄つて、居住ひを直しますと、姉は嬉しげに頻りに盲いたる眼を瞬させ、

「里ちやん妾ね、先刻つから種んな事考へてたのよ、里ちやんも妾も未だ少さかつた時……」と云かけて、美保子の面は俄かに生々と、「お庭　芝生の上で、里ちやんが唄つて、妾がヴァ井オリン奏いてると、ソレ蝶が

飛んで來て、里さやんのリボンの上に止まつて……黄色い蝶に紫のリボン、色彩の配合が餘り好かつたもんだから、妾彼の時寫生したら嘸ぞ好からうと思つたの……加旃恰度櫻の花が散り際だつたもんだから、風がそよ〳〵吹く度に花瓣がヒラヒラと降つて來て、里ちやんは宛然天使のやうだつた其事、分刻フイと思ひ出してね、妾も無邪氣、里ちやんも無邪氣、築山の蔭で文雄樣に悉皆妾のヴァイオリン聴かれて仕舞つて、妾やお當に極りが惡かつた事彼時は……眞個に彼時は…………嗚呼彼時が妾の一番樂しかつた時代だつた！もう妾斯樣に不自由な身に成つ了つては唯だ現世に生きてると云ふ計り、將來だつて妾の身體に花實が咲かうと云ふぢやなし……それから其れへと段々氣が滅入るやうになつてね里ちやん、妾や奈何したら宜かろ……」と美保子は聲を曇らせ「此節は又餘計に妾心細かつたり、戀しかつたり、氣が滅入つて〳〵、終ひには寧そもう現世は……なんてねえ里ちやん、一途につまらない事考へるやうになつたのよ。剰且不自由な身體になると、現世がつく〴〵果敢くなるんだねえ。」

美保子はつく〴〵自分の情ない事を申しました。すると里子は姉の今の境界を身に引較べて、何とも云ひ得ず胸が一杯になつて、俯向いたまゝ涙をはら〳〵と灰の中にこぼしたので御座います。

あゝ姉樣はお氣の毒で〳〵……御容色といひ、御才藝といひ、何一つ批點を打つべきところの無い、跡見女學校第一と唄ひはやされ、同窓からも羨ましがられたのに、如何なる宿世の因縁か、現今は衆中にもお出なさることが出來なくなつてお仕舞ひなされ、御自分でも嘸ぞやお辛いとであらう！既う世の中が可厭だ〳〵と最初の中、口癖のやうに仰有つてらしつたも、あゝ無理も無い事！女は顔に黒子が一つあつても氣にする位なのを、女の命の、容色の誇りも無くなつてお仕舞ひなされ、あゝ何んなにお辛い事であらう！何んなに現世が味氣なく思召す事であらう！里子はそッと鼻をすゝりあげて、聲を呑んで泣きました。美保子も同じく俯向いて、少時默つて居りまし　。彼と軈て、

「里ちやん……」と幽かな聲で、「妾、斯んな不自由な身になつちまつたんだから、今更妾や里ちやんのやうに……迚も最う思ひも依らないんだから、ねえ情願、縦へ里ちやんは葉山樣の許に嫁つたつても、と、情願妾を見捨てずに……ゐてお呉れ！ふ、文雄樣だつてお歸國なすつて被任しやれば、そ、そりや、豈夫に可……可哀相だ位はお思ひなすつて下さるだらうけれど、と迚も昔のお約束は………！こ、斯うなつて見りや頼みになるのは、里、里ちやんばかりだから、縦へお嫁に適つても、何時までも〳〵妾の事をお忘れで無く、ナニかの杖柱になつてお呉れね……里ちやん！」

噫いぢらしい！姉樣のお口から恁麼にも妾を頼りになさらうとのお言葉を聞かうとは！え、妾は寧そ、お父樣に左樣申し上げて、葉山樣の方は斷然お斷り申して仕舞つて、妾や斯うやつて一生涯、萬事御不自由勝な姉樣のお世話したら、定めて姉樣も屹度お喜びになるに違ひない。唯つた一人の姉樣ですもの、其位の事して差上げなければ濟まない事。

と思ふ中、

「え里ちやん否？え里ちやん……可厭!!」

と美保子の聲は稍焦つた調子で申しました。里子は驚いて、顏を擡げて、

「姉樣……」と力のある聲で、「あ、妾もう一生お嫁なんか適きやしなくつてよ。ほ、眞箇に！姉樣お一人お遺し申しといて、な、なんで妾一人適かれませう……!!」

と云ひながら自分も感極まつて、わつと泣き出したので御座います。美保子は倚更愕き、あわてゝ手探りに妹の身體犇と抱きしめ、

「里、里ちやん……か、勘忍しとくれ！姉樣は那樣こと云ふ積りで云つたんぢやなくつてよ。」

「でも妾……」と咽びかへつて、「姉樣……!!」

「え、え、里ちやん〳〵、勘忍してね！」

「そ、そんな事、あ……妾！ぢやァ無いわ!! 噫もう奈何したら宜からう!!」

「あゝ里ちやん!!!」

姉妹は互ひに相抱いて、咽びかへつて歎き悲しみました。

折から外方にあたつて、

「えゝ到頭チラ〳〵降つて來やがつた……」

と職人のやうな聲。

骨を刺すやうな冷たい風が颯と窓の間隙から襲込んで早くも夜は更けわたつたやうで御座います。

(中) 朧ろ月夜

上野の山の彼岸櫻が二三日來の暖氣でチラホラ綻び初めたと云ふ噂で耳にするやうになつた三月の下浣、里子の結婚式は愈々今宵と迫りました。

最初里子は、姉様が文雄様と御夫婦にお成りならさらない中は妾も葉山様の許にまゐりませぬ、とお父様に申し上げたので御座いますけれど、固より那麼ことで結納まで取替はしたのを今更當方から破る事も能きず且つはお父様の仰有るのに——縱へ美保子と文雄様とは幼少い時からの許婚ではあるけれど、先方が洋行中俺が確乎お預り申すと云つて置きながら、此方の不注意で生れも付かぬ不具者に爲て仕舞つて、それでも約束は約束だから是非娶つて與れろとは何うしても云はれぬ義理、だから俺は美保子を一生不自由しないやうに家に置いといて遣る積りだし、文雄様がお歸んなすつたら精しく其譯いうて、貴郎も可愛相だとお思ひだつたら、切めては時折面倒だけ見てやつて下され、と其れだけの事は俺からもお願ひする事は出來るが、其れ以上、奈何あつても夫婦になつて遣つて下されとは、迚も那麼暴な言ー俺には云へぬ。實に俺も腸が千裂れる程心を痛めて、美保子が身の上を案じわづらつたけれど、文雄様にさへ差上げるのは見合はした者を、況て他に何家に縁付けやうと云ふ事もならず、要り彼女は一生家に置いとくより他に詮方が無いのだ。其れはお前も情けないだらうし、美保子も口惜しいだらう。産んだ俺は何ぼ云ふに云はれぬ苦しみがある。雖ぜ其れは今更繰返したとて愚痴にしか過ぎぬ。だからお前

も其處のところを能く考へて、姉樣がお緣付きなさる迄たつてお嫁に適かぬなど丶云はずに、其れよりはお前が葉山樣に早く緣付いて、他家から些少でも姉樣の世話を爲て呉れる方が、家にゐて姉妹とも空しく寡婦で年齡取つて仕舞ふより幾干可いか……其處のところを能うく考へて見て呉れたら、却つて早く葉山樣に嫁つて、先方樣にも姉樣のために同情の感を起して貰つた方が餘程宜かろうと思ふが――

とお父樣から懇々と仰有られて見れば、其れも道理、ツイ又嫁つて見る氣になつて、移す可らざる黃道吉日はヒタと今日に差迫りました。

昨日、一昨日、先の一昨日、未だ其頃は結婚式の當日を思ひ浮べて、嬉しいやうな、心細いやうな、種々な事を考へてをりましたけれど、「今日」と差迫つては旣う何も考へる暇もなく、朝から媒介者のものは來るし、家内中引繰りかへるやうな騷ぎに、里子は船に乘つて夢を見てゐる心地の中、ソレ月下氷人の方に御挨拶しろ、ソレ出入の職人が祝物を持つて來たから御禮をしろ、ヤレお湯だの、ヤレお髮揚だの、と眼の廻るほど動き廻はつて、お正午の御飯さへ未だ喰べない中、早や三時の時計が打ちました。

「あゝ妾顏がほて〳〵して……」

眞黑な、艶々しい髮を、水の滴るばかり奇麗に、文金の高島田に結ひあげて、今お風呂からあがりたての、頰はぽうと櫻色、額はしつと汗ばむで、大柄の浴衣かけに纔まつた六疊の化粧部屋の姿見の前へ。鳥渡自分の立姿を映して見て、扨て髮の形を横目にながめながら小指の先で鬢を撫で、是れでよろしいとなつてから、更に鏡臺の前へ坐り直して、化粧の支度に、二番目の抽出をスーと開けました。

西に傾いた日影は、手水鉢の側の大きな八手の葉を障子に映して、逆上せさうなほど室内の空氣の暖かさ。玉のやうな掌上に白粉、水をぽつちり、能く溶かして顏へひつたり、香は高く部屋に限なく滿ちまする。

「里ちやん、妾がお化粧のお手傳してあげましよ!」

境の紙門をスイと開いて這入つて來ましたのは、四十

五六の瘦ぎすの女、古川の小母様で御座います。

『は、有難ござんす……どうぞ其れでは小母さん。』

小母様は鏡臺の横に立膝になつて、一生懸命念入にお化粧に取りかゝりました。

間越に、

『里ちやん！里ちやん！お前お化粧してるだらうねえ、遲くならないやうに……』とお母様の聲。此方でも聲張りあげ、

『私が唯今お手傳ひ！もう直きにお濟みになります……』

『おや左様ですか、小母様どうも恐入りますこと。』

『いゝえ如何いたしまして……それからお召は此室に御座んすので御座いますか。』

『はあ唯今妾が參りますから……』

さや／＼さやと裾捌きよく此室へと、年齢は古川の小母様より五つ六つ若い、面長の品の好い人品。

側へ寄つて、

『まあ奇麗に出來ました事！里ちやん鳥渡此方向いて御覧、頭飾に見違へるほど奇麗になつて……』

縦ひ生の母でも、つく／＼と自分の顔眺られては、流石里子は極り惡氣に面を赤くして俯向たので御座い升。

『里ちやん、お化粧が濟んだらね、其處の、簞笥の側の、風呂敷のかけたる衣服を、大抵お前お分りだろ、お母様は大急ぎて些と襟首だけ洗つて來るから。』

『お母様未だお風呂召さなかつたの？』

『どうして／＼お風呂どころか、今しがたまでお父様のお裝束附けさゝ 吉井様や花村様はもう先刻から來てゐらつしやるし、眼が廻りさうで、眼が廻りさうで。』

『貴女先あ御綴り貴女のお支度あそばせな。』

『はあ左様爲ませうよ、もう遲くなりさうで、遲くなりさうで……』

『お孃様の方は妾が引請けますから、お惡いとこ丈後で直して頂いて……』

『お母様、妾の方は好くつてよ、小母様に爲て頂きますから。』

『では誠に恐入りますけれど、左様お願しませう。』

お母様は倉皇彼方に行つてお仕舞ひなさいました。
彼方の間でも、此方の間でも、ざわ〳〵ざわめき渡つて、毎日今頃汲む車井戸の響きも、今日は殊に騒しく、職人や車夫などが下廻りを働くのも耳立つて喧しく、左う斯うしてゐる中に時間は見る〳〵經つて早や夕暮れ近き頃ほひ、漸と里子は衣服着更へ終りました。

『里ちやん、些とお映しなすつて御覧なさい、どうも帯に力が這入らないやうだけども、先あ後でお母様に直して戴くとして、些とお映しなすつて御覧なさい。』

『どうも有難御座んした、お蔭様で助かつてよ。帯だつてキウッと能く締まつて、眞箇に小母様御苦勞様でした。』

『如何いたしまして、』と容易く云つて、『ドレ御自分で鏡に向つて御覧なさい！』

下着は白羽二重の襲に、上着は黒縮緬の江戸褄模様、松竹梅の形を判然と染出し、帯は白茶の金通し、整然と胸を掻合せて足の小指に裳裾の捌き鮮かに、鏡に對して亭然とたつた立姿、春は未だ早く霞に深き枝垂櫻の風情とでも申しませう。

古川の小母様も後ろから鏡に向つて、

『さあお立派なお姫様が出來ました。もう是れでは里ちやんぢやなくつて里子姫様……ちよいと母様に御覧なすつていたゞきましよ。』

とは云ひながら尚ほも昵と鏡の中を凝視めてゐる兩人の笑顔。

此時、二階の階子段はミシリ〳〵と窃と降りて來て、手探りに障子を啓けて、

『里ちやん、もうお仕度出來ましたの！』

細面の、顔色　蒼い、頬に云ひ得ぬ淋しみを表はし、唇の詰と締まつた——其處に浮世の味氣無さを啣んだやうな、髪は束髪につかねて、衣服は稍々古びた節糸、姉の美保子はその淋しい片頬に無理に微笑を浮べました。

『里ちやん嘸ぞ立派にお成りだらうねえ。妾見度くつてよ。』

障子を啓けたまゝ其境に突立つて、美保子は妹の姿の恁うも有らうかと、晴れの装ひは眼に見るやうに脳裡

に浮べたので御座います。

里子も古川の小母樣も宛ら鬼氣に襲はれたやうに、瞬時は物も得云ひませんでしたけれど、軈て『あゝお氣の毒な!』と、一種悲愴の感がむら／＼と胸に擴がつて、里子は思はず知らず蹌踉と姉の足元によろけさうになり、

『姉樣……あッ何卒御勘辨なすつて、勘忍して頂戴!』

『さ……里ちやん!!』

『え、姉さま……!』

里子は姉樣の袖に縋つて俯向いて仕舞ひました。小母樣は、さて奈何して可いやら。

是れが順序なら姉樣がお嫁でなさるところを、嘸お氣の毒な!

里ちやんの今の境遇は、その昔自分が樂しみにしてゐた理想!

妾は今夜葉山樣の許へ奈何あつても嫁かなければならぬ。姉樣のお心は嘸ぞお淋しいであらう!

先日如彼な事云つてゐたつて、里ちやんは嘸ぞ嬉しいだらう、屹度其に違無い、妾達は捨小舟!

是れから後、妾が嫁つた後で、姉樣は尚更長い／＼眞暗な道を、果敢く／＼お通りなさるに違ひない!

里ちやんは葉山樣の許に嫁つてから奈何に花を咲かせるだらう、妾や生涯も不樂世を送るのか知らむ!

里子は姉の心情を酌んで、自分が姉を見捨てゝお嫁に適くのが唯だ々々濟まぬやうに思つて、お氣の毒やら、情無いやら、不吉とは思ひながら堰きくる涙を禁する事は出來ませんでした。美保子は妹の身の上の、今赫々として榮えゆかんとするに反して、いかに己れの運命の寂寥たる、固より妹の嫉憎いとを思ひませんけれど、何がな嫉ましさに堪へられず、蒼白い顏色は一入眞蒼に、唇を嚙んだまゝ、是れは涙さへ溢れる事が出來ませんでした。

＊　＊　＊

その夜、おぼろの月影を趁うて、數輛の腕車は飛ぶこと星のごとく、江戸川の水の流れ、長しへに春を載せ

せて去りました。

妹を送り出して、暫時は夢心地に玄關の扉に靠れかゝつて居ました切て美保子の心は！今の先刻、鼻をつまらせながら糸よりも細い〳〵忍音に、

「姉様……」

と唯だ一言、妹の顫へる唇より衝いて出た聲を偲び偲んでは、今は里ちやんの俥いづち馳すらむと、美保子の魂は其の跡を追ひました。

噫歎かざる同胞の赤心！幸なき我が身――榮えゆく妹――苟且にも嫉し羨ましと思つた感情は跡なく消えて了つて、宛ら遠き、戀しき人を戀ひ慕ふやうに、あるにもあられず、美保子は泣いたので御座います。

（下）落花の夢

春雨漸々と降りしきつて、江戸川の水流は水嵩を增して、潺々と瀬の音を立てながら岸邊の若草を浸して流れて逝きます。兩岸の櫻花は今十二分に開いて、花に露添ふ風情、點々花瓣の地に印したる有樣、思はず行人の袖を引いて止まらしむるので御座います。

美保子は今宵不圖往時の事を思ひ出して、淋しさ心情に沁みわたるばかりで御座いました。

庭の芝生には今春雨がそぼ降つてをるのでありませう庭の櫻の枝にも強かに暖かい露を宿してをるのでありませう！昔遊んだ彼方の芝生も、お池の周圍も、未だ蕾を有たぬが杜若の葉も、今宵皆な情け深い春雨の潤ひを享けてをるのでありませう！

あゝ文雄様は奈何なすつて被仕しやるか不知？

里ちやんは今頃奈何してゐるか不知？

嫁つた時の嶋田を止して丸髷に結ひかへてゐるだらうか……」

美保子はやをら起ちあがつて、二階の階子段をそろり。。。そろりと降りて、椽側傳ひにお母様のお部屋の前までまゐりまして、窃と靴脫の上の庭下駄を引掛けて、雨の音を耳傾けて伺ひますと、庭の木末を渡る風一トしきり、はら〳〵と雫のしたゝる音は致しますれど、好

い鹽梅に雨は時の間止んでをるやうで御座いました。
美保子は庭に下立つて、自分の胸の苦しみを散ずるが爲め些少そゝろ歩きでも仕て見やうかと云ふ姿勢。障子にはぱつと灯影が明く射して、古川の小母様と、お母様と秘々お話なすつてゐらつしやいました。

「……そりや文雄さんのお父様の仰有る事だつて些とも無理ぢやありませんけれど……」

「兎に角妾が其事を聞きました時は本當に愕ろいて仕舞つたんでございます。」

「妾ゃ愕ろきましたわ。なんぼなんだつて貴女、未だ此方と手を切らない中、如何あなた片一方の家が好いからつて餘りぢやありませんか！」

「左様で御座いますとも……」

「どうせ妾の方だつて貴女、良人が申してをります……美保は縦ひ小兒の時から、文雄様の許婚でも、既う彼あして生れも附かない片輪になつた者を、無理に夫婦にして頂きたいなど丶……那麼不憫い事は云へやせんァ貴女、何日でも左様申してをるんで御座いますのに、いくら何だつて餘りぢやァ御座いませんか、未だ文雄様がお歸んなさらない中から、急に火の附たやうに其方の華族様にお取極なさるなんて、妾ゃもう貴女に聞てさへ口惜しいんで涙が出る位……美保が聞たら嘸ぞ口惜しがつて、情無がつて泣くで御座いませう！」

「左様で御座いますとも、お孃様がお聞きなすつたら……」

「そりや乾度！聞いたら口惜しいッて泣くどころぢや無く、氣が狂つて死んちまいます!!」

兩人は語もなくこれなり默つて仕舞ひまして、後はお母様が力任せに煙管叩く音、煙草の烟は一團になつて雲のやうに障子に映りました。

美保子は、自分で死んだかと思つた程愕き、其處にじつと立ちすくんで仕舞ひました。

「眞箇に人間ッて……こんなにも薄情なもんでせうかしら……」

「眞箇に呆れつちまひますのねえ！」

颯々と梢の木葉を戰がす音、生暖かい薫風が又一ト

しきり、餘勢は美保子の裾をスッと舐めると、美保子は俄かに甦へつたやうにふら〳〵と歩み出しました。
何處へゆくと云ふ目的もなく。
薄絹を張つたやうな空の色。月のある處だけ雪洞を燈したやうに、美保子の慘たる青白い俤をうつすり照して居ります。
美保子は何と云ふ事なしに歩いて、裏の木戸口から往來へ來ました。川を一つ隔て丶彼岸は俥の轍、足駄のひゞき、匆々の賑かさで御座いますが、此岸は森閑として時に小鳥の夢穩かに結ばれざうで御座います。
此岸へ出て來て見ると、今、お母樣と小母樣とお話して被在つたお聲が遠くの方で——恰度川向で爲るやうに
美保子は口惜しさに堪へかねて——其の華族樣にお取極めなさゐなんて——我れ知ず坐ろに叫びました。
文雄樣はお懷しい……けれど文雄樣のお父樣て方は何と云ふ酷い方だらう……！若しかすると文雄樣も妾の眼の惡くなつたのを御存じて、それでお父樣と御相談なすつたのかも知れない。若し左樣とすれば文雄樣も餘りな‼
昔あつた樂しい事、今の己れの情ない事、妹の里ちやんはお嫁に適つて仕舞ひ、許婚の文雄樣は既う妾を見捨て丶仕舞つて、他家の華族樣のお姫樣と御縁組なさるとやら。人間……人間て者は男でも女でも片輪なんかになつちやア、誰れも管つて呉れや仕無い！里ちやんだつて彼の通り妾を世話して呉れてゐたけれど、今ぢや乾度、葉山樣の許と嫁つてから姉樣の御厄介が無くなつて何んなに好いか知れない……ツて云つてるかもわからない！況して文雄樣のお家とは元は他人、誰れが好きこのんで盲目の妾を一生世話をして下さるなど丶！嗚呼もう恁麼果敢ない身に成つて仕舞つた位なら寧そ……寧そ、あの眼を患つた時に死んで仕舞へば可かつた‼
川岸の櫻の幹に身をもたらして、其れからそれへと種〳〵の空想に驅られました。
時折風が通ふ毎に、花の香は含んで雫がぽたり〳〵と落ちて、直ぐ脚の下には水の流れがサラ〳〵と瀨を立

てゝをります。

中の橋を向へ按摩が流してゆく笛の聲腸に泌みて、あゝ彼れも綾目もわかぬ盲目者……と思へば、廣い世の中に不幸者の道は愈々狹く、彼んな不自由な者でも、自分で働かなければ、自分の口を糊してゆく事が出來ないのかと、美保子は更に己れ以外に彼の笛の主をもそゞろに哀れんで泣いたので御座います。

折から消魂しい俥の音、通りすがると諸共、

「アレ姉樣ぢや無くつて……?!」

と妹の聲。

「さッ、里ちやん……!!」

自分の聲に驚いて、はッと覺めれば春宵一刻の夢！何時の間にかお母樣は其處に居らつして、

「美、美保さん……」

とうるみ聲美保子は今宵も亦た世を果敢みながら、ツイ經机に凭れかゝつてうたゝ寢してゐたのを極り惡げに

「は、はい……何か御用で御座いますの？」

母君は少時躊躇つた末、漸との思ひで、

「お美保や、」と言葉を切つて、熟と顏色を伺つて、

「わ、妾やお前によつくり云つて聞かし度い事があるんだが……」

「は……はい。」

「妾、やソレを云ふのが辛いんで……ね。」

「はい……」

「實は先刻、古川の小母樣がおいでなすつて……ね」

お母樣の調子は痛く顫つて、顏は眞蒼となりました。今まで整然と謹しんで伺つて居りました美保子は、此時俄かに泣崩れて、

「お……お母樣！既う分りましてよ。仰有らなくつても既う分りましてよ。

嗚呼妾や奈何して怎麼に不仕合なんでせうねえ!!」

「お、お美保や、妾も因果で情ないよ……!!!」

と母子手を取つて歎きました。

戸外にはゝら〳〵と雫の音。此の雨で櫻花は大概散つてしまふで御座いませう。

〈完〉

開墾

勝間舟人

昔、富士山の麓に作兵衛と云ふ爺さんが住んで居た、此の爺さんは、子供も無ければ女房も無い、其で加に貧乏で、若い時分からいろ〳〵苦勞を爲た故で、未だ漸と五十の坂を越した許ですが、年齡よりは老けて、頭の毛は眞白に、額には大皺小皺が幾條も寄つて居ります、だから幾ら稼いだつて働いたつて樂しみも張合ひも無さ相に思へますが、此の爺さんは仲々然樣でない。

作兵衛の稼業は毎朝山から竹を取つて來て、せッせと笊や籠を拵らへ、而して其れを荷つて里の市に賣りに行くのであるが、一日も怠つた事はありませぬ。左うかと言つて金錢が欲しいといふ慾心も無ければ、村の人に譽めて貰はうといふ名譽心も無い、が、唯だ自分を賴にして居る者の爲にとて骨身を惜まず働く、若し此の作兵衛に一人も身内が無かつたら、其こそ年百年中眞黒な稗飯ばかり喰べて、そして稀に近所の人から盃を一杯馳走して貰ふ位で、滿足して暮して居たであらう、けれどまさか左うも出來ないのは、白金にも黄金にも優つて可愛いお清と云ふ一人の姪娘があるからです。

此の姪娘のお清と云ふは作兵衛の妹が里の酒屋へ嫁いて產んだ子供であるが、作兵衛に實子の無い所から、自分の養女に貰受け慈愛の手塩に掛けて育てゝ居りました、其の丹誠で追々成人致し、花ならば蕾といふ年頃に成りましたが、子柄も美しく性質も賢い故村の人は皆な此の娘を擧物にして、作兵衛の幸福を羨しがつて居ります。

玆に又た此の村に日傭取をして稼いで居る若者に長治と云ふのがありますが、正直で極く〳〵堅い勉強家だといふので、大層作兵衛爺の氣に入つて、姪娘の婿に貰ふことに相談を極めました、だが此の長治は矢張作兵衛爺と同じく、自分の五體に着けた物より外には、

浮世の上に何物も持つて居ないと申す程の素寒貧だから、婚禮の仕度の出來るまではお互に稼ぎ合つて、金の貯つた上で立派に結婚をしやうと言つて、唯だ後の約束を固め置く爲めに眞鍮の指環丈を假りに取替はして置きました。

『眞鍮の指環たアなさけねえだは他家の娘を見や、俺所の清より容貌も何も遙と惡いだが、皆、金の指環を箝めたり、絹布に包まつたりしてるだ、何うか清にも左ういふのを買つて與れたく思ふだが、俺がハア這麼に貧乏だんで仕方が無えよ、けれどなア、這麼に正直に精を出して稼ぐからにやア、其の内に買へる時節も來べいから、あにもはあ、慌てることはねえだよ。』

と獨語を言ひながら或る日の朝山へ茸取に出掛ると丁度彼方から長治が空馬を曳きながら、

高い山から谷底見ればヱ、瓜や茄子の花盛りナアエ
ドウ〳〵

と野原歌を面白さうに謳つて來ました。

『長治どん、滅相早えいのう。』

『ヤ、父さん、お早うがす。』

『お主はもう仕事に出掛けるのかい?。』

『さうよ、俺は今日から村長さん所へ積肥を爲に行くだよ、あの旦那は彼丈の身代を仕上げた人丈有つて能く行き屆いて居るから、働榮がするだよ。』

『さうだらう、彼の旦那と來ちやア豪勢なもんだ、お主もちつと肖かる樣に骨を折つて稼ぎなせい、今日は新暦の正月だちふから、俺は今屠蘇を祝つて來ただ、御主にも振舞はうと思つてるだから、歸りに寄んなせい。』

『難有う、ちや、今夜御年始に行くべいよ。』

此時、作兵衞爺は默つて何か考へて居る樣であつたが、艶々しい元氣の笑顏を若者に向けて、

『斯う長治どん、お主は俺今何を考へてたか當てヽ見な。』

長治は突然の奇問に怪訝な顏をして、

『何で御在ますべい、解りましねえよ、俺も此中は種〳〵ハア考へる事許ありやして、お清はんは今何をし

て居るだんべいなどゝ管らねえ事を思つて居ますだよ而して俺易者で無いだから人の心は此許も解りやしねえが父さんの考へてるのは、一體何んなこんで御在ますね?」

「俺のかい、俺の考へてるは恁うだよ、此の野良を遺塵に草だらけに茫々としたまゝで捨てとくは勿體ない話だから、老後の思出に俺一つ奮發して開墾して見べいと思ふた、而して金をうんと儲けて、お清に衣服や指環を買つて與れて、祝言仕度の簞笥や長持を拵えて遣つて、早くお主と三々九度の盃をさせて見たいなんかと、俺ハアそんな事を思つて居たですよ。」

と言ふ作兵衛爺の話を若者の長治はニヤ〳〵嬉しさうに聞いて居たが、開墾と聞いて急に眉を皺め、

「父さん其れア危ねえ、老人の冷水て云ふもんだ、開墾ちふ奴は隨分面倒臭いもんで、堅い土を掘り返へしたり根つこを引抜いたり、岩を打つ砕いたりせにやア成らんから、年寄の力にや迚ぁおへねえ話だ、父さん其許は止したが可かんべいよ。」

と老人の計畫を止めるのでありました。

「お主は俺の考を笑ふだが、あにも出來ねつてことは無かつぺいよ、其れア竹を伐るよりは骨が折れるには違ないが、俺も若い時から野良で鍛へた腕を持つてるだ、今時の若い衆には矢鱈ア負けねえ積りよ、何うしても俺は此の原を開墾してお清に祝言の支度を拵へてやる積りだ、何、心配しなくつたて宜いよ、大丈夫だ……ちや、長治どん左樣な。」

「父さん、左樣な。」

そこで二人は西と東に別れて、其の日の稼業を爲に行きました。

作兵衛爺は愈々開墾することに決し、その翌日一番鳥が鳴いた許で未だ夜も明け切らぬ内から、鶴嘴鍬を肩にして、此の野原の隅の日の出岩と云ふ所へ出掛けて行きました、茲は大きな岩だの丸い石だのが澤山轉がつて居て、而して朝の景色が大層好いと云ふので恁ういふ名前が付いてをります、作兵衛は今しも此處へ

來て鶴嘴鍬を一掘深く地面に衝き入ましたが、其の途端に何うしたものか急に地鳴がして、生温るい風が颯と吹いて來きたのであります。

すると一番大きい巖の間から一人の美しい乙女が顯はれて、其の巖の上に乘り、作兵衞の方を凝と眺めて居ります、是には流石に氣丈の作兵衞も恐く成つて、顏色も靑ざめて了ひました、正しく人間ではあるまい妖怪だらうと思つたので。

けれど是は世の常のおばけと違ひ、體の優さしい顏の美しい乙女姿で、白綸子の着物を着て、紫の裳を腰に纏ひ、水色の勾玉や管玉を領に懸け、まばゆい樣な緋の袴を穿いて頭髮は御下髮にして後に垂らし、右の手には檜扇を握り、左の手には靑葉の着いた齒の松の小枝を杖に突いて居ります、而して其の足許に咲いてゐる野菊の花や蘭の花は、宛で乙女の裾に繡を施したやうに見え、それから岩の周圍に生ひ繁つて居る小笹の葉や猶の葉は諸共に皆な前へ屈んで乙女に御辭儀してゐる樣に見えます、而して又乙女の頭からは御光が晃々と射して居る、この乙女は妖怪では無く、山の神であリました。

『作兵衞や、お前はまア何といふ大膽の人だらう、私の領地に斷り無しに這入つて來てさ、本統に惡い男だよ少しでもお前達に此の原を荒らされることは成りませんから、サアとつとゝ歸つてお呉れ。』

と鋭い聲で作兵衞爺を叱り付け、恐しく光つた眼に睨付けました、作兵衞は震慄へながら、

誠にハア濟みませぬ事を致しました、だが神樣、惡い心持は毫頭も御在ませんから、御慈悲に何卒許してお呉んなさい俺は貧乏な水呑百姓で大根の種一粒播く地面も無い樣な小前の者で御在ますからほんの少し許で宜いのですから、貴下の廣い御領地を惠んで戴かうと存じて參つたのです、俺は決して神樣の御地所を荒しは致しませんから、何卒少し許戴かして下さいまし。』

とお願ひした、すると山の神は美しく笑つて、

『お前は此原を貰つて一體何うする心算だえ。』

「へい、開墾して穀物を植えべいと思ひやす。」

「作兵衛や、お前が開墾とお言ひのは、あの地面を堀返へして、草や木を抜いたり、石塊を除けたりすることだらうか、そりや不可ませんね、お前が態々そんな事を爲ないでも此の原は此の通り奇麗に成つて在て可愛らしいぢやないか、憖つか下界の人の手を借りるよりも、自然に任せて置いた方が何程好いか知れないよ、………まア春に成つて此の原を眺めて御覧、其は實に立派だよ、大空の藍色は長閑に霞んで、青い若芽のちら〳〵と樹々の間から生えた畦梅のやさしさ、そして沼の中には水仙の白い花が咲いて床しい匂ひを放ち、雀は歌で面白さうに春の様子を語り合ひ、鶯は森で嬉しさうに花の景色を謳ひ合ひ、それから種々の禽獣も此原に遊びに來るではないか、けれど若し鋤鍬を入れると、斯う云ふ景色も斯ういふ賑ひも見られなくなるよ、其でもお前は開墾したいとお言ひのかい。」といふ山の神のお問。

「ハイ左様で………實に鳥ちう奴は可愛いもんで御在ます調子の高い聲を響かす鶉や、優しい聲で囀りながら空に飛び揚る雲雀なぞは、俺もハイ大好で御在ます、だがね、こんな鳥は皆な穀物の植はつてる田甫に許巢を喰ふもんで、荒れた野原にや一匹も居ないもんでがすよ。」と作兵衛は答へた。

「では、夏に成つて野良一面が晃々した大陽の光を浴びて、いろ〳〵の草の茂生から好い香氣が涼しい風に吹き送られて來る時なぞに、私は雁來紅の紫色とそれから百合や羊歯の花を見ると心持が快くなるが、お前が刈取つて了ふと斯う見られなくなるよ、其でもお前は開墾したいとお言ひのかい?。」と山の神の第二のお問に、作兵衛は、

「俺が開墾して田地や畑を拵えますと、そんな物は見られなく成つても、其の代り實の入た麥の穂が首を垂れてる所を見たり、それから秋に成ると黄はんだ稲の穂に小波を打つ景色を見ることが出來ますが、えれい氣持の善いもんでがすよ。」と答へまし

た。

「秋に成るとお前も知つての通り獵師が私の領地に這入て來て、獵犬を飛ばしたり、鉄砲を打つたりして、鳥や獸を苛めるだらう、私は其の獵師が惡くゝて、そして其禽獸を不便に思ふよ、だから兎にしろ鹿にしろ此の日の出岩に追詰められて逃げ込んで來ることがあれば、直ぐと私は獵師の目に觸れない樣に草叢の中へ隱まつて遣るのさ、だがお前が若し此の原を刈つて了ふと云ふことになると困るはでないか、其れでもお前は開墾したいとお言ひかい？。」と言ふ第三のお尋問に對して作兵衛は斯う答へました。

「へい、俺も獵を不便がる性分ですから、此間さ酷い目に逢はされてる南京兎を一匹助けて遣つたので御在やすよ、若し此の原が開けて田甫に成つたからとて、何もそんなに御心配なさる事は御坐りやしない、さう成れば稻村が隱逃所になりますから、幾ら獵師が來やうが獵犬が捜さうが、大丈夫のもんです。」

「けれど、お前が此の原を薄や茅や又た種々の雜草を一本殘らず苅り平げて了つたら、私は寒い寒い冬が來ても火を燃して煖る事も出來なくなるではないか、さうなれば私は冷い北風には身を切られ、寒い雪に埋められて死んで了はなければならないが、其でもお前は此處を開墾する氣かい？。」と言ふ第四のお問に、答へて作兵衛は、

「山の神樣、そりやア斯樣なすつたら善かるべい、寒く成つたら俺の家へ御入來なすつて、圍爐裏にでも巨燵にでも御存分御煖りなさるだ、俺も今年の暮までには新しい家を此の近所に建てでいと思ふで、其の時は毎日のやうに御出なすつて下さいまし、娘のお濟にも貴下樣のお相手を致すやう吩附て置きますで……斯樣に申上ける樣な譯ですから、何卒御慈悲を以て此の原の隅を少許り俺に貸してお與んなさいまし、而してお濟か小兒を産みましたら、其の子の守神に成つて戴きたう御在ます、後生御願ひです

から…………」と手を合せて拜んだのでありま
す。
　そこで山の神樣は漸う〳〵納得して機嫌を直し、
「あゝ、彼のお前の姪娘かい、私は能く知つて居ます
よ、大層色の白い、縹緻の美い子だね、そして氣立
の善い…………それから私は、お前が昨日の朝此の
原で話をしてゐた彼の若い長治とか云ふ男を婿に貰
ふと云ふ事も知つて居るよ、二人共よく揃つた善い
夫婦だね、而してお前も正直で能く稼ぎなさる、自
分の爲には塵一本も身に着けないで、娘の敎育に氣
を採んで、いろ〳〵と面倒を見て遣つてる樣だが、
本統に感心な心掛だよ、お前の未來は乾度芽出度か
らう、………私はお前の其の心掛に愛で〻願を許して
あげるから、さア遠慮なく鶴嘴鍬をお取り、とつと、
地面をお掘り、お前の要る丈此の領地を分けてやり
ますから精出して開墾して、早く美い果の成る樣に
してお呉れ、したが村の者が此の事を聞いて皆なお
前の眞似をするやうになると、私は終には居る所が
無くなつて了ふから、他言は無用、私はお前の幸福
を思つてお前に許り免すのだから、決して何人にも
此の事を洩しては不可いよ。」
とお諭になつて、にこ〳〵笑ひながら檜扇に顔を隱
すかと思ふ間に早くも躰は物陰に消えて、見えなく成
つて了ひました。
　作兵衛爺は山の神樣より御許の出た事を非常に喜ん
で、それからと云ふものは、毎朝早くより日の出岩へ
往つて土を堀返したり、巖石を割つてたり又は蔓延て
ゐる木の根を引き拔いたり、又は木屑や草片を一纏に
集めて、堆肥を製造したりなど致して、一生懸命に働
きましたから、其年の十月の末には一町歩程の荒地を
あらかた奇麗な耕地に爲て了ふ事が出來ました、是は
自分の腕に鶴嘴と鶴嘴鍬を持つて仕上たには相違ない
が、其の實、暗に他から力を添へて下さるものが有つ
たから、是程廣い荒野もまた〻く隙に開墾する事が出
來たと言ッて、作兵衛爺は山の神に感謝したのであり
ます。

　そこで先づ畑開には大麥を蒔いて見た所、種も好い塩梅に殺り、肥料も好い工合に利いて、直ぐ〳〵と生ひ立ち、翌年の四月作兵衛が娘のお清を連れて見廻に來た時は綠の稈が房々とした重い穗を戴いて、風にゆら〳〵動くやうに成つた、その有様は丁度耕作者の骨折に挨拶でもする樣な風でしたから、作兵衛の喜びは一通りではありませんでした。

　間も無く此の畠の麥も殘らず刈取つて見ますと、豫定よりも餘計の收穫があつて非常に利益を得ました、婿の長治が仕事の成蹟を驚いて、父さんの腕は豪えものだと譽めた時、作兵衛は態と笑つて

『何も豪いことがあるものか、けれど這麽に採れたかと思ふと俺は嬉しくて堪へられねえよ、是でまア漸う〳〵年頃の希望も協つたと云ふものたかち約束通り金の指環も縮緬の着物も買つて遣らうよ。』

と言ひましたが、お清は親を思ふ孝心より之を止めて、

『阿父さん、其りやお止なはい、お前は去年から甚く身體を使つてゐるのだから、少許疲勞を休めるやうに湯治にでも行つてお來でなさい、指環なんか買ふ餘が有つたら、其れで馬もで買つた方が、阿父さんの仕事が樂に成つて何程宜いか知れないのだから、本統に阿父さんさうしなさい。』と勸めたのであります。

　左う云ふ譯で婚禮の支度品は廢止となり、其の代り耕馬と殼臼を買つて、相變らず農事に勉強致しましたから、翌年の秋が再び來た時は、又々二丁歩程の原を畑にして了ひ、翌々年の夏には丁度三倍の收穫が有つた、けれどお清は未だ指環と衣服を新調することを承知しない。

『阿父さん、今度は牛をお買ひなさい、野良仕事には調法の物だといふから………。』

　かくて四年目の秋には、一町歩程の地面を殘らず開墾し終つて、其に其年は豐年でもあつたから、大層な收穫を得ました、けれどお清は例の頭を振つて、

『そんな物は後でも宜いのだから、其よりか家を新規

に普請なさい。』

と、婚禮の日の來るまでも到頭買はせなかつた。

その后間も無く待ちに待つた目出度い日は來た、其の時、

『私は長治さんと幾末長く色の褪めない松の心を深く取交はしましたから、金の指環や縮緬の衣服は無くとも構ひません、何と長治さん左樣では御在ましねえか。』

と花嫁のお淸が言つたら、

『本統に俺もさう思ふだ、這麼に澤山畠を持つてる家へ婿に來て、お淸さん見ていな人と夫婦に成るといふは、何ちふ嬉しいこんだから。』と花婿の長治が答へた、其れで作兵衞爺も非常に喜び、

『お前達二人は今日の心を忘れないで、頭に白髪のツン生へるまで、健全で仲善く稼いで與んなさい、何しろ結構な日だ、芽出度い芽出度い。』

その後この村に作兵衞爺の眞似をして此の原の開墾を試むる者が續々顯はれたが、此の爺さんの樣に思はしくは一人も成功しなかつた、一番雞が鳴き出す時、彼の日の出岩に行つた者は隨分多かつたが、白綸子の衣服を着て緋の袴を穿いた山の女神を拜んだものは一人も無かつた、

お淸と長治とは作兵衞の後を襲いで今も開墾の事業を續けてゐる。』

（終）

留守宅日記

秋の錦も今は名残なく失せて、里めぐる山々岩よりも痩せつ、今日も亦はだ寒き風の霙さへまじへぬ。

午食の副食にさて甘藷煮るとき、郵便の聲。なつかしき兄上の手の、いと太やかに只『無事』とばかり、後は小さく、『何れ近々大活動あるべく、いよ〱この身の年貢收めさなるやも知れず、されは御身あれば母上樣のことも心安く候。』さばかりいかに戦さする身さて少しは詳しくてもあれかしなど怨みがましき心地するも、朝な夕なに忘れ難ければこそ。

さはれこの不束の妹をかくまでも、頼み給ふかと思へば母上さら話してそゞろ涙催されぬ。

わびしく留主まもる山里の細き燈は、まして物さてなけれど、御燈明あげて心ばかりの陰膳供へつ。

浦物語

礒の人

其一

此の邊で金屋禮藏といつては、恐らく仁者として知らぬものはありません、舊は網持の旦那様で、此の界限で音に響いた家柄でしたが、十年以來、不運がうちつづいて、今では漸く、小廂住居で、草鞋だの塵紙だの、土器の皿や、杓子や、燒杉の下駄など商つて纔かに其日を送つて行く程の身の上となつたのであります。

妻は造酒屋のお紺といつて若いさかりは評判の美人でした。一と頃は土地の壯い者共の氣をもませて、彼方からも此方からも嫁に貰ひたいといふ口は降るほどでしたが、是も定まれる縁で、十八の歳禮藏の處へ嫁入して茲年八年目、夫婦の中に二人の子供さへ出來て頭が七歳の男の子で、妹が三つ、夫婦の間も睦まじく家内に風波なく穩かに暮して行かるゝと言ふものゝまた世の中には貧より辛い事はない、禮藏は天稟慈け深い質ですから貧乏して譬へ自分に食ふ物はなくとも他人の不憫は見遁し難いといふ方であるから、少し許り殘つた財産も、彼是して數年の間に殘らず費ひ果して、今では身一つの世帶となつても、人から慈悲を受くると云ふ事は厭である、併し此儘で居ながら行末を考へると心細いが、それには又隨分我慢もある、自分は此浦で指折りの家柄である、此儘朽ち果ては家の名折れ、先祖へ對しても相濟まぬ、それから子供の行末が案じられる、何様か一生懸命に奮發をして切ては我が代に元の身代の半分位にも仕上げて子供に渡したいものであると世間の様を見るにつけ、絶へず此事をおもつて居るのでした、妻の心懸は殊勝なもので、斯る貧苦の中をも露厭ふ心はなくて、朝な夕な夫を慰め二人の子供を良い方にと導き育てゝ居る、其れを見るにつけても、禮藏の心苦しさは猶一倍で、どうにかして身上を盛りかへして妻にも子にも安樂をさせたいものであると禮藏の其節の身の上は先づ斯様いふ風でありました。

或日の事禮藏が他方から歸つて來て妻に話すのには「何と俺は今日計らずゑらい事を聞いて來た、どうかこの事を一遍考へて見ては呉れまいか、それは外の事ではない、俺はこれから松前へ行つて見やうと思ふのだ、何さう吃くりしなさんな、唯金儲けである哩、彼所は鯡や、鮭の漁場であるがイヤ俺が何も漁師になるといふのおやない、繁昌する土地であるから行きさいすれば金儲の道は色々あるといふ事、今日彼方から歸ッて來た人に遭ッて直接に聞いたのぢや、何とまア、茲二三年が間、默つて見て居ては呉れまいか、必らず其方に悲慘なおもひをさせはしないから。」

と斯う云ふ事を突扱に言ひ出しました、お紺は其事を半分聞かぬうちから早眼に涙を浮めました、が中々諾さうもございません、頻りに四圍を環視すから、何を心配するのであるかと言ふと、二人の子供が午過から遊びに出てまだ歸つて來ないと言ひさして、ほろ〳〵と泣き出しました。「ア丶氣の弱い事を言ふ奴ではある、マア考へても御覧よ世の中は金儲と云ふ聲聞いては火の中へも飛び込んで見る位のものではないか、遠いと言ッた所が多寡の知れた松前ではないか、纔た三年が間の辛抱だ、歸つて來れば屹度よくなる、身上を立て直す、さうして其方にも安樂な世を送らせる、亦子供の出世も望まれる、生涯の苦患を遁がるゝ事だ、何の人間と生れて一生に一度山を張ッて見ねば運は開けないぢや。」

けれど妻は容易く諾さうもございません、禮藏がさも嬉しさうに、現在金儲をしたかのやうに調子に乘つて話す時には有繋お紺も莞爾して「まアさうなれば妾もどんなに嬉しいか知れません」など丶折節笑顏を見せて勇んで呉れる事もありましたが、話しが少し眞面目になると急にうち鬱いで、何かなしに旅の空に難儀苦勞のある事、災難怪我の多い事、そんなこんなを言ひ出していとゞ勇氣を挫かすばかりでした、併し一と晩丹念に說得してやう〳〵旅立することになりましたが、扨ていよ〳〵其の日になッては流石に名殘の惜まれて、夫婦はありやう涙に昏ました。今時ならば定期

航海の漁船もあれば、郵便、電信の便も日を欠さずあつて、旅の空に居ても互の消息は十日經たぬ間に知れる世の中ですが、まだ其節かゝるもの丶開けぬ時とて、百里以上の旅には水盃、まして松前下りとあれば、この世で生別れする覺悟で送り出すのも有理な譯、留守中一切の事は日頃昵懇にする隣家の親爺に托したが、これは宿屋の亭主で、なか〳〵の義俠肌な人、一旦賴まれてからには分別を据へて十分世話をする底の男ですから、禮藏も安心して出ればお紺も大きに力を得て、これからは何につけ叔父樣の世話に預ること丶言へば宿屋の亭主は今旅立する禮藏の行李を整へやりながら、「まづ三年とは言ふもの丶行先見込のないと御分別がつきましたらば早く切りあげてお歸りなさい、一度行きて見たらば、それで貴方もたんのうなさるであらう、」まづ海上御無事でと袂れの挨拶を切り出すと、お紺はたまらなくなつて泣きたくも、有繁に他見の耻かしく、じつと耐へて顏を乖ける、最早眼は涙に昏れて良人の顏は見えず仕舞ひました。

お紺は良人を送り出して船に乘せて、其船の帆影の見えなくなるまで灘邊に立つて見送ッて居ましたが、我が家へ歸ッても何だか氣が落着ないで三日ばかりといふものは、何事も手に付きませんかつた、斯ては果ずと心着いて、我れと氣を勵まして稼業に精を出す、十日二十日と日の立つうちには段々と忘られるやうになッて、毎日一度は必らず訪ねて來る隣りの親爺を力と賴んで、世間話しに徒然を慰め、行末を樂みにして日を暮すうち、いつしか其の年も暮れて仕舞ひました。然るに禮藏が出立したのは四月の下旬で、遲くも其年の暮までには何かの音信があるべきものと、心待ちして居るのに、まだ着いたとも着かぬとも、一切報知がないので、お紺は啻ならず氣を揉み出したのである、一年に二度の航海は必らずある、春此の浦から綿花を搭載で行くと、夏必ず鯡を積んで歸る、秋米穀を積んで行くと、冬は必らず又乾鮭を搭載で歸るのが毎年の例であるから、遲くも其年の暮には安否がなくてはならぬのに、何の報知もないのでお紺の心痛は一と通り

でない、よもや海の上での間違はあるまいとおもふもの、これが地方の船でないから、北から歸ッて來た船頭や脊ざくまいの人々に就いて質問しても、一向に樣子は知れません、併し宿屋の亭主は大腹中で、根がしつかりした親爺ですから、これしきな事に些とも心配はしません、何の一年や二年音信がないからと言ッて、決して身の上に不幸災難のある譯ではない、まア〱氣を靜かにして悠くりと待て居なさい、其の中にはやがてよい便りがあらう、追つけ歸ッて見えませうと何時でも斯ういふ風に言ひ慰めて居ましたが其の年も暮て翌年の春も過ぎ夏となり、今日は見えるか、翌日は來るかと待に待ッた北歸りの船の二三艘、此の浦へ這入ッては來たものゝ、禮藏からの報知は更にないから、お紺の心痛は限りない失望となッて、此の度は有繫に落ついて居た宿屋の亭主も、これは變な事だと我知らず首を傾けるやうな仕儀となッて來ました。

それ祈禱、ヤレ神頼と云ふのも最早遲い事、お紺は何かなし占筮に憑て分別を極めやうと思ッて、靈驗なと云ふ評判に聞く限りの神圖に判斷を依賴したが、十に七ッまではよい方の圖が出たので、やゝ安心はしましたものゝ安心なりがたいのは前後のつゞき合せ、さらば子供を牽き連れて共々松前へ渡ッて見やうか、異逆にそのやうなこともなり難い、嗟このやうなことのありと知りつゝ何故の其の折行かせたのであらう、エヽ神佛に見放されたか妾が身はと、うつ俯しに伏しては泣き、歯を喰ひしめて無念がり、朝夕纏ひつく二人の子供にもてあまし、我が身に持てあまし、果ては心も掻き亂れて前後不覺に泣くばかりでありました。

其二

此の浦に金屋と同じ位の家柄で新屋の半二郎と云ふのがありました、年齡は玆年三十二三、男振りもよく、氣前も凛々しく溫順で、理の解ッた人物ですが、其の身總領に生れながら家督を弟に讓ッて、自分は若隱居の身となりました、是れには中々仔細のあることで、事は矢張り金屋の妻、其節造酒屋のお紺と言ッて若い

者の評判する頃、半二郎は一方ならずこの女を戀慕つて居ましたのが、親類のつゝきあいからとう／＼金屋へ嫁いる事となッたので、所謂其の失戀者の境遇に陷いつたのでした、二十五の年始めて身に染みた世の中の憐れさ辛さが、魂に凍りついて、それからといふものはこの世をとんと味氣ないものにおもひ做して、如何な方便も屆かぬ事となッて仕舞ひました、かういへば何うやら物語めきますが、昔を言へば十六七の頃でもあッたらうが、其頃丁度其身が寺小屋をあがる時でした、七月七日は棚機まつりで、一夜をあかして朝に流す其笹に、短冊をつけて擔ぎ出る折、よう／＼風が吹きますといひつゝ駈けて來る娘の年齡は漸く十二三でせう、紅い帶をして花簪をさして蕾の口に紅を啣んで、一枚項戴といッたのは紺ちやんです、赤いのを進げやうか、その中へ何を書きますと言ひつゝうつとり見恍れてゐました後に人が居たので慌てゝ逃げ出して仕舞ッた事もあるそれからは一喜一憂、五年七年は夢と消えましたが消えないのはこの心です、日増に愛慕の情は募ッて身代をかけても、生命をかけても一生契るべき女はそれと心に定めて居ましたのに、定まる緣は他人にあッて、いよ／＼それと聞いた日から、世に在る事の慵くなッて、さらばと言ッて片山蔭に法師の生涯も成り兼ねたが、其身は浮世を斷たこゝろで一生妻は娶るまいといみじく覺悟を極めたのであります。

併し斯うはいふもの、猶且凡夫の果敢なさは、思ひ切ると覺悟はしてゝも燈を消したやうに物事埒の明くものではない、同じ土地に住つて居る限りは折節顏も見合へば、姿を見る、聲も聞く、何や角やの噂も聽かねばならぬ。それが半二郎の身に取つてはなか／＼辛いのですから、どうかいつそ一とおもひに忘れて仕舞ひたい、その妙藥はこの地を離れるに若くはないと考へついて扨て、四五年が間は他國に漂泊つて居たのである。

併し乍ら羇旅の境界といふものは誰しも同じおもはぬ辛さが身に染みるもので、我が故鄕ほど香ばしくはありません、何かにつけて我が生地がなつかしくなつて年老て死ぬる所はやはり墳墓の地と、行末の事おもふ

につれては妻も所詮なくてはならぬもの、子供も持たねばならぬものと年を積むに隨つて分別も定まれば、考へも着實になる、三十過ぎての半二郎は茲に漸く昨非を悟つてさてこそ歸省したのであッた。それが恰ど金屋の殘藏が家を出でゝ音信不通となつた其の昨今の事であッたのも奇遇である。

半二郎はお紺の身の上を聞き傳へて一時は茫然として宛然夢を見る心地であつたが、先方の身の不遇をおもふと同時に詐りならぬ同情の念が胸一杯に漲つて、これはどうで棄ては置けまい、直接に遭ッて心を添へてやらねばなるまい、救はれるだけは救ふてやらねばなるまい、と斯う決心をしては少しも心に疚しい事はない、亦慮かる事もない、むかしならば戀人と云ふ丈に多少心に怯れもあらうが、昨非を悟つた今の我か身は仁者の働きをするのであると云ふ一念から、遂に或る夜お紺を其佗しい住居に訪づれたのである、人眼を避けて態々夜中に訪づれたといふのはまた一點心の底に殘る所があつての事か、併しこれは人間の情といふので悟りを開いた今の身の上でもそれだけは詮方がない身を捨た西行法師でさへも「雪の降る日は寒くこそあれ」と言はれたのであるもの、思つて見ればお紺の心にも萬更覺えのないことでないから。

行きて見ると、見る影もない小な家で、氣の毒な程侘〳〵しくてなか〳〵這入り切れないけれども這入らぬ譯にはゆかぬ、そしてお紺に遭ふのが、第一氣の毒なやうな又少しは嬉しいやうなそして亦内心何となく羞かしいやうな、異なこゝろもちがして躊躇したのも二度三度でしたがおもひきつて這入つて見ると、これはしたり、室は六疊じきばかりの古疊で、荒けて、煤けて、剩さへこれから寒に向ッて行くといふのに障子は破るゝに任せて取繕はず、薄綿の布團一枚布いた其の上に二人の子供は早頭を並べて寢ッて居る其の傍らに寂然と物おもひに沈んで居るのが其のお紺だ、一と目見た半二郎の目には其の姿貌こそありしむかしの面影ながら、積年の貧苦と今日此頃の悲しみに身を削られて、窶々しい様なのに懐かしいやら、氣の毒やらで、

物をも言はず、ほろりとなつたので我れ知らず顔に手を抵て仕舞ひました。

道がにお紺は覺悟を極めてゐたのか、氣は爭々確かでありました、「マアよくこそお尋ねくださりました、妾の身の上は粗御聞及びでございませう、不運と云ふも定まる因縁でせう、女の身の墓なさには何と分別の仕様もござりませねど、まだしも二人の子供のあるうへは、それを力に致してなりと、過せるだけはすごしませう」と凜々しい言葉に流石女の決心は顯はれてゐました。この時を始めとして牛二郎はお紺の家へ屢々贈物をしてゐました、自分の家は綿の問屋ですから繰綿だの、造り綿だの、又時としては網から上ッた魚類、又野菜物、大抵そんな日用品でしたが、節季になると餅だのスルメだの其他様々なものを惜まず贈ッて慰めして居ましたお紺は因緣なく貰ふのがきまりの悪るいばかりでなく、後で困るやうな事になりはしまいかと始めのうちは唯これが迷惑で堪りませんでしたが、それ等の事を承知して居る牛二郎は、先方の氣を兼ねて滅多には顔出しをしません、その實逢いたさに心は非常にはヤッてゐました、けれど。お紺は難有いやら面目ないやらで偶と出會ふことがあつても唯口籠ッて碌々禮々云ふ事も出來ませんかッた、けれど、其處に子供といふものがあつて無邪氣で面白く、二人の子供は毎日學校へ行くので、朝晩必らず牛二郎の家の前を通るのに、見ると是非お辭儀をする、途中で會ッても遠くの方から其の姿を見かけては驅けて來て頭を並べて辭儀をする牛二郎も亦非常に子供達が好で、いつでもやさしく言葉をかけて度々物を呉れてやるから、子供達は此上もないよい人と思ッて居ました、するうちには、いつしか牛二郎には心の底に捨難き思ひが殘ッて逢えばうれしく、會はねば氣が濟まず、兎角して或日の事、折を見合せてそッと心のたけを打明して見ましたが、お紺は何だか心地のわるい氣持がしてなりませんでした。それ故碌々挨拶もしません、併し今は頼み少ない女の事であり、且は二人の子供の行末も案じられる折柄といひ、所詮剛情は張りきれまひと底を見貫

ての半二郎は、一度や二度の辭退はあたりまへとして其後とても母子の歡心を得ることをつとめて氣を長く時節の來るのを待つてゐました。

良人の消息は更に知れません、禮藏が旅立をした日から數へて恰ど滿三年となッた今日まで、以來一度の音信もないのは、尋常の事でないから、最早諦めて仕舞はねばならぬといふ事は、如何に未練なお紺の心にも分別は定まッて居ます、親切な宿屋の亭主も色々心を配ッて諸々方々問合せて呉れましたが、とんと手模がありませんから、表面ではよい加減な氣休めを言ッて居るもの〻内心では最早分別をして仕舞へと希ッて居るのです、お紺は兎もあれ、二人の子供が慘めであるからと云ふので宿屋の亭主を始め、近隣の誰彼の承諾を得てやがて小兒を引取て養育することゝなつたが、これが少からずお紺の心を動かす動機となッて、以來段々半二郎のなさけに繼くやうになつたのであります。宿屋の亭主も大贊成、近所の人も大贊成、そこでむかしの友達が媒人してお紺は遂に半二郎へ再醮する事となりました。けれどお紺は此の時半二郎に向つて斯ういひました、「併し一寸まッて下さい、いかに行方知れずなつたとは申すもの〻、一旦良人として五年の間同棲にゐて二人の子まで儲けた中を、唯行蹤が知れぬといふばかりで、まだ何の徵候も見ない中に二度の良人を持ちますのは、何分にも心に濟みませぬ、それといふのも元因は、と言へば妾身を始め、小供等の末々をおもふて、一家共々安樂させたいばかりに思ひ立つた旅であれば、猶更に情を立てねばなりませぬが、斯う申したらば定めしひどい我儘物と思召すかは知れませんけれど、子まで成した夫婦の中の未練は人樣に打明られぬところもございますから、どうか妾に免じて、爰今一年待つて下さい、今まで待つて音沙汰のなかつたものがこの末幾年待つたからとて、何の甲斐もありますまいが、そうすれば妾の胸臆もすつぱりと晴れませう、憖じ危ぶむ心のあつては、これから良人として生涯侍づかねばならぬ貴方へ對しても濟まぬ譯です」

如何さまそれも其の理の事であると半二郎も異儀なく

承諾して、一年待ちましたが、翌る年四月の下旬、禮藏が旅立をした其の日を命日として更めて亡夫の法會を營み畢つてお紺はとう〳〵半二郎へ再醮たのであります。

其二

金屋の禮藏は一家の身上を立て直して妻にも安らかに世を送らせやう小供の行末も榮へさせやうとの一心の奮發から松前行を志ざして旅の空にかゝりました、船は案外早く着いて、翌る月の下旬には難なく目指漁場へ着けました、海漁は丁度夏の末からかけて秋の中頃まで海濱はまるで戰爭場のやうで、昆布を取るやら、鯡を曳くやら、鮭を漁るやら、到るところ漁村の景氣金は其の時摑み取をもされる程な状況であつたが、何が扨て諸國のあぶれものゝ寄集まりで、酒を飲む、博奕を賭つ、イヤとても氣の弱い禮藏には一と川と辛棒の出來るところではありませんかつた。併し折角おもひ立つて出て來たものゆゑ何様にかして、よい儲け道を見つけ二年と三年其處で辛抱して一と廉の資本を拵へたいものだと、いろ〳〵と渡つて見ましたが、何分にも來たばかりで一向様子の知れないところから、半年ばかりは遂に徒爾に暮した其のうち冬となつて皆々歸るものは歸る、冬籠して越年するものは越年する、自分も仕方がないから一と冬は其の地に籠ッて翌る年の景氣を待ちましたが、年も越へて三月の下旬、丁度海獵船が一艘這入ッて來て徒然で居た禮藏の爲めによい金儲けの手蔓が看つかりました。

併し海獵船へ乘込むといふのも隨分危なくない仕事でもないが、折角憤發して此處まで出て來た以上は、何爲五十歩百歩で乘かゝつて運がなければそれまでの事と決心して其海獵船に乘組んだのである。

船は元より外國の物で、亞米利加だか、露西亞だか、五體は知れねど乘込の中に印度人も居れば、支那人も居る、身の丈の四尺にも足りない、赧ら顔の侏儒も居ました、同勢凡そ二十人許り何れもこれも皆元氣強い人々であッたが、日本人と見たのは自分の外に纔た一

人年頃三十あまりのがゐましたが、其の者は片言交りの九州言葉を使ッて生れ故郷さいも知らぬ程のものでしたが、食ふのも衣たのも悉皆異人風で言語も擧そ外國の調であつた。

金屋の禮藏はこういふ者の仲間へ入り込んで段々と氷海の方へ乗り出したが、船は決して一と所に居ません或る時は樺太の沖合から、東塞加の海岸を漁ッて白合の海へ出る事もあれば、亦遠く北の亞米利加の涯を經めぐッてアラスカの近海までも遠乘する事がありましたが、其年の夏測らぬ大風に吹きまくられて十日ばかり際限のない大洋の中に漂よッてゐるうち、到々名も知れぬ無人島へ漂泊して、一船中二十人の者は玆に至く漂流人となッたのである。扨て無人島へ上陸してからには一向方角も分らねば歸るべき手術もつかぬ、凡そ四年が間と云ふものは千に一つも寄ッて來る船もあらふかと毎日〳〵それを賴みにして消光て仕舞ッたのであるが、其中には氣候や飲食に堪なくなッて病氣になるものもあれば、其儘死ぬるものもありました、禮藏だけは辛くも生命を繼いで居ましたが、神樣の惠みか、圖らずも亞米利加船の一艘がこの島を目がけて寄ッて來ました、そこで禮藏は其の船に救はれて活き殘ッたものと一緒に亞米利加の本國に送られ、一年あまり米國に彷徨ッてゐるうち長崎へ向けて行く便船のあるのを聞きつけて、それを幸に七年振りの今日始めて我故鄉へ歸ッて來たのでございます。

永の七年、其の間、禮藏は唯の一日たりとも妻子の事を思はぬ日とてはありませんでした、九死の中から危ない生命を拾ひ出して、目出度歸れたからには、最早富貴榮達も望むところでない、唯々一と眼無事なる妻子の顔を瞻て、共々になつかしい言葉を交す事の出來ればそれで滿足と、うれしく心に期して歸ッて來たのである。

十年一とむかしと申しますが、それは其土地に住みついけて居て十年以前のことを回顧て舊故の觀をなすのを言ッたもので、況てや小十年其土地に居なかッたもの、眼から見たらば何樣であらふまるで浦島の境界で

せう、歸つて見るに大概な家はみな代が迭ッてゐて。其節十五六な子供であつたものが、今では家の新主人となッてゐる、十二三と思ッてゐた小娘に最早嬰兒の二人位も出來てゐるのがある、二十歲以下の若者で顔に面識のあるものは殆どない位である、其中にも四十以上の老人はあまり異はなかッたが何しろ廣い世界を見て來た禮藏の眼には我が生れ故郷が變に小さく見えて、マア斯なところであッたかと怪しまるゝばかりでとんと隔世の感を致しました、僅かに舊形を存じて居るのは町の光景でしたが、それすら、古い家は粗取り壞されて新規に建た家がどの位あッたか知れぬ、山は青く、森は綠に懐かしい浦の景色に變りはなかッたけれど、心付て見ればどうやら砂洲の堆積が以前よりも狹くなッたやうにおもはれる、川尻が妙な方角についてゐるこれも亦滄桑の變の一部として見るべきものでした、以前畑であッた所に今家が建ッて、川に架つてゐた橋が勝手を違へて居る、寺院の大門が取拂はれて其跡へ煮賣茶屋が二軒出來て居る、神社の石華表が木になッて居る、まづ一寸見た輪廓でさいもその位相違してゐるのであるから仔細に見聞したらば、どんなに愕く事であらう、以前富限であッた家が倒れて仕舞ッて新らしく出來た金持が店を繁昌させて居る、自分の知人に歿なッたものも隨分あるが新らしく生れ來たもの、どの位あるか知れない、何も彼も勝手が違ッて仕舞てゐる。

禮藏は唯もう夢を見てゐるやうな心地で、變り果た町の中をあるくにも懐かしさがあまッて何となく羞かしいやうである、唯もう胸の中があやしく躁がれて、我が家の前近くなるに隨ッて胸はます〳〵躍る、噫、妻は息災で居るか、小供達は無事か、家に變ッた事のなければよいがと樣々なものおもひで氣が悶となる。

禮藏の歸ッて來た姿を見ると等しく健かであッた宿屋の亭主は怪しくも座敷から滑り落ちんばかりに駈け出して、じつと禮藏の腕に取り縋ッて、ハアッと男泣に泣出しました、是れは懐かしいのと意外なのとで交々我が胸に分別し兼ねた事のあるからである。

「林兵衞さん(宿屋の亭主の名)久しい事でございましたな、お互に無事で亦會はれましたよ」斯う言ッて禮藏も涙を溢した「まあ何から先に話してよいか、お前さまにはいかいお世話を掛けました、悴や女房の身の上は。」

斯う言ひさしてじつと我家を振り向いて見る、どうやら容子が變ッて居るやうだ、宿屋の亭主は何かなし禮藏の手を引捉へて自分の家へ誘ひ込んで仕舞ひました。

此の家は元と商人宿で所在の綿商人や、肥料商人が、五人や七人は始終泊つてゐない事はなかッたが、今では餘程衰微したと見へて、家も一頃よりは大分狹められたやうに思はれて、禮藏の目には一しほ氣の毒に感せられた、扨て死だとおもッて萬事を處分して仕舞ッた其人に突然歸ッて來られたのであるから林兵衞親爺の錯愕は一と通の事ぢやございません、一體これを何樣仕末したものであらうと當惑が先に立ッてをち〳〵物が言へません。まづ兎も角も先方の次第を尋ねばならぬ、長の七年が其の間、どうして居たかといふことと去りながら其れをきいて見ると禮藏の物語はよく順序がとゝのふてゐて松前から海獵船に乘込んだ事、無人島へ漂流した事、亞米利加船に救はれて異國へ彷ッてゐた事、聞いて見れば一々有理である、妻や小供を戀ひ慕ふ其の心根は一倍不憫でした。

されば此方に於てもありし次第を分狀に語ッて聞かせてやらうか、年を取ッては心の弱さが先に立ッて、爭く其人の眼前では言ひ切れません、寧お紺半二郎の兩人へ知せてやつて、分別を定めさせやうか否々爾なッては事がいよ〳〵面倒になる、茲はどこまでも自分が引受てうまく所置をつけねばなるまいと宿屋の亭主は熟々考へました、成程禮藏の音信不通してゐたのも道理はあるが、此方に於ても曰くは十分ある、どちらかと申せばまづ禮藏の方が不運であるのだから今日の場合は詮方がない、身の不運を諦めさせて仕舞ふよりは。

林兵衞親爺は斯う決心して有し次第を殘らず語り聞か

せたのである、夢心地に聽いてゐた禮藏は、まだ信疑のほども測り難なくて、二度、聞直したが、決心の色を面に表はした林兵衞親爺の曰く『此の場に臨んで何の譃僞を申さう嘘ならば往いて御覽なさい、三年前に家を疊んで、彼方へ引き取られて今では夫婦の中に子供さいも出來てゐます。』其れ聞くと等しく禮藏は顏色を變へてほつと長息をしたが、其の時の顏貌と言ッては實に見られるものでなかッた。

落膽して禮藏は氣を取り喪はんばかり、林兵衞親爺は氣の毒なやら、申譯ないやらで、顏を瞻るのもつらひ物を言ひかくるのも不憫で何と慰めやうもない、それからはこの鰥夫を何樣したものであらう、併しお紺さまの志しは十分屆てをる、これだけはお前樣も徹底でおかねばならぬ、再緣したからと言つて決してそれを恨んではなりませぬぞと斯樣に言ひ聞かせたが、禮藏は碌々食も喰はず、三日ばかりは力なく打臥ッて考へ込んで居たが、恐ろしく神妙な志を開いて、辨まへた事を言ひ出しました。

『噫、御亭主、私はお前さまに一方ならぬ御苦勞をかけたり、心配をさせたり、氣を揉ませたり、扨て留守中は妻や小供の身の上に就て今又此の度の一條に就て御厚情の程は死でも忘れませぬぞ、女房悴の身の上を聞いて私は最早安心して仕舞ました、此の上はもう世に思ひ殘すことはないからお前さまもどうぞ安心して下さい、成程私も一時は無念と思ひました、けれど憖い茲で我が身を立てやうとすれば、可愛女房や子供達の身が立たなくなります、成程牛二郎とはまだ染々付合た事はないが、豫々噂に聞けば譯の解ッた人さうな、悴の親となッて貰ふて不足とは思ひませぬ、まア御覽じろ今こゝで私が一身の我を立てやうとすれば、あのうるはしく治まつて居る家に暴風を起させて、差寄り女房の身は破滅となり、又牛二郎には昨日今日まで佛として尊め奉ッてゐる私しの爲めに內心乃物を研がせねばならぬ、實の親と聞かば必らず着くべき悴のためにも義理ある親と讎敵同志にせねばならぬ、如何な事でも私しは其のやうな事したくはない、愛はどうあッ

ても我身一身を亡ものにして仕舞はねばならぬ、さうすれば三方四方まるく治まッて末々までも穏かに、女房も安樂な世を送り、倅の出世も望まれやう、さア御亭主私の決心は斯の通り、必らず疑ッては下さるな。」

有繫仁者と言はれた金屋の禮藏がこの一言に宿屋の亭主も心底から感じ入つて、じつと其の顏を看詰ながらあまり神妙で涙が溢れた、何程殊勝な志とは言ひながらも、凡そ人の情としてはそれほど奇麗に諦めのつくものでない、何時まで立つても可愛くおもふは夫婦の情である一旦他家に嫁づいて睦まじく暮すと聞かば無念にも心外にも思ふのが凡夫の常であるのに、去りとは神妙な志、餘りの事で流石の林兵衛親爺も叟は返辭が出來なかッた。

兎も角もまづ一と目見て置きたいと言ひ出した、妻や子供の顏を、成程それは可然人情であると、宿屋の亭主が導いて其の晩、日の暮るゝを待かけて密つと牛次郞の今の住居を裏口の方から這入らせて、戸の隙から內のよく見える處に忍ばせた。成程新屋の身代を二つ分にして新規に世帶を搆へた程あッて住居は爭々立派な、棟の高い二階屋で裏に白壁の藏が二戸前並んで建ッてゐる、新らしく普請したらしい建前の木口から馥々とよいにほいの木香が鼻を撲ッばかりであッた、覗いて見ると丁度今晩餐の時で、家内五人が同じ坐敷にずらりと團欒して睦まじさうに食事をしてゐたが、長男の總領息子は義父と並んで上坐にすはつてゐたが圖を立つ時七歳の子供は今十四五歳の少年となッて稚な顏も餘程大人びて末頼もし氣に見え、妹娘のおとなも最早十ばかりに成ッて母親の傍でおとなしく箸把ッてゐました扨て妻のお紺は、年は取ッてもまだ色艶は失やらで、盛りの面影みづ〳〵と以前よりは顏の色もずつとよく且肉づいて一と際艶麗に見受られた、そして其膝の上に二才ばかりの乳吞兒を擁きかゝへてゐましたが、小兒の顏へ半分光燭がさして、頰玉のぷつと膨れた所から、口に啣へやうとしてゐた手首が張り切るほどに肥ッてゐた、その愛くるしい顏立を母親がのぞき込んでは笑ひ、のぞき込んでは笑ひ、何やら男と睦まじげに話すのが見える、嗟、あの子がそだな、あの子が新らしい人との中に出來た子だなと禮藏は餘念なく眺め入ッてゐたが、我を忘れてアッと聲を立てや

うとしてあはて丶心づいて胸をなでおろした、其被てゐる着物といひ、食事の際の器物といひ、一見して物に不足を感せぬ程の世帶と知られて家内一同が滿足した面かげの名殘なく見え透きて誠に平和の暮し方であッた。

此時禮藏の感じは何樣であッたらう、あの姸やかな情け深さうな女は自分の妻である、彼の活潑で末賴母しさうな少年は現在自分の實子である、其の自分の妻や自分の實子が、斯樣して今では他人の妻子となッて他人に育まれ、他人である其人が自分の代りに一家の主人となッて、妻や子供等の愛嬌を一人で占領してゐるのを見ては、もう何もかも思へなくなッた、噫實に無念である殘念である、口惜しくて辛くッて堪らない、元より宿屋の亭主から何も角も聞及んで承知はしてゐるもの丶又現在この光景を瞻ては實に堪らない、胸膈は唯わく〳〵と躍るばかり、身はぶる〳〵慄へ出して、もう立ッては居られない、一方の手を掛戸の樣にもたせて身を支へ、一方の眼を戸の透間にひッたりと貼つけて一生懸命、家内團欒の內景に身も魂も打ち込んで見てゐたが、遂に氣がわく〳〵としておもはず、アッとばかりに聲を立てやうとした。

ア丶危險、と何の氣も付かず導ひて來た宿屋の亭主はそれ程とおもはなかッた禮藏が、窺き込んで一心不亂になり出したのでもう氣が氣でない、感情に餘つて何樣な事をせぬとも限らぬ、前后不覺に躍り見みもせねばよいが、と傍に見て居てもう心配でたまらない、あ丶憖じ見せる所でなかッたと大變に後悔して氣を揉み通してゐたが、禮藏のたんのうした樣子を見屆けてはつと胸をなでおろした、最早この上、何一つ思ひ殘す事はない、看るべきところを看たればこれで自分も本望を遂げたと林兵衞親爺に禮をのべ翌る日一通の書置を遺して其儘何處ともなく影を隱して仕舞ッたが、其れ切り禮藏の姿を見たものはなかッた、宿屋の亭主が後とで披いて見た書置の文意に、あの日親子の名乘り合は出來ぬとした所で、せめてはあの可愛らしい妹娘でもそつと呼んで來て一目逢ッて自分がおとつさんであると言つて抱き取ッてやりたかッた、彼れは三歳の時に分れたのであるから、親爺の顏は面識るまい、ああこれだけが心殘りであッたと、それからこの世に淺ましく姿を殘すのは彼等夫婦の間の感情を害ふ種であるから雲の彼方へ影を隱して仕舞ふとあッた。

（完）

家庭講談

女露兵

眞龍齋貞水

夫婦の情は日本も歐米各國も餘り違ひは無やうに思はれます、殊に東清鐵道の延長について一層土地も繁昌を致しまする彼哈爾賓、此地は日本人も多く入込でをりましたが、支那人は勿論のこと、露國の有力家又は波蘭人、其他歐米各國の人も澤山來ってをります、其哈爾賓の町端れに一寸氣の利た酒店を開いてをります夫婦の者は、亭主をハルマンエップと申して貳拾六歲、其妻をハラトン、コロトキーウヰッチユと申して貳拾歲、眞に夫婦の交情も睦ましく、此ハラトンといふ女房が世辭の宜ところへ、客扱かひも至ッて親切なので見世も繁昌をしてゐる、某一日夫のハルマンが妻に對ッて、夫「ハラトンや」妻「ハイ」夫「今チヨイと聞たのだが、何しろ今度の戰爭は大きくなりさうだ、事によると補充兵員の召集でも有たら、私も出なくッチヤア成ないが、困ッた戰爭が始まッたなア」妻「ハア然うですか、私は貴君が召集にでもなッた曉は、何にも世の中に樂しみといふものはない、何うか神に祈ッて貴君が召集に成ないやうにしたいものだ」夫「イヤ然う言たッて國の爲だ、皇帝陛下への御奉公だから出ないわけにも往ないが、何しろ此次の汽車で大分軍隊が送られるといふ事だ」妻「夫りヤア最う二三日前から大層兵士が、旅順の方面、海城、柝木城、大石橋、大連灣、金州なんといふのへ大層往といふことを、鐵道技師のツエルドさんから聞ましたが、實は私も其事で心配をしてゐるんですよ」夫「漸くマア此處へ來て三年目で、見世も何うか繁昌して、隣家の支那人の王桃源も、貴君澤山金が出來たらふといふくらゐだから、近所でも羨むくらゐに見世が繁昌をして來たんだ、實に世の中は自由にならないものだ」と、其日は大分見世もゴタ〳〵して、モウ閉はふと賣得金の計算をしてゐるところへ彼莫斯科の市長から致して、軍籍にある者は

補充勵員といふので召集令が來りました、 夫「ハラトン」 妻「何か用ですか」 夫「未だ先刻話しをした口が乾かんうち補充兵の召集令が來た」 妻「夫ヂヤア貴夫補充召集で出るのですか」 夫「然うさ此通り召集令が來た」 妻「エ、大變ですねエ」 夫「何しろ明日の十二時までに往なければ成んのだ」 妻「マア何うしたら宜うございませう」 夫「何うしたら宜いと言て、是が來るからニヤア何うしても出なくツチヤア成ないのだ、是も國のため陛下のお爲だから致方がない、我家に臥るのも今宵限りだ」 妻「夫では貴夫何うしても出なくツチヤア成ないの」 夫「夫リヤ何うしても出なくツチヤア成ない」 妻「夫では貴夫が出たら無事でお歸りになるやう、私しや神に祈ツてをります」と夫ハルマンの顔を見てワッと泣出した、 夫「何故お前其やうに慨く」 妻「でも私ほど不幸なものはない、幼さい時に兩親に別れ、伯父さんのシプヤキンの許に厄介になツて、漸く學校を卒業して貴夫と結婚をすると、伯父さんのシプヤキンは壓制であるといふので、大學生の爲に内務大臣の官宅で、短銃三發で無慘の御最期、夫から私は遂に聖彼得堡にも居ることが出來ないで、一旦貴夫の故郷の莫斯科へ往き、又漸く此哈爾賓へ來て三年目、兄弟は無し兩親は無し、賴みに思ふ人とては貴夫の外にない、其杖にも柱にも力と思ふ貴夫が召集されて往ば、先刻の話にも日本は小國でも軍人の氣性が優れてゐるといふから、万一の事が有たら何うしやうと哀しくなツたのでございます」 夫「イヤ夫れは假令戰爭をするからと言て、死ぬると定ツたことはない、お前こそ身體を大切に此見世を守てゐてくれ、其内には戰爭も止むだらふから、是も國家へ盡す義務といふものだ、此召集に應じなければ國恩を知んのであるから、私が出た後でお前が能家を守ツてをるのが、矢張お前が國に盡すのだから。何卒身體を大切に歸宅するのを待てゐて呉るやうに」 妻「夫りや御國への義務でありますから無理にお留申すのではございません、が實にお別れ申すのが辛うございます」實に麗はしき顔に涙を催はす其の風情、流石のハルマンも此妻を殘して召

集に應ずるといふのは情けないとは思ひましたが、國のため彌よ其晩夫婦は首途を祝ふ盃に、隣家の王桃源、妻の王江珊、兩人でやツて來て、王「ハルマンさん、貴君召集令が來ましたといふ事を聞ましたが然うですか」夫「ハイ、彌よ明日十二時に出るのです」王「夫はマア貴君御苦勞、併しハラトンさんの事は心配しないで、及ばずながら私共夫婦がお世話をしますから」夫「貴君とは不思議な緣で、此處へ來て以降はお心易くして居ますから何うかお賴申します」夫「宜うございます、私ども夫婦が氣を注てあげます、夫「何うかお賴申します」といふんで、隣家の支那人夫婦もハルマンの首途を何や斯や心配をしてくれました、支那人は只慾張てゐて致方がないと言ますが、なアに永く交際てお互ひに深切に仕合へば、支那人でも隨分深切なものでございます、ソコデ夫の彌よ出立の日には、ハラトン涙を隱し潔ぎよう送り出しました、ハルマンも隨分名殘惜氣に出立をする、是より夫は旅順方面に向ふことになッた、旣に夫から三日ほど經て某聯隊に附て出發の時には、見世を休んでハラトン哈爾賓の停車場に來て、夫の乘居ます列車の客室の窓に掴まッて暫時離れない、夫「ハラトン最早發車するから」貴夫御機嫌よう、貴夫御無事をお祈り申します、他の者も、他「アー可哀さうに、彼妻を殘して彼兵は出るのだな」見物をしてをる者も、此ハラトンが夫を戀慕ふの情は充分面に顯れてゐるので、アー氣の毒な事と口々に言てゐる、忽ち滊笛一聲發車する、ハラトンは隱囊より取出す手巾を振て夫を見送る、ハルマンも窓から首を出して其手巾の見えなくなるまで見かへッてゐる、其うち烟を殘して滊車は影も見えなくなッてからハラトンは力なく／＼雜沓の中を自分の家へ歸ッて來た、隣家の女房の王江珊が、珊「ハラトンさん何うしました、我夫はハルマンさんを送ッて未歸ッて來ませんが、停車場で會ませんか」ハ「ハイ誰人にもお目にかゝりません」珊「夫でもハルマンさんには會つたでせう」ハ「ハイ漸うの事で群集の中で會ました」珊「何うせお國の爲に出たんだから、是から餘まり心

配しない方が宜いの、若煩ひでもすると可ないから」へ「ハイ有難うございます」其内に半月ばかり經ましたけれど何の音信もない、隣りの王桃源が手傳に來てくれて、酒があるのだから商ひをしてゐる、何うも勝れない顔をしてゐる、王桃源の女房が自分の家へ歸ッて來て、理「桃源さん」桃「何だい」理「眞實にマア隣家のハラトンさんは、ハルマンさんに惚てゐるんだねヱ、又ハルマンさんも眞實に宜い人だッたからねヱ彼が全く睦ましい夫婦てへんだねヱ、世間には彼樣な可哀さうな思ひをして兵士に出た人が何人も有んだねヱ」桃「夫りヤア有にも無にも、豫備後備は皆な彼樣な思ひをして出たんだ、其中にもハラマンさんが美い容貌だからな」理「でも妙な、何だか商ひをするにも氣が無やうだけれど、容は來るよ、今日もねヱ鐵道技師のクリームンスといふ人が來て、種々深切にねヱ、彼のハラトシさんに、其樣に心配するもんヂヤアない、皇族でさへ今度出るんだから、ト言て種々話して往たよ」桃「然うか、己の考げへヂヤア、今に彼女は氣狂になるかも知れない」理「何故」桃「だッて何うも擧動が變だ、今朝私がお早うてッたッて默止てゐたよ、餘ぱど彼りヤアハルマンの事を思ひ詰てゐるんだよ」理「可哀さうだねヱ」桃「お前なんざア私を其樣に思ッチヤアゐねへだらう」理「思はない事は有りやアしない、お前さんが死にでもすりやア私だッて泣アね」桃「其樣な馬鹿な事を言ては可ません」と隣の家で心配をしてゐると、夫から少し經てへ「餘り心配でなりませんから、私は今度夫の容子を聞に往て切て一目會たいと思ひます」桃「夫りヤア女が戰場に往てへな宜ないから、止たら宜いでせう」へ「イヱ思ひ立た事ですから、何うか濟ませんが私が往て歸ッて來るまで見世を預かッてゐて下さい」桃「宜しい、夫ヂヤア私がお見世を預かッて商ひをしてゐてあげませう」夫からハラトンは鐵道技師のクリーの許へ往て相談をして、何でも是非往て會たいといふんで、此鐵道技師も其心の中を察し、夕「お前は無理に留ると氣が狂ふかも知れないから、夫ほど會度といふなら、何のやうな苦勞

も厭はないといふ決心で往くが宜い、併し見世は何うする」　ハ「ハイ家は隣家の支那人に頼みました」　タ「ウム彼支那人は、支那人としては眞とに宜い人間だから夫は仔細は無い、然れどゝ途中が危ないから、是から大石橋まで往て、而して彼處から旅順の方へ汽車が別れるから、マア何しろ道中するんだで能支度をして往が宜い、万一途中で何ういふ困難をしないとも限らない、其時は大連灣に鐵道技師で私の知てをる者があるから、是に私が書面を添てやらふ」　ハ「何うも有難うございます」夫から書面を認てくれました、タ「此宛名にも書てある通りブチレーといふのだから、万一の時には是を出して頼みなさい、此方へ歸ッて來る便利にも成だらふ」　ハ「眞とに有難うございます」夫を思ふ一念から二三の知人と、早速支度をしてくれましたソコデ彌よ出發する、哈爾賓の停車場まで王桃源と鐵道技師が送ッてくれ、汽車に乘込むまで見屆けて、タ「ヂヤア途中氣を注てお往で」　ハ「ハイ、夫では王桃源さん、何うか家をお願ひ申します」此汽車で往けば會ない事はあるまいと、ハラトンは喜んで哈爾賓を後としまして、汽車の室内で段々容子を聞と、今度の戰爭の話しで、負ることは無だらふが日本も勿々強いといふ、夫を聞毎ごとに胸に應へて、夫の身を心配してゐるうちにダルニーへ來た、そこでハラトンは、既に哈爾賓を出立の時、鐵道技師のクリーが添書まで渡してくれた事を思ひ出し、其人を尋ねたが斯うなるとサア知れない、何うしたら宜らふと思ふ途端に、向ふから來る人物は常に見馴た鐵道技師の制服を着てゐる、ア丶此方にお尋ね申したら、分るだらふと近寄つて、ハ「モシ貴君、少々伺ひたうございます」　技「ハイ何ですか」　ハ「此大連灣に鐵道技師でブチレーといふお方を御存知」　ブ「夫りやア私です」　ハ「ヤレ嬉しや、貴君ですか」　ブ「シテ貴女は何處の方ですか」其顏を見ると實に美い女だ、　ハ「ハイ私は此お方から貴方への添書を戴いて來ました」と書面を出す、夫を手に取て、　ブ「アー然うですか、哈爾賓のクリームンス、此リヤア私の爲には恩人です、お待なさい、ヤア何うも

此處は往來ですから私の家へお入來なさい」自宅に來てプチレー此書面を讀でみると、此女へ万一の時には力になッてやッてくれと有る、ア「此リヤア貴女の爲に力になれといふ書面だが、私も實は此大連灣に居られまいと思ふ、聞ばモウ靑泥は非戰鬪員は殘らず引拂つたさうだ、迚も旅順まで往なければ始末は出來まいと思ふ」と言てゐる中に日本軍は大連灣へ上陸をするといふ話か喧しくなッて來た、プ「チャア何しろ迚も其女の服装で逃れるわけには往まい、私も此通り家内を引纏めなければ可ない仕宜だが、貴女はマア何うするお考へだ」ヘ「ハイ私は旅順口へ參り夫に對面を致しまして、迚も哈爾賓に歸りましても望のない身で有ますから、願へます事から夫の隊に付て、看婦婦なり又武装を着て軍隊に交はッてなりお國の爲に盡したいと存じます」プ「何うも貴女は豪い決心だ、夫はマア何しろお待なさい、斯うしやう、男の裝をして往たら宜らふ」ヘ「何うか然ういふ事に願ます」プ「夫チャア此私の鐵道技師の制服を悉皆貸ませう」ヘ「何卒拜借願ひます」夫からプチレーは此女に食事を與へまして、御途中で万一の場合、食事の用意がなくては成まいと、麵包ビスケット其他の用意をして、幸はひ鞄を持てゐるから、其鞄の中に女裝を纏めて詰まして貸てくれた鐵道技師の服装を纏ひました、プ「偖是から貴君を一人でやるのは氣遣だが、迚も一緒に往わけにいかないから、兎も角も支那人を一人雇ッて附てあげる事にしませう」ソコデ支那人の苦力を賴んでくれ、是に鞄を持して道案内で、彌よハラトンは大連灣を立退ことに成たから、プ「夫では貴女御機嫌よう、事によると旅順で會かも知ないから、貴女の夫ハルマンさんに宜く言て下さい」ヘ「會ますれば申し聞ます、此度は種々お世話さま此御恩は忘れません、然やうなら御機嫌よう」プ「途中氣をお注なさい」ヘ「ハイ」夫からハラトンは此大連灣を後に旅順の方へと參る、最早や日本の軍隊が八方に戰線を布てしまッた、其日本軍の中を容子の分らぬ、心の知ぬ支那人の苦力に案内をして貰ひまして夜道を冒し心配をして丁度水師營の手

前まで進て來た、苦「モウ彼處にチラ〳〵燈火の見えるのは水師營です」ヘ「夫はマア嬉しい早く水師營まで往たい」苦「然う貴君駈出したつて、未だ貳拾哩もあるんだから駈通せやしません、モウ此處まで來れば安心だから靜にお往でなさい」といふ途端に向ふの高粱畑からガサ〳〵と出て來た彼是八九名の者、夜中のことであるから支那人か露兵か更に分りません、然れども何やら得物で、先に立てる苦力を打擲いたから、苦「アレー」と忽ち苦力は靴を捨て逃出す、ヘ「貴君何を」と皆まで言せず一人が拳銃を向け、甲「靜にしないと是だぞ」と威赫して吃驚するハラトンを、手を取り足を取り身動きもさせない、而して所持金を取り衣類を剝ふとして、賊「ヤア女だ」と、初めて賊共は女と氣がつき、忽ち高粱畑へ擔ぎ込で既に猥褻がましき擧動に及ばふといふ有樣、ハラトン必死になつて爭そつてゐる、ところへ靴音烈しく來つた一群、兵「此りャ狼藉するなッ」と跳り込んだは二十名ほどの露兵だ、此體を見て右の惡漢どもは八方へ逃てしまふ、ハルマンは起上ッて、ヘ「是は皆さま危ふいところをお救ひ下すッて有難うございます」兵「オャ貴君は露西亞人、殊に音聲の容子では女ですな」ヘ「ハイ實は女でございます」兵「女の癖に何で其やうな鐵道技師の服裝をして居れるか」ヘ「ハイ、其御不審は御尤もでございますが、私の夫は當三月召集になり旅順に參ッてをります、其夫に是非會たいと存じて、心易い技師の方から此服をお借申して、男の姿になッて參ッた次第でございます」兵「ハア然うか夫は頗ぶる夫熱心なことだ、僕等は第十三聯隊第七中隊、グチンコップ大尉の指揮の下にをる兵士で、此の邊を偵察の爲めに參ッたのだ、今の惡漢は彼りや支那人の賊だ、先〳〵負傷もなくつて宜ッた、何しろお前の夫は何聯隊だ、ヘ「何聯隊だか夫は分りませんが、只今は松樹山の砲臺にをりますさうで」兵「然うか、確に松樹山の砲臺にをるか、夫りャア此處ヂャア分らない、何しろグチンコップ大尉の許へ連て往から來なさい」ヘ「ハイ」爰でハラトンは右の兵士に連られ、其晩は水師營へ一

泊いたしまして、翌日大尉の前へ連て來られた、ゲテンコップ一目見ると年は拾九か貳十歳實に美婦人だ、委細をハラトンから聞て、ゲ「是れハラトン、妻として夫を慕ひ艱難辛苦して是迄參るといふ其心根を察して會して遣たいは山々なれど、規律の嚴なる軍隊のこと、別して今日は戰時であッて見れば、憫然ながら其方の望みを達してやるわけには參らん、又夫とて其方に會へば、自然心を引されて充分なる動作をすることも出來んと言たやうなわけ、然れば陛下へ對して不忠ともなる、サ愛の道理を考がへて哈爾賓へ立歸るが宜い」此說諭にハラトンは暫し涙にくれて居ましたが、良あッて顏を上げ、ハ「御尤もなる仰せ、夫を亦押返して願ひますのは、誠に罪深い事ではございますが、最早私は大連灣より引返しますについて、既に生命は無ものと覺悟を定めました、夫ゆゑ今夫に會ないからと申して、哈爾賓に歸る所存はさら〳〵ございません此上は女といへども國恩に報ゆるため、兵士と共に武裝して軍隊のお役を勤めたうございます、何うか此儀をお許しなすッて、貴君樣の軍隊にお使下さるやう、お願ひ申します」と又も其ところへヅッと泣伏した、流石のゲテンコップ大尉も是には持餘した、斯う言て此隊に使ッてゐて貰へば、何日か一度は會る時節もあるだらふと、飽まで夫を慕ふの一念、自分の身を投出して迄もと迫る、如何に迫らふとも、文明國の戰ひとして女を軍隊に付るといふことは能はん、然れども其處が露西亞の軍隊、流石のゲテンコップも大切なる願に心を動かされて ゲ「宜しい、夫なら本官が引請て和女を當隊に使ッ遣はす、隨分女で戰場に働かん限りもないから、是は本官が許す」言れてハラトンは喜び勇み立まして、夫から此が不思議にも、女の身をもちまして、兵士の服を着け、銃を携さへて他の兵士と同じやうな勤務に服してゐる、其うち五月十六日には勞務嘴、同月貳十六日には綠山、此兩度の戰ひには第拾參聯隊第七中隊、ゲテンコップ大尉が指揮の下に、ハラトンは男子も及ばぬ程の勇悍なる働きを致し、ソコデ大尉より、ゲ「ヤアお前は勿々豪いものヂヤ、今日の

動作感服いたした、其賞として和女を時機あらば夫と共に服務するやうに取計らッてやるから、其心得で尚出精するが宜い」　へ「ハイ眞に有り難い仰せ、何うか然う成ますやうお願申し上ます」是からは尚一層心を用ひ、殊に女であるから何事も細かに行屆く、其爲ることが如何にも深切だから、元來女と見れば猥褻がましき擧動を常とする露兵が、此ハラトンと同じ隊にありながら、戯談一つ言ふ者もなく、却ッて賢婦人であると尊敬するくらゐ、然れば偶ま集合て猥褻な話しをしてゐるところへ、ハラトンの姿が見えると、俄に話しが改まつて嚴格なことに移るといふやうな有様、併し本人が心のうちは片時も夫の事を思はぬ間とてはなく、旦暮只會たいとのみ焦れてゐると、某一日のことハルマンエップが、傳令使となッて此十三聯隊第七中隊に參りました、見るよりハラトンは飛立つ思ひ、然れども隊長の前なれば用務の果るを待兼て傍へより　某「貴夫」　夫「ヤお前はハラトン、其姿と言ひ何うして是に」此ときゲランコップ、ゲ「やあハルマン」へ「ハイ」　ゲ「ハラトンが其方を慕ふの一念、如何にも憫然であるによッて、自分が許して今日まで當隊に置て遣はしたのだ、此りやハラトン貳拾分の時間を許してやるから、當陣地の後方へ參ッて、其方が今日まで苦心致したことを能夫に語れ、何れ近い内にハルマンを當隊に屬するやう計らッて遣はす」夫婦は此言葉に喜んで大尉を三拜し、手に手を取ッて此陣地の後方へ參る、大尉は髭を捻ッて冷やかな笑ひを催す、並ゐる小隊長から特務曹長、軍曹伍長、上等兵から一等卒、何れも目と目を見合せ、小さい聲で、曹「エ甘くやッてをるな、嘸ハルマンは嬉しい事ヂヤらう、我輩なぞも本國では妻が定めし心配しをるだらふが、斯ういふ好機會を得るわけには往んのヂヤ、ア羨ましいなア、今頃は何を話してをるだらふ」詰らない事を言て頻りに氣を揉でをる、爰で夫婦は僅の間ながら積る話しを語り合ひ、ハルマンは厚く中隊長に其情けを謝し、別れともなき互ひの思ひを、他の見る目に夫と氣がつき、無理に袖を拂ッて自分の營所に立歸る、すると爰に八月十

五日の大激戰、英語にてコルオーヒルと稱する隅山にて、日本軍から發射しまする烈しき榴散彈の爲に、夫ハルマンは脚部を擊れアット叫んでドウと倒れる、此時ハラトンは少し離れたところに戰ッてをりましたが圖らず其体を認めて馳來り、妻「貴君確かりなさい」と抱起したが、當人は夢中で妻の聲音も分らん程の重傷でございます、鮮血迸ばしるところを、妻「貴夫確かりなさいと用意の假繃帶をして夫を肩にかけて後方に引揚る、早速に醫官の手當を蒙ふりまして「ハルマンに、旅順市街の定



立病院に送られる事になりました、ソコデ小隊長に願ッて許可を受けまして、改めてハラトンは看護婦になッて、夫の傍らに看護をして晝夜寢食の暇なく、他の負傷兵に對する繃帶の卷かへ、或は便所へ參る時には手を引て連る、又は便器を與へ藥を服用する食事を手傳ふ、實に細やかに働いてをりまする、其暇があれば我中隊或は聯隊の容子を聞に參るなと、自分の勞を少も厭ず八方に氣を配ッてゐる、其うち病院で三週間も手當をすると、夫ハルマンも大分宜しい方になりまして、最う一命に關

るやうな事は無と當人も喜んで、夫「おいハラトン」妻「ハイ」夫「實にお前があればこそ私は今度助かッたのだ、此病院で充分看護手が手を盡してくれても、お前が致てくれるやうな手當は迚も出來ない、全く私はお前の爲に生命を助けられたやうなものだ、お前は私しの生命の恩人だ」妻「妻が夫の看病をするは當然、併し然う言て下さると、私も盡した甲斐があッて何んなに嬉いか知れない」夫「ソコデ私は最う此分では快方へ赴くはかりだからお前は切ての事に再び隊に戻ッて軍務に服



してくれ」妻「ハイ夫では私が往て宜うムいますか夫「モウ大丈夫だから往て宜い、お前が長く居てくれたのを、私は重傷で氣付ずゐたが、他の戰友の手前も宜しくないから何卒隊へ戻ッてくれ」妻「夫では私は是から隊へ戻ります」ト爰でハラトンは他の負傷兵を能見舞ひ、又隊長醫官看護手の一同へ口誼をなし、へ「何分夫を願ひます」と再び聯隊へ復りましたスルト某日の戰ひに日本の砲彈の爲に貳人の兵士が一度に倒れる、ハラトンは駈來つて負傷兵に繃帶をする、殊に水源地の戰ひに

は日本軍から盛んに砲擊をされて、其の時なぞは前哨の防禦線の中にあッて能傳令を務め、又此際は非常に負傷兵が出來ましたので、傳令の間にはハラトン、負傷兵の手當沖搬に深く注意をした、其擧動には何れも感心しない者は無い、其暇には病院へ見舞に參りましては、一時間ぐらゐ夫の傍らに看護をして、透があれば同室の負傷兵の手巾を洗ひ、又藥を服用せるといふやうな事を手賢にしてやり、或時は鑵詰を土產に持って來り、又ビスケット煙草なぞを土產にして、一同が喜ぶ顏を見て此上もない樂しみにしてゐる、丁度十月十三日にも病院へ來て、妻「貴夫今日は何んな工合です」夫「大層今日は心もちが宜い」妻「然うですか、俄に寒氣が強いから何んなかと思ッて來ましたが、夫はマア宜い容體です、夫から此次は少と來るのが遠いかも知れませんから、機嫌よく今度來るのを待てゐらッしやい」夫「アー然うか、此次は何うして長いのか、」妻「ナニ第六中隊の塹壕の方へも傳令をするやうに成ッたから、今までのやうにチヨイ／＼伺へないかも知れません」夫「アー然うか、私が此樣な身體だから、貳人前と思ッてお前が勉めてくれ」ハ「皆さん、ハルマンを宜く願ひます」何だか今日は歸るのが變に否な心もちだ、と言ッて許された時間が盡るから致方がない、夫ではお別れします、今度は少と長く會ませんから貴夫御機嫌よう」夫「チヤアお前も身體を大切に勤めておくれ」妻「ハイ、然やうなら皆さん」皆「ハラトンさんお歸りですか、然やうなら」毎もにないハラトンが、夫ハルマンの傍らを去ともないといふ風情で立歸りました、甲「ハルマンさん、貴君の妻君は實に貞烈なものだねエ」ハ「ハイ能盡してくれます」皆「結構ですな、今日は歸ッて往とき、貴君の顏を見て淚を流して往ましたよ」ハ「ハア然うですかい」そこでハラトンは隊へ歸ッて、相替らず塹壕の內にをッて任務に服してをります、スルト十月の十八日、日本軍から發射まする激しき砲彈、此七中隊の塹壕へ對してヒユウー／＼／＼と飛來り、物に觸ては破裂をする又頭上で破裂をする、兵「ハラトンさん危ないよ、其樣に先の方へ往チヤア、オ、日本軍が盛んに擊は／＼、此リヤア强襲だぞ、氣をつけろ」と言てをるうち、今しも午前十一時といふ頃ほひ、ピユウーと風を切て飛來ッた一つの巨彈、パキーンといふ響きと共に、此塹壕の內

に防禦行動を執てをりました、彼貞烈無双のハラトン外八九名の頭上に於て破裂した、何でう堪りませう、ハラトン始め殘らず即死です、然も此日はハラトンが誕生日で、日本軍の攻擊さへなくば、小隊長に願ッて暫時の暇を貰ひ、日頃親しき戰友を酒保に伴なひまして、心ばかりの己が二十歲の誕辰を祝せんと、其前夜夫々へ物語ッたといふ、然るに此悲慘の最期を遂たるは實に哀れなこと、何とて神は斯る賴ひなきハラトンを救ひたまはぬかと、隊中擧ッて淚を催し、其死を惜まざる者は一人もない、切ては遺骸にてもと、是を松樹山の半腹に厚く葬むり、一の墓標を建て此芳名を不朽に傳へる事にした、忽まち此事が旅順一般の露國軍隊に知渡り、婦人といへど能國恩を辨まへて、軍隊において男子に優る働きをなし、其剛悍なる擧動は諸隊の摸範となるべく、又貞烈なること能婦人の道を盡し、夫を始め戰友の負傷者を懇情に劬つたる、其殊勝と深切なる志ざしを賞して、將校は勿論兵卒に至るまで、代る〴〵此の墓前に來つて拜を遂げる、中に定立病院へ此事が聞えたとき、夫ハルマンの慨きは狂せんばかり、夫を院長始め一同が種々に慰め、何はハルマンの氣を引立るために、具貴君が負傷してをられるによつて、ハルマンさんが貴君と兩人前の動作をして砲彈に殪れたんだ、此りやア是非に及ばんのヂヤ、女でさへ斯のごとき壯烈な戰死を遂られる、況て男子たる貴君が、早く全快て盛んにやらんければ成ますまい」斯う言れたので、「大に然でございます、漸う氣を取なほしました、同室の負傷者は、何にも此間ハラトンが歸るとき、每もとは容子が違ひ、淚を流して今度は永く會れないなぞと言たのが、今思へば能く俗にいふ虫が知したので有ふ、扨々可哀さうな事をした、と口には言ねど胸に思ッて一同淚を催はし、何かにつけて話しが出ると、此ハラトンの事を言ない者はない、實に今回の戰爭について、是ばかりは露軍の內の美談でござりませう、然れば旅順にて發刊する、關東報と申す露字新聞、十一月十二日の紙上に、右事實の全體を詳ッて記しました、夫に基いて私が斯は講談に致しましたのでございます。

（完）

新撰いろは格言

瓢笑門

△一年の計は元日にあり、妻を誨ゆるは初見にあり

△一斤の善行は十斤の學問にまさる

△一功德は萬論を防ぐ

△一滴多きに過ぐれば酒盃にあふる

△一身の品行は危難を防ぐ事、一隊の兵馬にも勝る

△一葉落ちて天下の秋を知る

△一錢を儉約したるは一錢を儲けたるなり

△一犬虛を吠へ萬犬實を傳ふ

△一失ある妻を拒むで二失ある妻を娶る

△色、人を迷さす、人自から迷ふ

△論に負けて實に勝てよ

△繁昌の時に用愼し、不仕合の時に辛抱せよ

△白髮を防ぐには門戸なし

△鋏刀と奉公人は使ひ樣による

△二兎を逐ふものは一兎も得ず

△人を見て法を說け

△肉を咬み合ふ犬の眼中に朋友なし

△逃がした魚は大きく見ゆるものなり

△朋友の交りを結ぶ前にまづ其人と共に一俵の鹽を嘗むべし

△暴風に遭はざれば船長の鍛錬を知る能はず、

△兵卒の血を以て將師の榮譽を作る

△鳥は樹を撰べども樹は鳥を撰ばず

△問ふは當坐の恥、問はぬは一代の恥

△得失は一朝にして榮辱は千載に亘る

△忠臣は人君を作る

△利子を取らんよりはまづ利子を拂ふ勿れ

△盜人の暇はあれど守る人の暇はなし

△面白い盛りに戯謔を止むべし

△溫良は暴よりも多く働らきを成すものなり

△我が所用のなき品を購入るゝ人は遠からずして我が必用の品を賣拂ふ

△我が最愛の人に對しては却て物言はれず

△黄金は火に當ッて知られ、友誼は事に臨んで顯はるものなり
△黄金の鍵は秘密の戸をも開くと知れ
△艱難は最善の教師なり、
△艱難窮苦の經歷なき人は富貴利達の眞味を解せず
△學問は恰も金庫のごとし而して練習はその鍵なり
△善き報知を持ち來る人は遠慮なく戸を叩くものと知れ
△善き隣人は遠方にある兄弟にまさると知れ
△世に馬鹿な稼業なし、只馬鹿な客あるのみ
△大勝者とは即ち己れの慾に勝ちたる者なり
△怠惰は不幸の母なり
△膽略と決心とは積德　精神なり
△璉環　又璉環　遂に竟に鎖帷子を成す
△月雪花は一度に眺めらるゝものにあらず
△汝若し榮耀を得んと欲せば太陽をして汝が臥床にあるを窺はしむる勿れ
△勞作は身体を營養し、學習は神靈を教養す

△無益の爭論は克つに益なくして負くるに益あり
△馬を相るに是れを痩せたるに失し、士を相するに是を貧しきに失す
△兎を捉ふるに良犬を以てし、愚者を捉ふるは感賞を以てす婦人を捉ふるは金銀を以てす
△嚢中に金を持たざる人は口中に蜜を持つ
△登る事いよ〳〵高ければ落ることいよ〳〵高し
△過食は刄よりも多く人を殺す
△口に蜜ある蜂は尻に刺あり
△苦を以て業をなせば成功其身に從ふ
△空な希望を失ひし人は大に得したる人なり
△儉より奢に入るは易く、奢より儉に入るは難し
△不幸は馬上にて來り、徒歩にて去る
△風雪を過ざれば春に遭はず
△淵に臨んで魚を羨むは、退いて網を編むに如かじ
△心に思ふて舌に語れよ
△言葉と行爲との間には長き距離あるを知れ
△畫師と辯護士の手にかゝれば白いものも黑くなる

△天は萬物を人に與へずして其働らきに與ふ
△酒知己に遭へば千杯も少く、話機に投せざれば半句も多し
△財布の底と心の底は決して人に示す勿れ
△山巓にある羊は原頭に眠むる牛よりも高し
△爭論は一方の勘忍にて終る
△木々曲げんと欲すれば若木の內に於てすべし
△義僕を得んと欲すれば自から勞に服せ
△名譽と利益とは一囊に貯へ難し
△身に健康を所持せざる人は何も所持せざる人なり
△自から第一の智者と思はざるこそ第一の智者なり
△店を開くは易くして、店を守るは難し
△道を同ふするものは相愛す、藝を同ふするものは相妬む
△親友と驢馬は險路に至りて人を助く
△思慮は老たるを尊び、手足は壯きを尊ぶ
△人生の大費は時間を費すにあり、
△品物を褒めたる人に買ふ試しなし

△品物に惡評を下す人は是を買はんと欲する人なり
△心中に燃ゆる火は口に其の烟を吐く
△辛抱と月日とにて桑の葉が錦の褥となる
△鹿を逐ふ獵夫山を見ず
△商賣に資金なきは弓あつて矢なきがごとし
△疾病は遊蕩の租稅なり
△人は富者に金を貸す
△人業を保てば業人を保つ
△人皆長壽を冀ふ然れども老ゆるを好まず
△美服はよき紹介人なり
△百說は一藝の詳しきに若かず
△百年間に試しなき事も一日中に知る事多し
△必要は人心を結合せしむ
△尤も甘き葡萄は高き處ろに懸れり
△目的の港を定めざる船には順風なし
△千萬の法律一片の慈愛なし
△債を蒔く人は貧乏を刈取る
△粋が身を食ふ

衛生小說

初夢

糸左近

讀者諸君の中には、「汝は醫者ぢや無いか、生意氣にも詩人の繩張へ飛込とは、如何にも不都合だ。」と言はるゝ方もあらう。仰しやる通り、私は藪鶯です、小說などゝいふ美しい物を嘲るやうな聲はもちませぬ、けれど神代の昔から聞飽いた法法華經のそれよりも一風變つた可笑な啼様の方が、却つて初春の一興にもなりますまいか、果してさうならば、衛生といふ冠に對しても何うぞ御許し下さいまし。

第一聲

一昨明治三十七年正月二日の朝、例の仲氣な我は、杯酒傾ケ來ル一二三。四五六七興愈酣ナリ。醉中ノ心事ハ如ニ王者ノ。何ゾ羨シヤ公侯伯子男。といふ調子でゐると、「是非御目にかゝりたい。」といふ女の方がありますとの取次で、我が居間へ通つて來たのは、五六年前ならいざ知らず、今は髪の結様が少し位惡かつたとて、左程氣にも懸らぬといふ位の年頃、少し薄けれど、兎に角黒々として美しい髪を丸髷に結ひ、舊い小說家の口吻するやうなれど、鼻筋の通つた口元の締つた品格の卑しく無い、何處へ出ても奥様と言はるゝ丈の價値は十分あるが、頬の少し瘦けて、脂氣の少い、色の蒼白い、眼元の淋しい所を地金の醫者根性的に評すれば、或は歇私的里か或は結核か或は慢性胃加太兒か何白貧血性の婦人だなアと不風流にも望診せらるゝのである、若し詩人の眼鏡を懸れば、「褪めにけり何時雨降つたいざ櫻」とか「美しい繪は書きあれど捨扇」とか口吟んで、兎に角少なからぬうき世の涙が可惜靨を流して了つた所謂美人薄命だわいと考ふるであらう。

『先生には初めて御目にかゝりますが、毎度女學世界の一日醫者や生理のお話を此上無い友として、蔭ながら先生を御懐しう思つてをります小山田かうと申す不束者で御座います、御用多い中とは存じますが、折入

つて御願申上たい事が御座いまして、その……。」と、我の如き者に對しては、些と丁寧過る言葉で、如何なる秘密を洩さうといふのであるか知らねど、言ひ出しさうにしては、又きまり惡さうに、狹い室内の四邊を眺めながら、稍あつて、

「突然に申せば如何にも變な女だと思召さうけれど、一口に言へば、妾は夢見性で御座いまして、如何なる晩も夢見ぬことは無く、晝間少し交睫んでも、何も見無いといふことは、茲十年來恐らくありますまい、それで悲しい夢を見ますれば萬事其の通りに運び、嬉しい夢を見ますれば其の反對になるやうで御座います其の他恐ろしい夢、厭らしい夢、それが爲め日に〳〵身も心も瘦せ衰へまして、言はゞ夢病とでも申せば宜しいかと存じられます、今朝の初夢も今思ひ出せば心配に堪へられませぬ、なんと斯樣に妙な身體が醫書にあるもので御座いませうか、若しあるものなら何卒善い夢を見るやうに御治療願ひたいので御座います。」

「それは妙な御質問、或は世間の醫書には無いかも知れませぬが、併し糸氏心中の醫書には無いでもありませぬ、就いては著しい夢の大略から貴女の來方などに就いて、御包無く打明けて御話なすつたら何うです。」

「嬉しい其の仰せ、何ぞ御聽下さいまし。」

これより抹茶啜りながら、悠々聽いた話は愈々出で、愈々妙なり。

第二聲

かう子は未だ小山田の家に植ゑられぬ鬼も十八といふ年の今より十三年前の事、秋は何の爲に悲しいものやら春は何が故に喜ばしいものやら一向分らねど、唯晴衣着るのが何と無く嬉しく、友の誘ふがまゝに、花は上野の櫻を眺めたのである、花見とて眞に花見る人の少いもので「酒無くば何の己れは」といふやうな連中もあれば「花より團子」といふ不風流な食一郎もある。その他運動會、パノラマ、動物園、博物館など、目的は花の千種萬態に咲いてゐる如く違つてゐる、かう子は彼の人の髮の結風、此の人の着物の摸樣など、餘念無く眺めてゐると、何處から來たか一疋の黒犬が群集

のあはやと驚く中を駈け拔けて、人もあらうに、花より美しいかう子目がけ、さながら動物園中の虎か狼かゝ火焔の舌を出してバウツウ叫ぶやうな勢ひ、「狂犬だ〳〵逃げろ〳〵」といふ聲騷がしけれど、此の場合果して逃げられようか、アレイ〳〵の悲鳴を擧ぐるのみである、犬は逃げ惑ふかう子の後を擊劍家の身構した揚句にエーと進むかの如く危機一髮、然るに此の時早く「畜生奴ッ」と大喝一聲その間に飛込んだ青年がある、飛込むや否や手に持てる手巾を下れば、猛りに猛つたる犬はウーッと手巾に喰ひ附く途端、ヤット聲かけ、右足擧げて犬の腹を蹴る、ワンと仰向に倒る、倒るゝ所を尙進んで蹴る、斯うなると石を投る者あれば、洋杖で打つ者もある、所謂犬死かと駄洒落をいふもあつた。

既に人心で無つたかう子も、漸く我に還り、嗚呼嬉しや、何處の御方であらうかと眺めた、その眺めたのが人生一階級を進めた試驗で、夢病の源である。

第三聲

嗚呼何處の御方であつたやら、若し彼の御方が居無かつたら、妾は恐らく犬毒病とやらに罹つて、再び上野の花は見られぬものを、實に第二の親とも謂はねばならぬ、何千何百の人が騷いだけれど、誰以て助ける者も無いのに、まア何たる義俠な大丈夫だらう、しかも手巾を食へさせ腹を蹴るなんどの智慧は迚も凡人では無い、それで荒くれた人かと思へば、彼の美しい氣高い態、彼の優しい高ぶらぬ風情、實に櫻、嗚呼櫻、それであるのに何くの何樣であると推返して問はぬとは考れば考る丈、自分程愚な者は此の世にあるまい、さても此の恩を何うして報されようか、報すべき道は無い、と言つて、斯の樣に莫大な恩を受けながら、何くの人であつたやらでは畜生も同樣、されば犬の惡むも無理は無い、偖何うしたら宜からうと、繰返々々思うては又思ひ、考へては又考ふれど、舵無き舟の太洋に漂へるが如く、更に目的の無いことである。

日は暮れても尙思ふ、寢床に入つても尙考ふ、眼を閉づれば「恐かつたですかね」と、微笑んだ青年の顔が如

何にも氣高く見ゆる。

若し之を識者の眼から見れば、如何にも單純な如何にも危い戀である、成程助けてくれた恩は言ふまでも無く有難いけれど、如何なる素性の人やら、何を目的としてゐる男やら、果して氣高き青年か、何んな遺傳病のある者か、神ならぬ身の分らう筈も無いのに、唯自分の心に理想の青年を畫き、それを戀ひ慕うてゐるのである。

夜は益々深け、心は愈々亂れ、身體は次第に疲れ果て、偖て甲斐無き我よと嘆けば、忽ち天使かとも思はるゝ神々しい白裝束の翁が現はれて、「汝は何を悶へてゐる幸は汝の袂にあるでは無いか。』と言ひ終るや否や、姿は何時の間にか消え失せて、唯次の室なる父の咳嗽聲が聞ゆるのみである。さては夢であつたか、夢としては不思議な夢である、果して神は妾の袂に幸を入れ玉ふたのであらうかと探れば更に何物も無い、嗚呼夢々、其の夢を信ずるとは我ながら可笑しきことよ、と思へど矢張氣に懸る、それとも此の寢衣では無くて、今日着た晴衣の中にあるのか知らと、又起き出でゝ改むれば、こはそも如何に、大きな盃がある、偖も不思議な夢、否不思議な盃何うしてこれが幸になるのであらうか、我にもあらぬ心地で燈火掻立てながら、能々見れば、木地の儘なれど潤澤漆の如くで、裏底に、

予以嵐山之櫻樹造之。僧月照。

と彫つてある、されば今現はれた翁は月照法師の靈であらうか、それとも神か、不審の念は益々少女の胸をかき亂すのである、知らずこの盃に如何なる運命が宿つてをらうか。

第四聲

『今の世は書の掛物を左程珍重せぬけれど、それでも南洲翁や月照上人の眞筆ならば、仲々價値がある、それであるのに上人自作の盃、しかも嵐山の櫻と來ては、豪傑の風流名勝の地が忍ばれるて、實に結構な品物だ、それが何うして御前の袂に入つたらう、何う考へても不思議ぢやのう。』

と幾度と無く、盃を撫でたり擦つたりしてかう子の父は云ふ。父といふのは近藤篤次とて、四五年前までは宮内省に仕へてゐたが、今は恩給と家作との上り高に、搗て〻加へて長男も醫科大學を卒業し地方病院の副院長を務めてゐるのであるから、年は未だ五十を幾つも越さぬけれど、日長の無事に苦しんでゐるのである。

『これは矢張神樣が此の娘に幸福を與へなすつたのに違ひありませぬ、錦の袋にでも包んで、家の寶物にしておきませう。』

と母は喜ぶ。けれど、かう子は何とも形容の出來ぬ思ひに沈んで、何うも未だ夢の覺めぬやうな氣持がするのである。

彼是評定してゐる所へ、近藤の碁友達折橋某が來たから、近藤は早速又例の西鄕と月照との講釋をし始めると、折橋は不思議さうに、

『これア何でも見覺があるやうだ、何處で求めて來なすつたか。』

と、云ひつゝ眺めてゐたが、即て思ひ出したと見え、

『さう〳〵上野の公園で、何でも書生體の男が誰彼の區別無く自慢しながら見せてゐましたよ、それだ〳〵』

と叫ぶ。さうで無くても一種異樣の感に打たれてゐたかう子は、今や書生體といふ一語を聞いて、思はず全身冷汗を流し、若しやそれではあるまいかと、胸轟かせながら、其の人相から其の年頃まで尋ねれば、我を助けた人に少しも違はぬ、して見ると、この盃は彼の御方の所有、それを何せ神は妾に賜ふのであらうかと、取つ置つ不審の念は愈々高まつた。斯くして其の日も暮れたが、其の晩はかう子の身に取つて、空前絕後の嬉しい夢を見たのである。

若し此の時眼識の高い親であつたら、必ずこの不審を看破つて一人の娘を夢病には爲し無かつたものを。

第五聲

櫻に異りは無いが、嵐山の花は又一入の風情がある、その氣立くて美しい天眞の姿は、優に千有餘年の都を忍ばせて、心無き者も坐に詩興に堪へぬのである。さ

れど浮世の塵に染らうとしてゐるから子は、この無垢の花を見るにつけても、連想せらるゝのは上野の櫻、上野の櫻と同時に彼の恩人、さては何處に何うして居玉ふやら、若し彼の青年と共に此の美しい景色を眺むるならば、何の樣に樂しいことであらうなど、千々に思を惱ましてゐると、突然呼ぶ者がある、不圖振返れば、今が今まで忘れようとすれど忘れられぬ彼の青年、心臓の皷動は、一時に高まつて、答へんとすれど早一種の涙に迫るのである。

「かう子様、嘸や不審に思召すでせうが、彼の盃は私が片時も離さなかつた品なれど、赤心に代へて差上げたのです、何私の心はこの通りですから……。」

と、一葉の短冊を取出し、何卒この返し賜はれといふ、見れば、

身に代へて愛でし盃心あらば
　我が戀ふ人と共に酌ませよ。

その時の嬉しさ何と返す言葉も無い、若しこの嬉しさを數量を以て示さるゝものならば、千萬無量とでも言はねばなるまい。されど斯くてあるべきにもあらねば、取り敢へず、

さなきだに嬉しきものを盃よ
　百千代かけて我は酌まなん

といふも愧かしき口の中、

「それが眞個の御心でせうか。」

「勿體無き仰せ。」

「この樣な嬉しいことはありませぬ。」

「妾こそ。」

何くとも無く颯と吹き來る山嵐、見るまに萬朶の花は虚空に舞つて、さながら吹雪の天に異ならず、如何に嵐山とは云ひながら、未だ蕾の破れぬ枝さへ多くあるものを、まア何たる情無い風だらう、若しや此の風は妾の行末をトふのではあるまいか、それとも我が思ふ人は何と觀ぜらるゝやら、偕も聽きたいものだと思へば、今が今まで微笑んでゐた氣高い姿は、何時の間にか、花と共に散つて果敢無き、嵐山ならぬ三疊の我が居間、嗚呼夢であつたか、夢ならば長へに醒めねば宜

いのに、されど又神は短冊を與へ玉ふたのか知らんと、これより狹い一室の中、何から何まで探せど、固より神は戀の使をするものでは無い。明朝は迷名だたる易者を訪うて夢判斷を請へば、何れも十人十色の答。咄無學の賣卜者何ぞ心の微妙を知らんや。

第六聲

「御前の留守中に、御前を助けたといふ年は二十四五の書生の人が來たよ、まアさう急かずに御聽なさい、其の人が「過日此方の御孃樣が若しも盃を一つ御拾になりますまいか」と問ふから斯々であると有の儘を答へたれば「それは如何にも不思議です、それぢや御獻上申しませう」との事、けれど唯貰ふ理れが無いから、御前を助けてくれた御禮を兼ねて、有合の金子五拾圓を差出したれば、容易に受取なかつたが、母樣も勸めたもの故、ぢや貧學の身でありますれば、暫時御拜借を致しませう」と、快く納めてくれたよ。」

「何處の何といふ御方で御座いましたらう。」

「其處だて、不審なことには、何と尋ねても、唯文學を少し研究して居りますもので、何れ又御禮に參りますから、其節申上げませうと、何うしても明さぬ、實に文學者といふ者は一種妙な風のあるものだ、惜いことには彼の人も一生富有にはなれさうも無いなア。」

聽き了つてかう子は思はず「殘念」と齒嚙をしたが、今更致方はない、何せ推返して聞いてくれなかつたと、兩親を怨んでは見るもの丶、何の詮も無いないことである。

「何うして此處が分りましたらう。」

「それは御前に聞いたと言つてゐたよ。」

何うも住所を告げた覺えは無い、實に不思議である、併しそれは何うでも可いとして、彼の方の處何とか尋ぬる手段の無いものか知らん、嗚呼神よ妾に今一度逢せて賜へ、父樣に聞けば「何れ又御禮に來る」との事、若し今度御出の時に妾がゐたら、令ひ後を尾けても、必ず其の住所を知らうけれど、それが幾年の後にあるものやら、嗚呼情を知らぬ御方である、その情の無い

人を、何せ此の樣に思はるゝのであらう、父は文學者だから富有にはなれぬと仰るけれど、それが却つて樂しい所、金が欲しくて學問するやうな學者に、眞の學者は無い、して又今は貧學とやら、貧にも色々ある、何の樣な境界で在らつしやるだらう、父樣も父樣である、今少し詳しく尋ねて、學資の助けでもしませうと仰れば宜いのに、されど彼の樣な氣高い方は、他人の助けなど受けなさるまいし、偖何うしたら宜からう。と今日も明日も同じ心の緒を亂せども、何の便も無い、春は暮れ、秋は過れども、唯詮無き毎夜の夢に、或は喜び、或は泣くのみ。斯くして來る年も來る年も盡き果てぬれど、盡き果てぬは我が思ひである。丁度五年の間は、眞に夢の世の中で、琴の復習活花の稽古も、聞いて聞えず見て見えず、夜は寢不足勝になれども眠からず、食欲進まず頭痛はする、醫藥も時々服めども何の効も無い、遊山見物は唯連想の種になり、夢の媒介となるのみである。

第七談

夢を見初めてから六年目の春である、父は嚴然と容を改め。

『母樣から毎々聞いて、お前の心は能々分つたが、實につまらぬ空想ぢや、成程偶然御前を助けた恩人とは言ひながら、何處の如何なる人やら譯の分らぬ者を慕ふとは淺墓である、恩を報ひぬとは言ふけれど、少いながらも報酬の志は遂げてある、又住所さへ分れば我もこれ限にはしておかぬ積、それを何ぞや許嫁でもした樣に、義務を立てゝゐるとは、馬鹿の骨頂ぢや、今頃は彼も三十に近い年、大方妻を迎へたらう、一時の恩を思うて、莫大な惠みの兩親に、心配をかけて何とする、不埒者めッ。』と息卷ながら、稍暫し見詰めてゐたが、又更に言葉を和らげ、

『父が言ふことを熟と聽け、其方も知つての通り、我れ幼い時、父母に分れ、今は世に亡き人なれど、今の小山田の祖父樣には一方ならぬ恩義を受け、又父親とは兄弟も及ばぬ交りをなし、その父親の臨終の際にも、必ず〳〵と約束したものを、今や其の靈を欺き、又今

の信太郎殿に、何と申譯するか、此の處能々考へて、廣い世界餘年も無い父を泣かせぬやうにしてくれい、に其方の夫は、唯信太郎其人のみぢやぞツ。」

斯の樣な義の高い父の言葉を聽いては、何と返す言葉は無いのみならず、母や兄の人情を穿てる優しい勸め、如何に彼の青年が思はるとても、道に背いて强情を張ることもならず、遂に心に染まぬながらも、今の小山田に嫁いだのである。けれど、夢は益々見る、彼の人を愈々忘れられぬ、嗚呼道ならぬことよ、今現在正しき夫に事へながら、其夫を戀しとは思は無いで、今は如何なる花を眺めて御座るやら踪分らぬ人を思ふとは、我ながら愛想の盡きた女だなアと、自ら責め自ら叱つては見るもの丶、又其の夜の夢は、矢張數年以前の青年が現はれて、

「彼の短冊を何うし玉ふた。」

と、怨めしさうな問、事情打明けて盡きぬ思ひを言はうとすれば、姿は忽ち消ゆる、或る夜には又、ありくと耳元に、

　　百千代と誓ひしものを盃よ
　　　昔忘れて人に酌ますな

といふ聲がある。知らず誰の聲であらう。

第八　聲

この外色々のお愧しい夢も澤山御座いますが悉皆略しまして、今日の初夢に飛びませう。

後は斷崖絶壁の岩山、仰ぎ見れば數萬丈もあらうと思はる丶峻しい頂が、火焰を吐きながら天空を焦してゐる、前は逆卷く黒潮の海原、山なす波は遠近相笑合つてゐる、山と海との間は僅かに二三十間、山颪はヒユウく呼んで海に訴へ、海はガウく鳴つて山に應ふ。かう子の身は今にも怒潮の餘沫に洗はれん恐ろしさ、山に攀んとすれど道無く、左右に逃んとすれば道尙狹し、兎角する中に、天色忽ち濛々と變じ、電光閃々迅雷轟々、今にも山を碎けんずる勢。

嗚呼三十年來御心配かけた父母を後に殘して、身は此の儘黒潮の魚腹に葬らる丶のか。天よ天よ、何の罪あつてこの一女子を此の苦境に陷れ玉ふかと、我知らず

歎けば、身の丈數丈もあらうと思はるゝ夜叉が表はれ、「不埒なる女めッ汝の罪は大海よりも深し今我汝を虚空に提げて、火山の頂に葬らん。」と言ひ終る一刹那、下婢が雨戸を開く聲に夢は醒めたが、冷汗は瀧の如くに流れ、全身ビショ濡に濡れて、今思ふさへも恐ろしい、この樣なことが二三度續けば、到底堪へらるゝものでは無い、夢も亦恐しいものと謂はねばならぬ。

「右の次第で御座いますが、何とか御治療下さいますまいか。」

「能々分りました、就ては治療に取懸る前に、第一貴女の心の雲を掃はねばなりませぬ、それは斯うです。」

第九聲

「貴女驚き玉ふな、その木盃は贋物で、其の青年否今では青年でも無いが、兎に角詐欺師に相違ありませぬ、お話に依れば、父上の御友達折橋とかいふ方が、その木盃を見たといふぢやありませぬか、それは能くある手段です、私も嘗て高輪の泉岳寺に詣でた時、或者が大石良雄の盃だと吹聽して、見知らぬ我にまで自慢してゐました、そこで名士の俤を追想する者は、欲しくなるから、不知貰ふ氣になるのです、盃もこれと同じ事で、櫻見の場所に月照の盃、しかも嵐山の櫻とあるから、ぢや讓つてくれぬかといふ人を待つのです。その狂犬は偶然でせう、併し狂犬を防ぐ其の術は、昔から誰でも知つてゐることなれど、生憎知つた者が無つたを幸として貴女を助け、助けると同時に、一儲しようとその盃を私に入れたのであります、義俠でも頓智でもありませぬ、然るに貴女は、昔からある小説的の戀に迷ひ初めたものゆゑ、其の盃は手に觸れてゐて、盃で無いか位は思うたでせうけれど、心は宙に飛んでゐますから、それが一つの妄想力となつて夢に化けたのです、青年の歌も、貴女の返歌も、皆貴女の妄想力、妄想力で出來た歌ですから、失禮ながら歌になつてゐませぬ。又その青年の恐るべきは貴女が住所を告げぬのに、尋ねて來たぢやありませぬか、それはチャンと貴女の後を尾けておいたのに違ひありませぬ。彼が住所を告げぬのは奥床敷見せる手段、今一つには若し

素情が知れたら、萬事の工みが破るゝからであります。又今朝の夢は貴女が親夫に對して良心を責めるし、彼の青年も亦忘れられぬから、それが極端な恐ろしい夢になつたので皆心の幻影であります。妄想力と雖も心理學の所謂連想より來らぬことはありませぬから、上野と盃とに因縁のある嵐山を夢見るでせう。實に心の幻影は面白いものです。」

と、余は言ひ終つて、かう子を眺むれば、早十數年來の迷ひの夢は既に覺めたと見え、頻りに感歎の聲を洩してゐるから、余は又改めて、

「これより當分の中は萬事を擲ちて、心身の攝生を專とし滋養の食物を取り、運動を怠らぬことは言ふまでも無く、その他空氣光線に觸るゝことを第一に心懸け、次に能く眠る工夫をせねばなりませぬ、寢床に入れば明朝まで一呼吸に、所謂鼾聲雷の如く、夢など見る暇の無いやうで無くてはなりませぬ、それには其の習慣のつくまで、毎夜寢臥に入浴して、路の二三丁も走り、それより左の藥を服み、雨降らば降れ風吹かば吹けといふ氣になるのです。

スルフォナール　〇、六　白糖適宜

(右よく混せ、微温湯にてグッとのむべし)

極端に言へば夢を見るのは身體が薄弱であるか、或は愚者です、それであるのに、寶船など買つて、わざ〳〵夢を見ようとは、笑ふべき野蠻の風習であります。」

第十聲

明れば明治三十八年一月二日の朝、かう子は生れ變つたやうな活々とした姿で、玉の如き男兒を抱きながら年賀に來て、

「御蔭樣で初夢も見ませぬやうになりました。」

と喜んだ。めでたし〳〵。

(終)

取次の統計

婦女通信社員が去月十三日より一昨十三日迄三十日間各戸に九十五戸を訪問したるに其取次に出し者は男四十四名女五十一名にして女さへ數へたる中には所謂腰婢もあり女中もあり乳母らしきもあり主婦自ら玄關に出でたるもあれど男は悉く玄關番の類にて男子にても十六七歳以下の者は極めて叮嚀なるも夫れより上となれば何れも起ちながらの挨拶にて中には社員の名刺を引裂きながら案内せし家もあり之に反して流石婦人は婦人らしく取次に出でながら笑を含みて挨拶出來ず面に紅さして引き込むもあり又十二三の少女が片手に焼芋を握りし儘に出でたるなど千差萬別なるが總じて女の取次は一体に叮嚀なれど男子は寧ろ無作法なるが多かりしと云ふ


岸豹筆
蘆雪の図


名筆断片
景文
守景筆
前九年絵巻

雜爼

鎌倉土産

蓮のや女史

鎌倉は我國の大公園たり。決して大陸的の地形にあらず、山あり海あり、又河あり、而して之等の山水皆美しくして雲を突くの高山ならず、千尋の谷ならず、規模小にして箱庭的たり、三面は山にして一方は海なり、即由井ヶ濱なり、此濱の中程に有名の滑川悠々として流る、山に多くは道ありて草は兩側に膝を沒するも歩むに不便ならず。名高き鶴ヶ岡の八幡宮は鎌倉の中堅とも云ふべく、流石に昔忍ばれて緑の松の間に隱見する朱塗りの廻廊殿宇、黄に色付ける階側の大銀杏樹、皆昔を思ひ出の種子ならざるなし、先鎌倉のステーションを下りて第一に目に付くは此八幡の宮なり、之に次ぎて見るべきは圓覺寺、建長寺は其當時の大建物とも云ふべきか。

畏れ多けれど鎌倉の宮と稱し奉るは、護良親王を祠れる宮にして八幡宮の東の方にあれど、多年の風雨に晒されて素朴にして清麗とは云ふべからんも、寂れたる處何となく胸せまる心地す、まして親王御最後の當時、一二町を隔てたる東方の山の麓に理知光寺と云ふあり、其住僧が親王の御骸を其山の中腹に葬り奉りしなりと云ふ、小さき木の鳥居に粗末なる祠あり、秋風颯々として印ばかりの〆繩をそよがす處、枯尾花のあはれにまだ咲きのこりたる、野菊の半しほれてまつはれる樣、思はず「愚なる身も古に生れなば君が

御爲とならましものを」の感歎する能はざらしむ。千古の英雄が眠る賴朝の墓も、哀れ草茫々たり、其他は云ふ迄もなし、畑の中に小さき石塔の立てるを何人の墓ぞと聞けば、之ぞ昔は飛ぶ鳥落す世に時めける人の、夫れと聞きては只「草も木もなびきし秋の霜消えて空しき苔を拂らふ松風」の古歌徒に忍ばるゝの

△冬の鎌倉　人出を當て茶屋小店は、冬に至れば實にみじめなるものなり夏こそ何千人の人此狹き處に入りこみて、雜踏し繁盛すれど、冬は打つて變りて寂しく、殊に此頃の時世とて土曜より日曜にかけての客も先皆無の姿なり、我此町に入りてまづ驚けるはさる人の許に玉子折持ち行かんとて、此處の最も賑やかなる長谷の町に買ひに行きしに、二三家尋ねて一家も折につめて進物に仕立て與るゝ家なし、詮方なく宿に歸りて家人にはなしたるに、此處にては玉子を折箱につめて進物にする樣なる人は絶へてなし故に玉子の箱としては別になきなり、強いて玉子など贈らんとする時には一ッ一ッ紙に包みて一々しばり持ち行くか折箱に入れて行くなりと。



△八百屋もの　日常の食品皆品あしくして都より價高し、八百屋の店に行きて見るに、八百屋たる名稱にそむきて品數は極めて少なく概古びて干からびたるもの店頭に僅か並べられたり、獨り甘藷は都會に比べていと廉價なりされども其味甚だ惡し、水分多くして糖分少なく、恰も馬鈴薯の少し甘き位なり、里芋も一舛九六錢にて買ひ得べし。

朝早く戸外に立ちて眺むれば、十二三才の子供の荷ひ

籠に葱甘藷大根など入れて家々に賣り廻るを見る「葱に甘藷に大根買つて與れないか」と而して無邪氣なる處可愛ゆらし、世辭一つ云ふにあらざれど、皆呼び入れて買ふ町の店より買ふものに比ぶれば價も安く品も新鮮なり、されど都にくらぶれば比較的皆高し、米は東京の三等米が此處の一等米として賣らるゝなり。

△魚屋　町に行きて見るに魚屋らしき店一ッもなし、夏は有りしと聞けど今は俎乾きて魚影なし、只朝毎に濱にて漁れるものをかつぎて賣り歩くなり、故に新しき事は最　稱す可れども一度時機を失へばもはや其日は容易に得られず、都ならば所々の濱より寄りあつめたる魚を平均して賣る故に、其價格は大抵一定し居れど、此處は然らず、大漁の時には無代價程に安すけれど、二三日も時化續きて不漁の時には一尾の小魚にも驚くべき價格を生じて、而も融通きかざるなり、實に不便なり、而して價は平時と雖　東京と餘り異ならず夏は魚不足して二倍三倍にも騰貴するなり。

△縁日　此處にも夫れ〳〵神社佛閣の縁日ありて露店なども出づ併し其種類は東京と大に趣を異にせり、先其大半は食物店なり、兩側に並べる何れを見ても食物のみ、中にも多きは鮨なり、次に菓子屋。おでん屋。菓物店。しる粉屋。あまざけ屋等、殆ど軒を並べて滿されたり、まさかに之等の店頭に立ちて眺むべくも有らざれば、宮に參詣しては直に家に歸るなりけり之等を以て見れば此地の人々の嗜好も大かた知られて笑止なり田舍は凡て斯の如きか。

△人氣　人氣は一般に大人しき方と云はむか、生活の道比較的困難なる土地なるを以て、所謂無賴漢なるものは餘り居ず、他の田舍に比ぶれば富貴の紳士の別莊の大方を占め居るを以て、氣風も何となく床し、子供の物云ひなど中等社會の家庭に於ても誠に美し、之も別莊のある爲ならん、之と同時に人の氣の長きにはあきるゝの外なし、凡て何によらず注文するものは二ケ月位前より賴み置かざれば、其時の間に合はざるなり、二三年前迄は月末の拂ひなど云ふ事はなくして、年に二度大拂ひをなすと云ふ有樣なりしが、今も所々に殘

り居て、月末になりても容易に勘定せず、誠に呑氣なるものなり、今一ッは此土地に士著の人の如何にもけちん坊なる事なり、謙倉幕府廢れてよりは只一の村として寂しかりしもの、明治になりてより海水浴場として多くの人々入り込む樣になり、此處に土地を持てる人々は意外の富を得たり、夫故之等の人々の内には隨分富豪なるもあり、然るにその富豪が中中けちん坊なり、こせこせとして五錢の錢も容易に出さざるなり。何にしても狹き處故、少しの事も直に夫れから夫れへと傳はり、一旦落目に向ひては容易に浮ばれざるは之田舍の常ならんか。

△氣候　冬は暖かに夏は冷しい之が通則で冬の内でも南風の時には殊に暖かい所謂熱帯風の餘波のお蔭ならん、東京などに比ぶれば綿入の一枚位はちがふと云へど、夫も餘り大業な話、兎に角夏は避暑に冬は避寒にとでも云ふべきならん、冬になりても日當りの宜き谷合ひなどに行けば、菫も咲いて居れば蒲英も咲いて居るなり。



大阪や京都の雨は縱に降り、東京の雨は横に降ると云へど、此處は東京處でなく、雨と來たら必ず横降りなり、兩側に家の並び居る處は只長谷の町の近所のみなるを以て、外は多く風の吹き通しなり、故に自然に横降りとなるも當然。雨ふりの日には滅多に外出は出來ざるなり。

△風俗　土地の人は云ふ迄もなく皆質素なれど東髮の

結ひ様などは大抵東京と異ならず、大きく前髪ふつくりと出して、所謂ハイカラ的の束髪に結ひ、藁草履はきて柴などかつぎ歸る處一寸愛嬌なり。

この土地に藝者も居れど無論東京の粹とは比べものにならざるなり、又蕎屋しる粉屋の何によらず飲食店なれば、招げて騒ぐなり、今はつぶれて有らざれど我が居る向ひに團子屋のありし時分は、此處にも藝者を招げて騒ぎし事あり。

面白きは此處の大工なり、仕事を云ひ付くれば殊勝にも朝の六時頃より來る、而して朝飯食はずなれば雇主の處にて食するなり、晝も辨當など持ち來らずして其家にて食し、夕方も然り。而して所謂お八ッの時分には菓子類にあらずして大なる握飯二ッ三ッに香の物にて茶を出すなり、一人二人ならばさして世話にも有らざれど、十人二十人を雇ふ時には隨分の大混雜なり。

夫から東京では市内を裸足で歩く事は出來ざれど、此處では平氣なり、隨分中等以上の人が素足に草履もはかず、海水浴用の帽子を被りて町を歩み居ても何とも云ふ人なし、日本橋や京橋の眞中を此風して行かば婦人にあらずとも人があつまつて來て見るべし、自分も初めの内は何となくをかしかりしが、此頃は馴れてやはり人並にはだしのまゝ飛び出す事あり。

はだしの事より思ひ出でたるが、此處に來てより足袋の切るゝ事非常なり、海岸の砂地は凡て然らんも、下駄の緒と足袋との間に砂はさまりて磨り切るゝなり、斯る處に居ては下駄をはくよりも靴を用ゐる方遙に經濟なり。

△よく見るもの　いつも見るものは師範學校の生徒と圓覺寺建長寺の坊主なり、師範學校は神奈川縣立のものにて生徒は三百人許り、東京の學生の樣に元氣は無けれど其代り眞面目に勉強して居るらし、圓覺寺と建長寺とには多くの學僧も居らるゝなり、圓覺寺にては五十人づゝ人數を定めて諸國より集め、宗教上の修業をするなりとぞ、而して此處に來たるものは此鎌倉附近に托鉢に出で此布施によりて勉強し、生活して行くなり、建長寺に居るものは然らず、自ら月謝を

出して修業するなり、此等の中には將來坊主の目的にあらずして、只單に禪學研究の爲に來たるものもあり、故に大學を卒業したる學士などもあると云ふ事なり、圓覺寺の坊主は深きすげ笠をかぶり、建長寺の坊主は大學院の生徒が用ふる如き形のものを用ひ居れり。

又此十月より鎌倉女學校と云ふが設立せられたり猶初めの事とて生徒は僅に三十人餘りなれど、高等女學校程度にして從來學事には餘り熱心ならざりし、此地に此設立を見るは此地方女子の幸福なり、中には專攻科專修科などもありて、一科目にても二科目にても專攻する事を得るを以て、暇ある夫人方には、最便利なり、健康の爲、精神修養の爲、都會の雜踏を避けて山水明媚の地に學ぶ事を得るは最此學校の得意とする處ならんか。



△四方の景色　勿論何處に行きても皆好景なり、兎にかく鎌倉幕府以來永き間日本の中心となりて、在りし處だけに、我等が詩歌の材料となるものは至る處に山をなせり、一寸由比ケ濱に行きても右を見れば稻村ケ崎怒濤の中に突き出でたり、左には逗子葉山あり、顧れば山又山連りて其間々に人家散在す、前にも云ひし通り箱庭的なるが故に、か弱き婦人の足にも彼の山より此山と思ふまゝに渡り行く事を得るなり、八幡宮の後の山の頂迄登り見れば、若宮大路の兩側の松はの黑く連りて、由比ケ濱に終り、一帶の入り海目の下に

宛も箱庭の池の如し、雲を隔てたる箱根足柄の山々、大陽の光りを受けて谷間は黒く峰は赤く見ゆるなど、實に絶景なり、殊に此頃(十一月初旬の)朝夕の寒さは少し身にしめど、四邊の山は綠黃紅こきませてさながらの錦之のみにても中々の見物なり、されど土地の人は此自然の美を何とも感せざるが如し、殊に岩角にからむ蔦蔓燃ゆるが如き紅なる勇士の血汐にさも似て、時節がら感慨無量なり、市の東西を貫く滑川の流れ悠々として無言の中に歷史を語れり、由比ケ濱の朝景色又格別、殊に日曜の朝など行き見れば丈け高き外國人が銘綫の綿入に白縮緬の兵兒帶などしめ其大なる足に白足袋をはき、駒下駄を引かけて無格好なる樣して彼方此方と散步せるに逢ふ、これ等外人の中には我國に歸化して日本婦人を妻とし名さへ和名に改めたるありと。

△樹木　鎌倉には櫻の木は餘り多からず、又大木とならず、之は汐風にあたる爲に其成育に適せざるなりと、柿の木は隨分處々にあれど皆澁柿にして木より直に食せらるゝものは此鎌倉に唯三本よりなしと云ふ。

△此頃の鎌倉　戰爭が初まりて以來は猶更に寂しくなれり、兵士の葬式も度々出でたり、多くは旅順にて戰死したるものなりとか、此葬式には鎌倉の町の消防夫は總出にて肩の處を赤く染め拔きたる白半纒を着て、旗を立てゝ眞先に進む、其次に樂隊行く、此樂隊は町の有志の少年達を集めて、組織したるものにて、黑の筒袖の紋付を着て白足袋に麻裏草履と云ふ扮、一寸格好よし、之が皆少年なるを以て殊に目立ちて見ゆ、之等が皆殊勝げに悲哀の樂を奏してねり行く棺は大抵小さき箱をのせて正面に四ツ切り位の板の寫眞をさげ。之を寺に納むるなり、棺の後よりは大抵町内の重立ちたる人は伴して行き、小學校の生徒も行くなり、たまさかに君の御爲、國家の爲に名譽の討死をせしと有りては限りなく貴く、斯く大勢の人が送りて行くにぞある、

(完)

青泥窪の一品料理

桂陵

青泥窪とは無論ダルニーの事を云ふのですが、之を以て直ちにダルニーと讀ませたのはちつと間違つて居ります。ダルニーとは露西亞人が來て初めて命けた名で、支那字で書くと大立內となる、現に其の商業會議所や停車場では大立內公議會、大立內火車站と書いてあります。青泥窪と云ふのは其の以前此處に東青泥窪、西青泥窪と云ふ二つの村があつたので守舊的の支那人が今尚ほ其の名を襲用して居るに過ぎないのですけれども、日本人は皆青泥窪と書いてダルニーと讀んで居ります。偶、大立內など、書いても通用しません、それで私も仕方なしに青泥窪の一品料理と題し、屋臺店の御話をする譯です。



扨て屋臺店の御客樣と申すと何處も同じ下等社會の人足連が多いのです、支那の人足即ち苦力の常食は麵包でありますから、青泥窪の屋臺店でも一番多いのが麵包屋である。眞黑な小麥の粉で製へた、直徑凡そ三寸計の圓形の麵包が一つ四文。それから直徑一尺計の中に黑砂糖の塊が丁度饅頭の餡の如く入れてあるのが一斤六十四文。外に又玉米麵包と云つて、玉蜀黍を潰して挽いて其の粉で製へたのがあります。是は一斤廿六文です。通常の麵包は何だが

咽喉へ支へる樣な氣がして食べづらう御在ますが玉米の方はザラ〳〵して居ても其の恐れがないから喰べ好いのです、苦力等は之に生葱一本、韮一株を副へ其も泥のついたのを洗ひもせず、皮一ッ剝いてポリ〳〵やつて居ます、少し贅澤な奴になると鹽豚を食べますが。然かし鹽豚と云つても決して腿肉の鹽漬ではありません、皮のまゝ（尤も毛だけは取りますが）安醬油で煮てい丶加減煮立つた時分に、唐辛を入れるのです、値段は一斤百六十文。モ一段贅澤な手合になると豚の腸詰を食べます。之は鹽豚の肉を細かく刻んで腸に詰め、一度蒸して天日に乾したもので、ちよつと手數の掛つて居りますので一斤三百二十文から致します、麵包に次でよく賣れるのは粥であります、私が試に喰べてみただけでも左の數種あります、

△黍●粥　黍を搗いて其まゝ鹽水に投じドロ〳〵になるまで煮詰めてある。是はねばり氣が多くて中々うまい。大きな茶碗に一杯が五文です。

△粟●粥　之は少しパラ〳〵して黍粥ほどうまくない。粟の葉の鹽漬を副へて與れますが、其の鹽のからい事といつたら非常なものです。一杯六文取ります。

△豆●粥　豆は靑豆を用ゐますが豆許では粥になりませんから、半分以上米を加へてあります。之には鹽氣も何もついては居らず、一杯六文です。

△米●粥　米が所謂南京米だから少しもねばり氣がありません。然かし苦力達は之を贅澤な食物として舌鼓を打つて居ります。一杯十文です。

此の外營口より遼陽邊へ行くと鉤蜀黍（日本人が高粱と云ふもの）の粥を賣つて居ります。黍粥よりも旨いものだけれど、何故か靑泥窪には之を賣つてる處がありません。それで此等の粥は皆素燒の甕の中へ入れられ、埃だらけの大道に蓋もしずに晒してあるのだから、少しは牛溲も飛び込もうし馬浡もはね込むでせうが、賣るものも買うものも一向そんな事には頓着せず。木製の大きな杓子で始終之を攪拌はし乍らシーフアヌヤ〳〵ハヲデシーフワヌヤーと呼び立てゝ居ります、若し其の攪拌を休んだら最後、甕の表面は忽ち鼠色の

垢がたまりて、それには髪の毛や藁屑などが浮び出す仕末。迚もたまつたものではありません。
それから此の粥に副へて食べる物に蝦の搗辛があります。詳しく製法を聞きませんかつたから分りませぬが、一見灰色をなし、箸をつき込むと赭色になつた小蝦がウヂョ／＼して居る。鹽は飽くまで鹹く、唐辛が交せてあつて、其の上臭い事一通りでありません。けれど口に馴れると中々旨いものです。
然かし麵包や粥は常食であつて、未だ御馳走の部には入らぬ、支那人の御馳走と云へば何時も餛飩が出るのです。其處で此の餛飩にも又種々あつて料理屋へ行くと四八三十二通りの餛飩を出しますが、大道の屋臺店にはそんな贅澤なものはありません先づ一通り擧げて見ると



△韮餛飩　豚のソップで餛飩を煮て之に韮をパラリと入れたので一杯大概四文。韮が多くなると五文の處もある。

△味附餛飩　味附の中へ燒肴と豆と豚とを加へ、豆の油で煎りつけて餛飩へかけます、之は日本人の口にも合ひます。一杯十二文。

△鷄麵　本名チーミエンだけれど青泥窰では山東訛りでキーメンと云ふ。鷄を入れた餛飩で臭くも何ともありません。一杯廿四文。

△炸麵　ツアーミエンと云つて餛飩を豆の油で揚げてそれに鷄肉の油でいためたのを交せて食はせるのです

一杯六十文。

以上は屋臺店の賣品の重なるもので、飯時になると埃と垢で眞黑になッた苦力が其の前へ立列んで餓鬼の如くにパクついて居ります。小さな小供までが自分の顔より大きな茶碗を抱へ込んで、往來に向て蹲まり、傍の石に菜の葉を一枚敷いて其の上へ燒豕の食べ懸を載せて置く處など以前の米僊にでも描せたら餘ッ程面白い圖が出來るだらうと思ひます、此外齊泥窪の街で能く目に付くのは、

△饅頭●　豕饅頭と餡入の二種類があります。前者は豕の肉へ葱、韮などを刻み込んで小麥の粉で包んで湯煮たもの。後者は麵包へ黑砂糖と豆の粉を入れたもので、値段は一ッ四文と三文です。

△粽子●　日本の粽で之には粟と糯との二種類ありまず何らも一度炊いで三角形に結び、笹の葉で巻いて又それを湯煮たので、乾した棗が三ッ位づゝ入ッて居ります。中々風味の宜いもので製へ方を奇麗にさへしたならば必らず日本人の口にも合うだらうと思ひます。

△鹽魚●　支那人は野菜を生で食べる代り、魚肉は決して生のまゝでは食べませぬ、必らず煮るか燒くかするのが、保存上大概は鹹乾にしてあります。就中最も一般に嗜まれて居るのは黃花魚で唐詩に「楝子花開石首來」とある、石首が即ち此の魚の事です。毎年三月の初め山東角に現はれ徐々に西して六月には跡を絶つのです。日本人の口には餘り感心出來ませぬが支那人は非常に之を賞美します。能く乾し上げた物は堅き事恰も石の如く叩けばカン〳〵音がする。苦力等は之をむしつて湯をかけて食べます。一片の價十文ばかり。之に次では太刀魚の鹽燒で小さく切ッたのが一片八文。飛魚の鹽燒が一尾十五文。鹽鯖の蒸燒が一片八文、之には唐辛が振りかけてあります。

△汁物●　は太刀魚や鹽湯で煮て之に韮をパラリと入れたものが一番歡迎されて居ります。一椀の價十文。牛の腸やら筋やらをグツ〳〵煮て唐辛をかけたのが一椀六文。東京邊の牛めし、其のまゝです。少し上等のになると鰈其他の魚を一度油でいためて、葱、韮、豆、藷、

椎茸等を交ぜ、小麥の粉を加へて汁にしたのがあります。一椀五十文で、苦力などの滅多に手を出す代物ではないのです。

△豆腐●● 之は中々馬鹿には出來ません。製法は日本と同じだか何樣だか知りませぬが、兎に角甕の中に未だ能く固まらない豆腐が浸けてある。それを手際よく茶椀へすくひ込んで、豕と豆とを豆の油でいため之に豕のソップを加へ、唐辛を加味してトロトロ煮詰めた汁をかけて食べます。

最も不味いものでは大豆と大根の葉の醬煮がありますいくら食べても代價は六文の定めであるが、鹹からくて〱如何な苦力でも一皿を平ぐるものはない。之に



反し豆のもやしに、酢と豕のソップを加へ、之を豆の油でいためたものは、一寸シヤキ〱して酒の副食などにはよさそうです。代價は一皿二文。

酒の肴と云へば支那には家鴨の卵の灰汁漬と云ふのがあります。本場は揚子江附近だと云ふ事ですが、滿州でも一方ならず賞味されて居ります灰汁が卵の殼を通して黃味は赤く、白味は黒く變じ手に取るとプーンといやな臭がして來ますが慣れると樂的にうまいのです。之を食物店で賣らずに煙草屋や瀬戸屋などで賣つて居るのも一つの不思議です。

此の外許泥窪附近は一帶に水の惡い處だからして、苦力と雖も用心して滅多に水を飲みませぬ。飲むには必

らず一度沸してから飲むが、その沸す時に米を一握り位づゝ入れて沸します 毒消しとでも云ふ積りでせう。屋臺店のある處には必らず、此の湯沸所があつて錫若しくは鐵葉で製へた大きな湯沸器（釣中に爐をしつらひ、周圍に水を湛へ我が鐵砲風呂の樣な體裁）を備へ、一杯一文づゝで賣つて居ります。茶にしても矢張り値段は同じ事。宿舍にある私達も一寸顏を洗ふ湯などは、自分で沸さず多くは此の屋臺店から買つて來ます。バケツへ一杯五錢位の相場です。

日露戰爭が始まつて補助輸卒隊が大部入り込む樣になつてからは軍隊の炊事より殘飯を貰つて來て之を賣るものが出來て來ました。毎日夕方になると小供がバケツや麻袋を持つて「メシ〳〵進上」と叫び乍ら道を歩いて居ります。之が即ち殘飯の仕入れ方で、時としては飯ばかりでなく、豕汁や大根汁の御剩餘をも頂戴する事があります。すると彼等は之を市場へ持つて行つて折柄仕事場から歸つて來た苦力どもに賣ります。北の相場は兩手に一杯が大概一文づゝで丼位茶碗に一つ四文です。我れ勝ちに買ひ取つた苦力等は、垢の巾汗みづくになつた上衣をひろげて、それへ飯をつゝんで歸ります、少し位泥がついても砂が交つても、そんな事には御構ひなしです。

備考——一文とは穴の開いた錢一つで、多くは光緒通寶、康熙通寶等であるが、我が寛永通寶も大部交つて居る。支那の穴錢は凡て地金が惡くてボロ〳〵欠けて仕舞うが、寛永通寶には其の憂がないので至る所非常に歡迎されて居ります。殊に滿洲や山東でも田舍の方へ行くと銀貨が少しも通らない、大小の取引悉く馬蹄銀か然らずんば此の穴錢に限られて居るので、北の相場も中々善い。普通穴錢七百文乃至七百五十文が墨銀一弗で、墨銀一弗は即ち日本貨幣の九十五六錢平均であります、若し寛永通寶ばかり集めて持つて行くなら六百五十文乃至七百文で墨銀一弗に替へて與れる。運賃さへ引合ふなら、日本から之ればかりを持つて行つても一かどの商法になります

クロパトキン物語

霞村生

日露戰爭の始めから、滿洲軍の總指揮官として皇帝よりこの大任を受け、幾十萬の大軍隊を指揮命令して各所に戰ひ、よしや連戰連敗とは言ひ乍らも大兵を扱ふこと手足の如く、操縱よろしきを得て、英氣少しも衰へず、今や沙河方面に我が軍と對陣して徐ろに捲土重來の氣を養ふものは實にクロパトキン將軍なり、將軍は敵ながらも天晴見上げたもの個人としては現代のヒーローである。歐洲各國の新聞紙上一日として將軍の噂の載らぬ日はない、又其の噂に就ては毀譽褒貶樣々であるけれども、善く言はるれば勿論惡く言はるれば言はるゝ丈それ丈、將軍の人物の大なり、豪なる處であらう。又我が國で今日兒童走卒に至るまでクロパトキンを知らぬものはあるまい、八百屋のおかみさんでも、車屋の小僧でも恐らくクロパトキンを知らぬものはありますまい、クロパトは實に露西亞の天子よりもよく知られて居る。クロパトは實に世界現代の一大名物男である。さればこの名物男たるクロパト公が軍人として如何なる經歷を持ち、又其の青年時代はどんな有樣であッたかといふ事を知るのは、極めて必要な事であッて、且つ興味の多い問題であらう。人間の性質や品位や、



其の精力や、覺悟や、又志氣や、抱負や幷に事に當ッての決心といふものは、どんなに働らき、又どんなに影響するものであるかといふ事を知るのは單に軍人の生涯を知るばかりでなく又家庭教育の參考ともなッて實物指教に裨益する處があらうと思ひます。

其の　一

丁度今から三十三年前の事であッた、聖ペートルスブルクの士官學校を優等の成績で卒業した一人の幼年士官がありまして。其人の父はプスコッフといふ地方の名望家であつて祖先も相應に身分のある人だつたそうです。さてその父がこの幼年の卒業生に向つていふには、

「お前はこれから近衛兵に入營して禁闕を守護する役目になるか、それとも又他の活潑な聯隊に這入ッて露西亞朝廷の爲めに勇名を轟かすのが希望か」と問ひました、するとその幼年士官は言下に答へて。

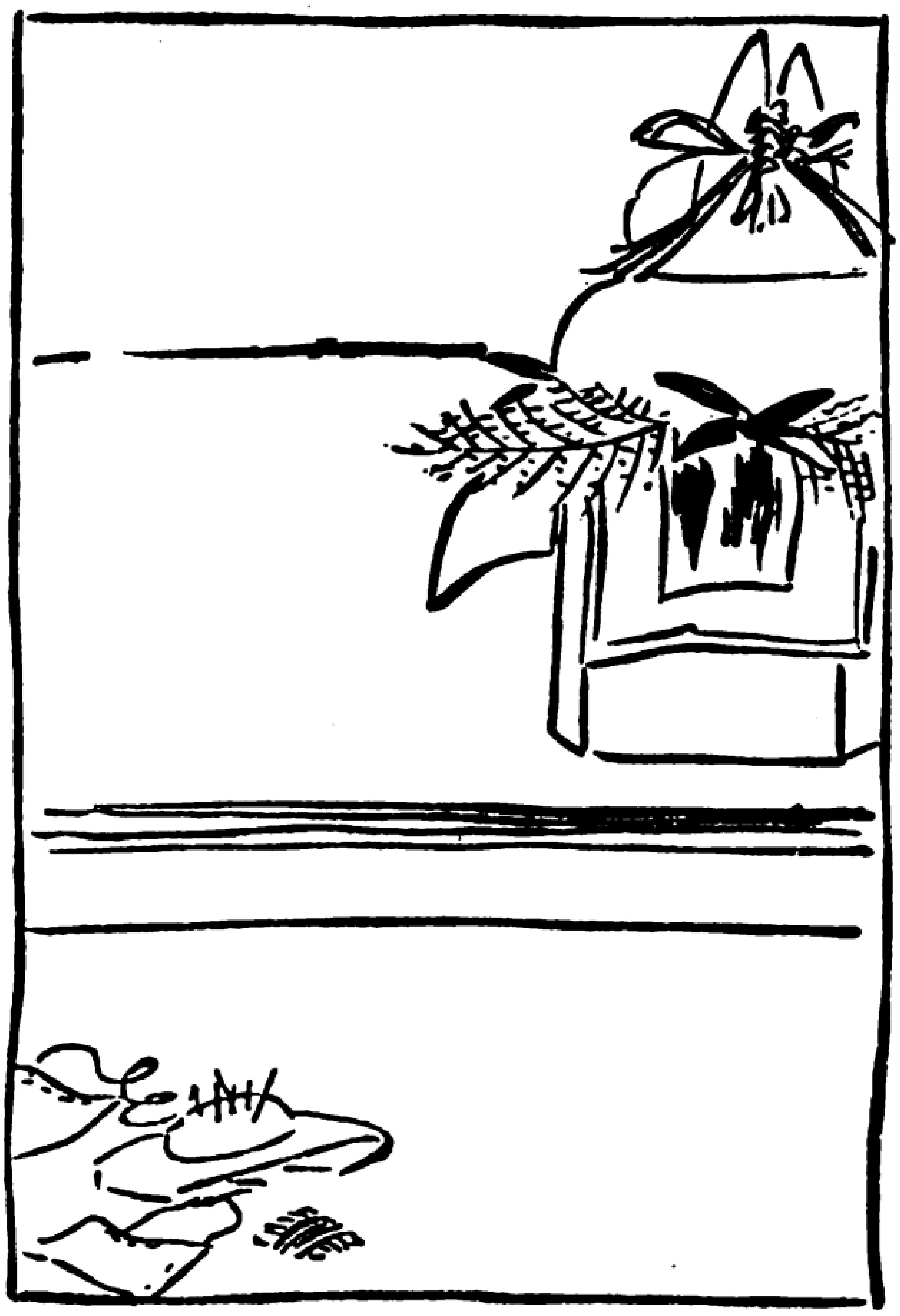
「嚴父、私はこれから中央亞細亞の方へ參ッて眞誠の軍人修業がして見たうございます」

と申しました。

近衛士官となッて皇帝に咫尺する事は靑年士官一般の希望であるけれども、それを辭して荒漠無限の中央亞細亞へ志ざすといふのは實に見上げた志である、ペートル大帝の遺訓にも露西亞は將來亞細亞大陸に向ッて大版圖を擴げねばならぬとある、其の大抱負をこの幼年士官は胸に畫いて居るのである。當時露國の軍人社會は大分腐敗して居る、武人が交際社會へ出入して美酒佳肴に飽き、流行を逐ひ、猥りに奢侈に耽つて居る、然るにこの幼年士官は我が眞の修業をするのは、この區々たる都會の地にあらずして、曠々たる蠻族の境にあるといふ事を夙に悟つたのである。そこで生年十八歲まだうら若き乳臭の齡を以て彼れは土耳古派遣隊の一士官となり、南部の方へ出發する事となッたのである。この幼年士官、そも何人である、これぞ、三十年の後滿州露軍の總司令官として五十萬の大兵の總大將となッた、アレキセル、ニコライウキッチ、クロパトキン將軍其人である。

其二

幼年のクロパトキンは生年十八歳で始めて軍隊に入り、密かに將來の英名を期待しつゝあった間に、ボクハラ、ンの戰爭が起りました。この戰爭は實に彼れが初陣ともいふべきもので、功名を樹て手柄をするには屈強の機會であったから、隨分勇敢なる働らきをしたのである。けれども、この戰爭には、當時露國に於ては日の出の名將として威名赫々たるスコベレフ將軍を始めとして、猛將勇傑雲の如く多かつた際であるから、斯る舞臺に一時の武勇を耀かさんにはクロパトキンのやうな幼年士官の到底及びもつかぬ事である。如何に明星の光りが美くしくとも太陽が赫



々の光を放つて居る間は到底その光明を爭ふ事は出來ないのと同じ事でクロパトキンの折角の武勳も當時露軍全體には知れなかつたのである。

然るにこのスコベレッフ將軍（當時は少將）といふのは實に一代の名將で露西亞の歷史にはキルギス戰役のコーフマン將軍プレブナ戰役のスコベレッフ將軍といつて、日本でいふと第一軍の黑木、旅順の乃木といふやうな、實に一徹、純粹の軍將で、英名世界に轟ろいて居る飛將軍であつた。其の有名なるスコベレッフ將軍がこの幼年なるクロパトキンを拔擢してプレブナ聯隊本部附の士官として軍事の樞機を司る一の要職を與へたのである。これが士臺と

なッてクロパトキンは段々と英名を軍隊の間に耀やかす事になッたのである。その間に彼れは佛蘭西に遊學して高等軍學の研究をし、又各地を歴ていろ〳〵と實地の取調をなしたのである。

其 三

斯るほどに間もなくプレブナの戰爭が起ッたのであるプレブナといふのは、土耳古の要害で、有名なるオスマンパシャといふ土耳古の大將が守ッて居る城であるこの戰爭は世界の歴史に特筆大書されべき大戰爭で、露西亞の困難をした事は非常なもので恰も今度の旅順口で日本軍が手痛き損害を蒙ッて居た如く、數ヶ月間の戰鬪前後六回の總攻擊も更に其の効を奏せず、稍く第七回目の進擊で始めて陷落せしめた大難戰であッて露軍の死傷は毎回幾千人を以て數へ、一時は三晝夜の立つゞけの戰鬪で時の旅團長スコベレッフの一隊は手兵僅かに三百人になるまで戰爭をしつゞけ、將軍身から十數個所の傷を蒙ッて漸く陷落せしめたほどの惡戰場であッた、此大激戰の時クロパトキンは漸く少佐で、スコベレッフの參謀を務めて居たのである。戰爭が終ッて後、世上で樣々と軍の評議があッた時、クロパトキンはどんな働らきをしたかといふ事が噂されると或る一の士官が、「ナニクロパトキン!あのクロパトキンか、あれは實にエライものだ、彼れの勇氣は實に感ずるに餘りありだ」といつたから、「それではどんな働きをしたか」と聞くとその士官の言ふには、「あれはスコベレッフ將軍の背後に立つて一歩も動かなかつたのだ!」と答へた。

千言萬語の賞讃よりも、その一言が實にクロパトの勇氣を表する適當の評語である、スコベレッフ將軍の背後に立ッて一歩も動かなかつたといへば、どんなにそれが勇猛で、且つ軍人たるの面目であッたかは知ない、抑もスコベレッフ將軍の猛鋭なる事は天下萬眼の舌が捲いて懼ろく處ろである、一軍の大將として如何なる時でも砲煙彈雨の間に立つのであるからこの大將に接近する事は通常の士官の到底なし能はぬ處ろであるから、この一言を與へられたもの丶如何に軍人として

名譽であるかは知れない。殊にスコベレッフ將軍は戰塲に於て最も勇敢であると同時に平時人材の選拔についても精密であッたが、その將軍が特にクロパトキンを擢んで、自己の股肱としたのを見ても又尋常普通の士官でなかつたのを知る事が出來やう。クロパトキンが戰塲に出づるや常にスコベレッフ將軍と相携へて奮戰し曉より眞夜中に至るまで戰鬪を繼續する事が度々であッた。而してこの戰塲にあるや自己の職務を完全に果す上に常に周圍の兵卒に注目して其の監督を等閑にせず、假令は砲兵などが發射に不熟練であるのを見ると直に其場に駈つけて、「お前達それでは行かぬといつて自分でその砲身を取



りて懇切に發射の方法を教へ又工兵が掩堡を築くのに手段を得ず當惑して居ると又自分で其の仲間に這入ッて兵士と一緒に立働く樣な事もあッた、兎に角注意が全般に亘ッてよく働らき如何なる困難にも屈する事なく、如何なる時でも始終火が燃へて居る樣な人物であッた。そして戰鬪が始まると恰も軍神の如く猛然として戰塲に馳せ向ひ、スコベレッフ將軍と兩々相並んで全軍の指揮を取ッて居たのである。それ故、彼れが纏ふた白色の軍服は血と硝煙とに汚れ居るにも拘はらず、退けば先づその士卒の健康に注意し負傷者は直ちに看護隊に命じて叮嚀に看護をさせ、それから夜を徹して徐ろに薄暗いランプの下で將

來の鞠戰を廻らすのであッた。其の精力の熾んな事其献身的の精神の旺盛な事、實に近代に稀なる人物であッた。當時スコベレッフは五十餘歳の盛年であッたが、その副官たり參謀官たるクロパトキンは三十四五歳の壯年であッた。

其　四

プレプナ戰役は土耳其と露國の死命を制する大活劇であッたが、幸にスコベレッフ將軍の比類なき勇戰で以て之を陷落せしめた。然し乍ら其の損害も又實に非常なもので、クロパトキン參謀が負傷した事も前後十二回であッた。けれども幸に急所を免れて命を全ふしたのは是又絶代の幸運兒といつてもよい、よくいへば天がこの大才を擁護したのである。彼れはこの如く大負傷をなしたにも拘はらず嘗て一回も病院に入ッた事はなく、いつでも天幕の裡で軍醫の治療を受くるのが常であつた。或る時は其の軍服を寸々に裂かれ、血は繃帶を衝いて額より泉の如く迸り顔の色は臘の如く青白く變つて居るにも拘はらず、猶自若として看護手の腕によりつゝ徐ろに左右を指揮して他の負傷士官に注意しつゝあつた。この時一士官はクロパトキンの傷の容易ならぬのを見て、切に入院を勸告したけれども彼は斷然として之を拒み、翌日は又平然として戰場に立働らいて居たので、他の士官達はいづれも其の勇氣に勵まされて、却て自分等の氣慨の足らぬを愧る位であつた。

けれどもクロパトキンは自分の勇氣に驅られて部下の士卒が危險を冒すのを堅く止めて之を勞はるといふ風であつた又偶々部下の者が偉勳を立つる事でもあれば彼れは立ちて手を打ッて、兄弟よ、うまひ事をやつたよ」と賞めつゝ自分の天幕の中に連れて來てブランデーなど與へて萬歳を唱ふるを例として居たから同戰爭中一軍の將卒は皆彼れを目して文武兼備の名將と呼び尊信をして居たのであッた。

其　五

クロパトキンの青年時代は多く中央亞細亞で過されたのである。千八百七十九年露の大將ラザレフカ、ゲオ

クチープで大敗するや、皇帝は特にスコベレッフ將軍を選拔して復讐軍の總指揮官に任命した、そこでスコベレッフは又もやクロパトキンを自己の幕僚として招き寄せた。するとクロパトキンは自分の率ゐて居る軍隊を携へてタスケンドを出發し、中央亞細亞を横斷してパミールに達した、その時の行軍は實に天下の耳目を驚ろかしたもので クロパトキンの英名は嘖々として傳へられるやうになッた、さてこの行軍の困難なりしとは――二十六日間一滴の水さへなき沙漠を旅行したのであるが、一兵だも生命を失ッたものゝなかつたといふ事である。



クロパトキンはスコベレッフ將軍と相携へてラザレフ大將敗軍の復讐を行ッたが、其戰爭は前後凡一ケ月間にトルコマンの敵兵を殺すこと二萬人、見事にこの要砦を乘り取ッて、敵は元より遙かの後方に扣へて居る印度の英國軍人をして膽を寒からしめ其名は遠く英の本國へまでも傳はりて露にクロパトキンといふ猛將があッて、迂濶に手出のならぬといふ事を知らせるやうになッた。

其六

千八百八十二年スコベレッフ將軍の逝去するや、皇帝はクロパトキンを中央亞細亞から召還して陸軍省に入れてある職務に就かしめられた、これまでは唯武邊一徹の猛將であッたクロパトキンも爾來は中央政府の軍務省にあッて事務を取る事となッた

が、政治家としても又非凡の技倆を顯はし、先帝アレキサンダー三世の信任を受けて遂に政府の機密を扱ふ人となッたのである。クロパトキンが政治的方針としては常に亞細亞に於ける露國勢力の發達を希望して居ると共に戰爭は飽くまでも忌避する方で、平和主義は實に彼れの本領であッた、然るに我が日本の眞相を知らざる極東總督アレキシーフが徒らに露國の大を負みて濫りに横暴の策を立て丶、日露の開戰を促がし、戰鬪いよ〳〵重大となるやクロパトキン將軍は陸軍大臣より滿洲軍の總指揮官に大命が下ッたのである。嗚呼一世の大人傑よ、勝敗は固より時の運である、たとへ露軍連敗し、ハルピンを失ふて遠くバイカル以東に退營するも、好漢クロパトキン將軍の價値を左右するには足らないのである。

髷のはなし

考古博士

歷史に趣味のあるのは世の中の事物の變遷の跡を尋ねる處ろにあるので、一塊の土器、一片の瓦も前代の遺物であるとすれば、其の興味も又尋常一樣の物とは違ふて見られるのである、併し一と口に事物の變遷といつても、其の中にはいろ〳〵の物がある、まづ大別すれば政體上の變遷、生活上の變遷、宗教上の變遷、文學上、科學上の變遷、といふ樣なものであるが、政治上、風俗上の變遷の中にも又いろ〳〵の區別があッて、たとへば家屋の變遷、食物の變遷、衣服修飾の變遷といふ樣に別れて居る。

そこで今茲に御話申上るのは風俗上に關する事で即ち婦人の髮飾、結髮の變遷といふのであります。尤も變遷といつても爰には唯太古中古に區別して其の風俗好尙の移り變りの梗概を述べて見ませう。

◎太古時代

太古は即ち日本の神代であります。我國神代に於ける婦人の髮は勿論垂髮でありました、これは何處も同じ未開草昧なる時代の風俗でありますが、髮の生へた儘後へ搔き垂れたのでありますけれども神代にも髻と

いふ様なものがあつて、麻の緒や、葛で髪の根を括つて下げたものである、そして其の髪の飾は如何なるものであつたかといふに是も誠に天然の儘で、古い書物に日かげの鬘といふ事がある通り種々の葛で髪を捲いて其の捲いた葛に樹の枝や又草の花などを折つて挿んだものである、これは世界萬國いづれも同じ風俗であつたものと見へて支那の昔しの天人を見ても、又西洋の古代の女神を見ても大概同様である今日婦人の頭髪に挿頭を挿のはこの風習が遺つたものでありませうそれから又早くからあつたのは玉の鬘、玉のかざしなどで、それは今諸方の古い塚穴から出る曲玉、管玉の緒に繋ぎて髪の飾にかけたものである。



(一)元祿以前の風俗にして今より凡二百三十年前の髮の結方なり、この時代の畫工は菱川師宣一派なり

(二)元祿以后寶永までの風俗今より凡二百年の髮の結方なり、此時代の畫工は鳥居清信一派即ち鳥居派といふ

(三)享保時代今より凡百八十年前畫工奥村政信、西川祐信等

(四)天明時代今より百五十年前畫工は鈴木春信、歌川豐春

髪の事はまづそれとして、其髪を梳づる櫛に就て御話をすると、其櫛は後世の物とは大に形が異ふて居る、後世の櫛は横長いのであるが、太古の櫛は縦に長く丁度、西洋の櫛に似て居る、唯西洋の櫛は少し器用に出來て居るといふ丈である。ザット長さが一尺、幅が二寸五分位あつたもので、古事記に伊弉諾尊が伊弉冊尊の御崩れになッた時、其の櫛の歯を缺いて紙燭にしてそれの先に火をつけて御覧になッたといふ事がある。

それから人皇の代になッても婦人の髪は矢張ずつと垂髪で生たまゝ搔垂れたものと、髻を二つに束ねて垂れたものとの二つでありま

した。尤も男子は昔時でも女よりは荒く働くので女のやうに後ろに垂れて居ては都合が惡いからして、ミッラといつて髮を二ッに分けてグル〳〵と兩端に唐子のやうに結ふたものである、勿論男子も又女と同樣垂髮で居たものもあつた、彼の神功皇后が三韓を征伐なされた時、神に禱る海水の中に髮を御浸しになッて、二ッに割れば男裝して征伐せん、もしそれが往かなければ一つになれと仰せられたら、髮が別れて二ッになッたといふ事があります。

◎中古

それから段々と時代を經過して三韓との交通も頻繁になり、支那の風俗を傳へて髮の風も趣を變じ、男子は髻を束ねて束髮のやうにした時代もあッたが、女子は猶依然として垂髮であッた。太古に於ける髮の飾はどうであッたかといふに、人皇の始め頃は婦人はおすびといつて巾の廣い帛を垂髮の上から被つたものでむる、これが後世の被衣である。又垂髮の飾りとして緒に貫いた玉を鬘に卷き、又草のかづらを頭額に卷たり、樹の枝などを鬘に插したりして居りました。けれども一旦唐の風俗が輸入してからは頭髮も又唐風を競して種々金銀のかんざしなどを插し、又寶玉を以て飾るやうになりました。つまりかつらを頭に卷きつけるといふ未開の風を脱して一歩文明の域に入ッたものであります。これが奈良朝時代までの有樣でした。

藤原朝時代となッて髮の飾はどんな有樣であッたかといふに、この時代は極めて簡單なもので平素は殆んど飾りをしなかつた位である。王朝文明の盛時に髮飾がなかつたといふと聊か異に感ぜられるが、これは何故かといふに此時代の貴婦人は容易に人に逢はない、大抵は車などに乘ッて外出の時も顏をかくして居たから、髮飾りの必要が少かつたのである、けれど朝廷の儀禮などの時け髮揚といふ事があッた。

又此の時代の下流社會の婦人は垂髮では勞働するのに都台がわるいといふので端をくる〳〵と結んで居た、すつと下ッて戰國から德川時代になるまで上流社會の婦人の髮の風は著るしい變化もなかつた、中流以下

の社會には德川の中世頃から様々に變化し又髮飾の具もいろ〳〵と意匠を凝したものに移り變りました。

それから彼の笄といふものは元と男子の冠を留める爲めに用ひられて居たのが、段々婦人の髮の飾の具となッて鼈甲などで造つて挿すやうになりました。又彼の耳搔の附いた簪は德川の中世から起ッたもので上流下流押なべてこれを挿すやうになりました。次に櫛も又其頃から髮の飾りとして盛んに流行し、高貴の品は玳瑁で造る樣になりました。



(五)天明以后の風俗齒工は勝川春章一派
(六)同時代の風俗齒工は北尾重政
(七)同時代の風俗齒工は歌川豐広
(八)凡百年前の風俗齒工は初代豐國

それから髮を固結せしむるに必要な油である、今日でも南洋野蠻國などへ行くと土人の婦女が石灰のやうな物で髮を固めて居る、髮に油を附ける必要は是と同樣な譯で、日本でも、むかしは蠟や、松脂を入れて煉油を造り、これに一寸匂のする香料を入れて煉り固めたものであつた。上代は美男かつらといつて樹木の液汁をつけたものであつた。それが段々と進步して鬢附となり、梅花油、伽羅油といふ樣な專ら髮の質を美麗にしたり、頭の垢を掃除する爲めの油が造られるやうになッたのである。猶結髮の變遷は近世德川時代に至つて尤も頻繁となりましたがくだ〳〵しく御話しては分り難いから圖に依ッて御覽下さい。

(完)

滿洲の冬籠り

沙河對陣中の一士官

十一月の上旬から今日(十二月廿日)まで、滿洲の日本軍は、沙河と申す大河を前に控へて、敵と對陣をして居るのである、其の前哨線は東の端から西の端まで十里以上にも亘つて居る、其の前哨では毎日のやうに、敵陣から砲彈の御見舞を受けてゐるのであるが、戰爭らしい戰爭はないから、後方に居る我々は此の處ろ暫らく休息の形ちで、大分退屈をして居る、そこで退屈の餘り、現在冬營の有樣を少しばかり書いて見ました、それには寒さの度合、防寒具、食物、遊戲などいろ〳〵ありますが、只自分の見た處だけを申すと。

◎家屋　沙河附近では一村約四十軒位でとても一般の軍隊に充て足らないから、此邊では中隊本部までは家屋內であるが、他は地の下を掘り開いて高粱稈を屋根として住んで居る、全く神代時の土人の生活が見るやうである。

◎炊事　は飯盒で三食分づゝ炊くのである、中々うまく出來るが、寒氣が激しい爲めに直きに凍ッて堅餅のやうになるには閉口である、夜間瓶の中の水が凍ッて瓶の破れる事もある。

◎井戸　一ケ村六七十戸の村に僅か三つか四つ位しかない、その井戸も中々深くそして水が淺いから汲みあげるのが困難である、兵士は飯盒やブリキの桶で汲み、梅干樽や、味噌瓶に容るゝといふ仕末、それ故大部隊の處では間に合はぬから河水を使用して居るのである其の川といつても幅は稍く二尺、深さは五寸位。

◎正月　も追々間近となつた、如何なる場合と雖も、必ず古來の儀式に依て歲を超さうと思ふのは當然である、只今の如く、幾十萬の大敵を眼前に控へて、イザ鎌倉と云ふ場合、何時にても準備を整へ、腕を撫して居つても來るべき正月丈は、出來る限り圓滿なる歲を迎へんとの考へで、夫々用意をして居る。

◎正月　を迎ふるには先づ第一に年の餠が必要である糧餉部よりは兵一人前、糯米五合宛を給した、併しな

から戰場の悲しさ、餅を搗くべき臼もなければ、杵もない、如何したら餅が搗けるだらうとの懸念は、當局者の頭に懸つて、種々研究の結果、遂に發見したのは、直徑二尺五寸位の柳の根元を以て臼を製造することである、併し肝腎な鑿もなければ鉋もない、兵隊の考案は遂に火を以て之を製すると云ふことにして、先づ外面は土人用の斧と、鋸とを以て其大體を造り、中の凹き所は木炭を澤山其上に燃して、漸次凹めて行く趣向である、一燃を加ふる毎に正直に圓く燃えて凹んで行き、遂に形の如き臼を製造することが出來た

◎餅搗 の景況を見るに、何れも二三十人の兵卒が、柳の臼に柳の杵を以て盛んに遣つて居る、如何にも年の暮らしくなつて來た、一方で轟々たる大砲の音、又他方では餅搗の音兩々相應じて一種の奇觀を呈して居る、戰場の歲暮、其他正月の準備としては各隊思ひ〳〵の趣向を凝らして計畫して居るが、多くは芝居を演ずるものと見え、彼所此所に芝居の稽古をヤッて居るのも見えた。



（九十共）今より八九十年前の風俗畫工は初代歌麿
（十一）凡七八十年前の風俗畫工は二代歌麿

◎宿舍 の前に張り詰めた氷、連日の冱寒に厚さ漸く加はり、其面恰も玻璃の如し、遂に此所は氷滑りの定舞臺となり、村中の小兒皆悉く集りて滑べり競を為す、トントン〳〵と驅け來り氷の上に乘ると、同時に兩足を開き腰を据、横樣にスーット矢よりも早く滑べり行く事、誠に容易げに且つ愉快らしきものである、見物せる兵士は興に乘じ仲間に入り、パタ〳〵と走り、氷の上に乘るが早いか、兩足をつるり、と滑べらし、仰向に轉覆する、他の見物一同拍手大笑、中

中に愛嬌あり、乘馬の要領でやれと叫び、自轉車のコツで行けと行ふ、冒險家の兵士は轉覆を厭はず、不器用の腰附で數次氷に乘る、其中を小兒等はスー〳〵と滑べり、果ては苦力の青年等も滑べり始め、氷滑りは愈々盛會となッた負けず嫌ひの我兵士、日ならず氷滑のチヤンピヲンを出すに至るであらう。

◎服裝　冬營の服裝は冬襯衣二枚、防寒襯衣一枚、直衣一枚、軍衣冬袴下二、防寒袷下一、軍袴、靴下等である、夜間は毛皮の直衣一着、防寒外套一着の外に腹卷などの用意あり、其他に尚ほ半靴下、防寒靴下、手袋、防寒覆面なども支給されて居る、廿七八年の時とは違つて陸軍當局の用意の周到には兵士等一同深く感謝し居る。

◎沐浴　滿洲の瓶風呂は有名なもので、先づ平釜にて湯を沸かし、之を土瓶に入れ、其の中に入浴する都合で中々氣持の好いものであるが、軍務に寸暇なきと瓶の數が拂底であるとの爲めで、滅多には這入ることが出來ない、そこで多くは手拭で體をふいてゐる、又たブリキの乾物箱を据風呂に代用し、露營の砲彈がらにて湯を沸かすこともある。

◎虱つぶし　陣中で最もつらいものは虱の攻擊であるホワイトボールや虱紐の用意はあつても、中々防ぎ切れない、却て虱の大集團を來すやうな譯だ、其故兵士達は暇さへあれば、日陽に並列して指頭の彈丸を以て虱つぶしを行つて居る、理髮にはバリカンを用ひ、髯は携帶の剃刀で時々剃つて居るのである。

◎物價　白砂糖一斤六七十錢、筆一本拾錢、封筒三錢乃至五錢、半紙一帖七錢、手拭十錢、煙草はピーコツク七錢、チエリー七錢、リリー六錢、刻煙草一包五錢羊羹十錢、其他の物も隨分高價である。

◎前哨　での話に、銃の引金が手に喰ひ付いて離れなかつた爲に、指の皮を剝ぎ取られたと云ふ話もある、又た或る山に居る兵士が朝、口嗽ひを仕やうと思ひ、水筒に口を付けた處、水筒先が唇に喰つ付いて其の肉を取られたと云ふ話もある、又たある歩哨が靴足袋三枚を穿いて居つたが、一番下の一枚が濡れて居つた

爲め、夫れから霰れが來て、遂に凍傷に罹つたと云ふ話もある、少々濡れた手では水筒が喰ひ付き、匕が喰ひ付き、煙管が喰ひ付き、小刀が喰ひ付き、洗面盥が喰ひ付く只だ此頃喰ひ付かぬのは露兵ばかりで、少しも手答へのないのは物足らぬ心地である。

◎休養　幾ら日本魂でも食はずには働けない、裸では凌げない、我が遠征の將士は前に述ぶる通り、鐵を斫るばかりなる滿洲の寒風を屁とも思はず、粉を飛ばすが如き西伯利亞の白雪をば、朝の茶漬と思ひ、元氣で達者で居るのは、ツマリ給養の行き屆いて居るからである、先づ一般兵士の服裝はと云へば、紀州ネル、莫大小の襯衣、ヅボン各一組、襟毛の防寒外套　毛皮の胴着手袋大小各一對、靴足袋半靴足袋、覆面の頭巾（莫大小製）と、上下の正服がある、夫れで尚ほ足らぬものは、各々が別に夫れ夫れの持合せがある、何うにも融通が出來る、又た前哨の士には總毛皮付きの外套も渡る、靴は此頃試驗の爲め土人の皮靴を歩哨の士に給されたが、此の皮靴のなかにはウーロ草といふ、恰度細い鐵の様な干した草を揉んで詰め込んで置く、コレはなか〳〵暖かなさうであるが、只だ不便なのは穿きッケぬものだから、立て居る時は宜いが歩く時や山なんかを登る時は滑べり勝で、日本人には具合が惡るい。

◎食物　はと云へば、生肉には牛もあり、山羊もあり、野菜には靑菜葉、馬鈴薯、薩摩芋、里芋、牛蒡、蓮根、干大根其他魚類には開き鱈、開き鯛、鹽ブリ等鑵詰類には鮭、牛、鰯等漬物には福神漬、奈良漬、大根味噌漬、梅干等其の外汁及煮漬には豆腐、麩、白ウヅラ豆延喜豆、ソラ豆、アラ目、昆布抔で一々漏れなくこゝに書き記さずとも大體は先づこんなものである。

◎酒　朝早く水筒を提げて酒保に飛込みオイ酒を二合ばかりといふと、店主は澄したもの、手前共では枡賣は致しません一塊ですか二塊ですか自分は頗る不審、ハテ妙な事をいふ男だと、ジッとその顏をのぞき込むや、店主思はずフッと噴だして、ト申す譯はこれ御覽なさいと、酒樽の掩ひを取つたところを見ると、これは意外、中は一面の氷。

詩人の家

（醉名）

南天の實はうなだれて
水仙姫は寒げなり
青葉生垣ひまをあらみ
庭は外より透いて見ゆ

年新しく來れども
春咲く種子の覺束な
地に蒔かれたる内畑
すゞなすゞしろ霜に伏す

都境を出たれど
若き主人が詩の名を
通りすがらに私語きて
ふりかへり見る小さき家

杯擧げて詩の爲に
好き歳うたふ賓客の
一人二人に日は暮れて
繪葉書多く來る哉

他の娘をあづかりて
彈初強ふる爐の邊
妻は蜜柑の露吸ひて
新しき詩を讀みもせず

燈火更けぬ睡れ子よ
詩人の家の幸福は
夢の翅に乘りて來る
汝の如き神に求めむ

戀愛神聖の說

X先生述

戰爭の眞ッ最中、戀愛などを說くは、迂濶の事のやうだが、今日社會の實際の有樣から見ると、決して、閑問題ではない、或は旅順な陷落するより大問題であるかも知れぬ。

今日いづれの小說を讀んでも、概れ戀愛を說いて居らぬはない、或は新体詩、或は小說、又文壇の一方に於ても、戀愛の神聖とか、自由戀愛とかを說いて居る、夫れよりも猶甚しきは、男女の若い學生達の間には、戀愛の實行が盛んに有る樣に思ふ、我邦古來よりの風習は、戀愛など口にするとへ厭つた位のものである、然るに夫れですらも實際の方面には行はれて居つた、然るに今日では啻に公然之れを口にするのみならず、神聖などゝいふ名の下に實行して居るのである。

何が故に戀愛は神聖であるか、戀愛とは、英語のラブであるが、此ラブといふ、即ち愛といふ字は、宗教、道德の方からいふと、神のラブとかいへば、殆んど基督敎の新約聖書の精神になつて居る位、佛敎、儒敎に於ても亦然りである、思ふに即ちラブといふ字が、戀愛の愛の字なるが爲めに、戀愛は神聖なりといふ事になつたのではないか、併し神の愛、神に捧げる愛と、若い男女が目尻を下げてする愛とは私は違ふ樣に思ふ、この愛では神聖といふ字が出て來ません。

思ふに戀愛を神聖視する所以は、戀愛なるものは、他に於て爲すべからざる犧牲をする、戀愛の爲には辛らい事も耐へる、欲しいものも耐へる、之れを耐へて愛する人に捧げる、此點が小說でも新体詩でも說いてある所で、戀愛の爲めには自分の生命を捧げるといふ、凡そ人間として生命を捧げる、之れより以上の犧牲はない、夫れほど強い犧牲の心が起るから、戀愛は神聖である、神聖なる所以であるといふのである。

又、戀愛なるものは、貞操の依つて起るところ、即ち貞女兩夫に見えずといふ貞操の現はるゝ基であるといふ、是れはミルなどの本にも出て居つて有力なる議論である、其書に、男女のラブは、積極と消極との二つがある、一つは嫉妬であつて、其人より離れるといふ事を拒絶するといふのが戀愛、又一つは、戀愛の一番強い點は、英語のホーギーブ、人の罪を許すといふ事である、成程戀愛といふものは、人の罪を許すものである、日本でいふと、アバタがエクボに見えるといふ樣なもので、人の缺點を見遁す、其人に少しの罪があつても、愛の爲めに許す、之れは神樣のやうな心ではないか、恰も神が人間の罪を許すやうなもの、かくの如き心は戀愛ばかりで、外にはないといふ。

併しながら、以上に述べた戀愛神聖論の條々も、矢張り見樣に依るものであつて、實はソンなに難有くはない、第一の犧牲といふことを考へるに、戀愛といふものは、ソレ程利益を犧牲にし、生命を犧牲にするものが、成程ソレ等の事が、實際の上にもあるが、誰れが考へても、戀愛其は私情であるといふのは、爭はれまいと思ふ、嫉妬の如きものが、抑も其證據で、實は戀愛ほど犧牲を嫌ふものはない、場合によつて戀愛其者が犧牲にしない、勿論或點に於て犧牲もするけれども、戀愛其物を犧牲にしないから、犧牲の本領たる眞の犧牲でない。

戀愛といふものは、一定不變のものとは思はれない、何ものに對する愛であつても、いつまでも此品物が愛らしいといふ事はない、飽きる

ことがあるから、コンスタンストのものではない。

世の中には、許すべきものと、許すべからざるものとある、許すべからざるものも、許して見ると、自から滅法界の許し方で、正當の判斷を加へた積りになる許し方でない、依怙贔屓の許し方であるともある、兎も角も此戀愛が一の情である以上は、戀愛のみではない、すべてが盲目のものである、戀愛といふ情のみが一つ特別の情の樣に聞えるが、情といふものは、すべて然儀のもの、偏に情に訴へて事を決する上は、他の情も戀愛と一つで、金錢の情も、矢張り戀愛と大した差はない、金錢の爲めには、隨分生命の取り遣りもする、生命を犧牲に供してもやる事がある、知識の慾も亦然りで、寢食を忘れる事もある、斯くの如くすべて情が然りで、水の流れを堰き止めるが如く、物に自由すれば、ます〳〵昂進して來る、是れ決して怪むには足らない、昔、ニユートンが、數學の問題の爲めに熱中して、精力盡きて睡つて仕舞つて、フト目覺めて見ると、チヤンと問題の解釋は出來て居つた、疲れて寢むつて居ながらも、夢の中に解釋をしたのである、かくの如き心は、其激しさにおいて、戀愛の心と少しも違はぬ、戀と違つたものとはいへぬ。

又方面をかへて見ても。政治家の野心でも、野心が遂げたい場合に、人を殺す樣な事もある、又選擧の時、大競爭をして、イザ開票の結果、僅か何票の差で落選した爲めに、其人は氣絶したといふ事實がある、之れによつて見るも政治家の野心ですらも、戀愛の情程つよい事がある、故に若し戀愛を神聖なりとすれば、政治家の野心も神聖であると謂はなければならぬ。

然らば人間の心の内に、神聖のものありやいなや、有りとすれば、戀愛などではない、良心である、神の道理を奉ずる道心であるかも知れぬ、もし之れがなければ、善惡と害を知ることが出來ぬ、之れがあれば知ることが出來るから神聖であるか、知れぬが、理性にあらざる情が何が故に神聖であるか、其情と一つなる戀愛が何故に神聖であるか、私は解することが出來ない。

人は男といふ丈けでは半人前であつて、子を生むことが出來ないから、女を愛する、半人前のものから、一人前になるのだから神聖の愛だといふものがある、然れども之れを以て神聖なりとすれば、世にソレ位の神聖なるものは澤山ある、これ等の論は少しも顧みるに足らない、要する、戀愛神聖論が價を制して、互に愛し合つた男女であるから、夫婦にしなければならぬといふ自由結婚論が實行されたならば、隨分不都合な事であらうと思ふ、凡そ男子にしろ、女子にしろ、一人に愛せらるゝには限らぬ、多くの人より愛を受くる場合がある、その時果していづれが神聖かといふ事になる、たとへ其中最も厚いものと結婚するとするも、他の多數の愛は如何する、ソレ等のものは神聖の愛でないといふか、斯くの如き次第で、愛は盲目である、故に間違つたものを結び直すといふ事がなければ實に危險である。

こゝに戀愛を制する事が出來るといふ事に就て一言したい、昔から兄と妹、弟と姉との間に、隨分つよい情があつて、この愛情たるや同胞愛であるが、それは何故に戀愛とならないか、之れは兄弟の間に戀愛が成立つとはならぬといふ事になるから、之れを制することが出來るのである、故に他人の間でも戀愛は神聖でない、盲目であるといふ事にしたならば、前もつて之れを制する事が出來て。然らば戀愛に神聖なる位を與へて非すべからざるものゝ樣にするには及ばぬ

下宿屋の二階や、公園で成立つ戀愛に、何の神聖なるものがあらうか。

記事豫告

第五巻第貳號　二月五日發行

每月五日發行

定價表

一冊（紙數二百八頁）……金二十五錢
四冊（三ヶ月分）……前金九十五錢
八冊（半ヶ年分）……前金一圓四十五錢
十六冊（一ヶ年分）……前金二圓八十錢
内　定刊數……十二冊　增刊四回（一、四、七、十月）價格同一
郵税　一冊　二錢

廣告料

一行二十四字詰　一頁（六十四行）半頁（卅二行）
特等……　割引三十三圓
第一等　四十四六十四圓〇八錢　割引二十七圓
第二等　三十六錢十一圓五十二錢　割引二十二圓
第三等　二十九〃九圓二十八錢　割引十八圓
▲等級の位置〆切日等御照會次第御可致候

注文略記

●本館發行の雜誌は總て前金の外送本せず
●御拂込前金滿期切れ候節は送本停止す
●郵券代用は一割増にて五厘一錢の切手に限る
●總目錄御入用の方は二錢郵券相添申込あれ

明治卅八年一月十五日發行（第五卷第貳號）

編輯兼發行人　松原岩五郎
印刷人　水谷景長
印刷所　合資會社博進社工場　東京市小石川區久堅町百〇八番地
發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局　三千三百三十八番　二千六百二十番　三千二百二十九番

巖谷小波山人著

各編著名書伯揷畫

新刊 世界お伽噺 四種

六十六編 ●日の罰 ――北亞米利加の噺―― 片山春帆君畫

或る老兎が、太陽の側にひるねして、其毛を燒かれた恨から、お天とう樣を滅そうと思つて却て自分が世界涯の穴の中へ落つこちた珍々無類の北亞米利加のお噺

六十五編 ●森の女 ――印度の噺―― 筒井年峰君畫

ドクトル、バイヤア氏の手に集められた印度口碑集の中に「巨人の少女」と題したのがこの話の原文であります夫れを平易に日本文に譯したのが此おはなし

六十四編 ●龍宮の使 ――琉球の噺―― 田代古崖君畫

これは朝鮮の有名な話で曾て日本に留學して居た李人植と云ふ朝鮮人が日本文で綴つた物を土臺として新たに書き直したものであります

六十三編 ●熊むすめ ――西比利亞の噺―― 小峰大羽君畫

全世界の遺物たる一大奇獸の遺骨を得て、俄の富貴を極めしは熊を助けし娘の功、それもうつかり氷つた口から、榮華をバイカルの氷さ解けたが興味は解けぬ西比利亞のお伽噺……

巖谷小波氏のお伽噺は一特待の妙ありて他人の比準し能はざる所あるは世皆之を知れり而して此世界お伽噺は廣く世界各國に於ける古今の傳說口碑等を參酌して編述せられたるもの今や其六十餘編を出版するに至り江湖の歡迎亦日に月に加はる自今以後氏が輕妙犀利の筆を以て如何に有益多趣の讀物を公表せらるゝやは、請ふ既往に徵して知らんことを

每月二回發行全部百冊極彩色石版表紙每冊讀切紙數一冊約七十頁

正價

●壹冊金八錢 郵六冊

金四拾五錢 郵五十冊

金參拾貳拾錢 郵稅壹

冊貳錢

（後付の三）

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

(後付の四)

文學博士 柿崎正治君編
文學士 齋藤信策君輯

樗牛全集 第二巻 文藝及史傳

全壹冊洋裝總クロース金文字及金模様入裝幀△著者少壯時代肖像筆蹟寫眞入總紙數約一千餘頁
正價金壹圓五十錢 小包料廿錢

故文學博士高山樗牛君著

文藝時評

文學と人生、近松巣林子

第一期（明治二十八年九月より同廿九年九月迄）

運命と悲劇、歴史的精神、研究の道念と觀念、詩人と模倣と天然、文學と美術、日本西洋兩畫風の折衷、文化の關聯、天才論、叙事詩と叙情詩、何故に叙事詩は出でざるか、戯曲に於ける幽靈、退壇に臨みて吾等の抱懷を白す、

第二期（雜論）

文學會漫評、青年文人の厭世觀、武島羽衣の「小夜砧」を評す、演劇界の風潮と劇評家の責任、美術と道德、「文學界」の諸君子に寄する書、敢て日本美術史の編纂を促す、批評眼、明治二十八年の文學界、少壯漢學者に告ぐ、宗教小說の裏面の觀察とは何ぞや、女性作家に望む、賞鑒家と國民、時好と批評家春の家が「桐一葉」を讀みて、寫生と寫意、想と畸形、大塚文學士を送る、今日の新体詩家を警醒す、講談一策、美學史及美術史、一葉女史の「たけくらべ」を讀みて、俳句及任詩、俳句と符號俳句、鑑定家と批評家、鷗外に答ふ、一葉女史の「われから」、德富蘇峰君を送る、市川新藏、今戸心中と情死、能樂會、能樂の性質、脚本の批評法、田山花袋の「わすれ水」

第二期（明治三十年六月より三十三年七月迄）

我國現今の文學界に於ける批評家の本務、明治の小說、所謂社會小說を論ず、支那文學の價値、春の家主人の牧方を評す、坪內逍遙が「史劇に就ての疑」を讀む、史劇に關して再び逍遙に答ふ、小說革新の時機、（非國民的小說を難ず）、詩的の兩面、其利弊、カーライル氏の英雄論の餘評に就きて、ワルト、ホイットマンを論ず、ホイットマン（再び）、僞詩人とは何ぞや、文明の裏面、時代精神と大文學、友人某に與へて昨今の文壇を論ずるの書、土井晚翠に與へて當今の文壇を論ずるの書

第二期（雜論）

齋藤綠雨の色道論を讀む、鏡花に與ふ、「先秦文學」を讀む、藤田劍峰を送る、文藝に對する根本的誤解、現今美術家の精神的教育、美術家の絕好題目、歷史を題目とする美術、佛像陳列の可否如何、閱歷と空想、小說中に現はれたる現代の女性、德富蘇峰、市川新藏を悼む、少年演劇に警告す、藤鬪鉢の末路、柳浪の「畜生腹」を讀む、晚翠の詩、今の滑稽文學、最も悲しき聲、詩人唱はず、老人時代、作家自衛の法、實在と空想、詩書の誘惑、[illegible]記者の資格、ピヨルンとゾラ、疑問、たそがれの辭、一葉舟を讀みて、「國民の友」を惜む、滑稽小說の作者に告ぐ、自己の修養、漢文を書き換へよ、西鄉南洲の銅像を評す、民族傳說の蒐集、新建築と美術、評家及作家としての不知庵、藝術の尚古主義、詩人と批評家木村鷹太郎君に與ふ（富士新聞の發刊に際して）、本邦文章の問題、我國演劇の前途に就て、明治卅二年に於ける小說界の傾向を論ず、鏈山人の日本お伽噺、言文一致の標準、自然の作を讀まざる風、小說の意義、少年の文學熱、煩鎖學風、煩鎖學風と文學者、人名辭書中の文學者、人の出處進退、學者と文章、犢々錄（一）（二）（三）、無題錄（一）（二）（三）（七）

第三期（明治三十四年七月より卅五年一月迄）

文士批評家としての文學者（本邦文壇側面觀）、姉崎嘲風に與ふる書、作文論、現代文章私見、嗚呼風俗改革、笹川臨風が「奈良朝史」の首に書す、「元祿時勢粧」を讀む、元祿時代の側面觀、土井晚翠を送る、大橋乙羽を悼む、美術の保護者、將來美術界の一問題、留學生諸君を送る、無題錄、三十四年の文藝界、文藝雜誌、藝苑鎖談、裝飾と日本美術、雜誌

發兌元 東京本町 博文館

全書新刊

第百廿壹編

文學士 松本孝次郎君著

兒童心理學

（近刊）

上製五拾五錢
郵稅拾錢
並製四拾錢
郵稅八錢

抑も兒童心理學は兒の精神狀態を攻究し兒童の心的發達を明にするを以て目的とせり而して此研究は一方に於ては普通心理學と相待て心に關する問題を解決し他方に於ては普通心理學と動物心理學及民族心理學との連鎖をなし尙精神狀態上より生理解剖學及病理學とに關する所少からず是れ近時學者間にありて兒童心理學が心理學中の一學科として重要なる位置を占め最新研究として最も價値ある科學と稱せらるゝ所以なり著者教鞭を高等師範學校に執られ久しく斯學に進涉する所あり、此頃講學の傍ら本書を公にし以て將來斯學の進步發達に多大の貢獻を與へらる。

第百廿貳編

農科大學助教授獸醫學士小倉鉀太郎君著

獸醫學汎論

（近刊）

上製五拾五錢
郵稅拾錢
並製四拾錢
郵稅八錢

要目　家畜解剖、家畜生理、疾病及用藥外科手術細菌、馬の外貌及管理、馬の疾病、牛の外貌及管理、牛の疾病、豚の管理と疾病、羊の管理と疾病、犬の管理と疾病、鷄の管理と疾病、獸醫警察法

國運日々に隆盛なるに從ひ衣食住の變遷と軍備の擴張は家畜の改良蕃殖を促かし農業及び交通機關の進步發達は動物力の利用を增進せしめ家畜の增加と畜種の改良を來し隨て畜產事業に關係するもの、斯學の大綱を知ることは尙國民一般の普通學に於けると其必要の底を均ふせり故に本書は敢て學理の深きを說かす其一般大要を述べ愛畜家の參考に資せり

本町三丁目　博文館

大日本地誌

理學士 山崎直方先生
理學士 佐藤傳藏先生
共編

齋藤文學士大日方理學士大塚文學士田山花袋君補輯

第三卷 中部 出版

第一編

第壹章 地形概説＝尾張、三河、駿河、伊豆、甲斐、美濃、飛騨、信濃

第二章 海洋並に海岸線＝相摸灣伊豆海並に其沿岸、駿河灣並に其沿岸、遠江灘及其海岸、伊勢海及其沿岸、海流及潮、近時にかける重要なる地變

第三章 地質＝汎論、始原大統、古生大統、中生大統、御坂統及ひ三倉統、新生大統、噴出岩、地體構造、鑛泉

第四章 氣象

第二編

第一章 沿革＝石器時代、上古、寧樂朝より平安朝に至る、鎌倉時代、南北朝の時代、諸族割據攻伐の時代、豊臣氏の時代、幕府時代、維新以後

第二章 政治宗教＝行政、司法、軍事、教育、宗教、交通

第三章 產業＝農業、林業、水產、工業、鑛業、商業

第三編

地方誌＝靜岡縣、山梨縣、長野縣、岐阜縣、愛知縣

（正價二圓五十錢小包送料二十錢）

我邦空前の大著たる大日本地誌は、既に第一關東、第二奧羽の二卷を刊行し、今又爰に其第三中部の卷の發刊を見るに至りぬ。夫れ中部の地たる海岸線は關東奧羽に比して及ばざるも火山叢の形狀、河流の壯大頗る研究に價すべきものあり、殊に此の地方には中京名古屋の如き乃至は靜岡長野の如き繁盛なる都會を有するが故に、人文發達の上に注目すへき事多く、沿革はまた德川時代の爭闘史に富み商業、工業、鑛業、林業に於て他地方に卓越し、政治宗教、教育、地方誌に關して記すべき事甚だ多し。今此篇を編むに當つて、著者は凡て最近の材料に依る、

既刊

第一卷 ● 關東　正價貳圓五拾錢　小包送料十五錢

第二卷 ● 奧羽　正價貳圓五拾錢　小包送料十五錢

續刊

第四卷 近畿　第五卷 北陸　第六卷 中國　第七卷 四國　第八卷 九州　第九卷 北海道　第十卷 臺灣琉球（以上）

裝幀

全部十卷菊判總紙數約八千餘頁脊皮金模樣金文字入頗高尚優美

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

（後付の八）

女學世界定期增刊 小天地
(毎月一回五日發行)
明治卅八年一月十五日發行 第五卷第貳號 (明治卅參年拾貳月廿[illegible]日 第三種郵便物認可)

謹賀新年



本舖 東京日本橋通四丁目 (電話本局千九十七番) 津村順天堂
支舖 大阪堺筋大寶寺町南 (電話東二百七十八番) 津村順天堂

監修
小山静子　KOYAMA Shizuko
京都大学大学院教授

女学世界（じょがくせかい） 明治期復刻版㉝
明治38年1月（第5巻第1号、第5巻第2号）

2007年12月10日　第1刷発行　　定価（本体20,000円＋税）

監　修　小山静子
発行者　富澤凡子
発行所　柏書房株式会社
東京都文京区本駒込1-13-14（〒113-0021）
電話　03-3947-8251［営業］03-3947-8254［編集］
協　力　株式会社博文館新社
印　刷　株式会社友美社
製　本　有限会社青木製本

ISBN978-4-7601-3286-7　C3321